

鶴岡西部地区遺跡群

矢 矢 遺 跡
矢 清 遺 跡
馳 馳 新 田 跡
水 発 掘 調 査 報 告 書

山 形 県
山形県教育委員会

矢馳 A 遺跡
矢馳 B 遺跡
清水新田遺跡
発掘調査報告書

昭和63年3月

山形県
山形県教育委員会



矢馳 A 遺跡 S T 31 住居跡 (S↑)



矢馳 A 遺跡 遺物出土状況



矢馳 A 遺跡 S T 41 住居跡 カマド



矢馳A遺跡S T13住居跡出土遺物



矢馳A遺跡S T31住居跡出土遺物



清水新田遺跡出土土師器（1）



清水新田遺跡出土土師器（2）

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した鶴岡西部地区遺跡群、矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡の緊急発掘調査の記録をまとめたものです。

これらの調査は庄内地域での初めての本格的な古墳時代集落跡の発掘調査であり、発見された遺構と遺物の数々は日本海沿岸に位置する当地域の性格を考える上で極めて注目されるところです。

近年、埋蔵文化財と諸開発事業のかかわりは増加の傾向にあります。県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、先人の遺産である埋蔵文化財の保護との両者には困難な問題も介在することから、状況に応じた適切な対処が望まれています。山形県教育委員会では、「こころ広くたくましい県民の育成」とする同一の立場から調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保存と活用のための努力を続けてまいる所存です。

おわりに、本調査に御協力いただきました関係各位ならびに地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財の理解を深め、その保護普及の一助となれば幸いです。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

例　　言

1 本報告書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて昭和62年度に実施した「昭和62年度県営ほ場整備事業鶴岡西部地区」に係る鶴岡西部地区遺跡群、「矢馳A遺跡」・「矢馳B遺跡」・「清水新田遺跡」の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の調査期間は以下の通りであった。

矢馳 A 遺跡　自 昭和62年4月6日～至 昭和62年10月31日（延138日）

矢馳 B 遺跡　自 昭和62年7月1日～至 昭和62年7月21日（延 13日）

清水新田遺跡　自 昭和62年4月20日～至 昭和62年6月19日（延 42日）

3 遺跡の所在地

矢馳 A 遺跡　山形県鶴岡市大字矢馳字下矢馳

矢馳 B 遺跡　山形県鶴岡市大字下清水字向京田

清水新田遺跡　山形県鶴岡市大字清水新田字下谷地

4 調査体制

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　主任調査員　佐々木洋治(山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査)

　同　　佐藤 庄一(山形県教育庁文化課 係長)

　同　　野尻 侃(山形県教育庁文化課 主任技師)

矢馳A遺跡

現場主任　阿部 明彦(山形県教育庁文化課 技師)

調査員　吉田 洋一

調査員　斎藤 克典

矢馳B遺跡

現場主任　阿部 明彦

調査員　吉田 洋一

清水新田遺跡

現場主任　阿部 明彦

調査員　黒坂 雅人(山形県教育庁文化課 嘴託)

調査員　斎藤 克典

事務局　事務局長　後藤 茂彌(山形県教育庁文化課 課長)

事務局長補佐　土門 紹穂(山形県教育庁文化課 課長補佐)

事務局員 菅原 徳嘉(山形県教育庁文化課 芸術文化主査)
佐藤 大治(山形県教育庁文化課 文化財主査)
長谷部恵子(山形県教育庁文化課 主事)
氏家 修一(山形県教育庁文化課 主事)
高橋 春雄

5 挿図縮尺は、遺構については1/40、1/60、1/80、1/100、遺物については1/2、1/3を基本として収録し、それぞれにスケールを付した。遺物図版のスケールも挿図同様1/2、1/3を基本としている。

挿図、表および本文中の記号は、S T：住居跡、S B：建物跡、S K：土壙跡、S D：溝跡、S E：井戸跡、E P：柱穴、E D：周溝、R P：土器・土製品、R Q：石製品、R N：自然遺物等を表わしている。

6 報告書中の平面図・遺物実測図等での表示基準は概ね下記の通りである。

- (1) 遺構の平面図や遺物の分布図等の方位は磁北を示している。
- (2) 土器実測図では断面の白抜きが主に土師器等を、黒塗りは須恵器を表わしている。
- (3) 土師器実測図の内面右側のスクリーンは内面黒色処理(内黒)を表わしている。
- (4) 遺物内外面に漆他の付着物が見られた場合は内黒とはトーンの異なるスクリーンを用いてその範囲・状況を示している。
- (5) 現地調査段階で遺構(S T他)・遺物(R P他)の登録番号を付したが、本報告書でもそのままの番号を踏襲して用いている。

7 本報告書の作成は阿部明彦、黒坂雅人、吉田洋一の3名が担当し真柄美紀子・三沢友子・柴崎マリ子・安達みゆき・和田正子・五十嵐憲子・飯田恵美子・佐藤泰子・真壁建・遠藤文子がこれを補佐した。

8 本文の執筆はI 1・2、II 3、III 6・7、IV 1～7、V 4・6・7・VIを阿部、II 1・2、III 1～5、V 3を吉田、V 1・2・5を黒坂が各分担した。編集は阿部がその任に当たり、全体を佐々木洋治が総括している。

9 なお、本書の作成に当たって下記の個人より御指導と御教示を賜ったここに明記して感謝申し上げる。吉岡康暢、宇野隆夫、田島明人、坂井秀弥、酒井忠一、酒井英一、加藤 稔、川崎利夫、佐藤禎宏、小野 忍(順不同 敬称略)

10 出土品その他、調査にかかわる記録類は一括して山形県教育委員会が保管している。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の立地と環境	
1 概要	3
2 遺跡の立地と微地形	3
3 古墳時代の庄内地方	5
III 矢馳A遺跡	
1 調査の方法	7
2 調査の経過	7
3 遺跡の層序	9
4 遺構と遺物の分布	10
5 遺構	14
6 遺物	67
7 まとめ	88
IV 矢馳B遺跡	
1 調査の方法	93
2 調査の経過	93
3 遺跡の層序	95
4 調査トレンチの概要	95
5 遺構	96
6 遺物	100
7 まとめ	100
V 清水新田遺跡	
1 調査の方法	101
2 調査の経過	101
3 遺跡の層序	103
4 遺構と遺物の分布	103
5 遺構	107
6 遺物	119
7 まとめ	143
VI 総 括	151

挿 図 目 次

- | | | | |
|------|------------------------|------|------------------------------|
| 第1図 | 遺跡位置図 | 第33図 | S D76溝跡(3) |
| 第2図 | 遺跡周辺低地の微地形分類 | 第34図 | S D76溝跡(4)・S D35溝跡 |
| 第3図 | 助作遺跡出土遺物 | 第35図 | S T13住居跡出土遺物(1) |
| 第4図 | 矢馳A遺跡概要図 | 第36図 | S T13住居跡出土遺物(2) |
| 第5図 | 矢馳A遺跡基本層序 | 第37図 | S T13(3)・S T31住居跡
出土遺物(1) |
| 第6図 | 遺構配置図 | 第38図 | S T31住居跡出土遺物(2) |
| 第7図 | 遺物分布図 | 第39図 | S D76溝跡出土遺物(1) |
| 第8図 | S T3・4・5・12住居跡 | 第40図 | S D76溝跡出土遺物(2) |
| 第9図 | S T8住居跡 | 第41図 | S D76溝跡出土遺物(3) |
| 第10図 | S T9住居跡 | 第42図 | 遺構内出土遺物 |
| 第11図 | S T13住居跡 | 第43図 | 遺構・包含層出土遺物 |
| 第12図 | S T13住居跡遺物分布図 | 第44図 | 古墳時代の須恵器(1) |
| 第13図 | S T14住居跡 | 第45図 | 古墳時代の須恵器(2) |
| 第14図 | S E15井戸跡 | 第46図 | 土・石製品 |
| 第15図 | S D21溝跡、S K36・38土壤 | 第47図 | あかやき土器有台皿・出土須恵器
(蓋・坏) |
| 第16図 | S T22・23住居跡、S K39・40土壤 | 第48図 | 住居の規模と主軸方位 |
| 第17図 | S T24・25・26住居跡 | 第49図 | 土師器坏・高坏の分類 |
| 第18図 | S T27住居跡 | 第50図 | 土師器鉢・甕・甑の分類 |
| 第19図 | S T28・29住居跡 | 第51図 | 矢馳B遺跡概要図 |
| 第20図 | S T30・33住居跡 | 第52図 | 基本層序柱状図 |
| 第21図 | S T31住居跡 | 第53図 | 遺構実測図(1) |
| 第22図 | S T31住居跡遺物分布図 | 第54図 | 遺構実測図(2) |
| 第23図 | S T32・47住居跡 | 第55図 | 出土遺物実測図 |
| 第24図 | S T41住居跡 | 第56図 | 清水新田遺跡概要図 |
| 第25図 | S K66・69土壤 | 第57図 | 遺構配置図 |
| 第26図 | S T70住居跡、E D74溝跡 | 第58図 | 遺物分布図 |
| 第27図 | S T47住居跡、S K49~53土壤 | 第59図 | S T6住居跡 |
| 第28図 | S D35溝跡全体図 | 第60図 | S T10住居跡 |
| 第29図 | S D35溝跡(1) | 第61図 | S T13・14・15住居跡・E K25土壤 |
| 第30図 | S D35溝跡(2) | 第62図 | S T16住居跡 |

- 第63図 S T17住居跡・E K26土壤
 第64図 S D18・21～24溝跡
 第65図 遺物実測図(1)
 第66図 遺物実測図(2)
 第67図 遺物実測図(3)
 第68図 遺物実測図(4)
 第69図 遺物実測図(5)
 第70図 遺物実測図(6)
 第71図 遺物実測図(7)
 第72図 遺物実測図(8)

- 第73図 遺物実測図(9)
 第74図 遺物実測図(10)
 第75図 遺物実測図(11)
 第76図 遺物実測図(12)
 第77図 土師器坏分類図
 第78図 坏・鉢・高坏の法量
 第79図 土師器集成・分類図(1)
 第80図 土師器集成・分類図(2)
 第81図 土器共伴関係図
 第82図 土器組成表

表

- 表 1 検出遺構一覧(矢馳A遺跡)
 表 2 検出遺構一覧(清水新田遺跡)
 表 3 土師器観察表(1)
 表 4 土師器観察表(2)

目 次

- 表 5 古式須恵器観察表
 表 6 土・石・金属製品観察表
 表 7 須恵器・中世陶器観察表
 表 8 あかやき土器観察表

図版目次

矢馳A遺跡

図版1 検出遺構全景

図版2 調査風景

図版3 検出住居跡(1)

図版4 S T13住居跡遺物出土状況(1)

図版5 S T13住居跡遺物出土状況(2)

図版6 S T13住居跡遺物出土状況(3)

図版7 検出住居跡(2)

図版8 S T31住居跡遺物出土状況

図版9 検出住居跡(3)

図版10 住居跡遺物出土状況(1)

図版11 住居跡遺物出土状況(2)

図版12 検出土壙(1)

図版13 検出土壙(2)

図版14 S X46遺物出土状況

図版15 S D35・76溝跡検出状況

図版16 S D35・76溝跡遺物出土状況

図版17 S D76溝跡遺物出土状況(1)

図版18 S D76溝跡遺物出土状況(2)

図版19 平安時代遺構検出状況

図版20 S T13住居跡出土遺物(1)

図版21 S T13住居跡出土遺物(2)

図版22 S T13住居跡出土遺物(3)

図版23 S T31住居跡出土遺物(1)

図版24 S T31住居跡出土遺物(2)

図版25 S D76溝跡遺物出土状況(1)

図版26 S D76溝跡遺物出土状況(2)

図版27 S D76溝跡遺物出土状況(3)

図版28 S D76溝跡遺物出土状況(4)

図版29 S D76溝跡遺物出土状況(5)

図版30 住居跡出土遺物

図版31 包含層出土遺物

図版32 出土須恵器(1)

図版33 出土須恵器(2)

図版34 出土遺物(管玉・須恵器他)

図版35 出土遺物(土・石製品)

図版36 出土遺物(砥石・紡錘車)

矢馳B遺跡

図版1 遺跡近景

図版2 調査風景

図版3 土層断面・遺構検出状況

図版4 S T12住居跡検出状況

図版5 出土遺物(1)

図版6 出土遺物(2)

清水新田遺跡

図版1 遺跡近景

図版2 検出遺構全景

図版3 検出遺構

図版4 遺物出土状況(1)

図版5 遺物出土状況(2)

図版6 出土遺物(1)环

図版7 出土遺物(2)环

図版8 出土遺物(3)环

図版9 出土遺物(4)高环・鉢

図版10 出土遺物(5)鉢・甕

図版11 出土遺物(6)甕

図版12 出土遺物(7)甕

図版13 出土遺物(8)壺・甌

図版14 出土遺物(9)須恵器

図版15 出土遺物(10)土錐

図版16 出土遺物(11)子持勾玉・その他

I 調査の経緯

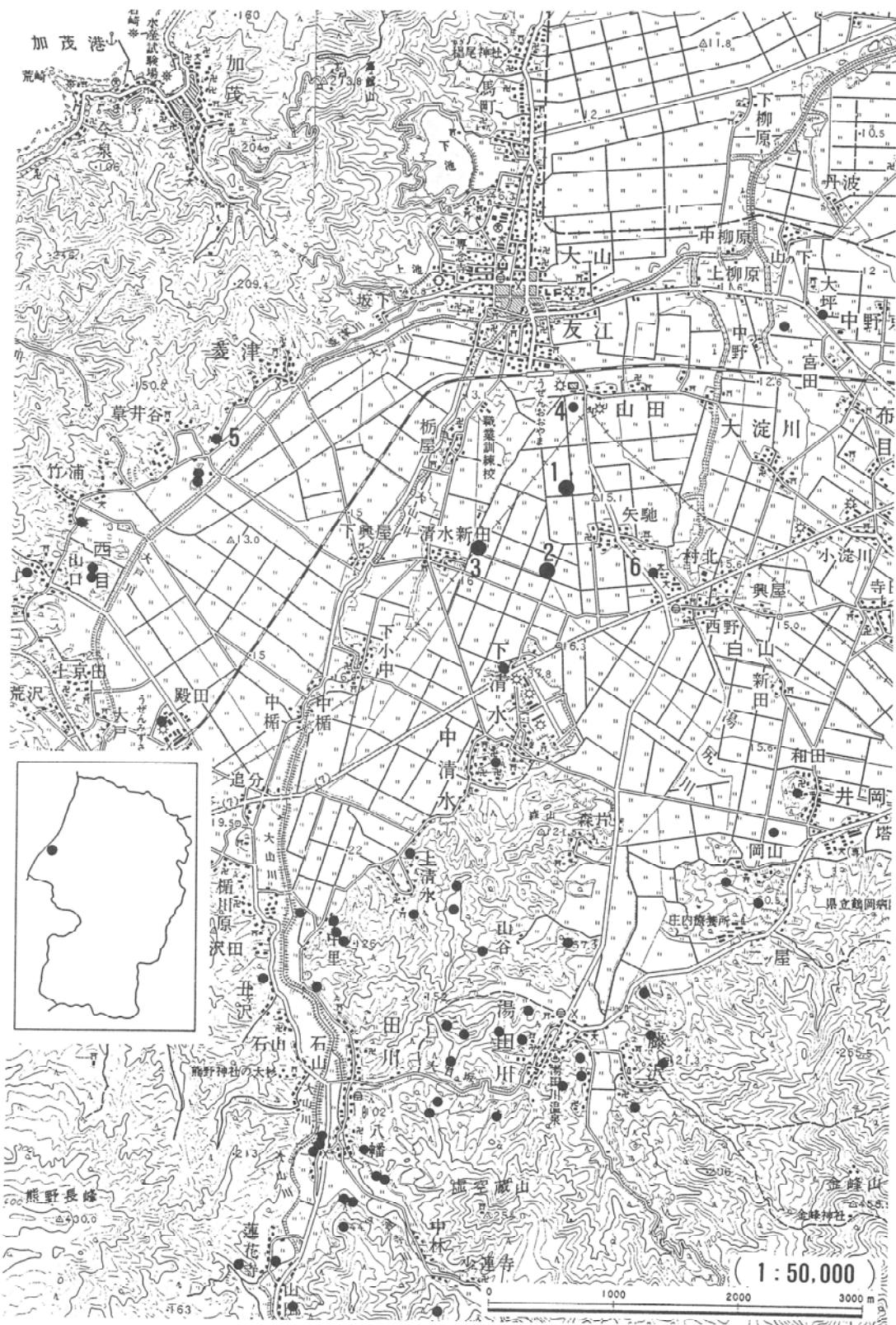
1 調査に至る経過

鶴岡西部地区遺跡群の発見は昭和31年頃に行われた暗渠管の埋設工事や水田の盤下げ等を契機とし、ほぼ時を同じくして庄内を代表する古墳時代の集落跡、すなわち清水新田遺跡、矢馳A・B遺跡、山田遺跡等が知見に上った。当時編纂された大泉村誌続(昭和34年)には、今回報告する矢馳A遺跡について以下のような記述が見られる「昭和31年矢馳の西北465m位のところの盤下げの工事中に多数の土器を発見した、そこは俗に「かまつくり」と呼ばれるところで、壺形のもの、皿形、高環等いろいろな種類のものであるが一様に稍褐色をおびた美しいものである。これは土師器といって祝部土器である。」これらの内の方は致道博物館に収蔵・展示される所となり、研究史的な遺物として当該遺跡群に関する時期他の内容的一端を早い段階から窺い知らせてくれた。その後、これらの遺跡と遺物は折りに触れて庄内地域を代表する数少ない事例として取り上げられることとなり、いつの日か正式な発掘調査を行って内容的詳細の究明を行う機会が待たれていたのである。

こうした中、これら遺跡群を含む一帯に昭和62年度から県営ほ場整備事業(鶴岡西部地区)が実施されることとなり、計画の事業区内に昭和62度には矢馳A・B遺跡、清水新田遺跡の三遺跡が含まれると予想された。そのため、事業の着手前に試掘調査を行って遺跡範囲他の確認を行ったところ地区内に各遺跡の全体が含まれること、遺跡範囲は矢馳A遺跡で東西150m、南北200mと広大な規模になる事等が判明した。これらを下に関係機関と協議を重ねたところ矢馳A遺跡は昭和62年4月16日～同年10月30日、清水新田遺跡は昭和62年4月20日～同年6月19日、矢馳B遺跡は昭和62年7月1日～同年7月21日までの期間で緊急発掘調査を実施する運びとなったものである。

2 調査の概要

矢馳A遺跡では遺跡範囲内の中に $2 \times 10\text{m}$ のトレンチ56本を設定して調査を開始し、遺構・遺物の集中する地点約 5000m^2 程を精査の対象地区として拡張した。調査の進行に伴って当初予想された深度での遺構検出が極めて困難であり、容易に遺構等の輪郭を捉えられない状況等に遭遇したため面下げの続行とサブトレンチを設置しての断面観察による検討を加えるといった苦しい工程を余儀なくされた。調査の結果、約 3600m^2 を測る精査区内から堅穴住居跡他の遺構多数と約200箱にのぼる多量の遺物が検出された。清水新田遺跡は遺跡範囲が東西180m、南北200m程の広がりを持ちこの内の約 950m^2 について精査した所、大溝跡他の遺構と約50箱程の遺物が検出された。また、矢馳B遺跡は約100m四方の遺跡範囲の内、水路・道路に係る約 350m^2 についての限定的な調査を実施したに止どまっている。



1 矢馳 A 遺跡 2 矢馳 B 遺跡 3 清水新田遺跡 4 山田遺跡 5 菊津古墳 6 助作遺跡
※ ● : 遺跡(包蔵地)

第1図 遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

1 概 要

矢馳A・B、清水新田遺跡の所在する大泉地区は、鶴岡市街地の西方約5km、庄内平野の南西端に位置する。遺跡は西方を高館山地、南方を金峰山地とに囲まれた標高14~15mの河間低地に立地し、東部を湯尻川、西部を大山川が北流する。現在の地目は水田である。

2 遺跡の立地と微地形

角田(1976)は、庄内地方における縄文時代と弥生時代以降の遺跡の分布から、地形・地質環境の変化を示唆している。これは遺跡分布に限って言えば、弥生時代以降の生活形態の変化に関する配慮を欠き、一概に肯定はできない。しかしながら、元来地形学的見地からのみ論ぜられることの多かった古地理の復元は、遺跡の立地する自然環境についてより歴史的に捉える必要性から、考古学的にも多分に重要性を持つと考えられる。遺跡の立地を考える上では、現在の地形と当時のそれとが異なる可能性があることを考慮し、単純に現況をあてはめるのは危険な場合があることを、常に念頭に置く必要があるのではなかろうか。従って、矢馳A遺跡をはじめとする遺跡群についても、集落が営まれた当時の自然環境をある程度的確に把握しておく必要がある。

米地(1978)による国土調査法に基づく地形分類図「鶴岡」では、同地区は「自然堤防一後背湿地の組み合わせよりなる(後略)『河間低地』」として一括されているが、低地上の遺跡の立地と対応させるためにはより微視的な地形分類が必要となる。第2図は空中写真における階調の差異に着目し、色調の明るい部分を予察的に微高地、暗色の部分を後背湿地と判断して分類を試みたものである。これは、最初の段階で行われたトレンチ調査や昨年度の遺跡詳細分布調査、さらには矢馳A遺跡の現地調査後に行われた助作遺跡および山田遺跡の詳細分布調査の結果を下に、特に地山の高さや状態、泥炭の分布状況等から裏付けが可能であった。現段階では広域にわたる実地調査はなされてないが、上記遺跡等調査が行われている地域に限れば予察と実際の微高地とは概ね対応していると見做せる。

湯尻川や大山川の流路と共に幾筋もの微高地が形成されたと考えられるが、歴史時代以降延々と続く開拓、とりわけ機械導入以降の大規模な農地の改変によって土地の平坦化が急速に進められた。そのため微高地の上部は既に消失して現在ではごく微かな起伏を残すのみとなっているものが少なくないが、古墳時代に集落が営まれていた当時はより起伏に富んだ地形を呈していたものと推定される。

稻作を営み低地での居住を必要とした当時の人々は、度重なる水害とのジレンマの中で、より高燥な微高地上に集落を形成したであろうことは想像に難くなく、遺跡の立地はこの様子をよく物語っていると言えるであろう。



● 微高地 空中写真 T O-72-4 X, C 16-4 ほかによって、色調の明るい部分を予察的に微高地とし、のこりの暗い部分を後背湿地とみなした。

○ 遺跡範囲

第2図 遺跡周辺低地の微地形分類

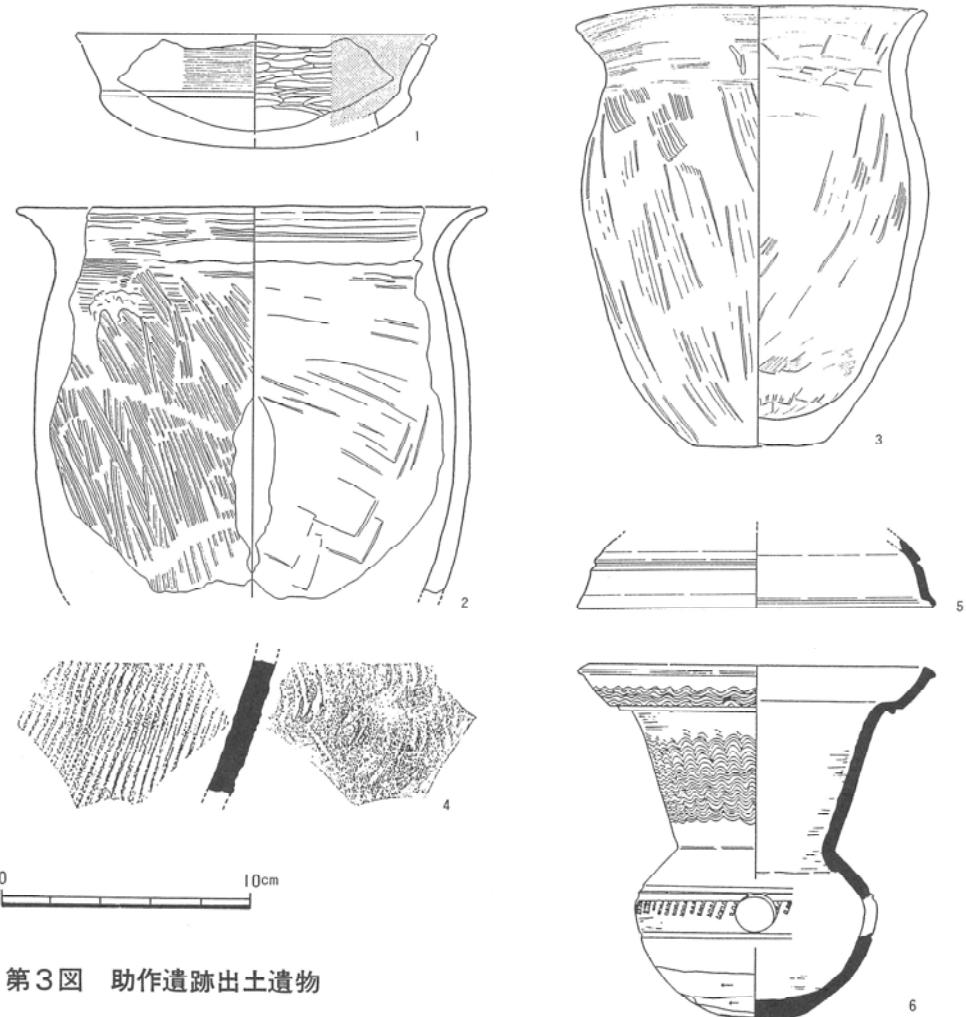
3 古墳時代の庄内地方

庄内地域でこれまでに確認された古墳時代の遺跡は古墳・集落跡・包蔵地その他単発的で内容不詳なものを含めても10箇所余りと少数である。また、これらの半数以上が今回調査の対象となった矢馳A遺跡他と同じ西田川郡域に存在している事実が認められる。一方、ほ場整備事業の進展によって調査された関B遺跡や南興野遺跡等から、これまであまり知られていなかった飽海郡域に於ける古墳時代前期と後期の遺物が発見される等の注目すべき最近の状況がある。しかし、単発的な遺物のみの発見に止どまっており、依然として従来の概況を大きく覆すには至っていないのが現状と捉えられよう。

ところで、この10数遺跡は、山形盆地における同時代の遺跡数約80箇所に較べてはるかに少ないと見做せるが、遺跡的に尾花沢市八幡山祭祀遺跡他1・2箇所にすぎない内陸部の最上地方、あるいはオホン清水遺跡・宮崎遺跡等2・3の遺跡に限定される出羽北半(秋田県域)での状況等に対比させれば、ここで取り上げる鶴岡西部地区遺跡群の状況はこれらより数段まとまりのある分布密度と内容を備えていると考えることが可能であろう。

以上の事実、すなわち庄内地方でこれまでに確認された古墳時代遺跡の大半が庄内平野を二分する最上川の南半部(川南地区)田川郡域、とりわけ鶴岡市の西南部や藤島町東南部等に集中して分布する状況は、古墳時代の庄内ひいてはその後の出羽郡から出羽国の成立過程を考える上で非常に示唆的であり重要な事と受け止められる。加えて、今の所では庄内に唯一と考えられる後期初頭期の古墳で、「変形長持形組合式石棺」等の形態から6世紀前半代の年代が考定される菱津古墳が清水新田遺跡他一連の集落遺跡群とかかわって象徴的に存在していることも看過できない。すなわち、こうした古墳の存在は当地にあっても当時の趨勢に違わぬ古墳文化の開花が生産力の向上と集落群の発展他を背景として培われた結果と評価できるからである。転じて最上川以北(川北地区)の状況を見る時、本遺跡群と同等の遺跡的まとまりと内容を見いだせない今日的状況からは、未だに埋もれて発見されない関B遺跡他の古墳時代遺跡が幾つか存在すると予測できるにしても、田川郡域が質的な面での「日本海沿岸地域に於ける古墳文化(様式)の分布的北限」とできる認識を覆すには至らないと考えられる。こうした認識の背景には調査によって明らかとなった遺跡群の内容が古墳時代後期を中心とする大小の集落的性格と様相を充分に備えていると把握できた事等が最大の理由としてあり、川北の飽海郡域では確定的でないにしろこうした事例を求め難いと判断できるからに外ならない。なお、以下に菱津古墳、山田遺跡、および助作遺跡について簡単に紹介し、その概要を述べておく。

菱津古墳：明治43年、鶴岡市菱津字火打崎の丘陵突端通称仏の山より、近くの農民が発見して崖下に落とした云う謂れを持つ凝灰岩製の長持形組合式石棺が現在も大山小学校に



第3図 助作遺跡出土遺物

保管されている。石棺の作り等形態から「古墳時代中期に盛行する長持形石棺の変形したもので、縄掛け突起等もあることから、後期もその初め頃のものと推定され、6世紀前半に比定できるであろう」(川崎1980)と古墳時代後期の前半に位置付けられる。

山田遺跡：鶴岡市山田字油田他に所在する広範な遺跡で、遺跡の発見は昭和31年頃に行われた水田の盤下げ工事や暗渠管の埋設工事に由来している。これまで正式な調査等が行われていなかったが昨秋、ほ場整備事業に先立つ分布調査を助作遺跡等と共に行った結果、古墳時代から歴史時代にわたる大規模な遺跡であること、古墳時代にかかる遺跡の分布的位置はより北西方向の微高地上であること等が明らかとなって来ている。

助作遺跡：矢馳A遺跡の南東に隣接して位置し、須恵器壺の出土等から早くから注目された。上図に掲げたのは昨秋の試掘で得られた土壌内出土の土器他須恵器蓋を含む一括品、および大正年間の県道工事によって出土した現在致道博物館に保管される須恵器壺である。

III 矢馳A遺跡

1 調査の方法

調査はまず、対象とする南北430m、東西360mの区域にグリッドを設定することから行った。調査グリッドは西側排水路の中軸線に沿ったY軸と、それに直交するX軸とを設定し、基点を南西に取った。Y軸は南から北へ、X軸は西から東に向かって、5mを単位とする数字を付して座標としている(第4図)。尚、グリッドの呼称は北西隅の座標点を代表とし、 $(X - Y) = (24 - 50)$ Gの様に表記している。

次にグリッドを基準とする2m×10mの調査トレンチを56箇所に設定し、遺構・遺物の分布や遺構検出面の深さ、状態を調査した。その結果(42～48-23～30)G及び(22～31-41～58)Gを中心とする2箇所の遺構・遺物の集中地点を確認した。その中でも特に遺物の出土の多かった(24～33-41～58)G、約4,500m²を主な調査区として拡張している。

調査区では重機械による表土掘削後、手掘りによる面整理を行った。調査の進行と共に当初予想されたIII層上面での遺構検出が土壤のグライ化等の理由から非常に困難であることが判明し、III層を若干掘り下げると同時に排水トレンチによる断面観察を行いながら遺構の検出に努めた。

調査の後半では検出された遺構を掘下げ、遺構・出土遺物について平面図や断面図の作成・写真撮影等の記録作業を並行して行った。

2 調査の経過

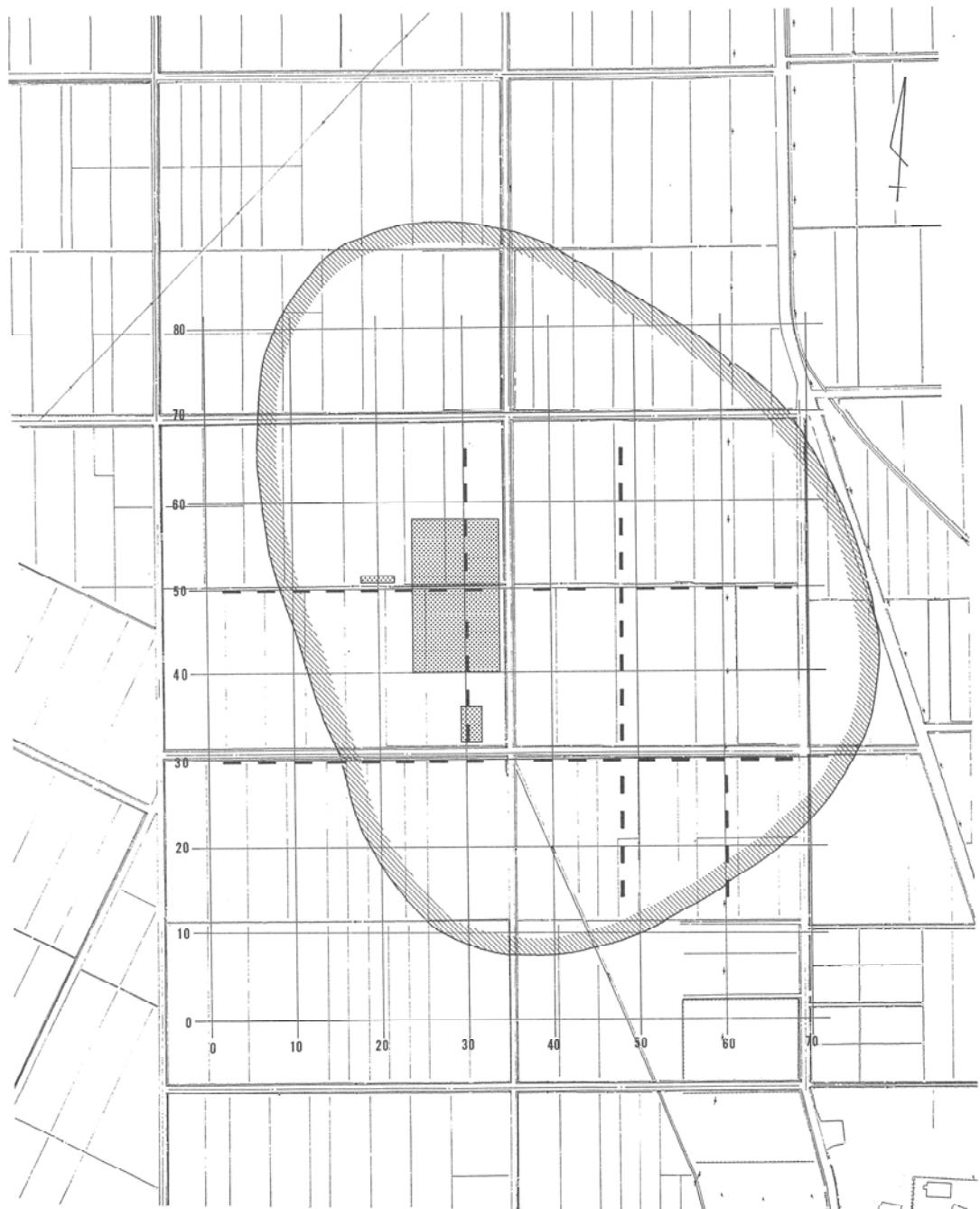
現地調査は昭和62年4月16日から同年10月30日迄、延138日に渡り実施した。

5月中旬迄の1ヵ月間はトレンチ調査による遺構・遺物分布の確認を行った。その結果に基づき、5月15日、関係公所、地元地権者等立合いの下、(24～32-41～50)G約2,200m²を中心とする調査区を設定した。

調査区では、5月20・21の両日重機械による粗掘を行った後、手掘りで面整理を進めた。調査の進行と共に、遺構が東方及び北方へ拡がる様相を呈し、7月末、都合2度に渡る追加拡張を行った。最終的には(24～33-41～58)G約4,500m²を中心として調査している。

遺構の検出作業は困難を極め、9月初旬まで続いたが、住居跡20棟余りを含む80の遺構を検出した。9月7日以降遺構の精査に着手し、9月中は主にS T13・31を中心とする住居跡や土壤等の精査、10月は住居跡の記録作業と並行してS D35・76の2条の溝跡の精査を行った。

調査終了を一週間後に控えた10月23日には、関係者を含む約70名を迎えて調査説明会を開催。10月30日、S D76溝跡の記録を最後に現地調査を終了。器材の撤収を行った。



〈凡例〉

■ : 遺跡範囲

■ : 調査区

— : 調査トレンチ

0 100 m

第4図 遺跡概要図

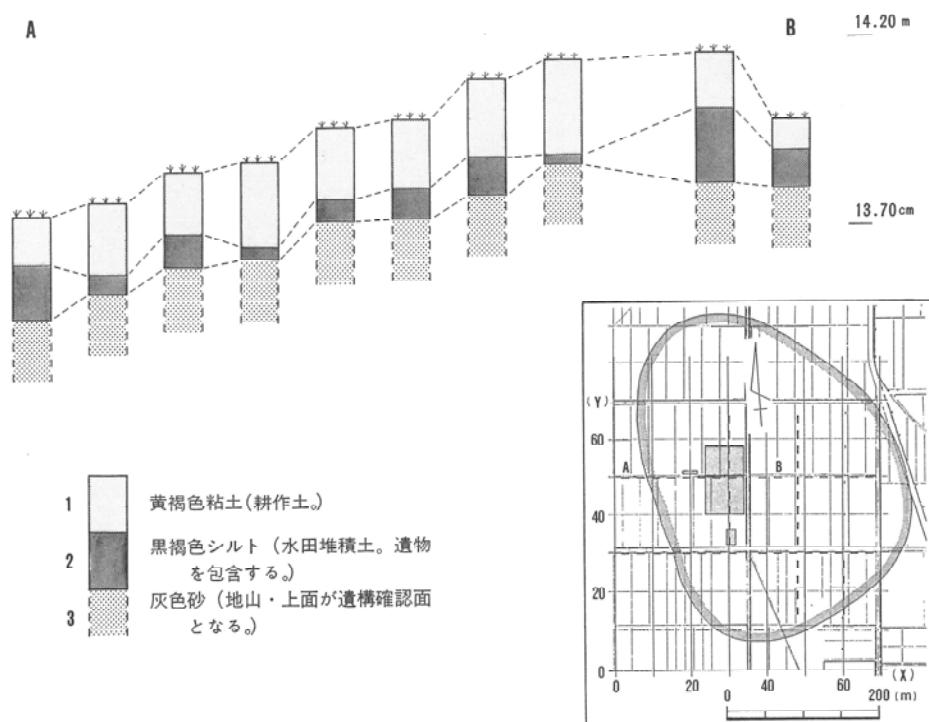
3 遺跡の層序

遺構の立地する区域の層序は、基本的に3層から構成される。即ちI層(耕作土)、II層(遺物包含層)、III層(遺構検出面・地山)とであり、土色・土質は第5図に記す。

遺構検出面をIII層上面としているが、実際にこのレベルでの検出は難しい。グライ化のために土色変化による識別が困難であることも理由の一つだが、遺構検出の最も大きな障害となっているのは、遺構内の堆積土と地山とが基本的に同質(粘土質の細砂又はシルト)であるという事実である。これは即ち地山である微高地の形成と遺構の埋積とが同様の過程を経て行なわれたことを示している。微高地は河川の運ぶ土砂によって形成されるが、その上に営まれた集落は、主に河川の氾濫がもたらす土砂によって埋積を受けたと考えられる。

以上の事を考慮すれば、集落は微高地の形成途上に営まれ、度重なる水害による崩壊と再生の過程を経て最終的な埋積を終えたと理解できる。この場合、集落廃絶後も微高地の形成は進んだであろうから、古墳時代の地山と現在のそれ(III層上面)とが必ずしも一致するとは限らない。これが特に地山の状態の良好な調査区北側での遺構検出の防げとなっていたと考えられる。

尚、微高地の存在は第5図模式柱状図中のIII層上面の推移によって理由づけられる。



第5図 矢馳A遺跡基本層序

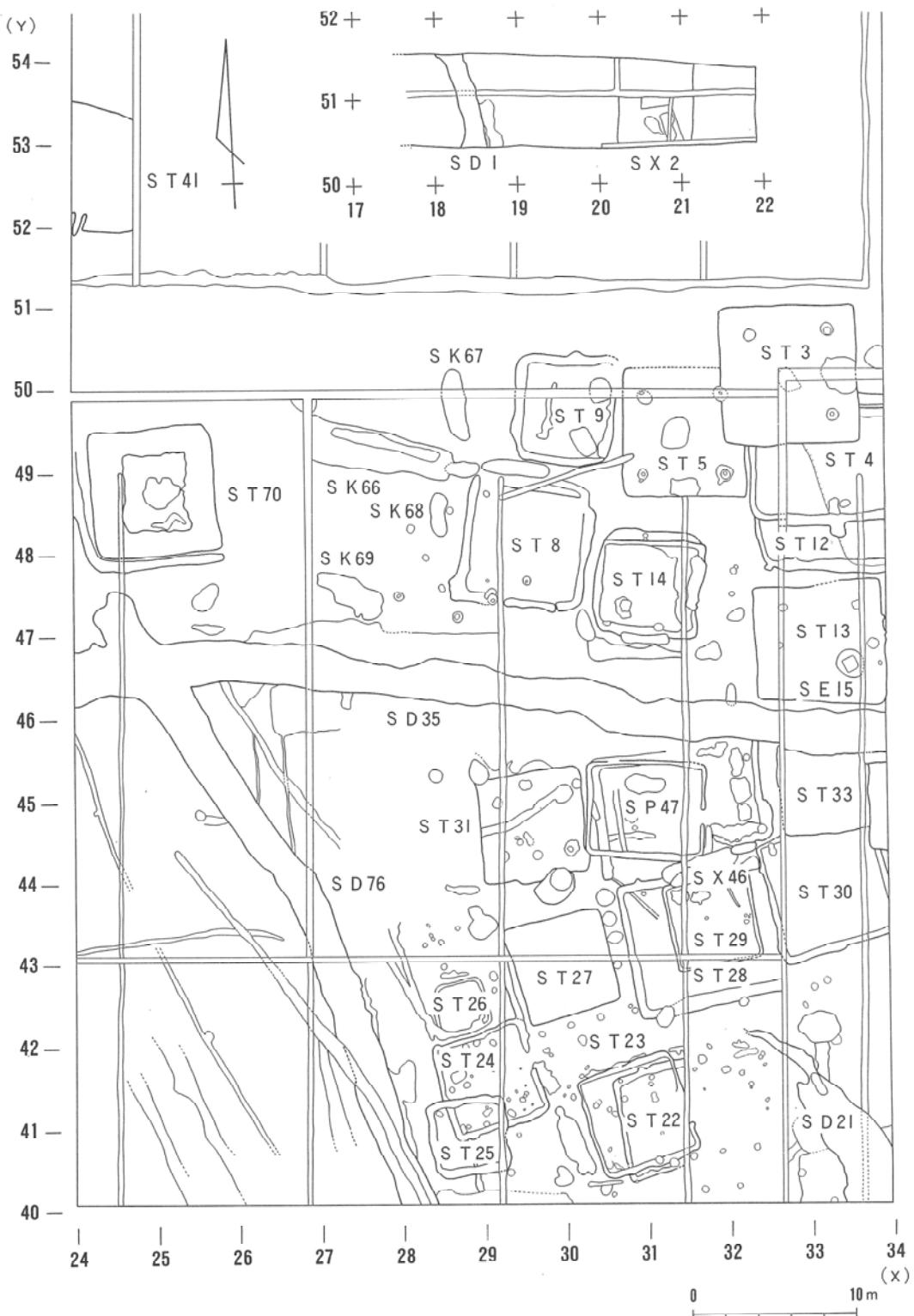
表1 検出遺構一覧

	遺構番名	検出位置(X-Y)G	平面形	主軸方位	規模(NS×EW)m (長径×短径)m	備考(重複関係他)
住居跡	S T 3	(32, 33-50, 51) G	方形	N 0.5°E	8.3×8.3	S T 4.5を切る。柱穴4、地床炉
	S T 4	(32, 33-49, 50) G	方形周溝	N 2°E	?	S T 12を切り、S T 3に切られる
	S T 5	(30-32-49~51) G	方形	N 4°E	7.5×7.5	S T 3に切られる。柱穴4、地床炉
	S T 8	(28-30-48~50) G	方形	N 12°E	(7.3)×7.9	
	S T 9	(29, 30-50, 51) G	方形周溝	N 10°E	6.8×6.0	
	S T 12	(32, 33-48~) G	方形周溝	?		
	S T 13	(32, 33-47, 48) G	方形	N 1°E	7.8-8.0	柱穴6? 地床炉。遺物多数
	S T 14	(30, 31-47~49) G	方形周溝	N 8°E	6.0×6.4	
	S T 22	(30~-41, 42) G	方形?周溝	?	6.3×?	S T 23に切られる。東側不明
	S T 23	(30, 31-41, 42) G	方形周溝	E 15°N	6.5×6.3	S T 22を切る。東側不明
	S T 24	(28, 29-41~43) G	方形周溝	E 15°N	5.9×6.0	S T 25に切られる。東側不明
	S T 25	(28, 29-41, 42) G	方形周溝	E 3.5°N	4.7×4.7	S T 24を切る。東側不明
	S T 26	(28, 29-43) G	方形周溝	N 10°W	3.2×3.4	
	S T 27	(29, 30-43, 44) G	方形周溝	N 10.5°W	6.0×5.8	
	S T 28	(30-32-43~45) G	方形?周溝	N 7°W	8.4×?	ST29, SX46に切られる。東側不明。
	S T 29	(31, 32-43~45) G	方形周溝	N 7°W	5.5×5.4	S T 28を切り S X 46に切られる。
	S T 30	(32~-43~45) G	方形周溝	N 12.5°W	7.7×7.4	S T 33に切られる。
	S T 31	(28-30-44~46) G	方形	N 1°W	6.5×6.5	ST47に切られる。柱穴6、地床炉。
	S T 32	(30, 31~-46) G	方形?周溝	E 3°N	? ×7.0	ST 47に切られる。南側、北東不明。
	S T 33	(32~-45, 46) G	?	N 0.5°W	5.6×?	S T 30を切り、SD35に切られる。
	S T 41	(~-25-52~-) G	?	?		北側不明。南側にかまど。
	S T 47	(30, 31-45, 46) G	長方形周溝	E 7°S	6.2×7.2	S T 31, 32を切る。東側不明
	S T 70	(24, 25-49, 50) G	方形	N 0.5°W	7.7×7.6	地床炉
	S T 74	(~-25-48~-) G	? 周溝	?		東、北、西側一部不明。
土塙跡	S K 18	(30-50) G	長方形		1.8×1.1	
	S K 36	(33-41) G	長楕円形		1.5×0.5	
	S K 39	(29, 30-41.42) G	長楕円形		4.0×1.8	
	S K 40	(29, 30-41) G	ハート形		1.3×1.2	
	S K 43	(30-44) G	円形		1.2×1.1	
	S K 44	(29-44) G	瓢箪形		2.1×1.8	
	S K 55	(28, 29-46) G	卵形		1.5×1.1	S T 31を切る。
	S K 58	(30-50~51) G	楕円形		1.6×1.3	S T 14を切る。
	S K 63	(30, 31-47) G	長楕円形		3.0×0.5	
	S K 65	(30-47, 48) G	楕円形		2.0×0.9	
	S K 66	(26~28~50) G	長楕円若くは長方形		9.0×1.5	S K 73に切られる。
	S K 67	(28-50, 51) G	長楕円形		4.3×1.4	
	S K 68	(28-49) G	瓢箪形		2.7×1.0	
	S K 69	(27-48) G	不定		4.5×1.9	
	S K 72	(29-49, 50) G	長楕円形		4.2×0.9	S K 73に切られる。
	S K 73	(28-49, 50) G	楕円形		1.6×0.6	S K 66, 73を切る。
溝跡	S D 35	Y=45, 46		E→W	幅 約2.5m	S T 13,33を切る。
	S D 37	(33-41) G		SSE→NNW	幅 約2.5m	住居址周溝?
	S D 76					S D 78に切られる。
その他	S X 46	(31, 32-44, 45) G			5.5×1.0	
平安時代遺構	S E 15	(33-47) G			0.8×0.8	
	S B 17	(28, 29-48, 49) G			6.2×5.1	
	S D 21	(32~-~-43) G			5.1×1.9	
	S K 38	(32, 33-43) G	楕円形			
	S K 75	(29, 30-44, 45) G	円形			
	S D 77	(29, 30-45) G			幅 約0.5m 最大幅0.9m	

4 遺構と遺物の分布

本遺跡では、トレンチ調査の結果から(22~31-41~58) Gと(42~48-23~30) Gを中心とする2箇所の遺構・遺物の集中地点が存在することを確認した。これは遺跡範囲として示した区域の南北長軸線とほぼ平行し、第II章第2図に提示した微高地の分布とよく対応している。これら2箇所の集中地点のうち、特に遺物の出土量が多く地山も安定した地域約4,500m²を中心として拡張し精査を行っている。

調査区では主に南側、(24~33-41~50) G約3,000m²を中心として精査を行った。検出された遺構は古墳時代中葉を中心とする住居跡24棟をはじめとして、土塙、溝跡等がある。



第6図 遺構配置図

住居跡は主に調査区の東側に集中し数期の重複関係が認められるが、詳細は明らかにできなかった。また、検出された住居跡は周溝の有無によって2つのタイプに分類できる。しかし、2タイプ間の新旧関係については、S T12(周溝あり)→S T3(周溝なし)とS T31(周溝なし)→S T47(周溝あり)という相反する2つの重複関係が存在し、単純に新旧を決定することはできない。

住居跡以外で特に重要であると考えられるのは、S D35・76の2条の溝跡である。S D35溝跡は調査区を東から西へ横断する形で検出された。溝の性格については不明瞭な点が多いが、S D35を挟む南北の住居間では主軸方位に若干の差異が認められる。もちろんすべての住居跡が該当するわけではないが、ある時期、溝を境とする集落単位が存在したと考えるのも不自然ではない。

調査区南西部に検出されたS D76溝跡は、S D35に接続する形で人為的に掘込まれたと推定される。また、S D76は集落の西辺を画していたと考えられ、東側では住居跡をはじめとして多数の遺構、遺物が検出されるものの、西側では細かい溝状の遺構が数条確認されたに留まり、遺物の出土はほとんどなかった。さらにS T22～32を中心とするS D35南側の住居跡の多くが、その主軸方位をS D76とほぼ同一方向に取っている点も注目される。

調査区北側(24～33-51～58)Gでは、かまどを備える住居跡S T41を1棟検出したに留まった。他にも遺構の存在を示唆する炭化物や一括性の高い遺物の出土はあったものの、土色変化が極めて不明瞭で、遺構の輪郭を正確に把握するには至らなかった。

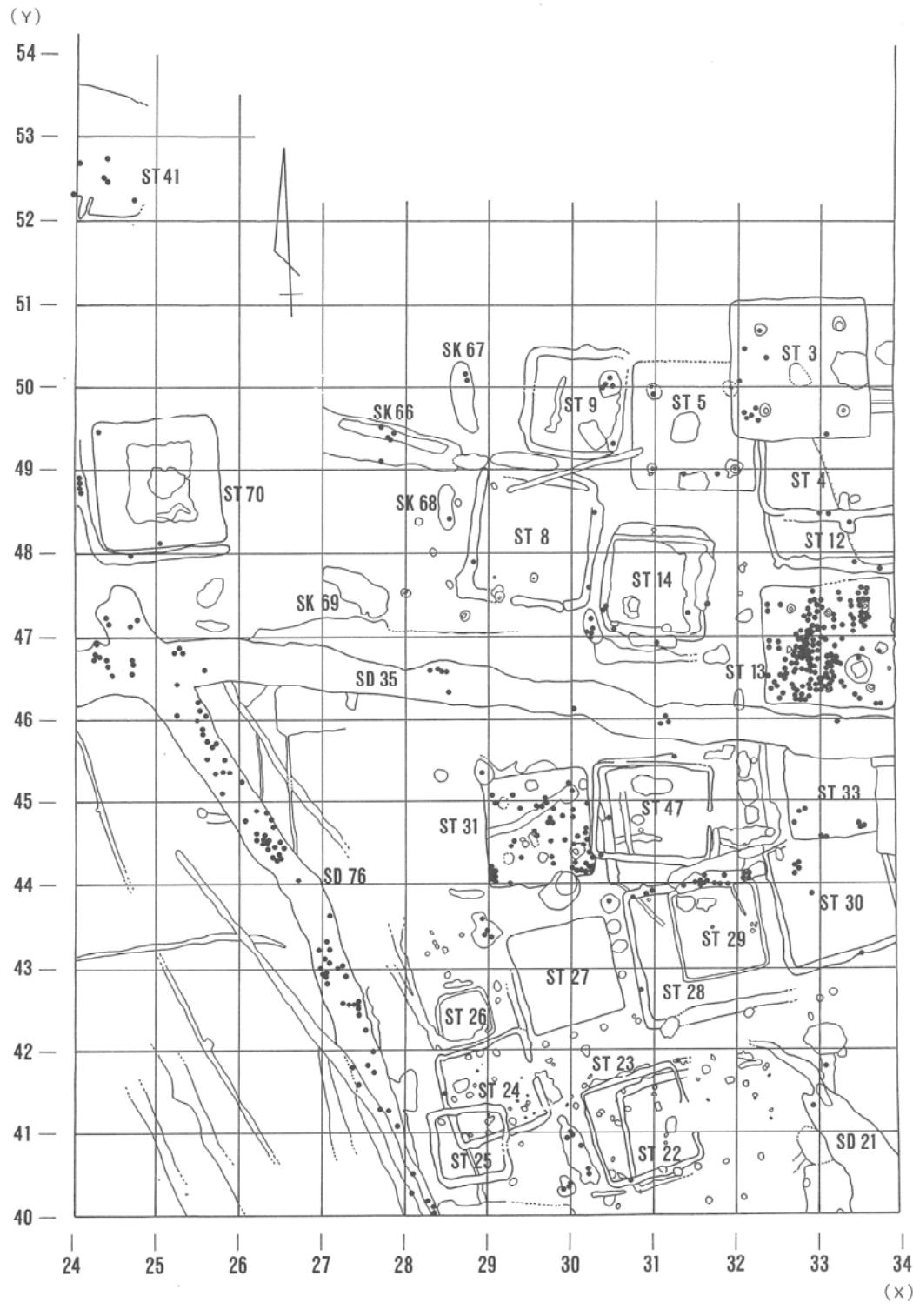
かまどを備える住居跡の検出例はS T41の1棟のみで、他ではS T4・23・24・25の各住居跡にその可能性を見出すことはできるものの、かまどを確認することはできなかった。しかしながら、S K58、S X46の各遺構内や包含層中から数点の支脚が出土しており、他にもかまどを備える住居跡が存在していた可能性は高い。

いずれにせよ全体に住居跡の保存状態は良好とは言い難く、得られる情報量は限られるため、詳細を把握するに至ってないのが現状である。

遺物は整理箱にして200箱程度が出土している。中でもS T13・31の各住居跡とS D76溝跡からは、相当量の遺物がまとまって出土している。

S T13・31の各住居跡では、日常生活で使用された土師器類の他に、祭祀用と考えられる勾玉や手捏土器、聰とその模造品等の出土があり、通常の生活レベルでは到底考えられない遺物の出土量と共に、遺構の持つ性格が注目される。

S D76溝跡からは全出土箱数の3分の1近い出土量があった。遺物の保存状態も極めて良好で特に(26～45)Gより出土した坏類は、形態や一括性の高い出土状況から、資料的価値の高いものと考えられる。



第7図 遺物分布図

5 遺構

S T 3

〔位置・重複〕 調査区の北東、32～33-50～51Gに位置する。S T 4、5、12住居跡を切り、4棟の内では最も新しく構築されたことが判る。

〔平面形・規模〕 一辺約8.3mの方形を呈し、今回検出された住居跡中最大規模を有する。確認面から床面までの深さは5～8cmで、壁は約45°の角度をもって斜めに立上がる。

〔床面・柱穴〕 地山を直接床面とし貼り床等は認められない。東側に径2.2m程の浅い落ち込みが有る。柱穴は4本で床面下40～60cmに達する。また、北東の柱穴東側と中央やや南東寄りに、わずかではあるが炭化材が検出されている。

〔堆積土〕 やや粘土分を含む灰オリーブ色の砂を主体とする単一層から成る。

〔地床炉〕 中央部に黒色の炭化物の広がりが確認でき、地床炉の痕跡と推定されるが、中央部分を水路によって分断されたために規模や形は確定できない。

S T 4

〔位置・重複〕 32～33-49～50Gに位置し、S T 12→S T 4→S T 3の順序で構築されたことを示す重複関係が認められる。

〔概要〕 東側は調査区域を外れるために未検出であるが、南北7.5mの方形を呈すると推定できる。周溝のみが残存し、幅35～40cm、深さ10～15cmを測る。周溝南側に南北1.5m、東西1m、深さ20cm程の土壤状の落込みが有り、北側に焼土を伴うことから煮炊きの設備が存在した可能性がある。

S T 5

〔位置・重複〕 30～32-49～51Gに位置し、北東部をS T 3に切られる。

〔平面形・規模〕 北辺を水路に切られるが、一辺7.5mの方形を呈すると推定される。確認面から床面までの深さは7～9cmを測り、壁は斜めに立上がる。

〔床面・柱穴〕 地山を直接床面とする。南壁に接して南北1.1m、東西1.6m、深さ4cmの長方形の深い落込みがある。柱穴は4本で、床面下20～25cmに達する。

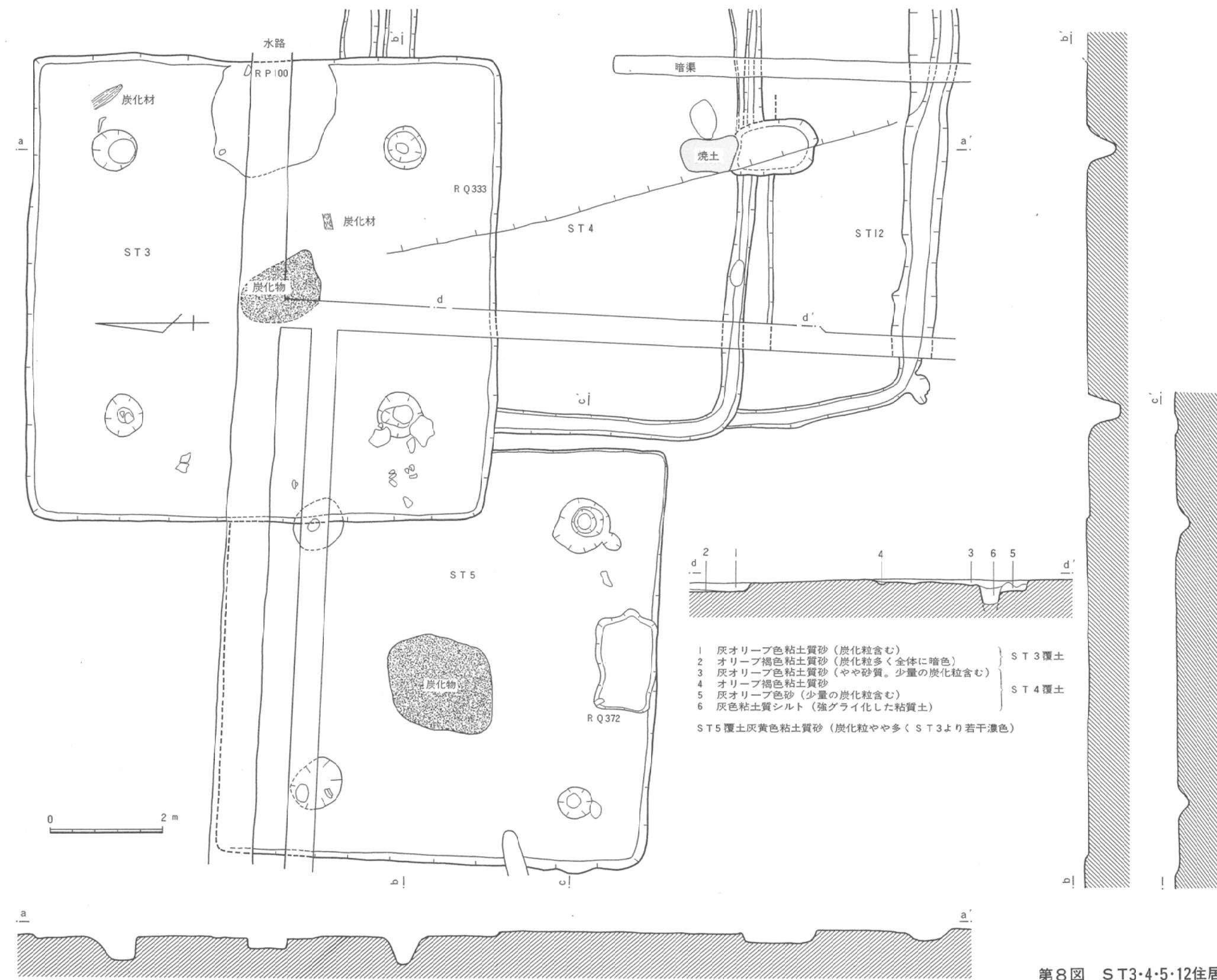
〔堆積土〕 粘土質の灰黄色砂を主体とする単一層から成る。土質の面ではS T 3住居跡の堆積土に近いが、炭化粒を多く含み濃色で目立つ。

〔地床炉〕 中央に南北1.8m、東西1.6mの略方形の地床炉を備える。

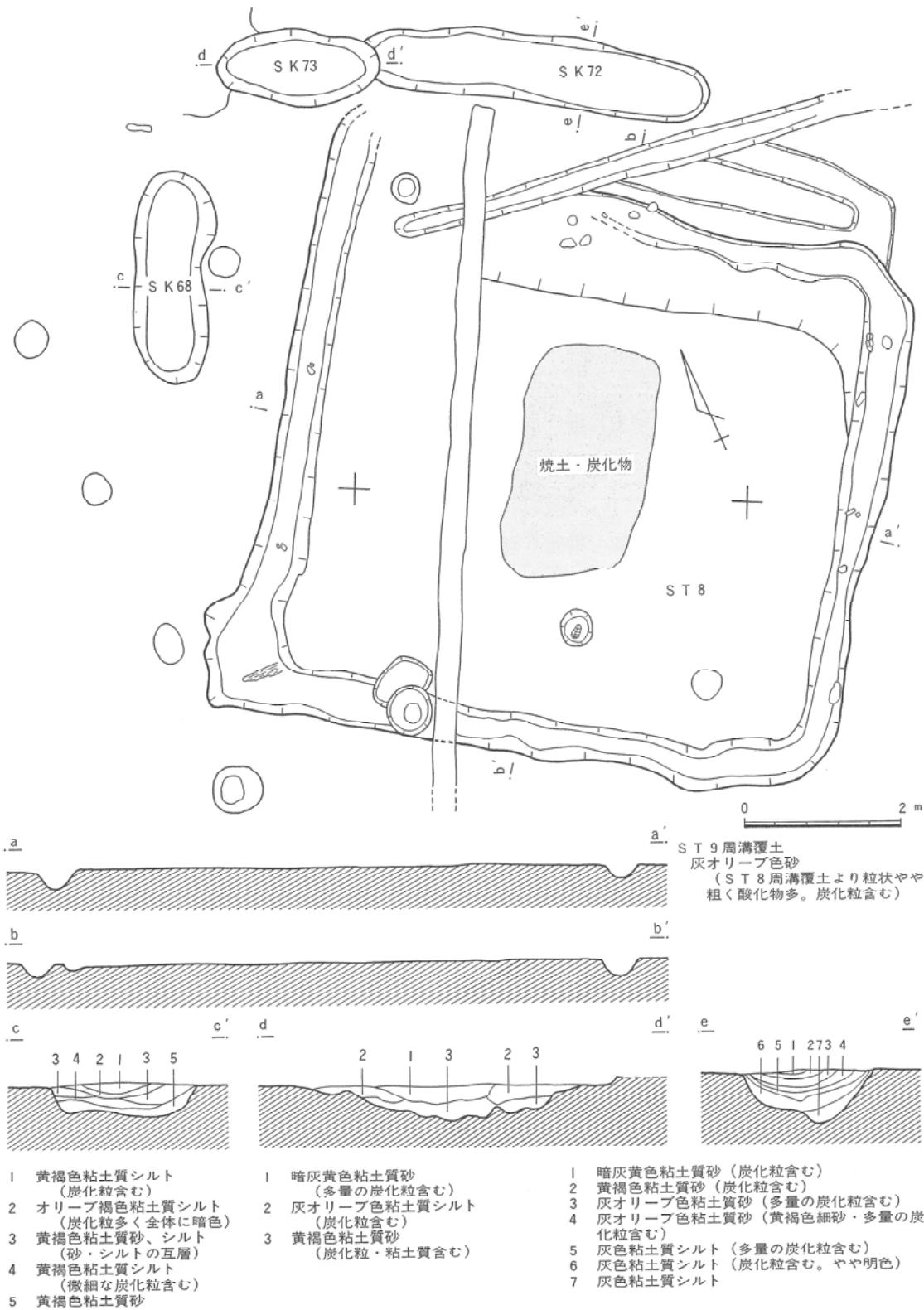
S T 12

〔位置・重複〕 32～33-48～50Gに位置し、S T 3、4住居跡に切られる。

〔平面形・規模〕 東側は調査区域外のため未検出であるが、一辺10m前後の方形を呈すると推定される。周溝のみが残存し、周溝は幅30～80cm、深さ7～12cmを測る。



第8図 ST3・4・5・12住居跡



第9図 ST 8 住居跡

S T 8

〔位置・重複〕 28~30—48~50Gに位置し、北側をS D11に切られる。北西部が不明で未検出であるが、SK72と重複している可能性がある。また、現地調査の段階では確認できなかったが、西側に掘立柱建物跡との重複が認められる。これは東西の間尺8尺、南北の間尺7尺の2間×3間の建物跡で、付近より出土した遺物等から平安時代前期のものと推定される。

〔平面形・規模〕 南北7.3m、東西7.9mの東西にやや長い長方形を呈し、周溝及び地床炉の痕跡と推定される焼土・炭化物のみが残存する。柱穴は確認できない。

〔周溝・堆積土〕 周溝は概ね幅40~60cm、深さ15~23cmを測る。周溝の北側部分では内側を約80cm幅で掘込み、南から北へ向かって緩やかにその深さを増しながら周溝へと移行している。周溝内部の堆積土は単一層で、粘土質のやや強い灰オリーブ色の細砂を主体とする。

〔地床炉〕 中央部に南北3m、東西1.8mの南北に長い長方形を呈する焼土及び炭化物の広がりがあり、地床炉の痕跡と推定される。

S K 68

28~49Gに位置する。南北2.7m、東西1mで中央部のやや細くくびれた長楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。堆積土は5層から成り、第2層のオリーブ褐色粘土質シルト及び第4層の黄褐色粘土質シルト中に遺物を包含する。

S K 72

29~50Gに位置し、SK73に切られる。南北80cm、東西4.5mの東西に長い長楕円形を呈し、深さは35cmを測る。堆積土は7層から成り、上部は粘土質の細砂、下部はシルトを主体とし、ほぼ全体に炭化粒の混入がある。特に3、4、5層は暗色で目立つ。

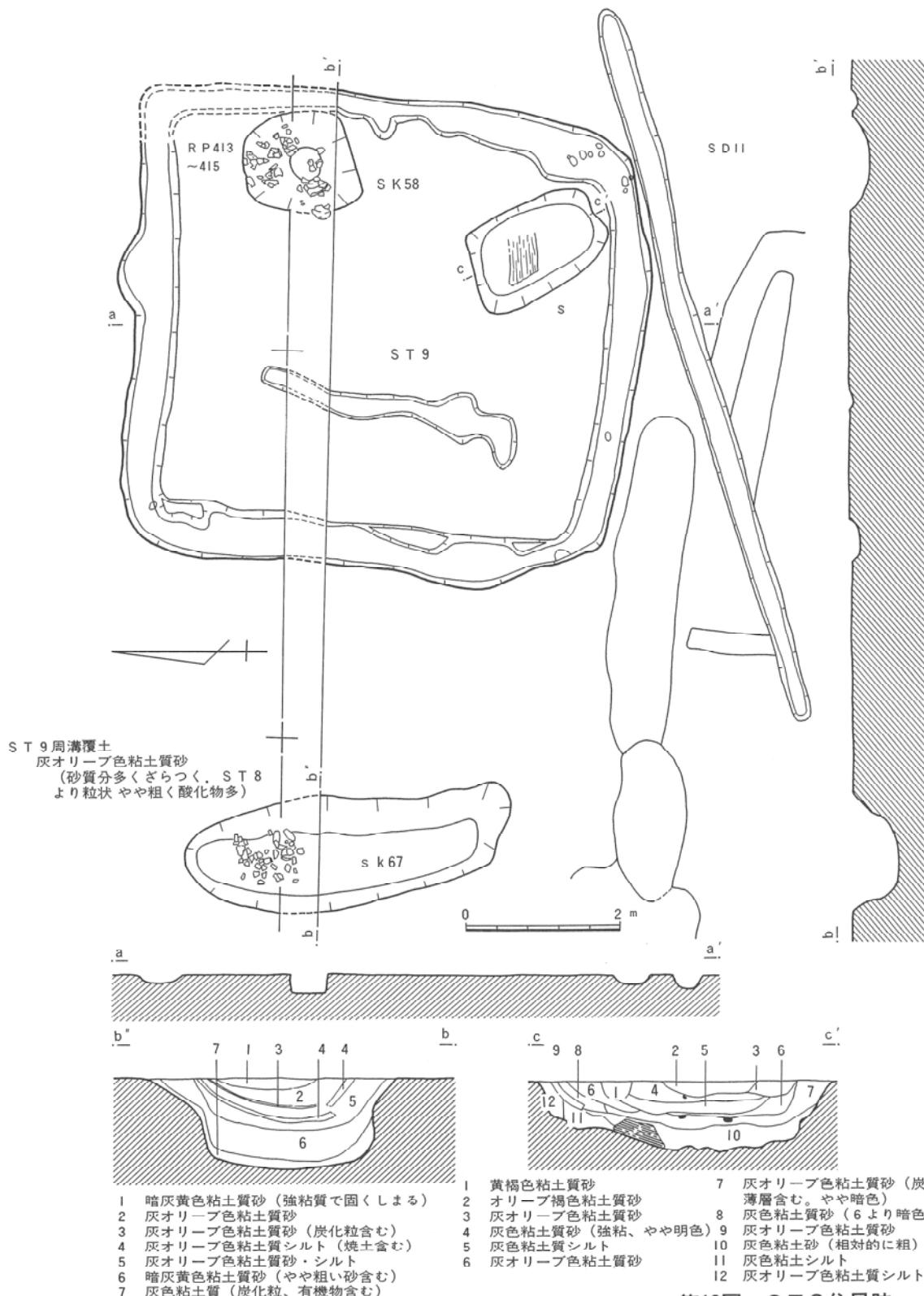
S K 73

28~50Gに位置し、SK66、73を切る。南北1m、東西2.1mの長楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。堆積土は3層から成り、第1層の暗灰黄色粘土質細砂層中に遺物を含む。

S T 9

〔位置・重複〕 29~30—50~51Gに位置する。内部にSK18、58を含み、貯蔵穴等である可能性があるものの、床面が残っていないために直接の関係は不明である。

〔平面形・規模〕 北東部が一部未検出であるが、南北6.8m、東西6mのやや南北に長い長方形を呈する。周溝のみが残存する。床面、柱穴ともに確認できず、また、かまどや地床炉等の設備の存在を示唆する様な焼土、炭化物等も認められない。SK58土壤跡より支柱が一点出土しているが、前述の通り住居跡との相関関係については不明である。



第10図 ST 9住居跡

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅50～60cm、深さ5～15cmを測る。周溝内部の堆積土は単一層で、灰オリーブ色の粘土質砂を主体とする。砂質が強くざらつく。

S K18

S T 9 住居跡内部、南東の隅に位置する。南北1.9m、東西1.2mの長方形を呈し、深さは45cmを測る。長軸はS T 9 住居跡の南東一北西の対角線に沿う。堆積土は12層から成り、第10層の灰色粘土質砂層に板状の炭化材を含む。遺物は少量が出土している。

S K58

S T 9 住居跡内部、北東部に位置する。住居跡周溝との重複はない。平面形は南北1.4m、東西1.3mの円に近い橢円形を呈し、深さは40cmを測る。中央部が水路にかかり、堆積土の詳しい状況は判らないが、遺物は主に壁及び底面に接する形で出土している。

S K67

28-50～51Gに位置する。南北4.3m、東西1.5mの長橢円形を呈し、深さは60cmを測る。堆積土は7層から成り、第4層中に焼土と思われる小粒を含む。最下部に有機物を含む泥炭質の粘土層を有し、遺物を包含する。

S K11

東西9.5m、幅30～40cm、深さ15～20cmの溝跡。平安期と推定される。

S T13

〔位置・重複〕 調査区の東辺32～33-47～48Gに位置し、南東部をS E 15井戸跡に切られる。平面形は西辺のやや短い略方形を呈するが、南側を走るS D35溝跡との重複によると考えることも可能である。S T13住居跡の南側に設定した土層観察用のサブトレンチでは、S D35がより北方へ広がる様子が観察できたが、土色が地山と酷似しており、識別は困難を極めた。S D35は多量の炭化物を含む層をもって南北の幅を決定したが、溝幅がひとつ回り広範に及んでいるとすれば、S T13との接触あるいは重複の可能性があることも否定できない。

〔平面形・規模〕 東辺7.7m、西辺6.7m、東西7.8mの略方形を呈する。確認面から床面までの深さは15～20cm、確認面の下がる水路西側では5cmを測る。

〔床面・壁・柱穴〕 地山を直接床面とし貼床等特に手を加えた様子は認められない。床面はほぼ水平だが、南東部から中央やや左寄にかけて若干の盛上がりがある。意図的に作られたものか、あるいは構築後若くは埋積後に外部からの力により変形したものかは定かではないが、堆積土の上部から掘込んで作られたS E 15井戸跡が、東側から押された様な状態で変形している事から、後に地震等の外部からの圧力によって変形したと考えるのが自然であろうか。



第11図 S T 13住居跡



第12図 S T 13住居跡、遺物分布図

壁面は床面と同様に地山をそのまま壁として利用している。床面から約20cmの比高を、約45°の角度をもって斜めに立上がる。

柱穴は南北に3本づつの計6本と考えられるが、うち南西の1本を除く5本が確認された。さらに、東側壁に2ヶ所、北側壁面端に1ヶ所の計3ヶ所に、直径10~20cm、遺構検出面からの深さ20cm程の小ピットが検出されており、支柱痕と推定される。

〔堆積土〕 堆積土は基本的には全て粘土を含む砂若しくはシルトを主体とするが、土色や土質、含まれる炭化物の量などから16層に分類した。うち明らかに後世の柱痕である第1、2層、及びその疑いのある第5~7層を除き、11層が住居跡に関連する堆積土と考えられる。

中でも重要な層は、多量の炭化物を含む第9、14層及びその間の第11層である。第9層は暗灰黄色の粘土質細砂中に大量の炭化物を含み、全体に黒く目立つ。平面的には、S T 13住居跡検出時に、南西隅から北辺中央部分にかけて軸線を持つ楕円形の炭化物層として認識された。完形品を含む大量の遺物を包含し、当初はS X 16として個別に扱ったが、特に後から掘込まれた様子もないため、住居跡覆土と考えるべきであろう。

第14層は灰オリーブ色の粘土質シルト中に大量の炭化物が混入し、第9層と同様にきわめて黒く目立つ。しかしこの層に関しては上下の厚さがほとんどなく、薄く広範に拡がっていることから、床面上に敷かれた植物質のものが炭化した結果であるとの見方ができる。また、住居跡中央部のやや深い炭化物層は地床炉の痕跡と考えられるが、その南西部の2ヶ所の炭化物層は、部分的に深く残った第14層であると推定される。

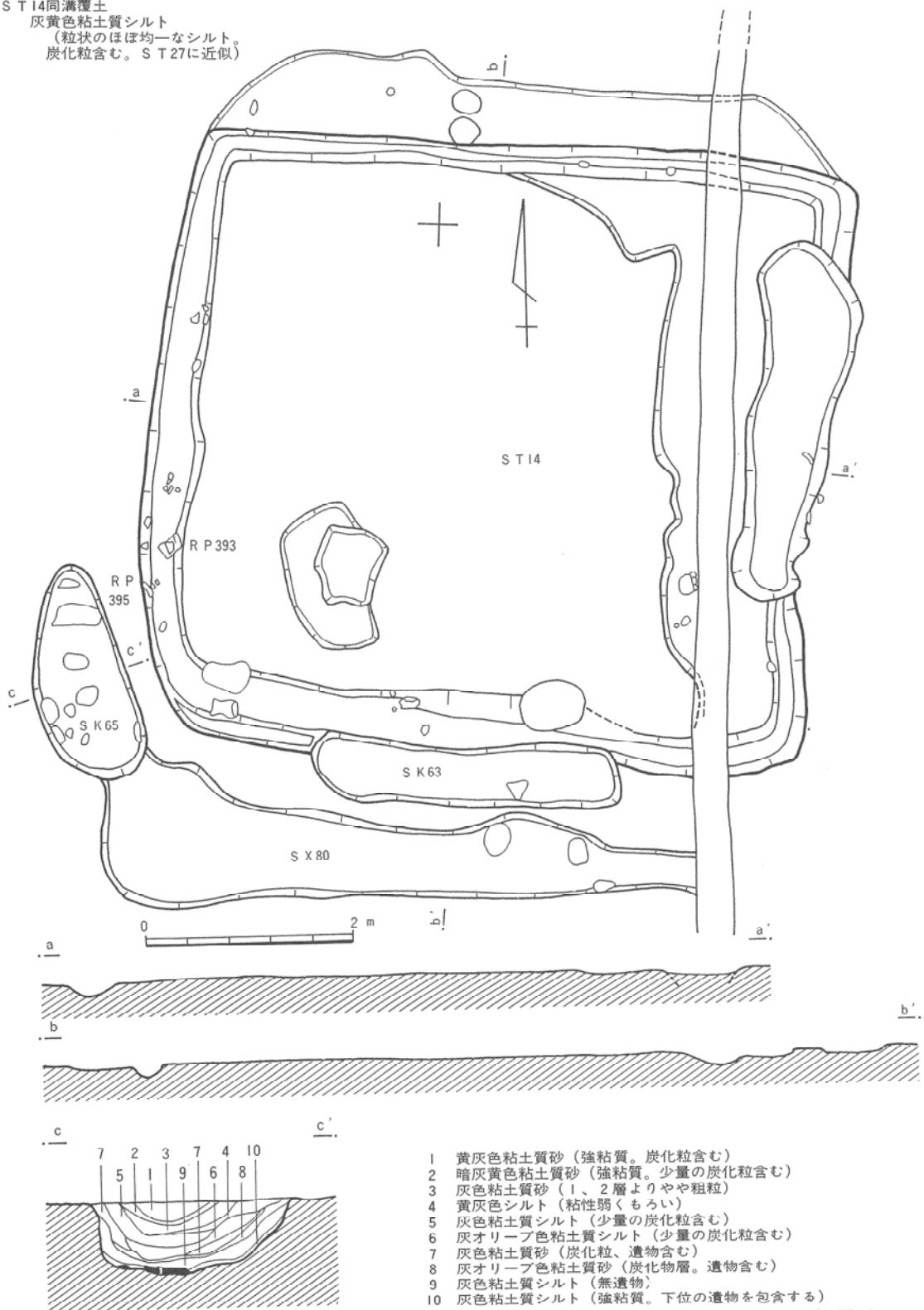
第11層は第9、14層間に比較的厚く堆積している。灰オリーブ色の粘土質細砂中に多量の炭化物が混入する。S T 13住居跡より出土した遺物は主に第9層及び第11層中に含まれており、第9層中に含まれる上位の遺物と第11層中、換言するば第14層(床面?)直上の下位の遺物とに大別できるが、両者の間に決定的な時期差は認められず、ほぼ同時期に埋積を終えたと推定される。しかしながら、S T 13住居跡からは一般の生活レベルでは考えられない大量の遺物が出土しており、これらの遺物が同時に存在したとするなら、ごく普通の住居としての性格を有したとは考え難い。尚、第11層上部より勾玉が、下部よりミニチュア土器がそれぞれ1点ずつ出土している。

S T 14

〔位置・重複〕 30~31-47~49Gに位置し、S T 8住居跡の南東に隣接する。他の住居跡との重複はないが、周溝南側をS K 63に、東側を細長い土壙状の遺構に切られる。

〔平面形・規模〕 南北6m、東西6.4mの方形を呈し、周溝のみが残存する。北西に位置するS T 9住居跡とは主軸方位、規模ともにほぼ共通する。

S T 14同溝覆土
灰黄色粘土質シルト
(粒状のほぼ均一なシルト。
炭化粒含む。S T 27に近似)



第13図 S T 14住居跡

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅25~40cm、深さ10cm前後を測る。周溝内部の堆積土は灰黄色のシルトを主体とした単一層で、若干の炭化物の混入がみられる。南側周溝中に2ヶ所、円柱状に埋込まれたと思われる径30×45cmと50×60cmの灰白色の粘土塊があり注目される。同様のものはS X80にも存在する。

〔その他〕 床面は既に削平を受けて消失し、柱穴なども検出できない。また、炉跡の存在を示唆する様な焼土や炭化物も見受けられない。南西部に存在する土壙状の浅い落込みや、周溝東側及び北側をとりまく落込み等と住居跡との関連については不明瞭である。

S K63

S T14住居跡南側に位置し、住居跡周溝を切っている。南北0.5~0.6m、東西3mの東西に長い長楕円形を呈し、若干量の遺物の出土がある。

S K65

S T14住居跡南西に位置し、S X80を切る。南北2.1m、東西0.9mの細長い卵形を呈し、深さは35cmを測る。7、8層及び最下層の10層より遺物の出土がある。

S X80

S T14住居跡の南側に位置し、S K65に切られる。東西に長い溝状の遺構で、覆土中に焼土や炭化物を含む。また、S T14と同様に円柱状の粘土塊が2ヶ所検出されている。

S E15

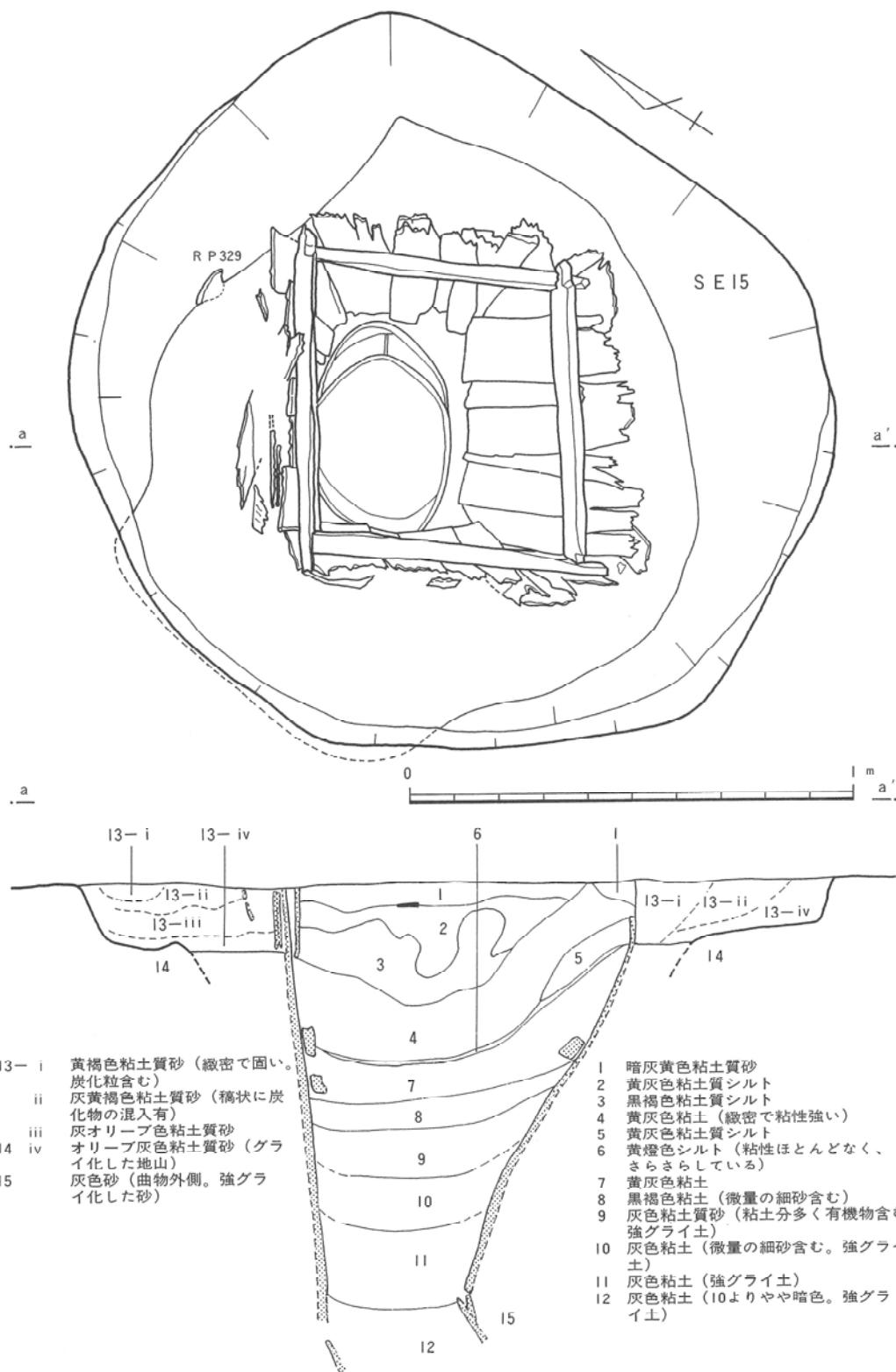
〔位置・重複〕 33-47Gに位置し、S T13住居跡を切る。

〔掘り方〕 東側を暗渠に切られるが、本来は直径1.7mの円形を呈したと推定される。覆土は炭化物を含む灰黄褐~灰色の粘土質細砂から成り、基本的にS T13住居跡の堆積土を主体とするものと推定される。尚掘り方内より古墳時代の坏が1点出土している。

〔井戸側の構造〕 約40枚の矢板とそれを内側より押さえる1組の横棧、及び下部2段の曲物より構成される。検出面での平面形は一辺約80cmのややつぶれた方形を呈し、検出面から横棧上面まで約30cm、曲物上面まで約90cm、井戸底面まで120cmをそれぞれ測る。

〔堆積土〕 内部の堆積土は第1層~12層及び矢板と曲物間の第15層の計13層から成る。うち第4~12層は自然堆積、第1~3層は人為的堆積の様相を呈し、特に第3層は軟かくしまりがない。第4層以下では白色がかかった黄燈色の薄層(火山灰か?)を成す第6層を除き、概ねグライ化した灰色の粘土から成る。第15層は粘土分をほとんど含まない細砂~中砂で、もともと地山を構成する層と考えられる。

〔その他〕 S E15井戸跡は南東方向から押された形で変形しており、詳しい原因は不明であるが、S T13住居跡の床面が不自然な盛り上がりを見せる事から、地震等何らかの理由で土圧が加わりつぶれたのではないかと推定される。



第14図 S E 15井戸跡

S D21

調査区の南東隅、32～33-41～43Gに位置し、S K36、S D37を切る。調査区内での最大幅は約3.2mで、調査区南東角から北西方向に延びる。遺構確認面からの深さは最大で40cmを測り、北西に向かうにつれてしだいにその深さを減じ、S K36、S D37との重複部分付近から緩やかに立上がる。その後も幅、深さ共に減じながら4.5m程北西へ向かった地点で消滅する。

堆積土は黄灰色の粘土または粘土質のシルトを主体とし、極微細な炭化物を含む。粘土分はかなり多く強い粘性を帯びる。また、レンズ状に砂の混入がある。遺物は堆積土中よりほぼ満遍なく出土しているが、時期的には古墳時代から中世まで様々で、中世以降の溝跡であると推定される。

S K36

S D溝跡の底面より検出された土壤跡で、長径1.8m、短径0.5～0.6mの楕円形を呈する。深さはS D21底面から20～25cm、S D21の確認面からは30cmを測る。古墳時代の遺物が出土している。

S D37

S D21溝跡の北側に位置し、S D21、S K38に切られる。幅70～80cm、深さ10cmを測る。溝の幅や深さ、方向、遺物の出土状況からみて住居跡の周溝である可能性が高いが、相当する他の3辺の周溝が検出されていないため確証はない。完形の環1点が出土している。

S K38

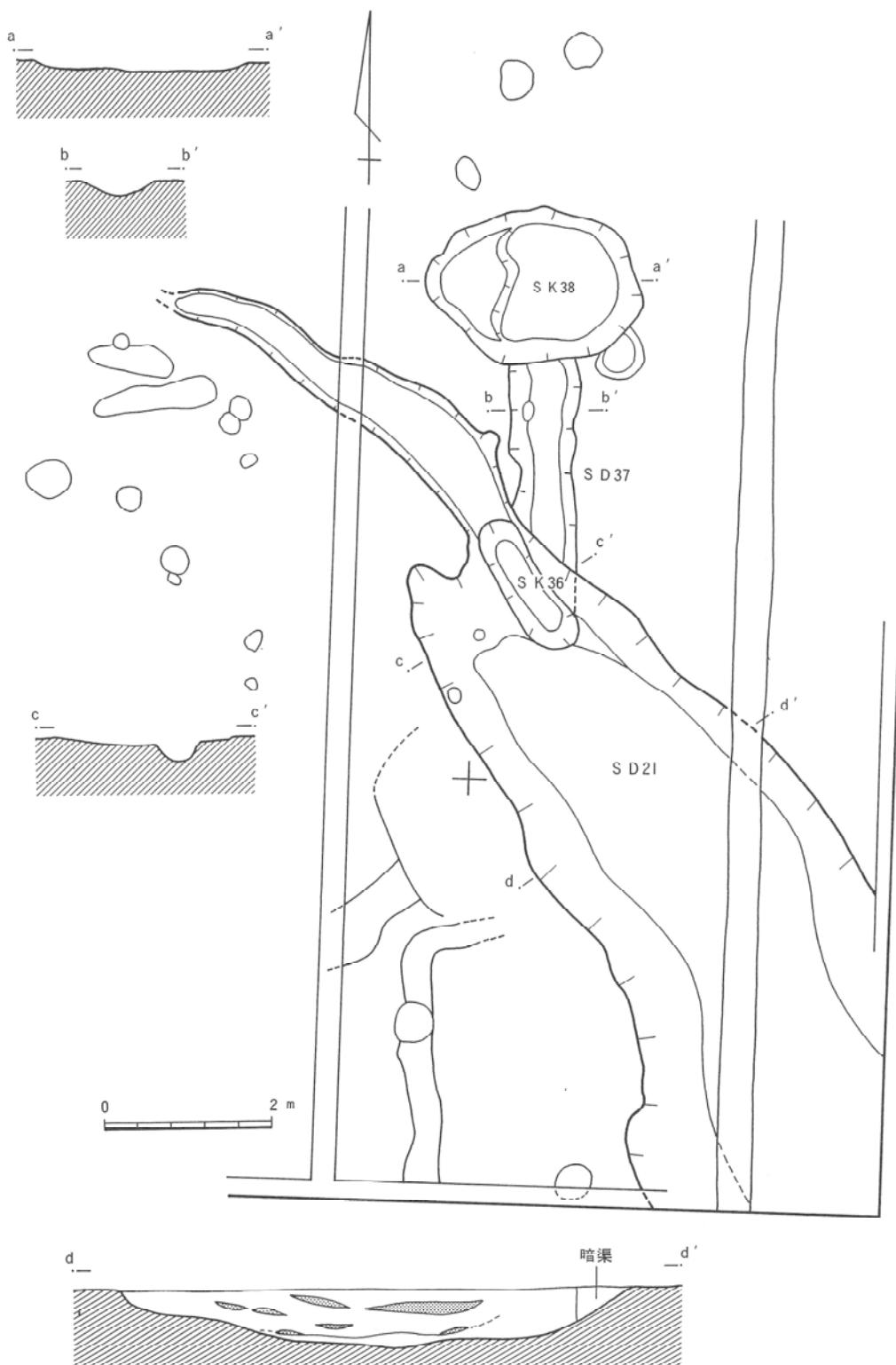
S D21、37の北側に位置し、S D37を切る。南北1.9m、東西2.6mの楕円形を呈し、深さは10cmを測る。出土した遺物から平安時代の土壤跡と推定される。また付近には、組み合わせはできないものの、平安時代と思われる多数のピットが検出されており、同時期の集落の存在を示唆している。

S T22

〔位置・重複〕 調査区南端30～31-41～42Gに位置する。周囲にはS T23～30等多数の周溝を持つ住居跡が重複関係をもちながら検出されており、S T22住居跡はS T23住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕 東側は確認できず不明であるが、南北6.3mのややつぶれた菱形に近い方形を呈するものと推定される。周溝のみが残存している。

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅30～50cm、深さ2～4cmを測りきわめて浅い。周溝を検出したレベルでは既に東側の周溝は消失していた可能性が高い。周溝内部の堆積土は強粘土質の黄褐色シルトを主体とする単一層で、細砂と多量の炭化粒の混入がある。S T24住居跡



第15図 SD21溝跡、SK36.38土壤

の周溝堆積土と土色、土質共に似ており、同時に堆積した可能性が高い。柱穴、炉、かまど等の設備は確認できない。

S T23

〔位置・重複〕 30～31-41～42Gに位置する。S T22住居跡を切り、東側約3分の2が重複している。西側にS T24、25、北側にS T27の各住居跡、西隣りにS K39土壙跡が位置する。

〔平面形・規模〕 南北6.5m、東西6mのほぼ方形を呈し、周溝のみが残存し、柱穴等は確認できない。

〔周溝・堆積土〕 周溝は東西で幅20cm、南北でやや広く30～50cm、深さは10～18cmを測る。周溝の東側中央部分が約1.9m程開いており、出入口若しくはかまど等の設備が存在したと推定されるが、焼土、炭化物等は認められない。周溝内部の堆積土は灰オリーブ色の粘土質細砂を主体とする単一層で、若干の炭化物片が混入する。S T30住居跡の周溝堆積土と土色、土質共に近似する。

S K39

S T23住居跡の西側、29～30-41～42Gに位置する。南北4m、東西1.3mの南北に長い楕円形を呈し深さは最大で15cmを測る。堆積土は3層から成り、いずれも暗灰黄若しくは灰色の、粘土分を含むシルト又は細砂を主体とし、炭化粒の混入が認められる。1層では全体の約3割を炭化粒が占め、粘性も強く包まれる遺物の量も多いが、下位の層ほどそのいずれもが減少していく傾向がある。3層では若干の炭化粒を含むものの遺物の出土はほとんどみられない。また、北側にはS T14住居跡の周溝で検出されたものと同様の灰白色の粘土が、直径50cmの円柱状に埋込まれており、土壙と何らかの関連があるものと推定される。壺・甕類等遺物の出土も多いが、いずれも破片である。

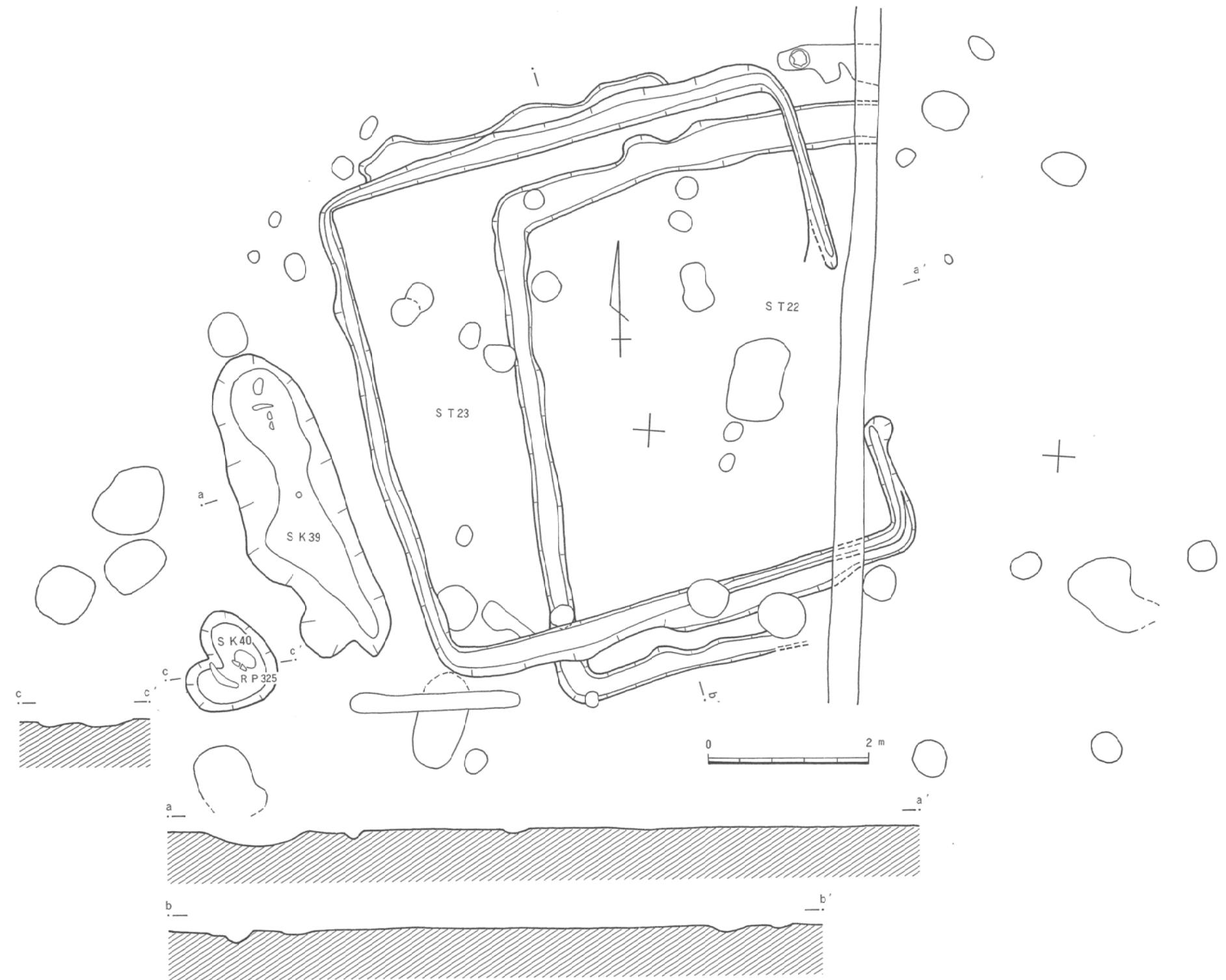
S K40

S K39の西側に位置する。東西、南北共に1.2mのハート形を呈し、深さは7～8cmを測る。2基の土壙の重複したものと考えられなくもないが、遺構検出時にそのような様子はみられなかった。遺物は甕が2点と壺が1点出土している。

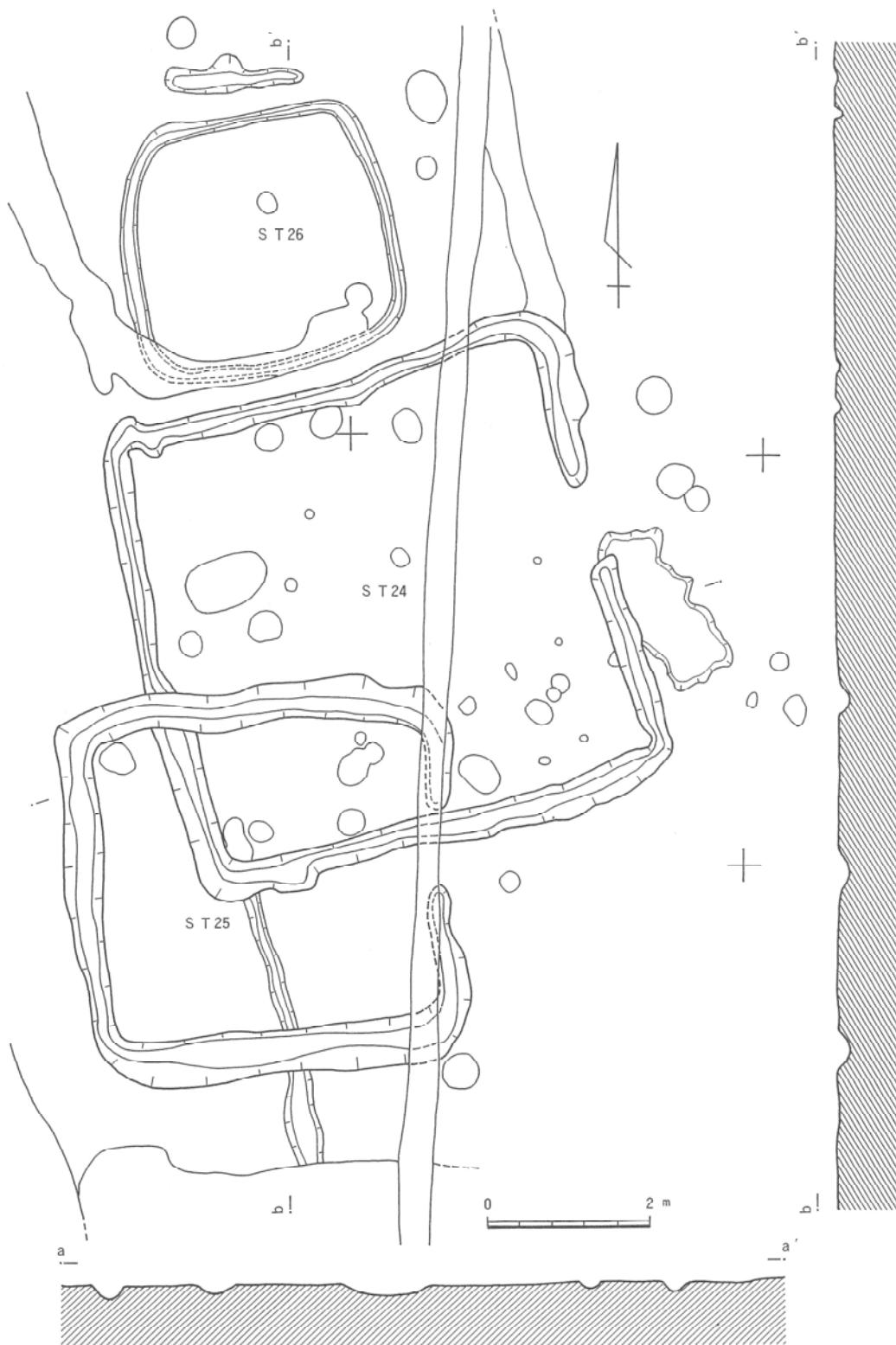
S T24

〔位置・重複〕 調査区の何部28～29-41～42Gに位置する。周囲をS T22、23、26、27の各住居跡に囲まれ、西側には遺跡の西辺を区画すると推定されるS D76大溝が走る。南西部をS T25住居跡に切られる。

〔平面形・規模〕 南北5.9m、東西6mの方形を呈する。周溝のみが現存し、柱穴・炉跡等は確認できなかった。規模的には、周囲のS T22、23、27の各住居跡と共通する。



第16図 ST 22・23住居跡・SK 39・40土壤



第17図 ST 24・25・26住居跡

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅30～40cm、深さは10～20cmを測る。S T23住居跡と同様に周溝東側中央部が約1m開いており、出入口若しくはかまど等の設備が存在したと推定される。周溝内部の堆積土は粘土分のやや多い黄褐色のシルトを主体とする単一層で、多量の炭化物片を含む。これはS T22住居跡の周溝堆積土とほぼ同色同質であり、同時に堆積した可能性が高い。

S T25

〔位置・重複〕 調査区の南端28～29-41～42Gに位置し、S T24住居跡を切る。

〔平面形・規模〕 一辺4.7mの方形を呈する。周溝のみが残存し、柱穴、炉跡等は確認できなかった。規模の点では今回の調査で検出された住居跡の内では小型の部類に属し、S T24住居跡の3分の2、S T3住居跡の3分の1以下の面積を有するに過ぎない。

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅50～60cmとやや広めで、深さは10～15cmを測る。東側は暗渠に切られやや不明瞭ではあるが、S T23、24住居跡と同様に中央部が90cm程度開いている。堆積土は単一層で、極めて粘性の強い暗灰黄色の粘土質シルトを主体とする。

〔その他〕 S T22～25は、周溝の形態や主軸方位等に共通点があり、S T23と24の2棟の住居跡では堆積土もほぼ同一であることから、これらの住居跡が同時存在若しくは比較的近い時期に建て換えられた可能性が高い。

S T26

〔位置・重複〕 S T24住居跡の北側、28～29-43Gに位置し、南側を不定形の溝状遺構に切られる。

〔平面形・規模〕 南北3.2m、東西3.4mの方形を呈する。規模的には最も小型であり、他の住居跡と比較しても極端に小さいため、他と同様の使われ方をしていたかは疑問である。周溝のみが残存し、柱穴等は確認できない。

〔周溝〕 周溝は幅15～25cm、深さは12cmを測る。

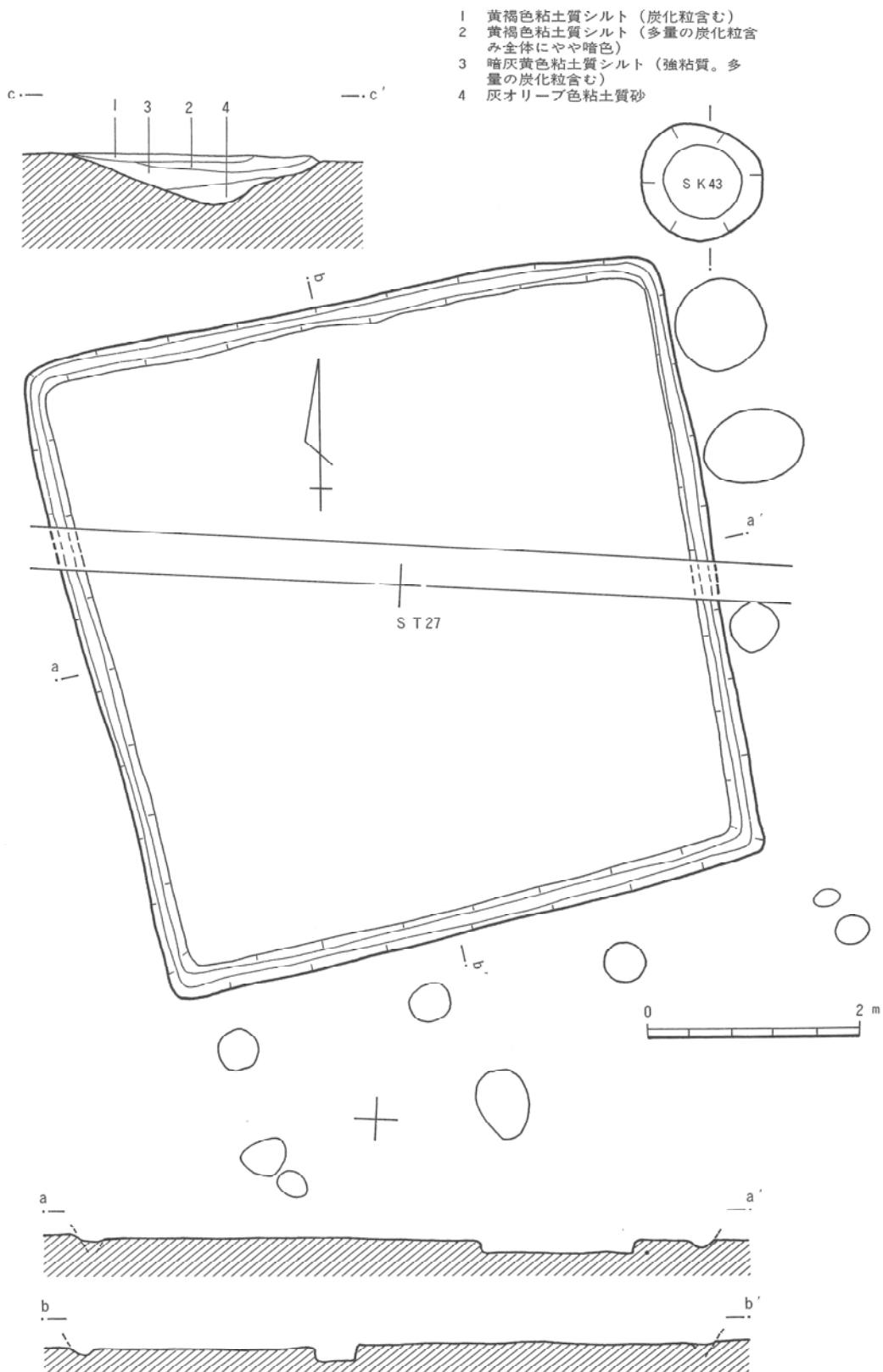
S T27

〔位置・重複〕 29～30-43～44Gに位置し、他の遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕 南北6m、東西5.8mの方形を呈し、S T23、24住居跡とほぼ同等で平均的な規模といえる。周溝のみが残存し、柱穴等は確認できない。

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅20cmと細めで、深さも4～5cmときわめて浅い。周溝は四方をほぼ一定の幅で巡っており、S T23～25住居跡にみられる周溝の切れ目はない。堆積土は単一層で、地山との土色変化の小さい灰黄色の粘土質シルトを主体とする。土色的にはS T14住居跡の堆積土に近いが、粒径はより小さい。

〔その他〕 南側に平安期の掘立て柱跡が多数存在するが、建物跡の確認には至らない。



S T 27周溝覆土
灰黄色粘土質シルト
(炭化粒含む。S T 14周溝覆土に近いが粒状はより微細)

第18図 S T 27住居跡

S T28

〔位置・重複〕 30～32-43～45Gに位置し、周溝北側をS T住居跡及びS X46、71に切られる。

〔平面形・規模〕 東側が検出できず不明であるが、南北8.4mのきわめて大型の住居跡である。周溝のみが残存し、柱穴や炉跡等は確認できない。

〔周溝・堆積土〕 周溝は北及び西側では幅40～50cmであるが、南側では内側をさらに掘り広げており、70～90cmとやや広い。深さは概ね5～7cmと浅い。周溝内部の堆積土は単一層で、若干の粘土分を含む灰オリーブ色の細砂を主体とするが、全体に砂質が強くざらつく。南側の周溝には外側に突き出る様な形で円柱状の粘土塊があり、粘土の色や質、存在の仕方などはS T14やS K39、S X46等において検出されたものと同様の様相を呈する。遺物は北西隅に集中し、甕類が主体となる。

S T29

〔位置・重複〕 31～32-43～45Gに位置し、S T28住居跡の内部に含まれる様な形で検出された。S T28住居跡を切り、S X46に切られる。

〔平面形・規模〕 一辺5.4mの方形を呈する。周溝のみが残存し、柱穴、炉跡等は確認できない。

〔周溝〕 周溝は幅20cm、深さ5cmを測り、幅、深さ共にほぼ一定の値を保ちながら四辺を巡る。S T27住居跡とほぼ同様の形態を持つといえる。

S K50

S T29住居跡内部の北西隅に位置する。長軸1.1m、短軸0.9mの東西にやや長い円に近い橢円形を呈し、深さは約10cmを測る。堆積土は灰オリーブ色の粘土質細砂を主体とし、炭化物の混入がみられる。

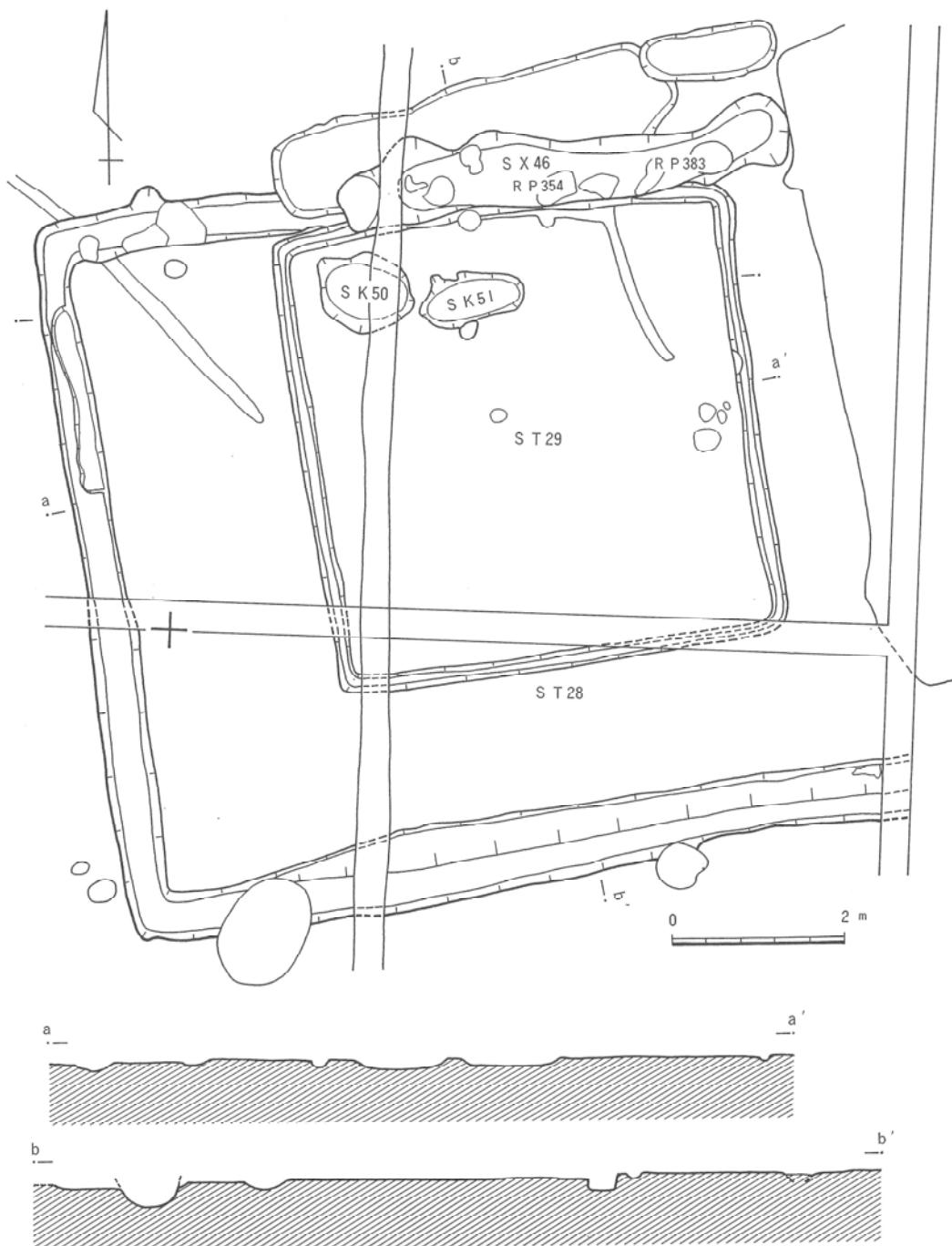
S K51

S T29住居跡内部の北西隅、S K50土壤の東側に位置する。長径1.2m、短径0.5mの東西に長い橢円形を呈し、深さは約10cmを測り、堆積土はS K50と共通する。S T28、29各住居跡との関係は不明。

S T30

〔位置・重複〕 調査区の東部、32～33-43～45Gに位置する。北側をS T33住居跡に、北東角をS T54に切られるが、S T54はその大部分が調査区から外れるため、今回は割愛した。

〔平面形・規模〕 南北7.7m、東西7.4mのほぼ方形を呈する。周溝のみが残存し、柱穴、炉跡等は確認できない。



第19図 ST 28・29住居跡 SX 46溝跡

〔周溝・堆積土〕 周溝は概ね30~40cmを測るが、南側でやや広く50cmに達する。深さは10~15cmを測る。堆積土は単一層で、若干の粘土分を含む灰オリーブ色の細砂を主体とする。また、住居跡中央付近に直径25cm程の灰白色粘土塊が検出されている。

S T33

〔位置・重複〕 S T30住居跡の北側、32~33-45~46Gに位置し、北側をS D35溝跡に、東側をS T54住居跡の切られ、S T30住居跡を切る。

〔平面形・規模〕 北辺及び東辺を完全に分断されるために正確な規模は把握できない。

〔床面・壁〕 遺構検出面から5~6cm掘込んだ時点では住居跡全体を通じてほぼ水平に拡がる黒色の炭化物、及び炭化材を検出し、これをもって床面であると判断したが、柱穴等は確認できず、さらに掘進める必要があったかとも思われる。壁は上記炭化層の上面より緩やかに立上がる。

〔堆積土〕 堆積土は遺構検出面から炭化物層までの1層とそれ以下の炭化物層との計2層に大別できる。1層は灰オリーブ色のシルトを主体とし、全体に明色である。2層は粘土分を含む黄褐色の細砂を主体とし、大量の炭化物を含む。1層とは明確に識別可能であり、住居跡全体に3~4cmの厚さで分布する。また炭化材も広く検出されていることから、焼失家屋であるとの見方も可能である。

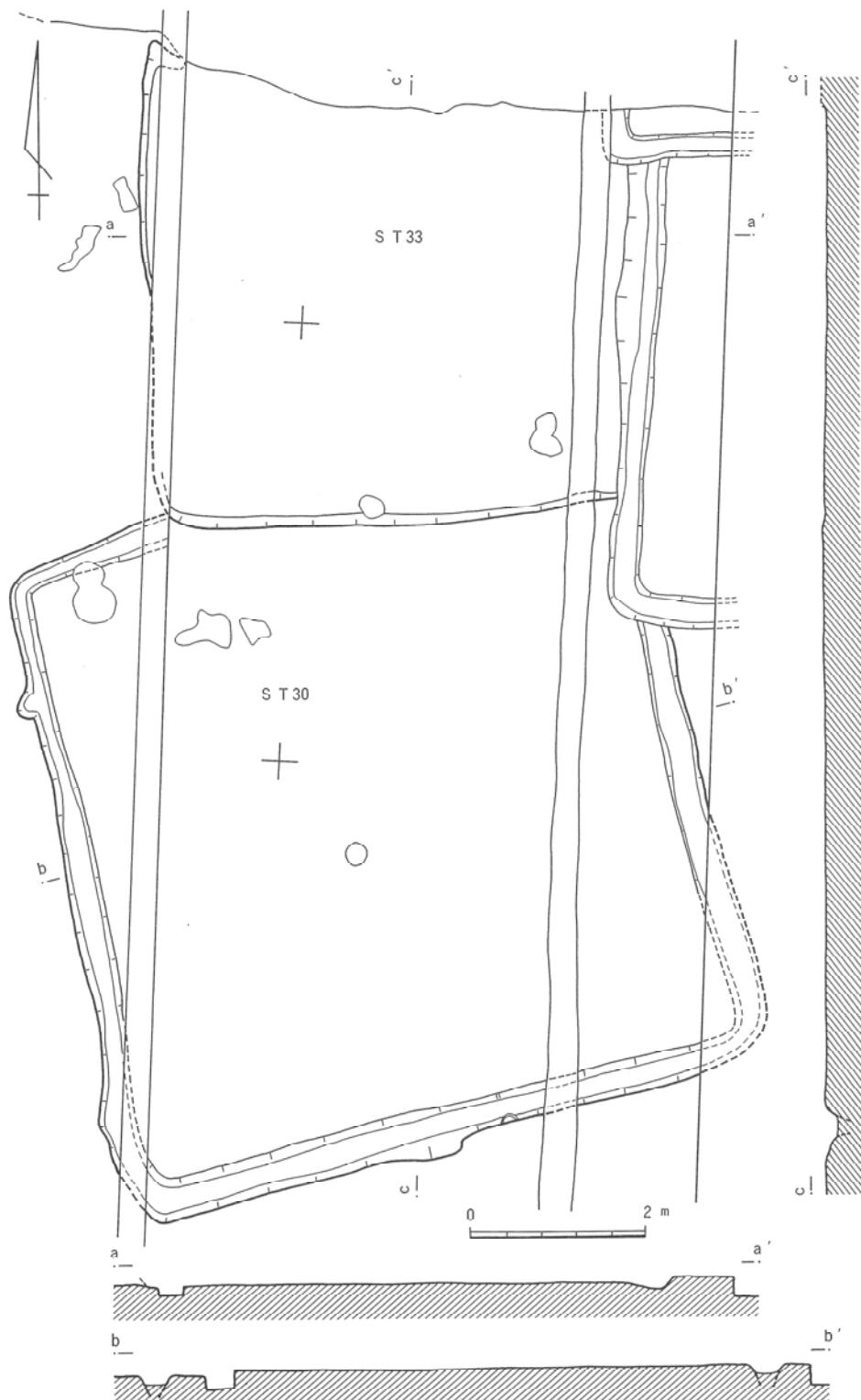
S T31

〔位置・重複〕 調査区のほぼ中央、28~30-45~46Gに位置する。北西角をS K55土壙跡、東辺をS T47住居跡という2つの古墳時代の遺構に切られ、南辺をS K75土壙跡、北東から西辺にかけてS D77溝跡の2つの平安時代の遺構に切られる。

〔平面形・規模〕 南北6.4m、東西6.2mの方形を呈する。確認面から床面までの深さは約10cmを測る。

〔床面・壁〕 地山を直接床面とし、貼床等特に手を加えた様子は認められない。床面はほぼ水平でほとんど凹凸はみられない。壁は床面同様、地山を直接壁として利用しており、約10cmの比高を緩やかに立上がる。

〔柱穴〕 柱穴はS T13と同様に南北に3本づつの計6本が検出された。しかしながら、南北中央の2本については堆積土の状況から柱穴と考えるには不自然な点もあり、仮に柱穴であったとしても、住居跡埋積時には柱そのものは存在していなかった可能性が高い。S T13住居跡についても同様の事が考えられる。また北東の柱穴については、S D77溝跡が掘込まれた時点で抜取られた可能性が高く、他とは趣を異にしている。残りの3本は、床面検出時において、直径1m程の円形を呈する暗色の土色変化として確認された。深さは床面から概ね40cmを測る。



第20図 S T 30・33住居跡

〔地床炉〕 住居跡のほぼ中央に炭化物の広がりとして確認された。北側は S D77溝跡に切られ不明であるが、東西1.9mの楕円若しくは隅丸の長方形を呈するものと推定される。また、内部に直径20～30cmの焼土が2ヶ所確認された。

〔堆積土〕 堆積土は土色及び土質の点から11層に分類した。うち S D77溝跡の堆積土である第1層及び他の遺構(S T47か?)の堆積土と考えられる第11層を除く9層が、S T31住居跡に関連する堆積土である。主体となるのは住居跡全体に比較的厚く堆積する第7層で、やや暗い暗灰黄色の粘土質シルト若しくは細砂中に多量の炭化物を含み、黒く際立つ。出土した遺物の多くがこの層中に含まれる。また、先に述べた南北中央の2本の柱穴(?)との関連から注目されるのが第2～5層で、柱穴内部の堆積土第3～5層との共通性から倒壊時に抜けた柱の痕跡と考える事も可能だが、平面的な拡がりがつかめないために飽くまで推測の域を出ず、確証はない。

〔遺物〕 遺物は住居跡のほぼ全域にわたって出土しているが、内でも南東及び北西隅に多く分布している。この住居跡からは廐の口縁～頸部、廐を模造し、内側に黒色処理を施した土師器等が出土しており、遺物の量から見ても単なる一般の住居跡とは考えられず、遺構の持つ性格が注目される。

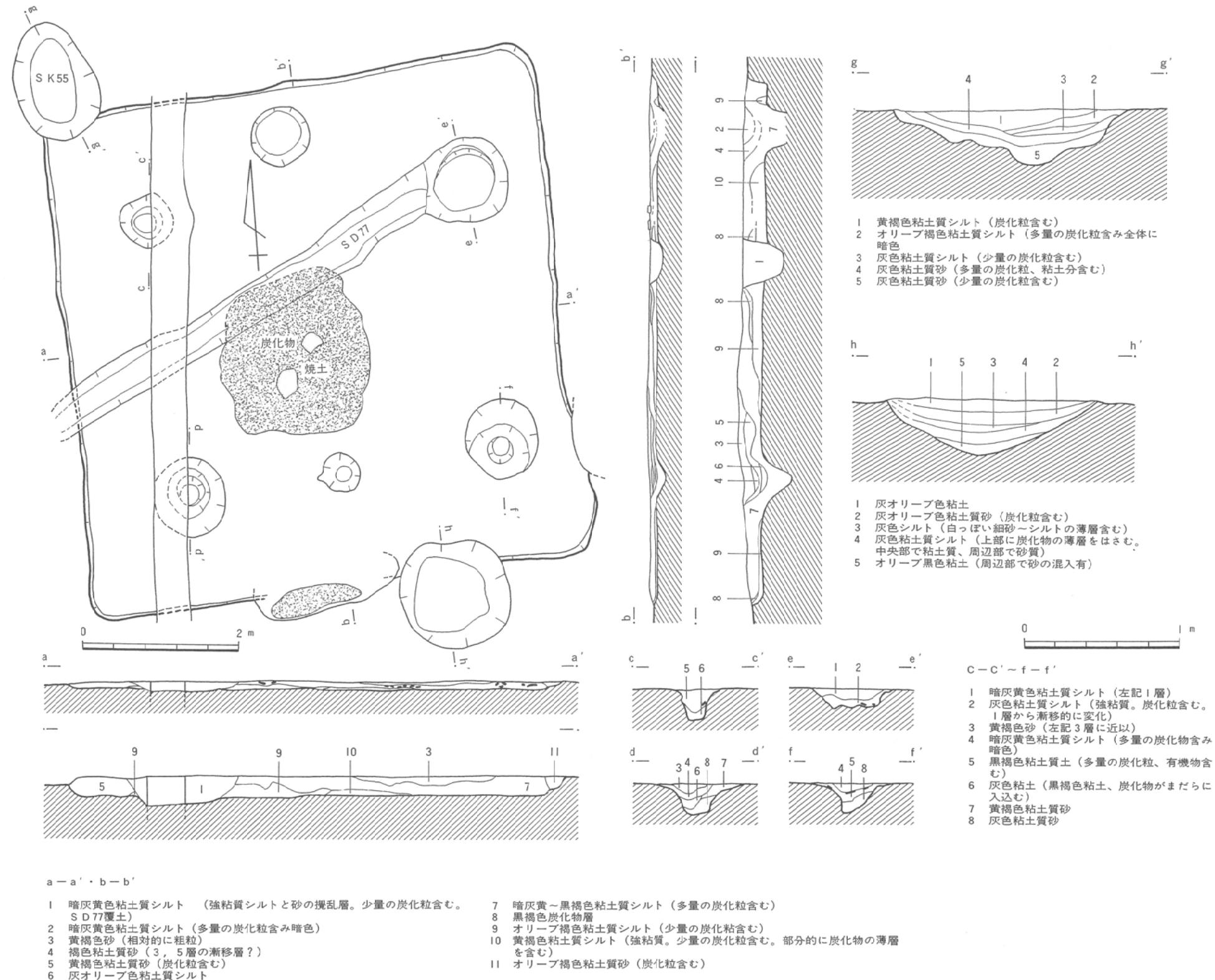
〔S T13住居跡との共通性〕 S T31住居跡とS T13住居跡は多くの点で共通性を持つ。以下にそれらを列挙すれば、①主軸方位がほぼ共通する。②今回の調査で検出された住居跡の内では少数派に属する周溝を持たない住居跡である。③柱穴が6本あった可能性がある。④通常の生活レベルでは考えられない量の遺物が出土していること等となるが、③については前述の様な疑いはあるものの、北側及び南側の2本の柱穴間にピットを持つという構造上の点については共通している。またS T13住居跡とS T31住居跡では壁の高さが異なるが、S T31では遺構の検出レベルが約10cm下がるために、床面そのもののレベルはほぼ等しい。よって当時は同一面上に同一の形態をもって存在していた可能性が高い。規模の面では、S T住居跡を一辺7.8mの方形とみなせばS T31住居跡との面積比は3：2となる。住居跡以外の利用若しくは使用されなくなった住居跡の再利用としても、倉庫あるいは保管庫等が考えられるが、いずれにせよ推測の域を出ない。

S K55

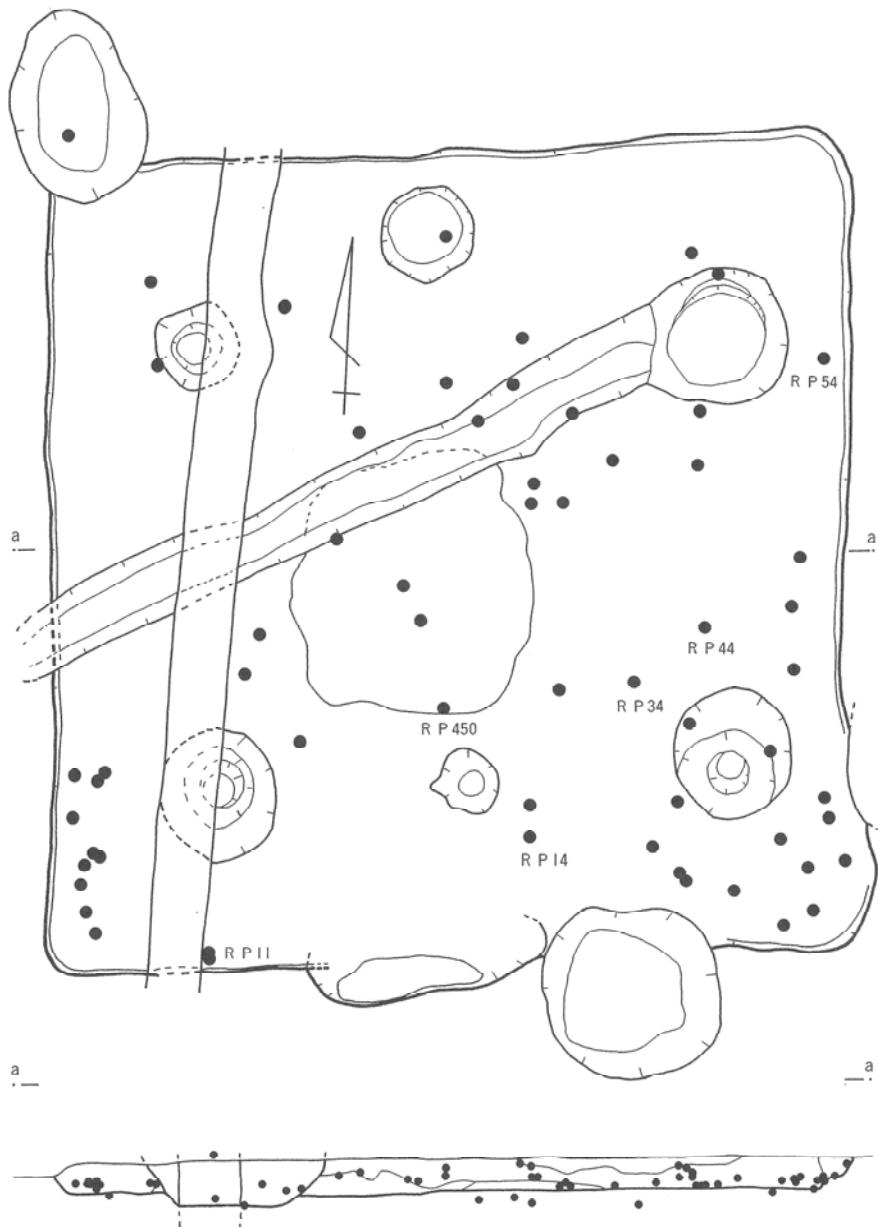
S T31住居跡北西角に位置し、住居跡を切る。長軸1.5m、短軸1mの楕円形を呈し、底面に凹凸があるが、深さは最大で35cmを測る。最底部より环が1点出土している。

S K75、S D77

S K75はS T31南辺を切り、直径1.3～1.4mの円形を呈する。深さは35cmを測る。S D77はS T31内部を斜めに切り、幅50cm、深さ12cmを測る。いずれも平安時代と考えられる。



第21図 S T31住居跡



第22図 S T 31住居跡遺物分布図

S T 32

〔位置・重複〕 S T 31住居跡の東側、30~31-45~46 Gに位置し、S T 47住居跡に切られる。

〔平面形・規模〕 北西部で90°の角度をもって曲がっているために周溝であることは確実だと思われるが、北東部及び南部が消失しており、具体的な規模はつかめない。しかしS T 47住居跡の東部外側に位置する溝がS T 32の周溝と考えられることから、東西7mの方形をなすと考えられる。

〔周溝・堆積土〕 周溝は幅60cmでほぼ一様の値を示すが、深さは最深部で10cm、他は概ね2~3cmと浅い。堆積土は暗灰黄色の細砂若しくはシルトから成る単一層で、粘土分を含む。西側周溝のほぼ中央付近より完形の壺が1点出土している。

S T 47

〔位置・重複〕 S T 31住居跡の東側、30~31-45~46 Gに位置し、S T 31、32住居跡を切る。S T 32住居跡はその大部分を重複している。

〔平面形・規模〕 南北6.2m、東西7.2mの東西に長い長方形を呈する。今回の調査で検出された住居跡中、軸長北の極端に異なるものはS T 47住居跡1棟のみである。

〔周溝・堆積土〕 周溝は南側で幅50cmを測るもの、他は概ね25~30cmとやや細い。深さは10cm前後を測る。また、S T 23~25各住居跡と同様に周溝東側中央部が約80cm開いており、出入口若しくはかまど等の設備があったと推定される。周溝内部の堆積土は1層で、暗灰黄色のシルトを主体とする。

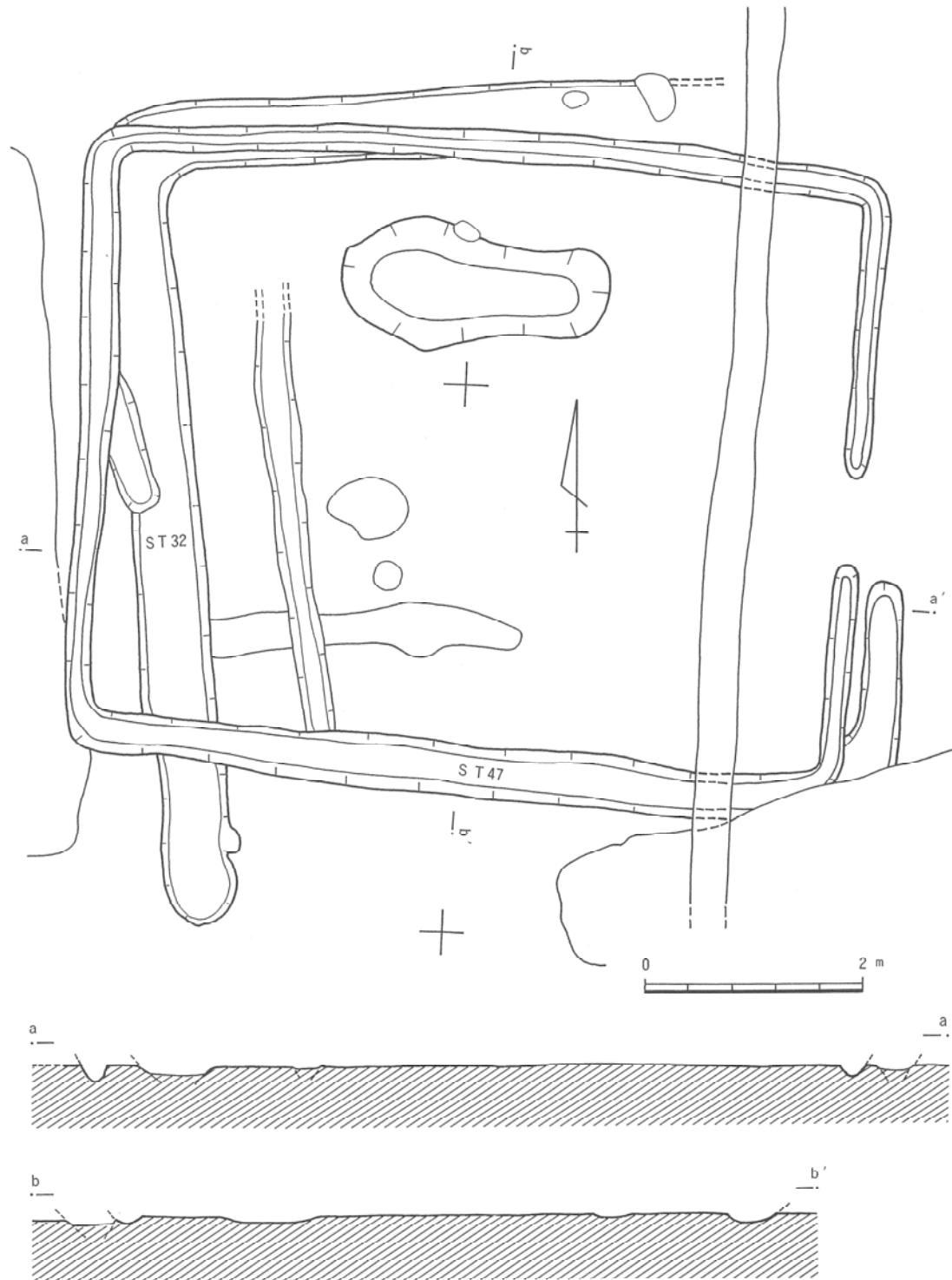
S T 41

〔位置・重複〕 調査区北側、23~24-53-54 Gに位置する。北側及び東側を他の遺構に切られるが、これらの遺構のプランを検出する事はできなかった。また、調査区外にかかるS T 41住居跡の検出を目的として西側を若干拡張したが、遺物は出土するものの遺構の検出はできなかった。

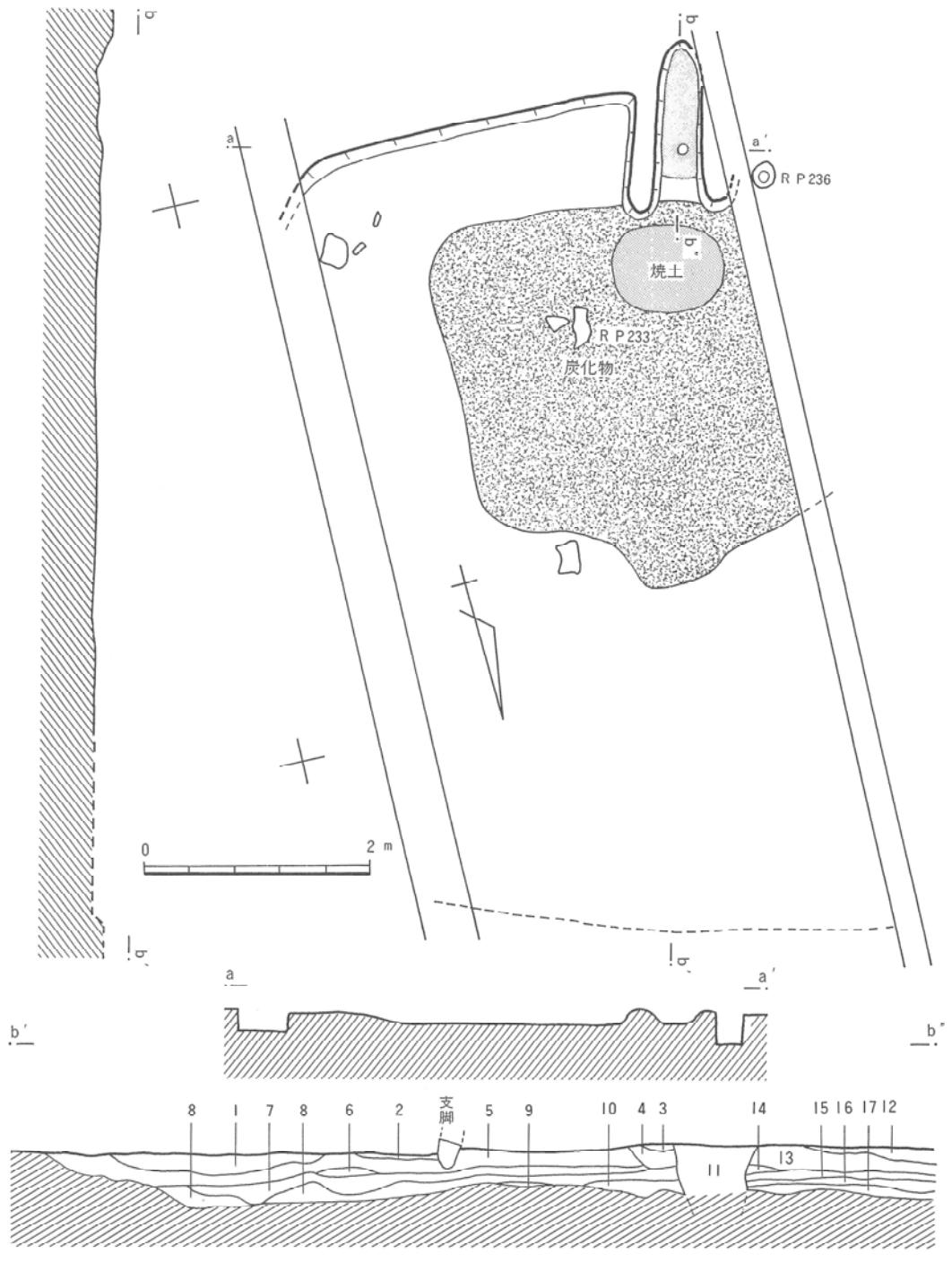
〔平面形・規模〕 上記の様な理由から平面形、規模共に正確なところは不明である。遺構検出面から床面までの深さは約10cmを測り、周溝はなく、今回の調査で唯一かまどが検出されている。

〔床面・壁〕 床面はほぼ水平で地山を直接床として利用し、貼床等はみられない。南側に炭化物及び焼土が広く分布し全体に黒く汚れるが、この住居跡は煮炊きの設備としてかまどを備えているため、焼土をともなうものの地床炉とは考えにくい。柱穴は確認できなかつた。

〔かまど〕 S T 41住居跡は前述のとおり、今回の調査で唯一かまどの検出された住居跡



第23図 ST 32・47住居跡



- 1 灰黄色粘土質砂（細粒。無遺物）
 2 暗褐色燒土
 3 黃褐色粘土質シルト（強粘。燒土、炭化粒含む）
 4 暗褐色粘土質シルト（燒土、炭化物を層状に含む）
 5 黑褐色粘土質砂（細粒。燒土、炭化粒含む）
 6 黑褐色燒土
 7 黃褐色粘土質砂
 8 暗褐色粘土質砂
 9 黑色炭化物層

- 10 暗褐～褐色燒土（強粘質）
 11 灰オリーブ色粘土質砂（強粘、微量の炭化粒含む）
 12 灰オリーブ色粘土質砂（堆積で固い）
 13 暗灰黃色粘土質（炭化物層状に含む）
 14 黄褐色粘土質砂
 15 暗褐色粘土質シルト（燒土中に炭化物を層状に含む）
 16 にぶい黃色粘土質シルト
 17 黑色炭化物層

第24図 S T 41住居跡

として注目される。かまどは住居の南壁に位置する。構造的には全長約110cm、幅30cmの燃焼部から成り、煙道は遺構検出時点で既に失われていたと考えられる。断面図における支脚の位置から考えて、2層あるいは5層底面がかまど底面と推定できる。側壁は地山の削り出しによって造られ、地山と連続する。主軸方位はS-17°-Wを測る。

[堆積土] 堆積土は灰オリーブ色若しくは暗灰黄色の粘土質細砂を主体とし、全体に非常に固く締まりがある。下部には炭化物を多く含む黒色の粘土質シルト層、さらに最底部には黒色の炭化物層が分布する。遺物は主に底部の炭化物層上面より出土する。

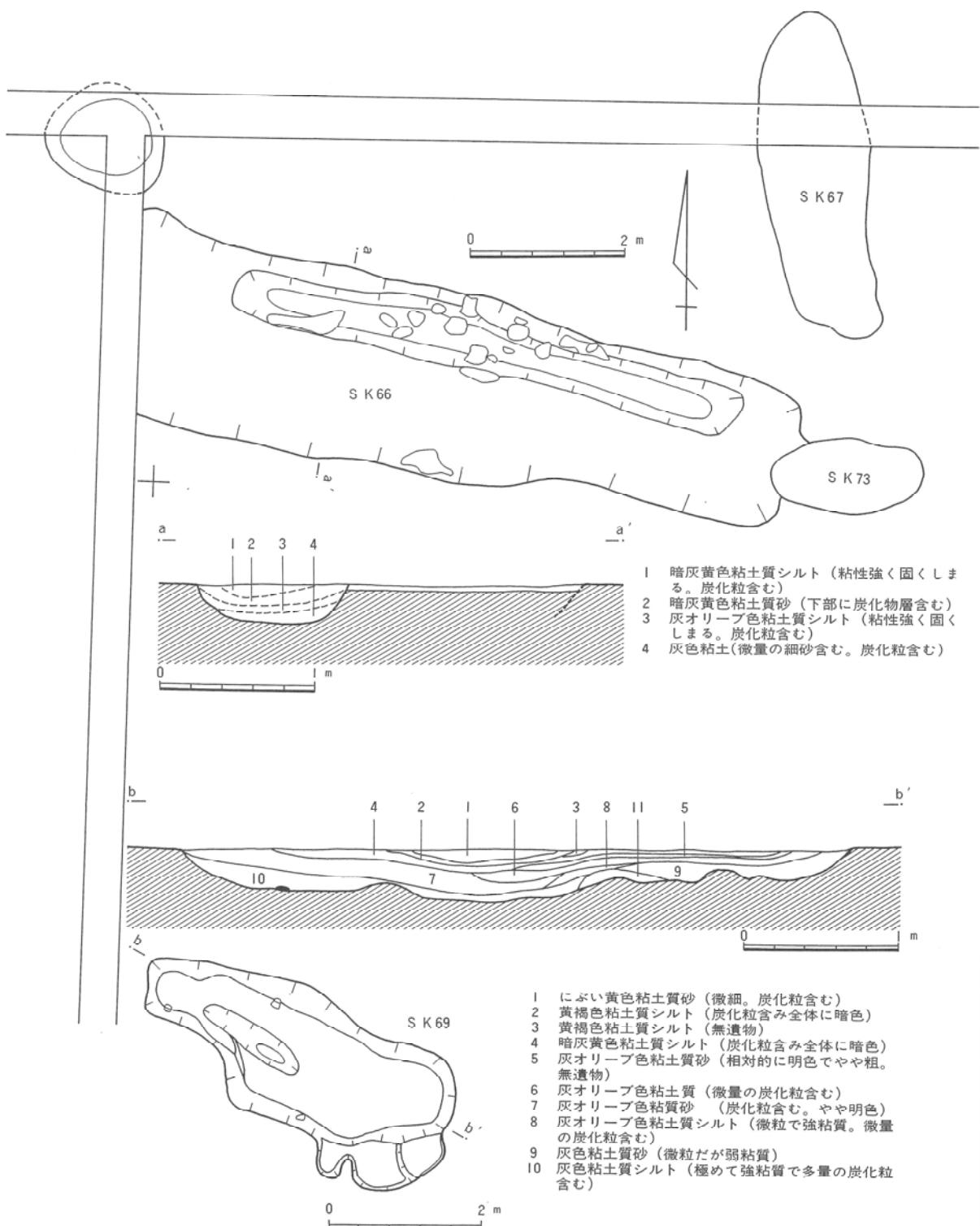
[かまどを備える住居跡に関する考察] 検出された住居跡中かまどを備えるものは1棟に止どったが、20棟余りの住居跡中1棟のみというのはいかにも不自然である。S T 41住居跡より出土した遺物は他から出土したものと絶対的な時期差はなく、時期的に大きな隔たりはないと考えられる。よって、集落が営まれた当時は存在したが、現在までに削平等を受けて消失した結果検出できなかったと考えるのが妥当であろう。また、他にかまどの存在があることを裏付けるかの様に、S K 58土壤跡とS X 46より計3点、さらに包含層他から数点、支脚が出土している。かまどを備えていた可能性のある住居跡としては、周溝南側に土壤状の落込みとそれに接する焼土が検出されたS T 4が最も有力だが、S T 23、24、25、47の各住居跡の周溝東側部分にも可能性を見出すことができる。

S K 66

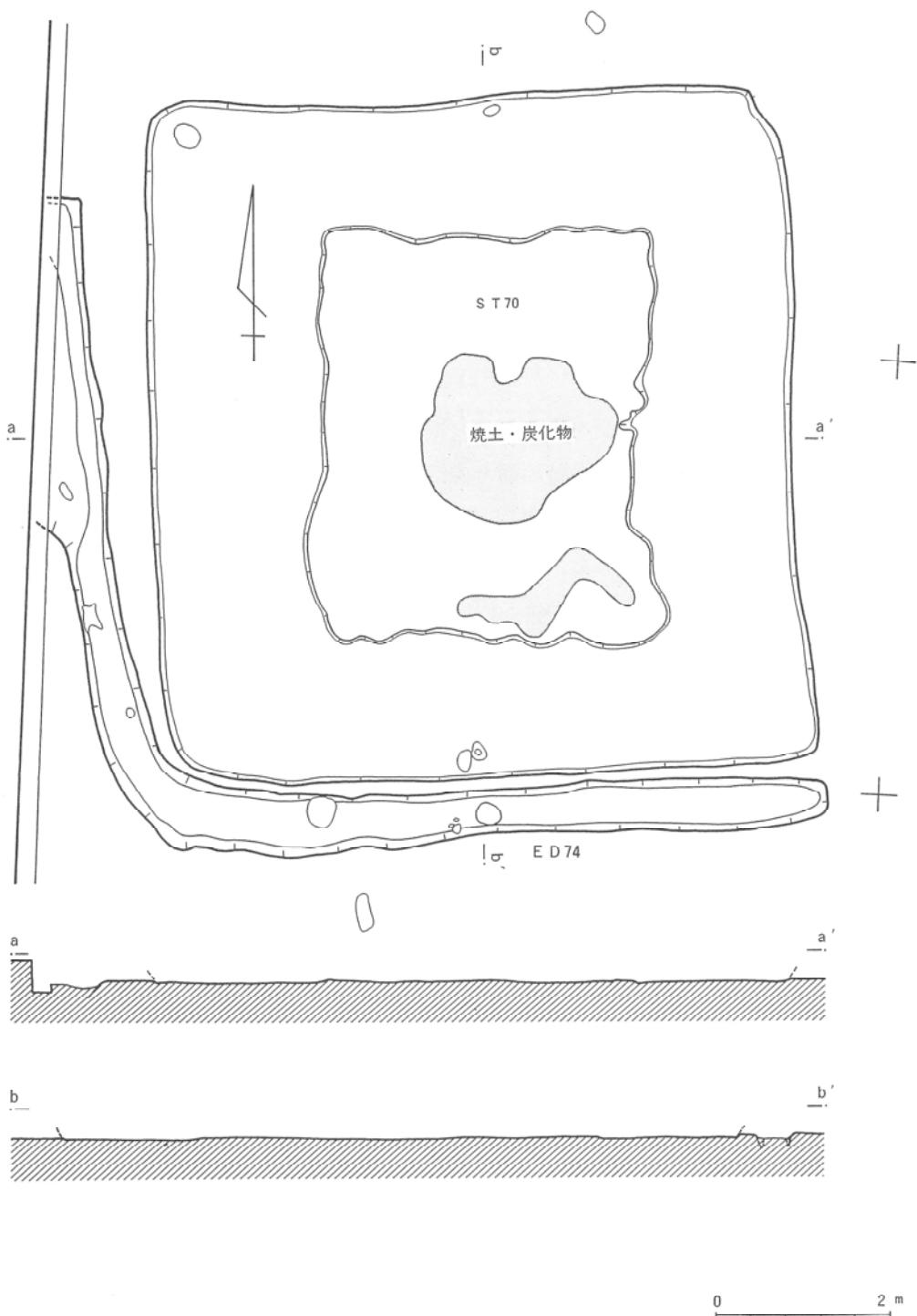
調査区の北部27~28-50Gに位置し、東側を土壤S K 73に切られる。西側は排水路にかかり未検出であるが、南北2.4m、東西9mの東西に長い長方形を呈するものと推定され、深さは最底部で約30cmを測る。平面的には北側に細い落込みを持つ土壤として捉えられるが、堆積土の状況から2つの遺構の重複である可能性が高い。北側落込み内部の堆積土は4層で、暗灰黄~灰色の粘土質細砂又はシルトから成り、全体的に粘土質が強く固くしまりがある。また、堆積土全体にほぼ満遍なく炭化物を含み、第2層下部には多量の炭化物が層状に入り込む。遺物は主に第2、3層より出土し、量的にはきわめて多い。また、土師器片に混じり若干量の骨片も検出されている。南側堆積土は土色的にやや明色で、北側第1層とは若干の違いを有する。

S K 69

S D 35遺跡の北側、27-48Gに位置する。長軸4.4m、短軸1.6mを測るが、形は不定である。底部中央から北西寄りに細長い楕円形の窪みを有し、最底部となる。深さは30cm強を測る。堆積土は10層から成り、ほぼ全体に炭化物を含む黄褐色~灰色の粘土質細砂~シルトを主体とする。上位では各層の厚さは1~4cmと非常に薄く堆積する。遺物は第3層及び第5層を除くほぼ全域より出土するが、第10層中により多くの出土をみる。



第25図 SK 66・69土壤



第26図 ST 70住居跡. E D 74溝跡

S T70

〔位置・重複〕 調査区の北西、24~25-49~50Gに位置する。南側をE D74と接するが重複はない。

〔平面形・規模〕 南北7.7m、東西7.6mの方形を呈する。

〔床面・堆積土〕 検出時点ではほぼ全域を黒色の炭化物に覆われ、既に床面に達していたと考えられる。堆積土は前述の炭化物が1層あるのみだが、これを除去した段階で壁の内側を約1.5~2m幅で浅く掘込んだ特異な形態を有することが確認された。しかし、上部がほとんど失われており、情報量が少ないとから、詳しいことは判らない。

〔地床炉〕 住居跡の中央部に、約2mの径を持つ焼土を含む炭化物層として確認された。尚、地床炉南側に、やはり焼土を含む溝状の炭化物が検出されている。

E D74

S T70住居跡の南側及び西側を取り巻く形で存在する。西側は調査区域外にかかり、北側と南側も未検出であるが、住居跡周溝と推定される。幅は60~70cm、深さは約5cmを測り比較的浅い。遺物は主に西側に集中し、調査区西辺と境を接する付近より、壺・甕類を中心とする多数の遺物が出土した。また南側の中央部には、S T14住居跡等において検出されたものと同様の粘土が直径約25cmの円柱状の塊として検出された。

S X46

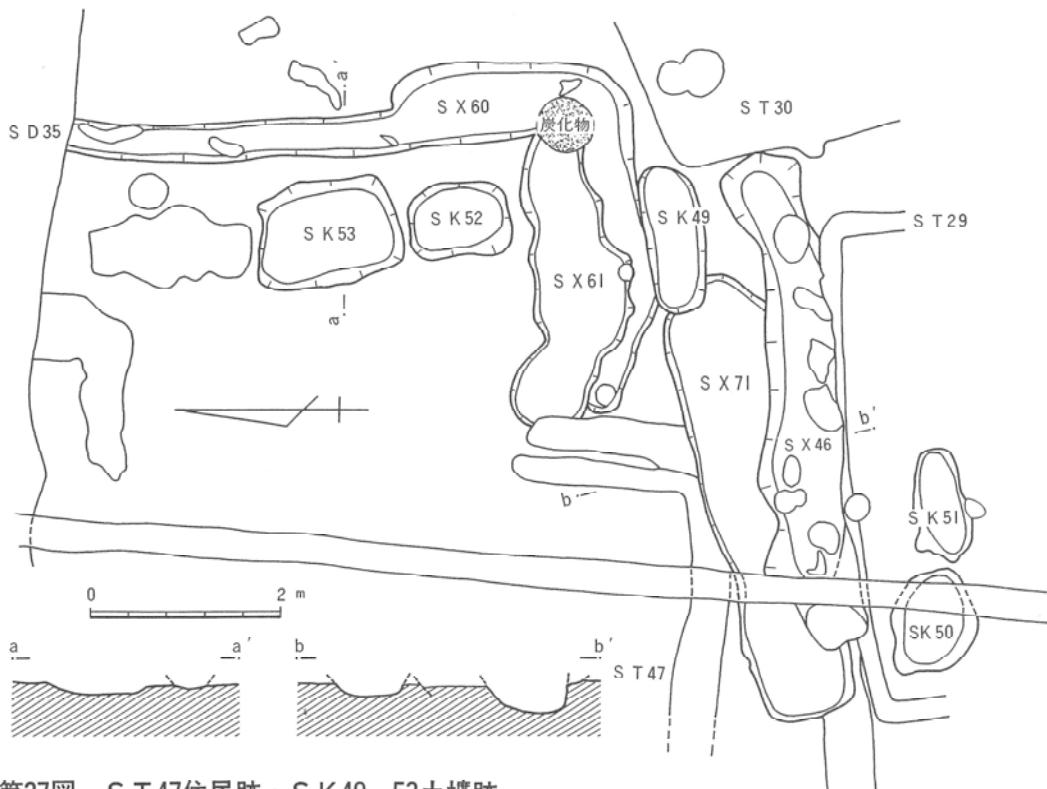
〔位置・規模〕 31~32-44~45Gに位置し、S T28・29、S X71を切る。付近には多数の遺物及び遺構が重複して存在し、遺構プランの正確な検出は非常に困難であった。

〔形状・規模〕 東西5.2m、南北は最大0.9mの東西に長い土壙状若しくは溝状を呈する。ほぼ中央部で約30cmと最深となり、東西に向かい緩やかに深度を減ずるが、南北の壁は比較的急に立上がる。尚、長軸方向はS T28・29住居跡の北側周溝にほぼ平行する。

〔堆積土〕 暗灰黄色の粘土質細砂を主体とするが、遺物の密度が高いために詳しい土層の状態は確認できない。部分的に焼土を含み、東端ではS T14住居跡やS K39土壙跡にみられたものと同様の灰白色粘土が、長径50cm、短径40cmの塊として検出された。

〔遺物〕 遺物は遺構検出面から底部に至るまでほぼ満遍なく密集して存在する。全て土師器であるが、器種は壺・高壺・甕類等多様で完形品も多い。また、土製の支脚が2点出土している。

〔遺構の性格〕 東西に細長く延びる遺構の形態や円柱状に埋込まれた灰白色の粘土塊、支脚や完形品を含む大量の遺物等からみて単なる土壙とは考えにくく、何らかの特別な性格を有したものと推定される。また、部分的に深く掘込まれた周溝の一部との見方も可能である。



第27図 S T47住居跡・S K49~53土壤跡

S K49

32~45Gに位置し、S X60、71を切る。長軸1.6m、短軸0.6mの東西に長い楕円形を呈し、深さは2~3cmと浅い。

S K52・53

32~45~46Gに位置する。他との重複はない。S K52は長軸1m、短軸0.8m、S K53は長軸1.5m、短軸1.1mのいずれも長方形を呈し、深さ5~10cmを測る。堆積土が共通することから、部分的に深く残った溝状遺構の名残りかと推定される。

S X60

31~32~45~46Gに位置し、S D35、S K49、S X61に切られる。南東部分で直角に曲がる周溝状を呈するが、幅は30~80cmと一定しない。深さは5~6cmを測る。

S X61

31~32~45Gに位置し、S X60を切る。南北1m、東西約3mを測るが形は不定。東側に直径60cm程の円形の炭化物層を有する。

S X71

31~32~45Gに位置し、S X46、S K49に切られる。南北1m、東西4.7m、深さは5~6cmを測る。

S D 35

〔遺構の概要〕 調査区の中央付近をほぼ東西方向に流れる。もう一条の大溝である S D 76と調査区西端近くで合流するが、両者の間に明確な切り合いは認められず、また S D 76溝跡の北部より出土している木質の遺物が S D 35溝跡にも広がりを見せる事から、ほぼ時期を一にして存在したと推定される。

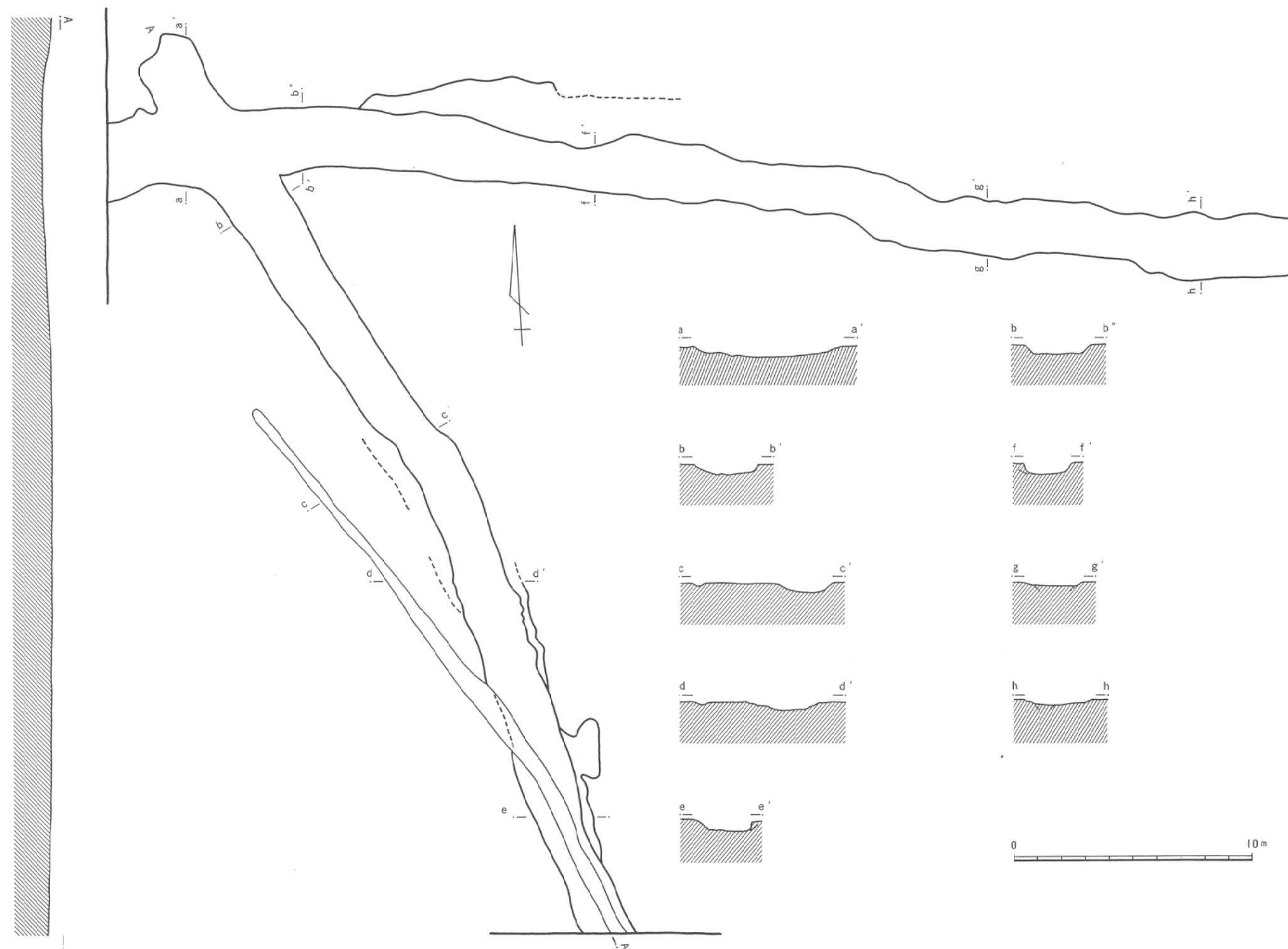
検出時点では幅 2～3 m の溝跡として認識されたが、後の土層観察によって部分的にさうに広がりを持った複雑な様相を呈することが判明した。しかしその全容を把握するには至らなかつたため、遺構平面図には検出時のものを記すこととする。尚、当初の遺構範囲の決定には炭化物を含む第 2 層を根拠としており、詳しくは以下〔堆積土〕の項で述べる。深さは第 28 図 h-h' で 25cm、f-f' で 50cm、b-b' で 45cm を測る。但し、西側ほど遺構検出面が下がる傾向にあるため、調査区東側から中央にかけてはやや急激に、中央から西側にかけては緩やかにその深度を増していくと推定される。

〔堆積土〕 堆積土は比較的短時間で堆積したと考えられる上位層と緩やかな堆積状況を示す下位層とに分かれる。ここでは主に上位層についての精査を行い、下位層については時間的な制約からトレンチによる断面観察のみに止まった。

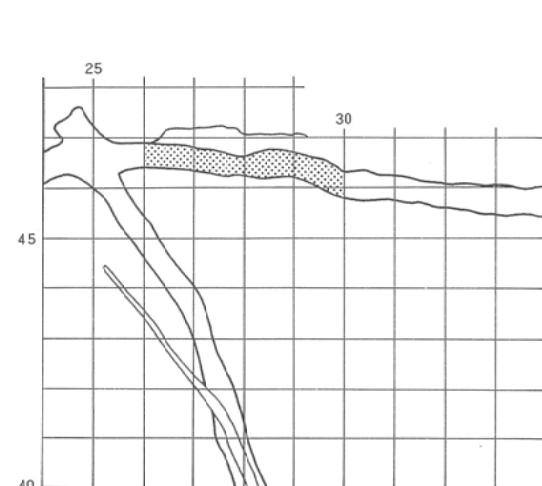
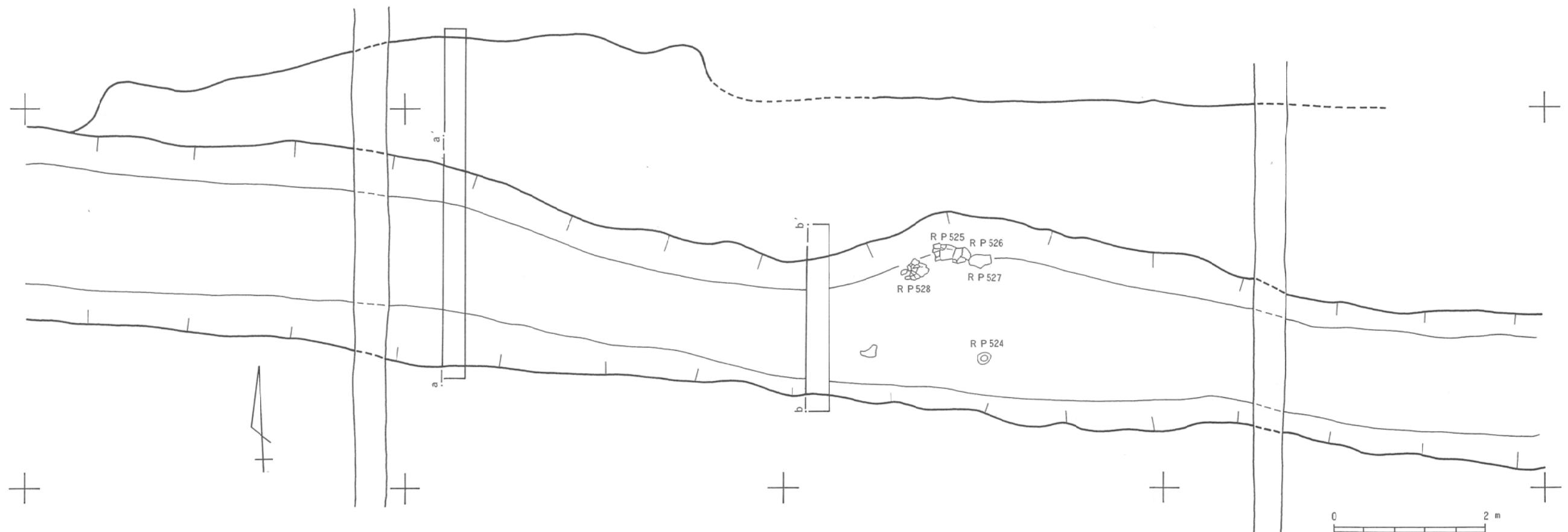
上位層では、S D 35 溝跡の全体にわたって分布する灰色の細砂が主体となる。ほとんどの部分では最上位に分布するが、遺構検出面の高い東側(第 30 図 b-b')では第 4 層がこれに相当する。S D 76 溝跡では、合流部付近に存在するほかは南側では確認できず、埋積の最終段階で最後に残った浅い溝状の部分に、洪水等によって運ばれた砂が短期間で堆積したと推定される。上位砂層中には部分的に薄い粘土～シルトの混入が認められるが、西側ほどその傾向は顕著で、S D 76との合流部付近では、砂層中に粘土が鳥趾状に入込む様子が観察できる。全体に非常にもろくくずれ易い。

下位層では炭化物を含む粘土質細砂～シルトを主体とする。グライ化のために土色変化は小さく、概ね灰～灰オリーブ色を呈するが、含まれる炭化物や泥炭状の有機物によって分類が可能である。下位層については、前述の通りトレンチによる断面観察のみで調査を終えているが、S D 76との関連から部分的に調査の及んだ西側では、S D 76と同様の棒状木製品や枠を加工した板状の木製品、土師器類が出土していることから、浅い東側部分は別としても、中央部までは同様の状況が及んだ可能性は高い。

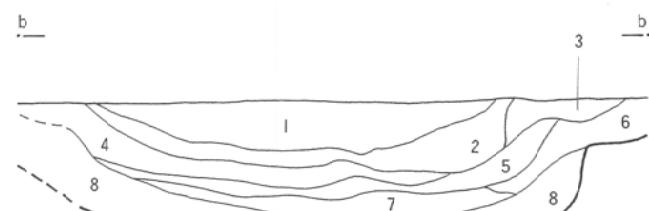
〔遺物〕 遺物は上記の木製品等を除いて、精査の及んだ上位部分に限定すれば、主に上位砂層直下の炭化物を含む粘土質細砂中に含まれる場合が多い。中でも 28-47G、31-47G では、完形に近い鉢や甕類が一括性の極めて高い状況でまとまって出土しており注目される。



第28図 SD 35・76溝跡全図

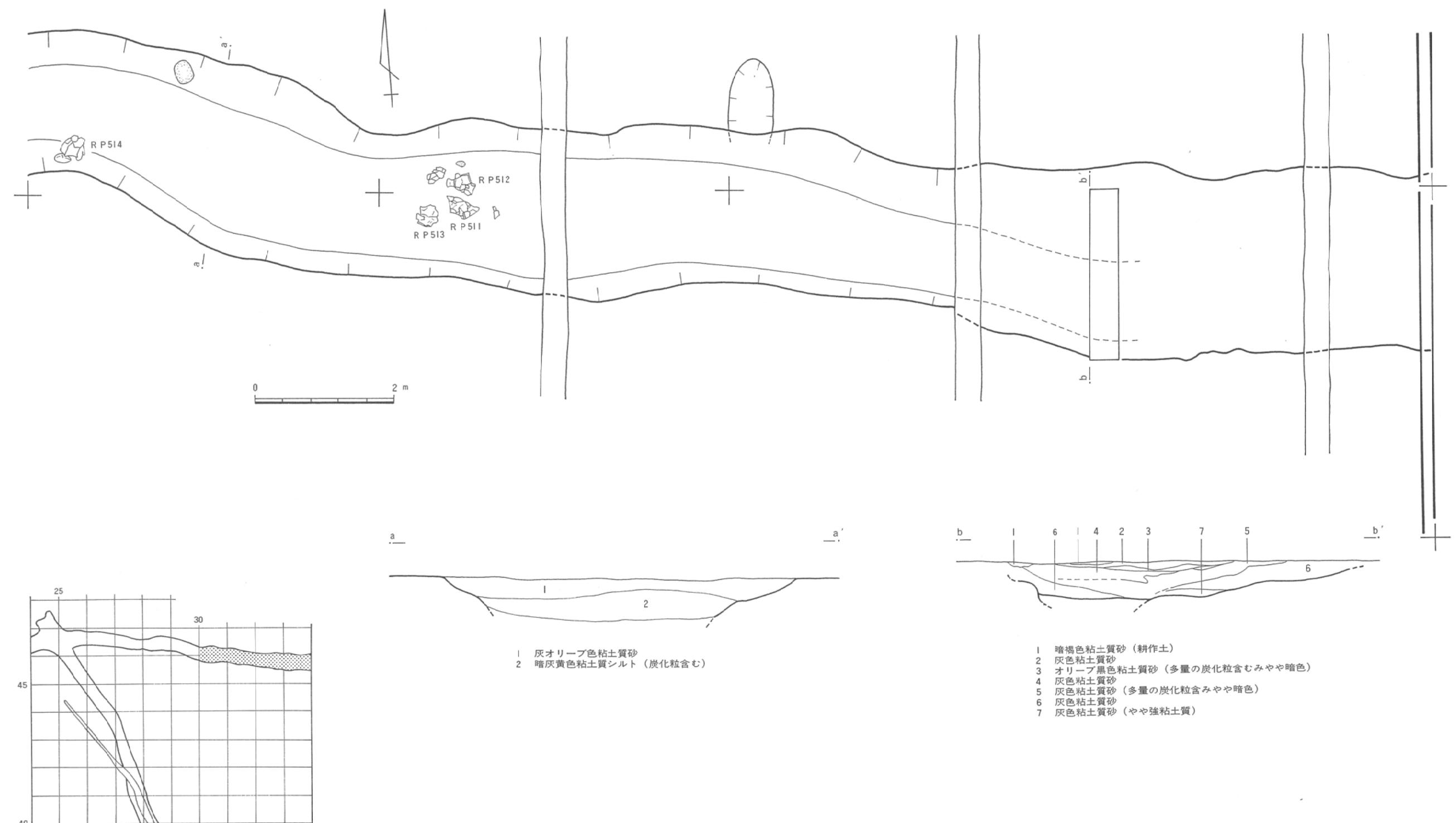


1 灰オリーブ色粘土質砂（無遺物層）
2 暗灰黄色粘土質シルト（炭化粒含む）
3 灰オリーブ色粘土質砂（無遺物層）
4 黄褐色粘土質砂（相対的に粗。南側で焼土含む）



1 灰オリーブ粘土質色砂（無遺物層。粘性はないがほぼ左記1層に相当）
2 暗灰黄色粘土質砂（炭化粒含む。左記2層に相当）
3 暗灰黄色粘土質砂（無遺物層。左記3層に相当）
4 黒色炭化物層
5 黄灰色粘土質シルト（多量の炭化粒含む）
6 暗灰黄色粘土質シルト（炭化粒含む）
7 灰オリーブ色粘土質砂
8 灰色粘土質シルト（少量の炭化粒含む。やや暗色）

第29図 SD35溝跡(1)



第30図 SD 35溝跡(2)

S D76

〔位置・概観〕 調査区の西側に検出され、27~28-41Gから24-48Gにかけて南南東-北北西方向に延びる。南部にS D78、北部にS D35の2条の溝跡との重複関係が認められる。そのうちS D78溝跡からは明らかに切られており、より以前に埋積を終えていることが判るが、S D35溝跡との切り合いは不明瞭で、S D35の項で先述した通り、溝が存在した期間の大部分を共有していた可能性が高い。溝は幅2~2.5mを測り、部分的に拡がりはみせるものの基本的な溝幅を超えた部分は極めて浅く、ほぼ一定の幅で掘込まれたものと推定される。S D35溝跡に比して溝の立上がりは明瞭で、深さも40cm程度と一定している。

〔堆積土〕 以下に各挿図ごとの遺構の状況を、主に堆積土の点から概略的に述べる。

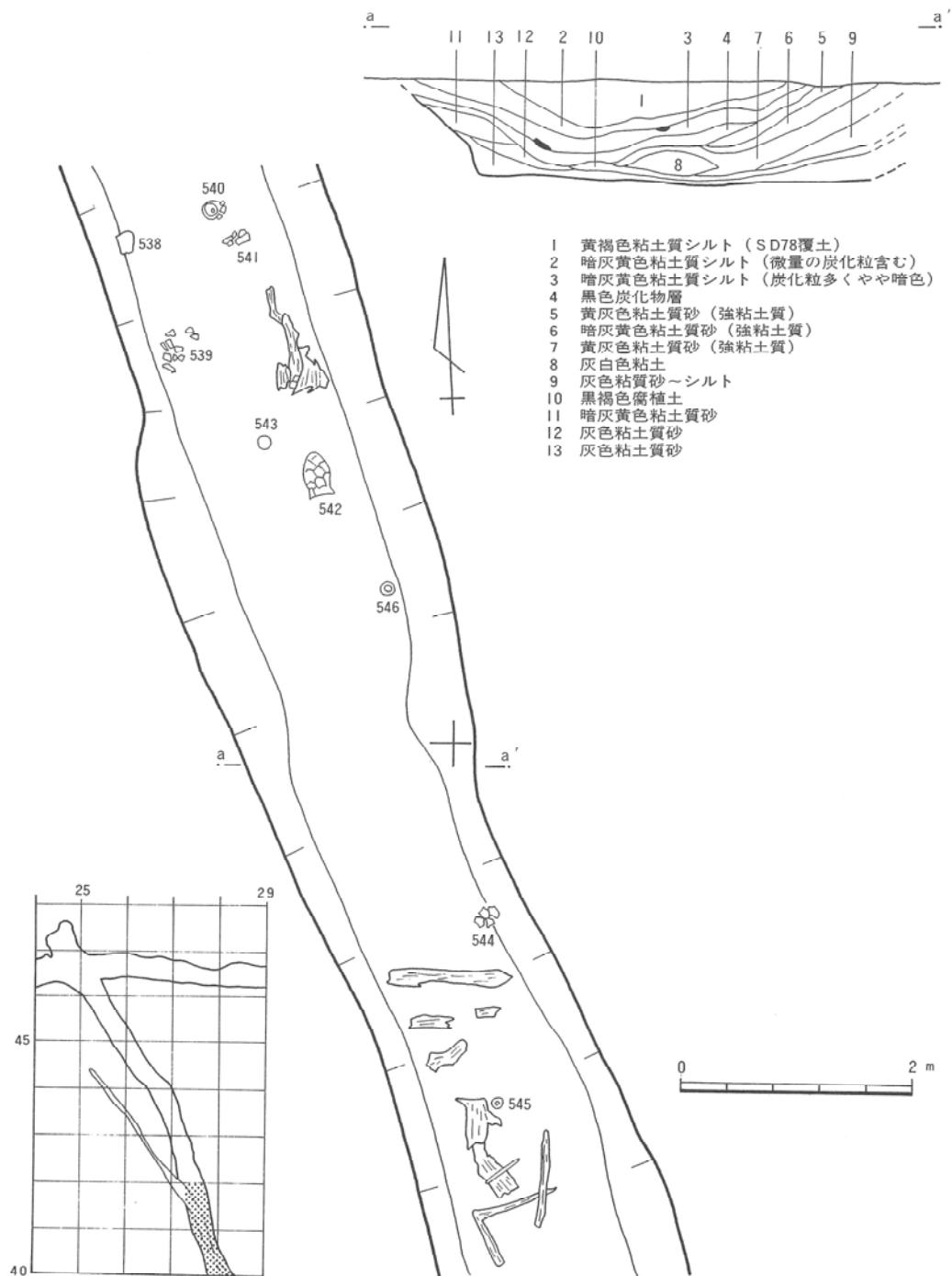
〈第31図〉 調査区内に係る最南部で、S D78溝跡と重複する部分。堆積土は13層から成るが、うち第1層はS D78溝跡の堆積土であり、残る12層がS D76溝跡に係るものである。注目すべき堆積土は上位の遺物を包含する第2~4層と下位の遺物を包含する泥炭質の第10層であるが、間にほぼ無遺物の間層(第5~9層)が存在することから、遺物の混入する機会の多かった静水状態の2時期と、その間の洪水等によって比較的急激に堆積した時期とを想定することができる。上位と下位の遺物に時期的に大きな開きは認められないことから、間層はごく短期間の内に堆積を終えたと考えられる。尚、第8層の灰白色粘土はS T14住居跡の周溝等で検出されたものと同様のものであり、第5~7層や第9層とは別に、人為的に持込まれたものであると考えるのが妥当であろう。

溝の底面はほぼ水平に近く、東側ではさらに外側へと拡がる様相を呈するが、西側は概ね側面が検出されており、底面から10cm程はやや急激に、それ以上は約45°の角度をもって斜めに立上がる。

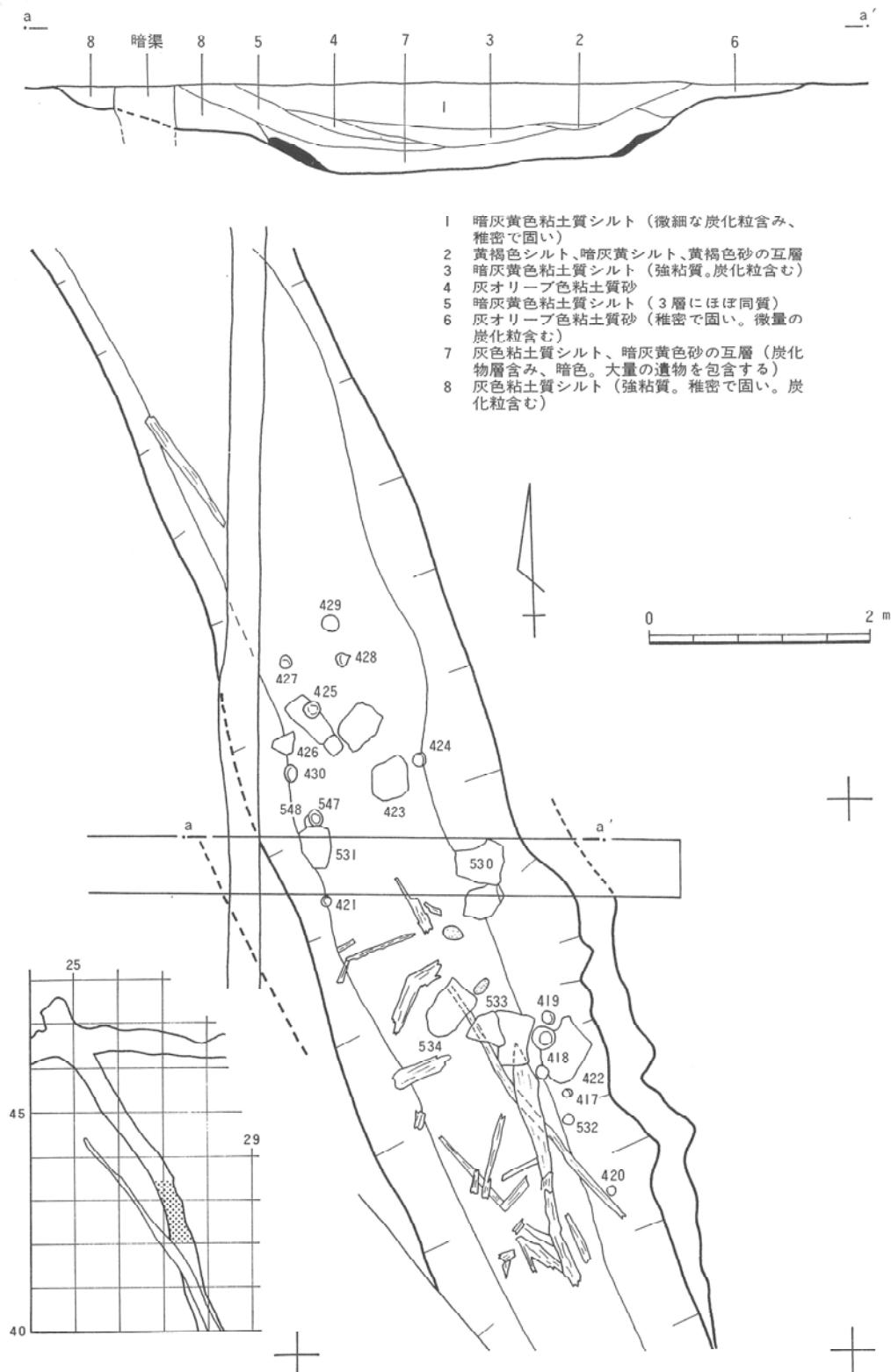
〈第32図〉 溝の中央からやや南寄りの部分にあたる。堆積土は8層から成り、やはり無遺物層(第2・4層)を間に挟むが、南側ほどの明瞭な区分は認められない。遺物は先の間層を除くほぼ全域から出土するが、完形またはそれに近い遺物のまとまった出土があるのは、上位の遺物を包含する第3・5層と、下位の遺物を包含する第7層である。また、第7層からは土器類に混じり、棒状や板状の木製品が出土している。

溝の底面は東かわ西に向かって緩やかに傾斜し、側面は約30~45°の傾斜で立上がった後、角度を減じて緩やかな拡がりを見せる。

〈第33図〉 溝の中央から北側、S D35溝跡との合流部手前迄の部分にあたるが、ここでは南側と北側とでは堆積土に若干の違いを有する。南側では先の2図中に示された部分と基本的にほぼ同様の様相を呈するが、北側では上部に砂の混入が多く見られるようになり、その傾向は、そのまま合流部まで続く。南側b-b'における堆積土は7層で、第3層と第



第31図 SD 76溝跡(1)



第32図 S D 76溝跡(2)

6層の2層の無遺物層を除き、ほぼ全域から遺物の出土が見られるが、まとまった遺物の出土は、炭化物を多量に含む第4層及び第7層に限定される。また、第4層では土層中に焼土(第5層)を含み、中央やや西側寄りに、溝の方向を平行に列を成して出土した、一括性の高い環・高環群と併に注目される。

a-a'では砂質が強く、まとまった遺物の出土があるのは第4層のみである。ここでは、他の下位遺物包含層と同様に、土器片以外にも棒状や板状の木製品が出土している。

溝の底面はほぼ平坦で、側面は塊状、あるいは約30°の角度で斜めに立上がる。

(第34図) S D76溝跡とS D35溝跡との合流部分。計4ヶ所について断面観察を行っているが、個別の層序については図中の註記に譲り、共通する概要を述べる。

ここでは全体を通じて、若干乱暴であるが上位の砂層と下位の炭化物層とに大別できる。上位では、黄褐色～灰色の細砂を主体とし、部分的に粘土分の混入が認められ、b-b'ではそれが鳥趾状に入込む様子が観察できる。遺物の混入はほとんどないが、下位炭化物層直上や、混入する粘土中より若干の出土がある。S D35溝跡及びS D76溝跡の埋積過程で最終的に残った窪地に、洪水等により運ばれた砂が急激に堆積したものと推定される。

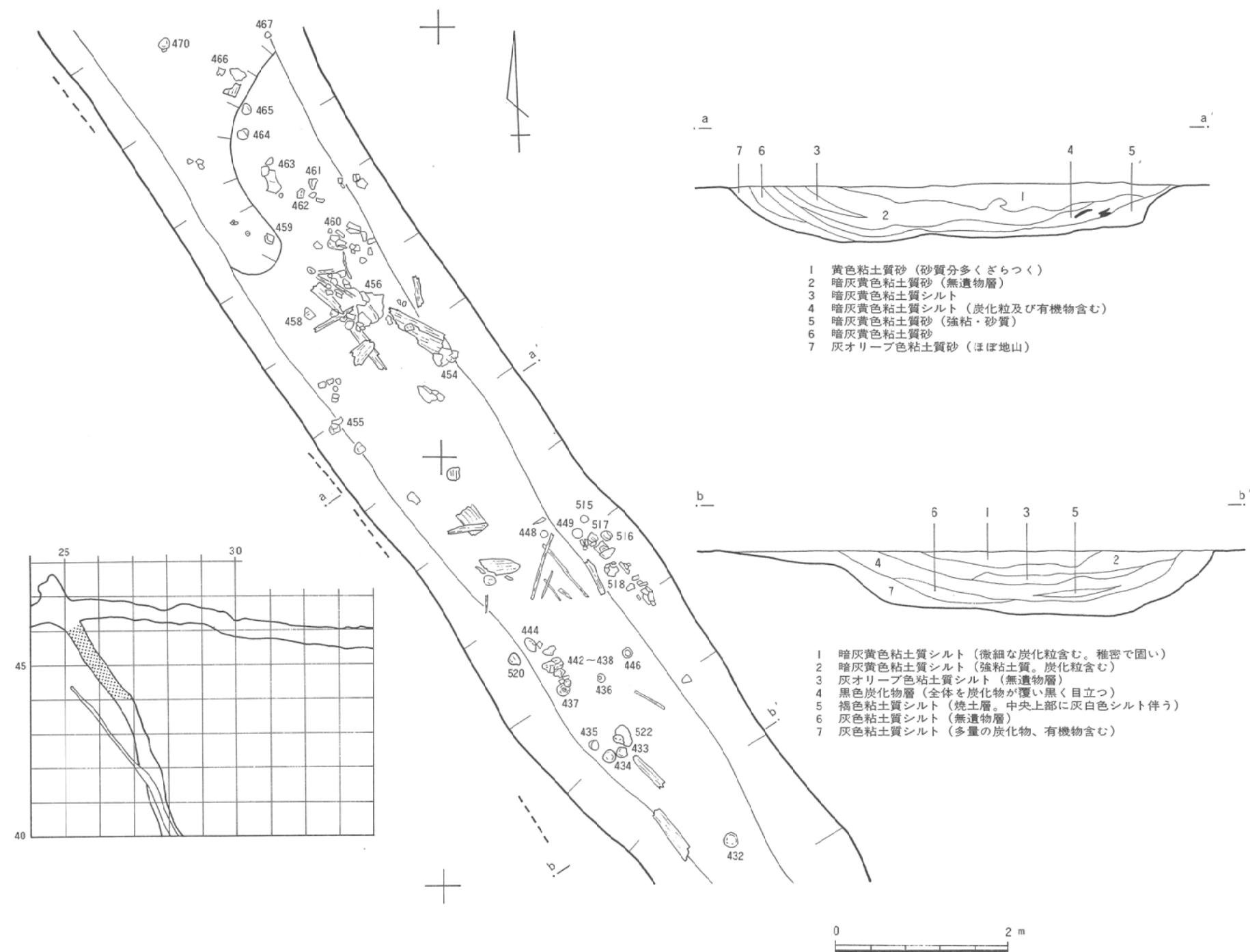
下位の炭化物層は無遺物層を挟む2～3層若しくはそれ以上の層によって複雑な様相を呈する。遺物は主にこの炭化物層中に含まれるが、ここでは土器類に比して棒状木製品が多数を占める。これらはS D35溝跡にもみられるものの、多くは合流部から南のS D76溝跡に分布し、方向も一にすることから、主にS D76溝跡からの流れ込みによるものと推定される。

S D76溝跡は、S D35溝跡と合流後しだいにその深度を減じ、北側に約4m張出した地点で消滅する。

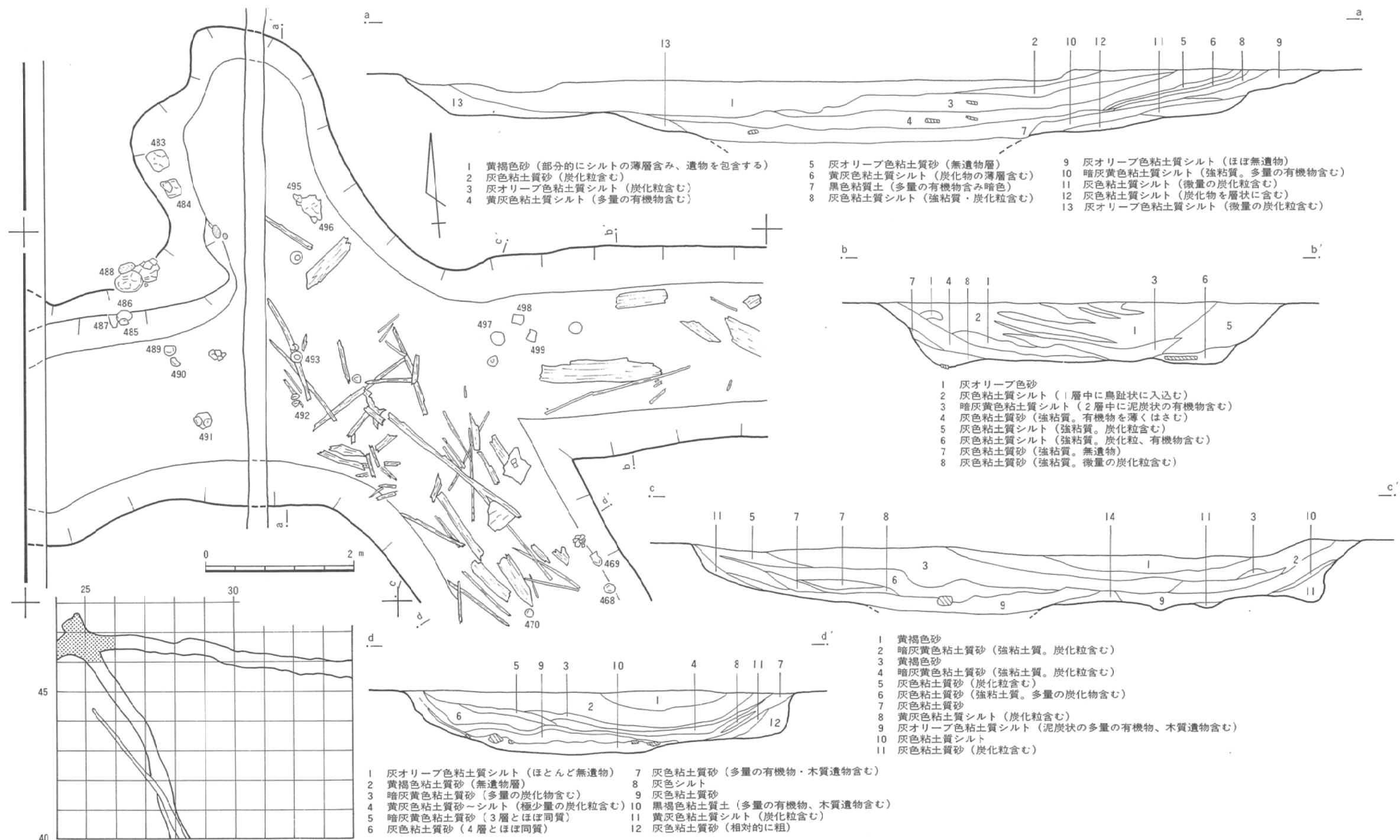
〔遺構の性格〕 S D76溝跡を境として、東と西とでは遺構の分布に大きな差異が認められる。即ち東側では住居跡が密集し遺物の出土数も多いが、西側では遺物・遺構伴にほとんど存在しないという状況は、偏にこの溝が持つ集落を区画するという性格を意味するものと考える。溝の南南東～北北西という方向は、集落の営まれた微高地の軸方向とも一致しており、この溝が集落の西辺を流れ、生活用水やさらに外側へ展開するであろう水田の用水として、時には祭祀の場として利用されていたと考えるのもあながち不自然ではない。

S D78

S D76溝跡とほぼ平行して流れ、25-45Gで消滅する。南側はS D76溝跡と重複しこれを切っている。堆積土は単一層で、第31図第1層がこれに相当する。遺物の出土はほとんどないが、27-42Gにおいて完形の皿が一点出土している。奈良・平安期と推定される。



第33図 S D 76溝跡(3)



6 遺 物

(1) 土師器

环(A)

I類：塊形で口縁が内弯して立ち上がり、丸底ないし丸底風平底形態でやや身の深い器形を持つ。内黒のa(第39図1)と非内黒のb(図版25-1)とがあり、さらに非内黒で法量的に小さなc(図版30-7)の3種に分類される。手法的には、a・b・cとも輪積痕を明瞭に止める等仕上げ整形が粗であり、内面のミガキ他の調整も顕著ではない。外面はナデやケズリ調整を施し、いずれもその方向は横である。内面の調整は内黒のaで横方向のアタリ単位が大きくて不明瞭なミガキ、bの非内黒で指等によるヨコナデが見られる。

II類：体部の丸み・身の深浅等から深身のa(第92図2)、浅身のb(第35図4、第39図3、第42図2、第43図3・5)形態に分けられる。いずれも丸底の内黒で、口縁は体部との境に段が付く程強く抑えられて長めに外反ないし外傾する特徴が著しい。口唇端では玉縁になるものと素縁のものの二種があり後者が多い。外面の調整は口縁部のヨコナデ、体部のケズリ整形とその後の弱いナデ等が大方に認められる。内面の調整はヘラミガキが例外なく施され口縁で横方向、体部で放射状ないし横と平行等による充填手法が窺える。

III類：法量により大形のa(第39図4)と小形のb(第35図13)とに分けられる。形態的には、丸底でいずれも体部から縫れる口縁がそのまま直上するかないしはやや内傾して立つもので、その分深身の形態となる。内外面の調整は、外面の口縁でやや強めのヨコナデ、体部でのヘラケズリ、内面での横方向主体のヘラミガキ等前述II類に共通している。

IV類：外面に目立った縫れや段等がなく、丸底で丸みを持って膨らむ体部からそのまま口縁が緩やかに外反する形態を持つ。内面の体部と口縁部の境に見られる明瞭な稜状の段は、本類の顕著な特徴となっている。外面の調整では、口縁部のヨコナデと体部でのアタリ単位がやや大きな横方向のヘラミガキ仕上げが認められ、整形時のヘラケズリ痕をほぼ覆い尽くすものが多い。内面では口縁部分で左から右方向へのヘラミガキ、体部で放射状ないし斜方と平行のヘラミガキによる充填手法が観察される。なお、本類は総て内黒のもので占めらる(第35図1・3・5・6・10・12、第36図1、第37図12・13、第39図5)。

V類：器形的には先のIIa類やIV類等にほぼ等しく、丸底でやや膨らむ体部から口縁が大振りに外反する形態を持つ。但し、外面での目立った段や内面中程で見られたIV類での稜状を呈する段等をほとんど認めないものが大半である。外面の調整では口縁部のヨコナデ、体部の横方向を主とするハケメ仕上げ等を認め、後者に手法上の特色が見られる。このハケメ仕上げは、本類の顕著な特徴となるもので、ケズリ・ナデ調整等の後に仕上げとして施している点が注目される。内面の調整ではIV類同様のヘラミガキが認められ、黒色処理

が施される(第35図7・9・11・14、第39図6)。

VI類：他の類に較べて幾分か小振りな法量を持ち、丸底でやや深身の形態を示す一群である。これらは、その法量から大形のa(第52図2、第39図7)と小形のb(第39図8)とに細分される。器形的には、丸みの強い体部と一旦強く内屈してさらに外傾する口縁部等の在り方から、体部中程よりやや上部に形成される強めの段が特徴的である。また口唇端は、例外なく玉縁となる点も特徴の一つとできる。外面の調整では、体・底部のヘラケズリ、口縁部のヨコナデ等の後、底面を除く体部上半から口縁部に至る最終段階の仕上げとして施されたヘラミガキを認める。内面の調整では、口縁部で横方向のヘラミガキ、体・底部で丁寧な放射状となるヘラミガキが行われ、後に黒色処理が施される。なお、小形のb類に内面黒色処理を行わないものが見られるが、非内黒は量的に僅少と見て取れる。

VII類：形態的にはV類等に類似するもので内外ともに顯著な縫れや段等を見ない。すなわち、丸底の底部から緩やかに延び出る体部、さらに幾分強めに外反する口縁部等屈曲の少ない器形を持つ。なお、口唇端は玉縁状を呈している(第39図9)。外面の調整ではナデ・ミガキともに顯著ではない。これは、仕上げ段階でのナデ調整が底・体部から一連で施された結果によると考えられる。内面の調整では、口縁部で横方向、体・底部で放射状ないし横・平行のヘラミガキ手法等が観察され、加えて黒色処理を施している。

VIII類：丸底風の平底から内弯して強く膨らむ体部と一旦直上気味に立ち上がった後強く外反する口縁部を持つ形態で、深身となる(第35図8、第39図10)。調整では、口縁でのヨコナデが目に付く他は最終段階でのナデ整形のため判然としない。内面は内黒であり全体に前記のVII類に近似した手法を認める。

IX類：小径の平底から外傾して立ち上がる体部は内弯して膨らみ、さらにそこからつまみ出されて外反する口縁部等の器形を呈し、全体にやや崩れた形態と見做される。外面の調整では口縁部のヨコナデ、体・底部でヘラケズリおよびその上から施される部分的なヘラミガキ等を認める。内面では、口縁部で横方向のヘラミガキ、体・底部で放射状のヘラミガキが施されて内黒となる(第42図4・7)。

X類：小径で上げ底風の平底から大振りに内弯して立ち上がる体部、体部との接続部分で強く内屈して段を成し、短く直上気味に立つ口縁部等の形態を持つ。口唇部は外側に肥厚する玉縁となる(第37図14)。外面の調整では口縁部でヨコナデ、体部下半でハケメ整形が顯著に認められる。内面では、底面周辺でヘラナデ、体部上半でヨコナデを認める等これまで見た他のものと異なった様相がある。加えて黒色処理を施して内黒としている。

高坏(B)

高坏は形態や手法等から以下に述べる6類に分けられるが、これらは殆どと言ってよい

程環(A)の形態を基本としている事が判る。

I類：深身で環IIaに類する環部を持ち、長く外反して開く口縁部等に特色がある。脚部は身が低いながら大きく外方に張り出す形態で、全体に大振りな作りとなる。外面の調整では、口縁部のナデ、体部から底部にかけての丁寧なミガキ等が特徴的である。また、脚縁は口縁同様のナデが施され、その端部を玉縁様に整形する。内面の調整では、口縁部で横方向のヘラミガキ、体・底部で二段程度に分けて施す放射状のヘラミガキが丁寧で、いずれも内黒としている(第36図2・4、図版21-6、図版27-8)。

II類：浅身で環VII類に近似の環部を持ち、口縁が強めに開く形態のものである。全体に作りが小振りで法量では高環の中で最小となる。脚部は直線的に開くものや、その中程が外方に幾分膨らむもの等が見られる(第36図3、図版21-5)。外面の調整では、体部のヘラケズリや口縁部のヨコナデが見られるが、体部ではその後のナデによって平滑に仕上げられる。脚部ではヨコナデ整形による仕上げが施されるが、1次整形時のハケメを薄く残すもの等がある。内面の調整は、口縁部で横方向のヘラミガキ、体・底部で放射状等となるヘラミガキがそれぞれ小さく細長いアタリ痕を見せながら施されて内黒としている。

III類：図示し得なかったが環IV類に共通する環部を持つ形態のもので、法量的な大小からa・bに二分できる。大形のa(図版27-7)は体部中程に口縁部との境がありその部分で緩やかな膨らみを見せる。内面では口縁部が体部と口縁部の境目から内屈して迫り出すように肥厚し、その下端部に稜状の特徴的な段が付く。脚は短い柱実部と膨らみながら大きめに開く脚縁部とからなり、内外面共にナデ調整が施される。b(図版27-5)は、法量的に以下で述べるIV類に近く、環のIV類に較べてやや身が浅い。環部では体部下半に膨らみを持ち、口縁部が外反して立つ他顕著な屈曲を見ない。内面の形態的特徴等はaや環IV類と同様で、調整でも丁寧なミガキを施して内黒とする等相違がない。

IV類：環部の形態は環IIa・VI類等に近似する。すなわち体部が一旦膨らんで後に口縁部との境で縊れ、そこから強めに口縁部を引き出して外反させる形態を持つ。但し、段等の明瞭な屈曲はなく、その環曲は自然な丸みで推移している。脚部は短めに大きく開く形態で、柱実部を殆ど見ない。脚部の調整は、内外面ともナデ整形されるものが多い。なお、口縁や脚縁の端部を抓み出し、玉縁状に整形するものが多く見られるのも本類の特徴とできる。環部外面の調整では口縁部でヨコナデ、体部でミガキないしナデ等を認め、一部に一次整形時のハケメ調整を残すものが知られる。これらは全体に環VII類に共通した在り方と理解でき、類縁のものと把握される。内面では口縁部で横方向、体部で放射状となるミガキが施され例外なく内黒となる(第36図5~7、第42図5)。

V類：図示資料はないが溝跡SD76他から幾つかの出土例があり、一定量が組成される

ものと判断できる。器形的には坏V・VII類に近い形態を取るもので、深みで屈曲のない碗状の坏部を持つ。脚部は他の類型と同様柱実部が殆ど無く、脚縁が直線的ないし中膨らみ加減で開く形態となる(図版27-9)。外面の調整では口縁部のヨコナデと体部に縦ないし斜め方向に施すハケメ仕上げが特徴的に行われ、坏V類のそれと一致した在り方と見て取れる。内面の調整では、口縁部で横方向のミガキ、体部で斜めあるいは平行等のヘラミガキ手法が施され内黒となる。

VI類：IV類同様坏VI類をモデルにしたと考えられる高坏で、法量から大形のa(第36図7、図版21-7)と小形のb(第43図1、図版27-4)とに細分できる。一方、高坏IV類との顕著な違いは、本類が明瞭な有段形態を示すことであり、体部と口縁部の境を強く意識した調整と整形の仕方にある。器形は、丸みの強い体部から口縁が一旦内屈気味に立ち上がり、そこから大振りに外傾ないし外反して立つ坏部、柱実の殆ど無い脚柱、小振りで強く開く脚縁等の形態を持つ。全体的には、口縁部の開き加減が幾分小さいことや、器高が高くかつ小振りな体・底部等から他に較べて深身となる印象が強い。調整ではa・bともにほぼ共通で、外面では口縁部にヨコナデ、体部にナデないしミガキが施される等丁寧な仕様が見られる。内面は概ね口縁部で横方向のヘラミガキ、体・底部で放射状のヘラミガキが認められ、加えて内黒としている。なお、本類の大方は先のVI類同様口縁端を玉縁としており、特徴的な在り方と注目される。

鉢(C)

鉢は法量と形態から以下の四類に細分できるが、その主体はI・IV類を除くII・III類にあると見られる。

I類：平底から体部が急傾で立ち上がり、上半で僅かな膨らみを見せる器形を持つ。口縁は指でつままれて直上気味に立ち、さらに口唇が内弯様に外反している。内面の体部と口縁部との境には坏IV類程顕著ではないものの明瞭な段が認められ、粗いヨコナデとヘラミガキが施される。外面の調整は体部でナデ、口縁でヨコナデが行われ、内面ではアタリ単位の大きいやや粗いヘラミガキが横方向で施される。なお、内面は黒色処理が施されて内黒となる。以上のことから、本類は形態を別として全体的手法が坏のそれに近似すると見做される(第40図1)。

II類：小形のものから中形のものまでを含めたが、器形的にはほぼ同等と言える。形態的には小径の底部、体部上半が頸部で一旦締まり丸く膨らむ体部、強く外反して開く口縁等に特徴が見られる(第40図3～5)。外面の調整は主として縦方向のハケメ仕上げ、口縁部のヨコナデ等である。内面では下地にハケメ調整が行われた後、ヘラナデないし指によるナデ等仕上げが行われて平滑に仕上げられる。なお、口唇は坏VI類や高坏VI類で認めたと同

様玉縁とするものが多く、手法的共通性が窺える。

III類：法量にややばらつきがあるものの、全体的には前類とほぼ同等である。また、形態的にも口縁部を除けば近似したものと言える。形態上の特徴は小径の底部、丸みのある体部、直上ないし外傾して短めに立つ口縁部等に求められ、特に口縁部の形状でII類と大きく異なっている(第38図1、第40図2、第42図3)。外面の調整では縦方向のハケメが体部全体に施され、最終の仕上げとされる。口縁部はハケメの後に強くつままれて内外ヨコナデ整形が行われ、端部が玉縁となるものがある。内面は下地に斜方向のハケメ調整を施した後、ヘラナデないしはナデ整形を加えて仕上げるものが殆どである。なお、本類並びにII類の大半は、外面の全域あるいは上半部にスス状の炭化物が付着し、さらに下半部で二次的な加熱を受けた形跡が明瞭であること等から、直接カマド等の火に掛ける煮沸形態器種の一つであったことが推測できる。

IV類：小さめの底部から体部が内弯気味、かつ大振りに立ち上がり、そのまま口縁部に連なる形態を持つ。口縁部はヨコナデされて体部と区別されるが、体部との境に明瞭な段ないし縫れ等の区画は見ない。なお、口唇は外方に極短く捲れるように反り、さらに端部が丸く整形されて玉縁となる(第40図6)。外面の調整は口縁部で弱いヨコナデ、体部で縦方向の目の細かいハケメ、底部周辺で横方向となるハケメがそれぞれ施される。内面では底面から口縁端部に至るまで右から左方向に周巡するハケメ整形が行われ、これをもって最終の仕上げとしている。本類も体部上半に炭化物が付き、さらに下半部が加熱されて赤色に変色している。

甕(D)

甕はその法量と形態からI～VII類までに細分される。しかし、これまで見て来たもの同様全体についての類別作業を行っていないため、これらの型態が総てを表しているとは言い切れない。現段階では明らかに出来ないがさらに追加されるべき類型が予想される。

I類：丸底ないし丸底風の底部形態が特徴的で、法量的に壺形態の中では小さいものの部類に属する。量的には僅少で、組成中に占める比率もごく少ないと判断できる。

器形的には丸底ないし丸底風の底部から直上気味に内弯して立つ体部、頸部で幾分か締まりそこから直線的に短く開く口縁部等の形態を持つ。また、体部と口縁部の境である頸部には顕著な段等を認めず、その移り変わりは体部のハケメを口縁部のヨコナデが浅く切ると言った漸移的なものとなる(第38図4、第42図8)。外面の調整では底部付近で左から右方向へのハケメ調整、体部で縦方向のハケメ、口縁部で指等によるヨコナデが認められる。また、これらの調整は底部、体部、口縁部の順に行われている様子が明瞭に観察されるものが多い。内面の調整では浅目のヘラナデとナデを右から左方向へと繰り返し行って

全体を平滑にしている。

II類：形態的には後に述べるIV類に近いものながら法量的にI・III類の仲間と見做せる小形のものである。器形では体部中程が強めに膨らんで張る丸みが特徴的で、一旦締まる頸部から口縁部が「く」の字形に外傾して開くものである。口唇部は口縁端部を短く外方に折り曲げて後、その上からナデ仕上げを行って玉縁とする。外面の調整では体部で縦方向のハケメ、口縁部でやや強めのヨコナデが認められる。内面の調整は、横方向のヘラナデである(第42図1)。

III類：小さめの底部から内弯して立ち上がる体部は、その上半部分で張りを持つ。形態的に見て他の一群とは趣が異なり、法量的に大きいながらむしろ鉢的な形態を呈す。口縁部は直上気味に弱く外反して立ち、端部の外縁は沿帶状の玉縁となる。外面の調整では底部周辺で左から右方向へのハケメ調整、体部で縦方向のハケメ、口縁部でヨコナデ等が認められる。内面の調整では下地にハケメ、さらにその上から仕上げのヘラナデが施されるが、底部付近は斜方向の下地ハケメがそのままに残されている。なお、本類も組成中に占める割合はそれほど多いものとはならないだろう(第40図7)。

IV類：甕の中では大形の部類で量的なまとまりを持つ。これらは以下で述べるa・bに頸部の作出と調整の仕様等から細分出来るが、器形その他は一括的に扱うこととする。

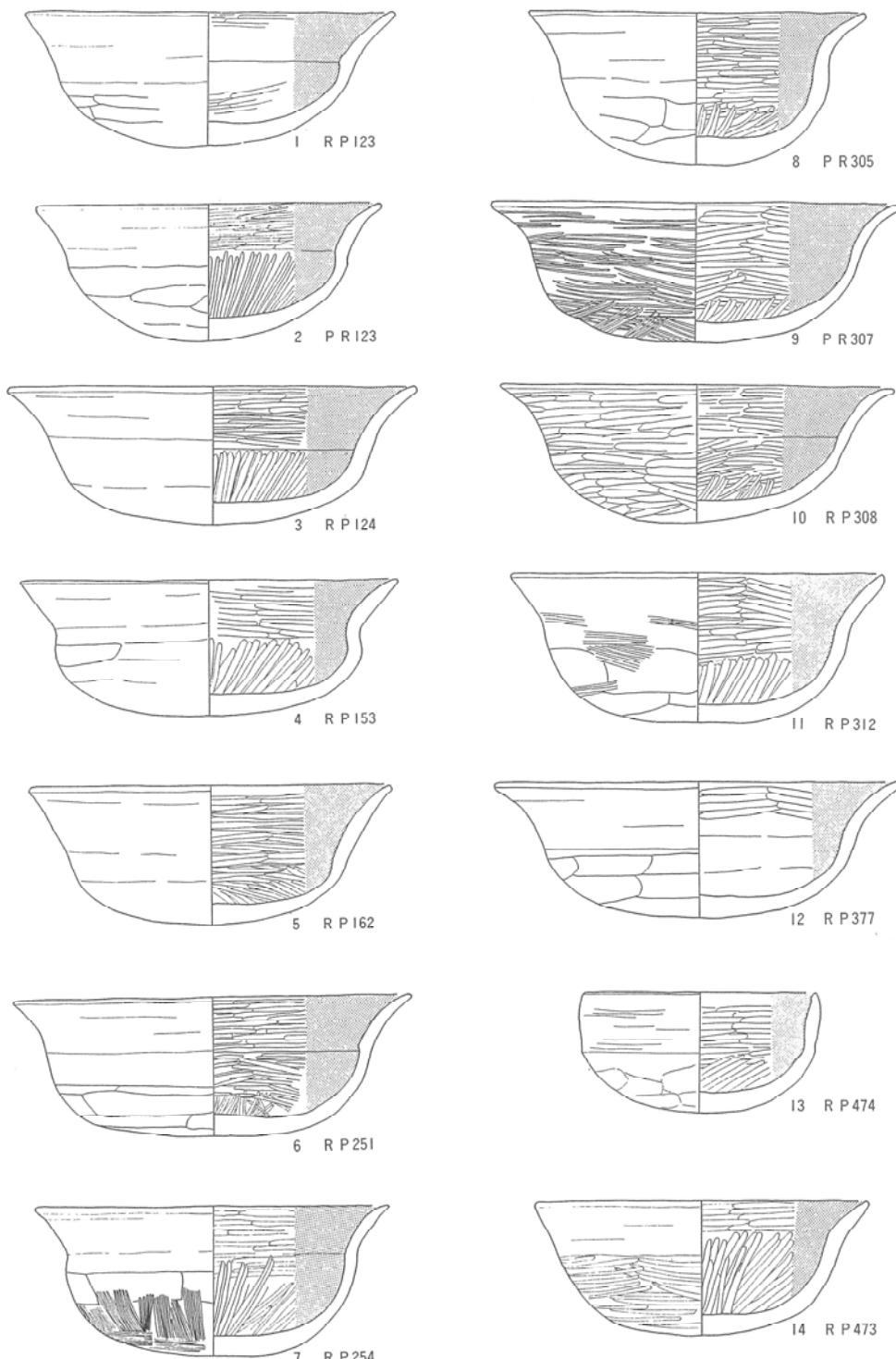
器形は長胴で体部中央部が強めに膨らむ形態を持ち、一旦締まる頸部から長めに引き出されて外反する口縁部等の在り方に特徴が求められる。口唇部は玉縁とするものが多い。

外面の調整では体部で縦ないし斜め方向のハケメ、口縁部でヨコナデが例外なく行われる。また、口縁部のヨコナデは体部のハケメ調整を切るもののが大半で、整形上ヨコナデが後であることが明瞭である。このヨコナデは弱い押えの周巡で施し終わるものと、頸部との境目を意識してその境界を明確に作出するものとがある。前者をa(第46図8、第41図1・2、第42図6、第43図4・10)、後者をb(第36図9、第38図5、第40図8)として区別する。

一方、内面の調整では最終の仕上げとしてハケメ調整を施すものとヘラナデとによるものの別があり、不確かながら両者相半ばする様相と見て取れる。

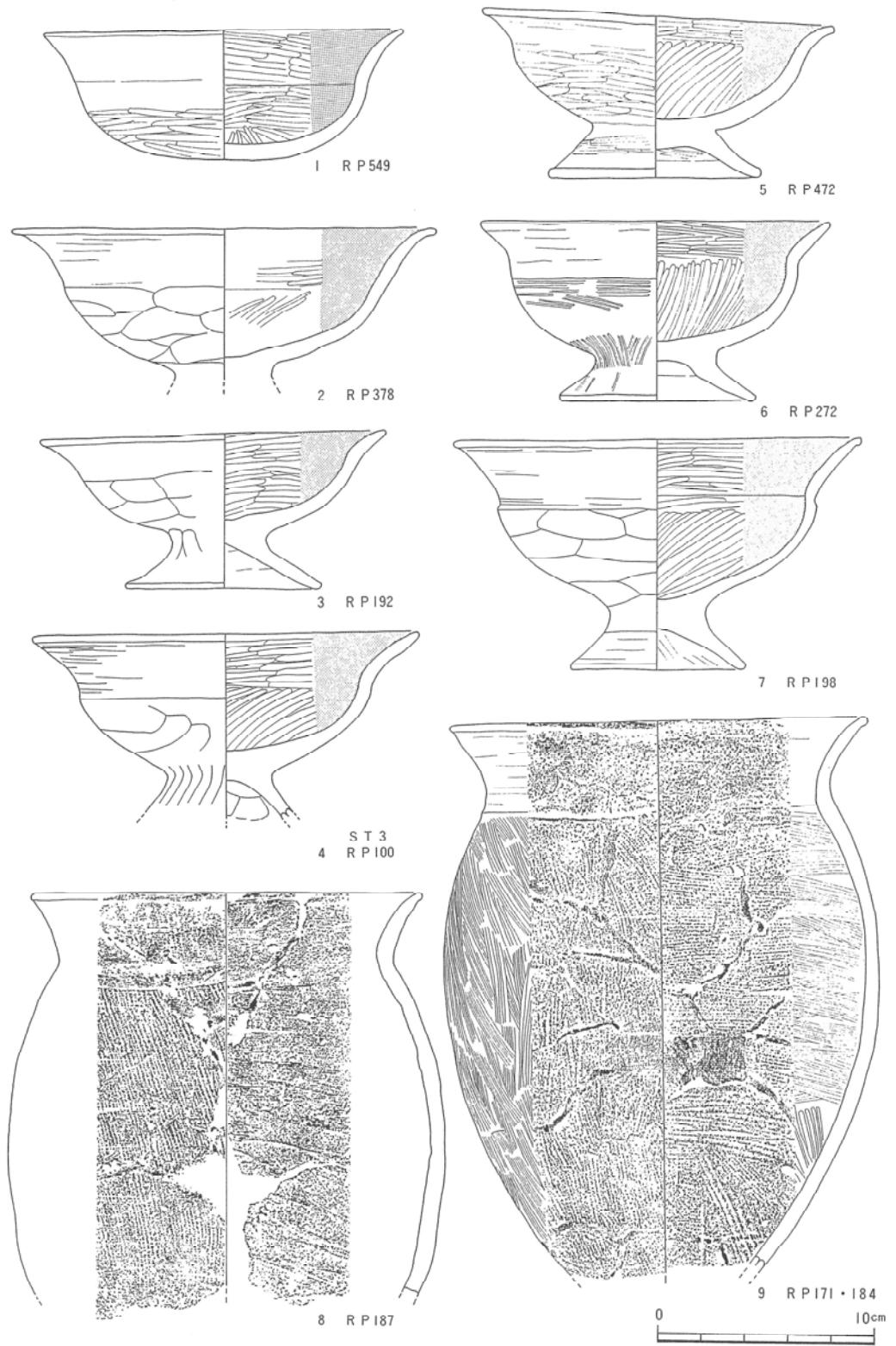
V類：器形は体部が丸く膨らむもので、恐らく最大径が体部中程に来ると考えられる。しかし、復元し得たものが1点に限られるため内容的な詳細を知り得ていない。外面の調整は浅いハケメが縦方向で、内面では一旦ハケメ調整を行ったのちさらにその上からハケメを潰すように施す丁寧な横ないし斜め方向のヘラナデが見られる(第41図3)。

VI類：基本形をIV類に置くと考えられる台付きの甕である。量的に僅少と見做せるが3・4例は確認できる。調整その他でこれまでの類型と大きく異なる所はない。すなわち、外

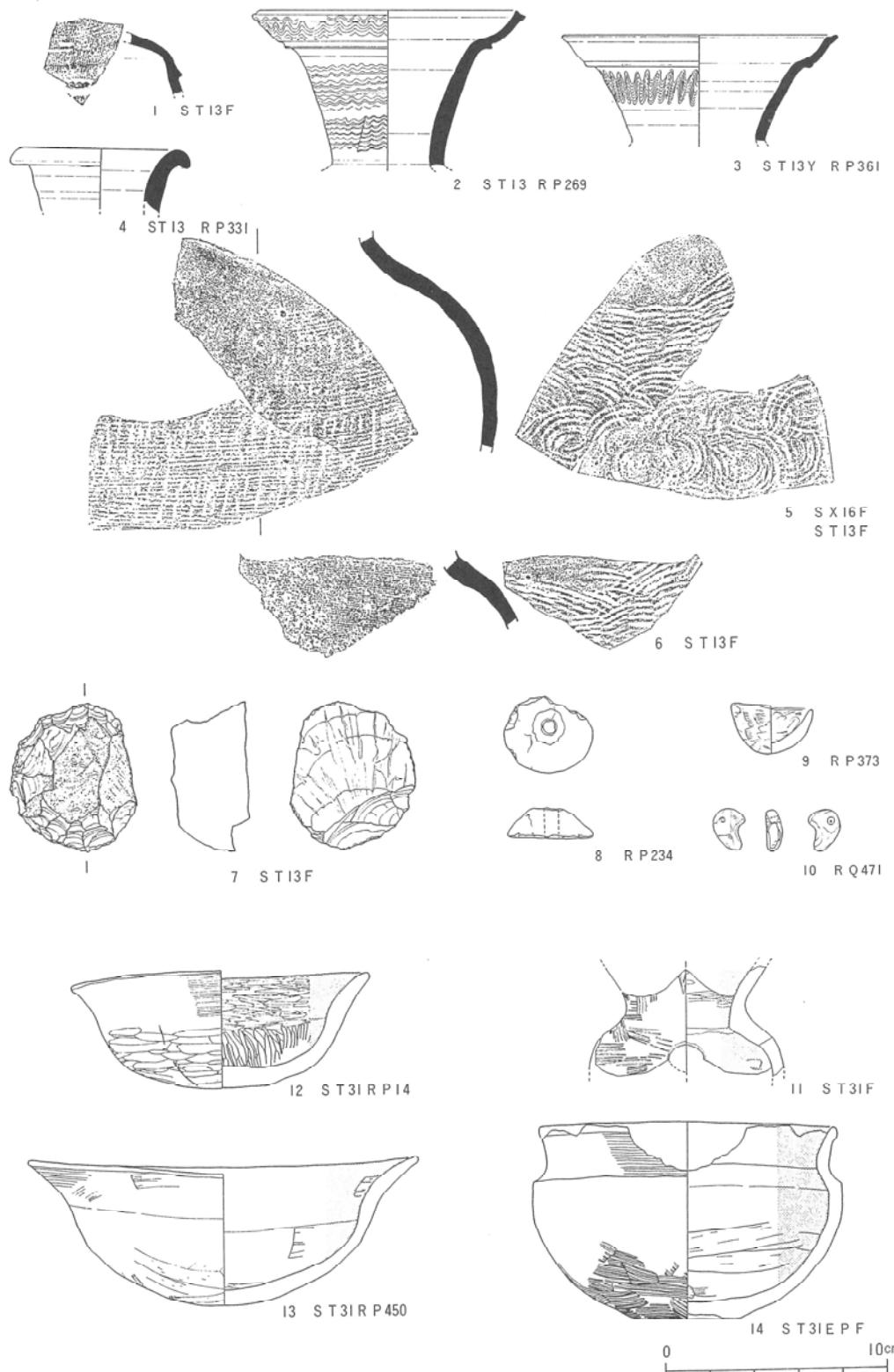


0 10cm

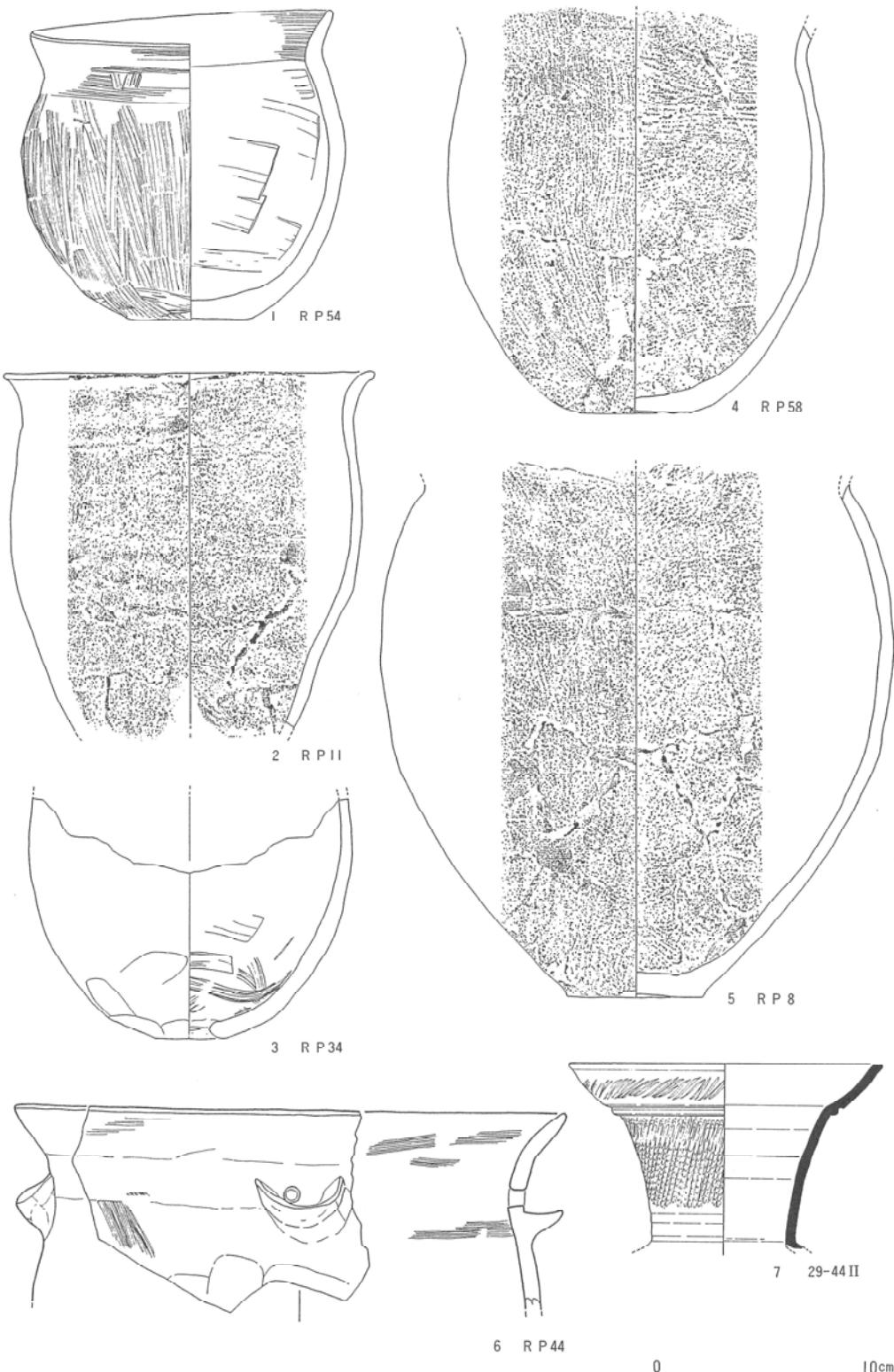
第35図 S T 13住居跡出土遺物(1)



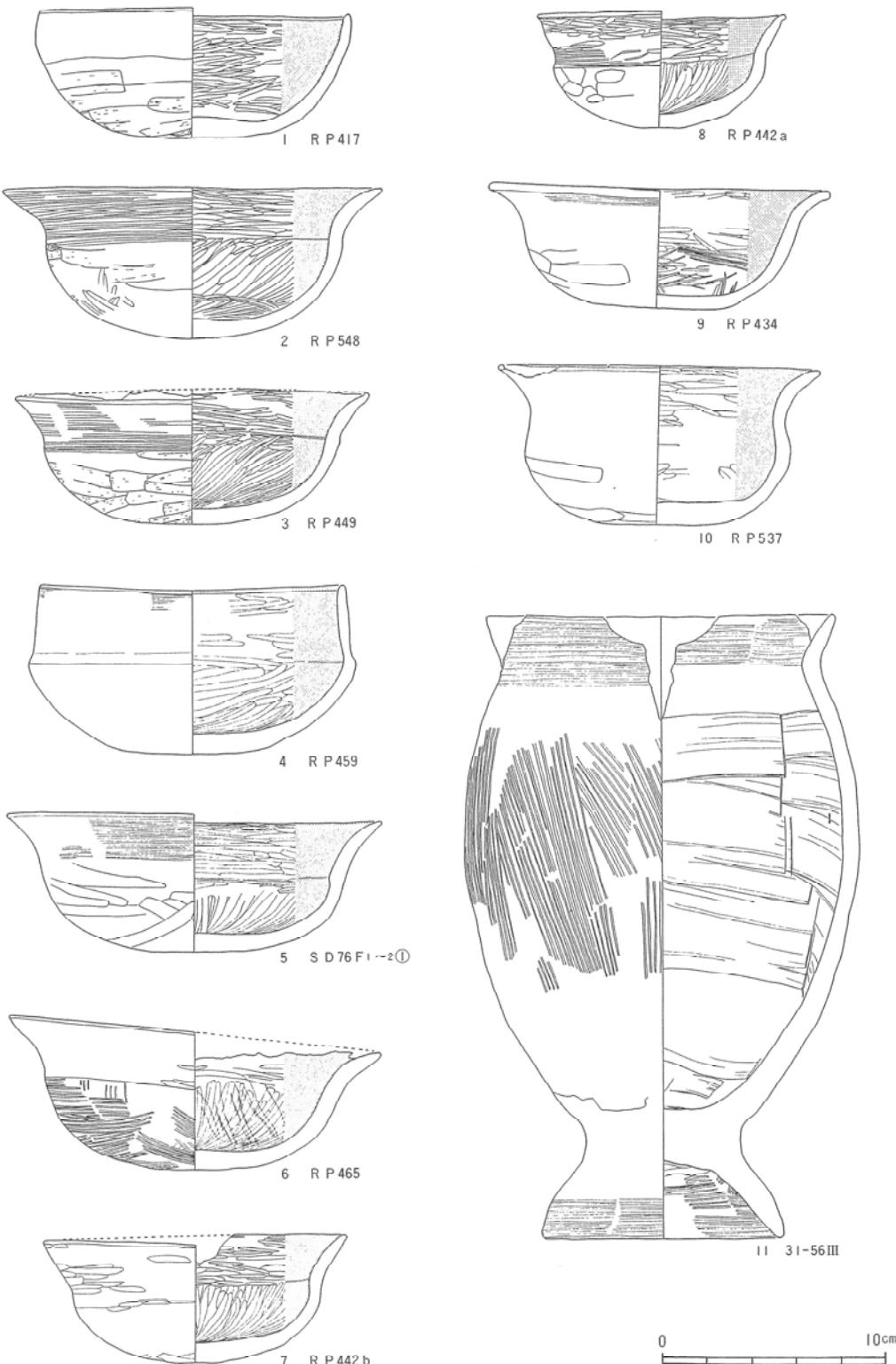
第36図 S T13住居跡出土遺物(2)



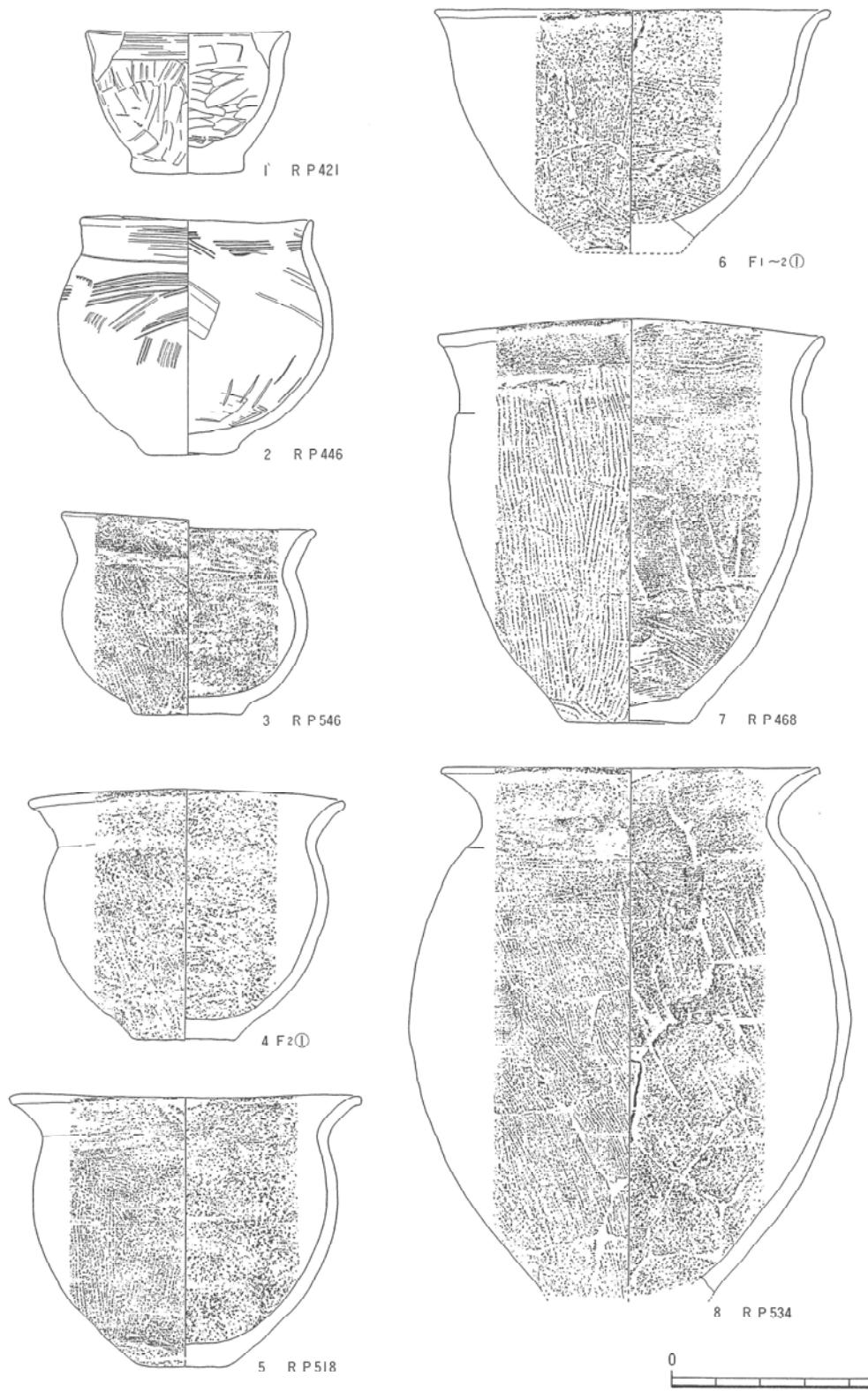
第37図 S T 13(3) · 31住居跡出土遺物(1)



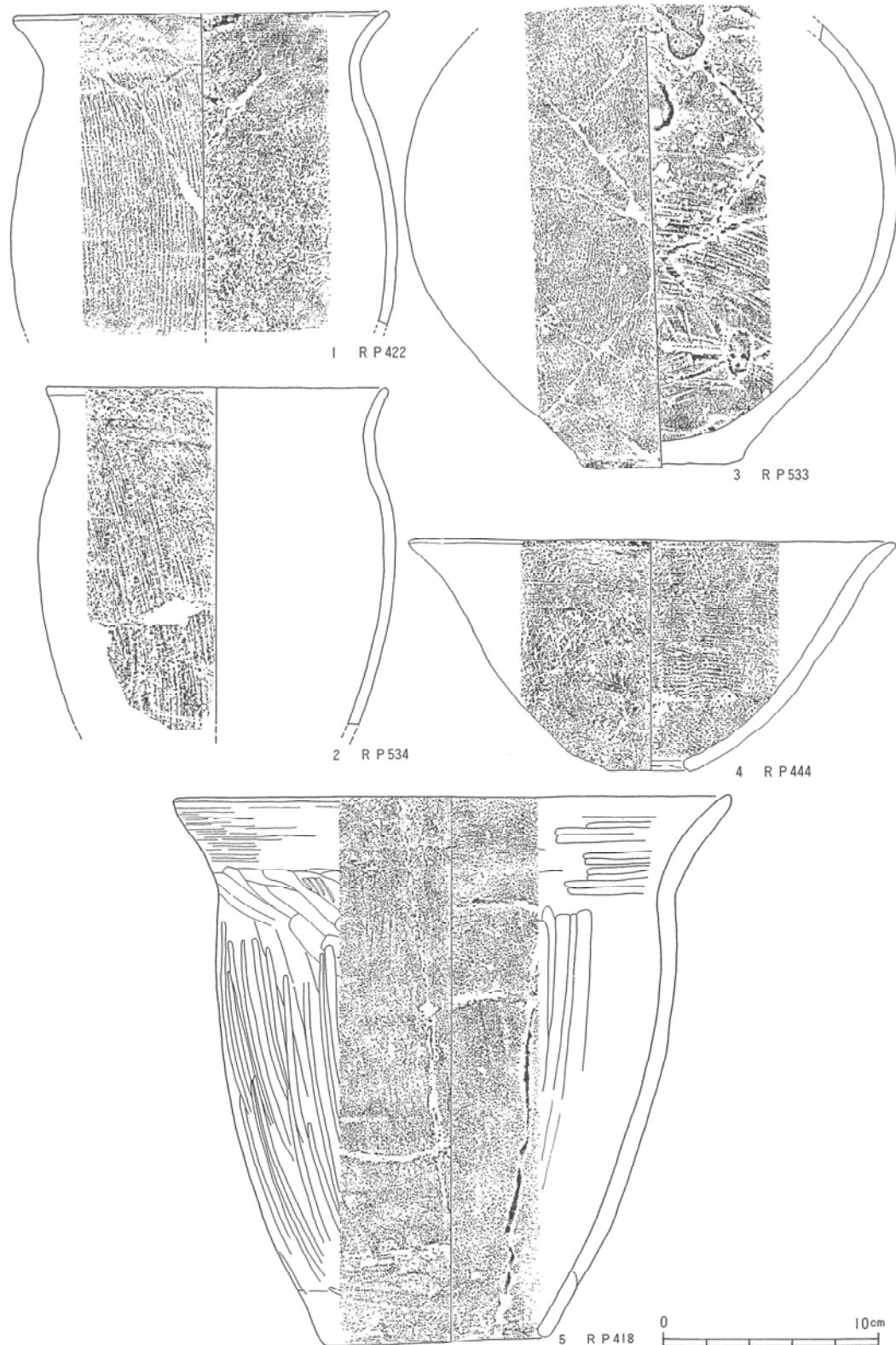
第38図 S T 31住居跡出土遺物(2)



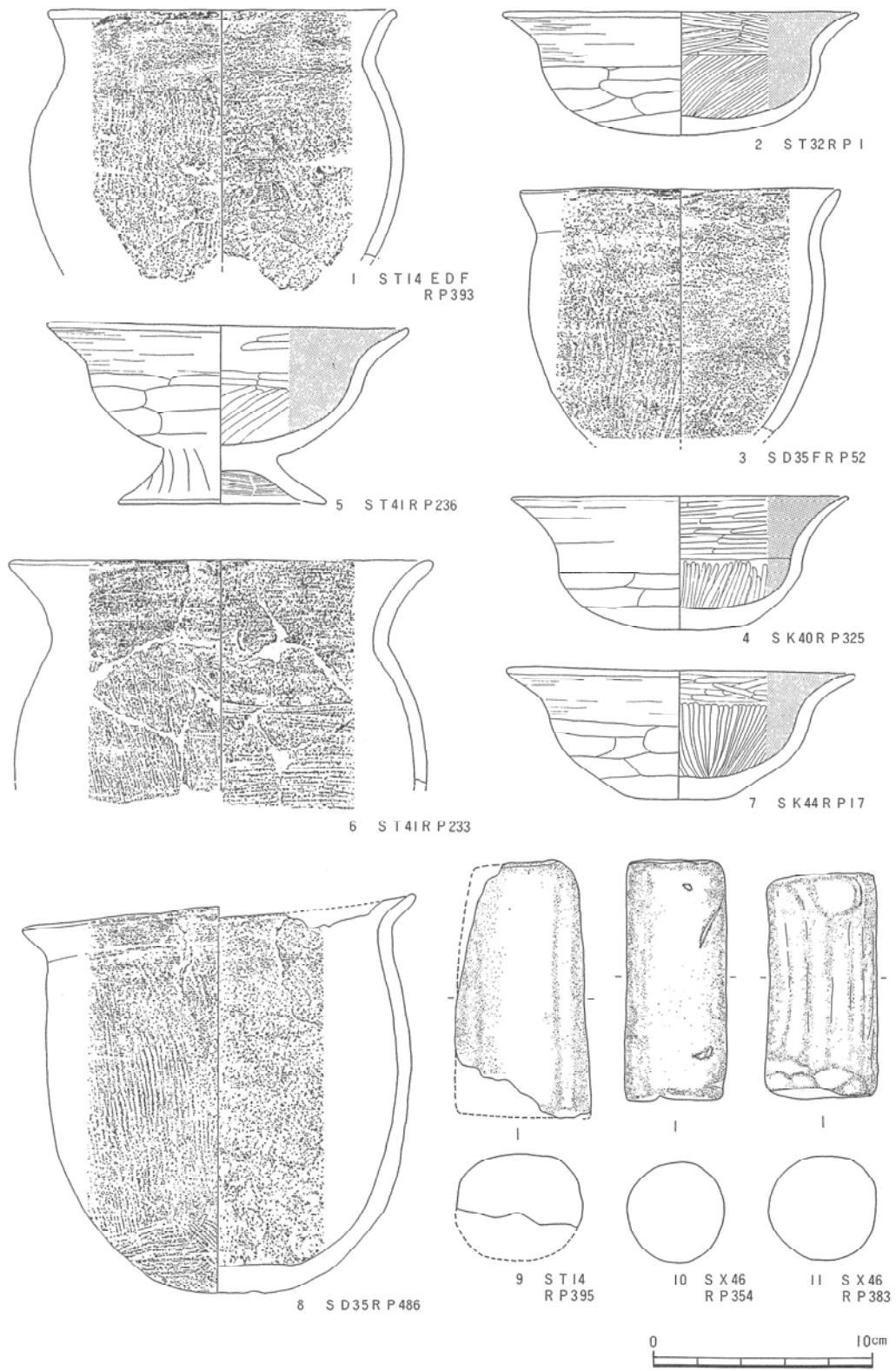
第39図 S D 76溝跡出土遺物他(1)



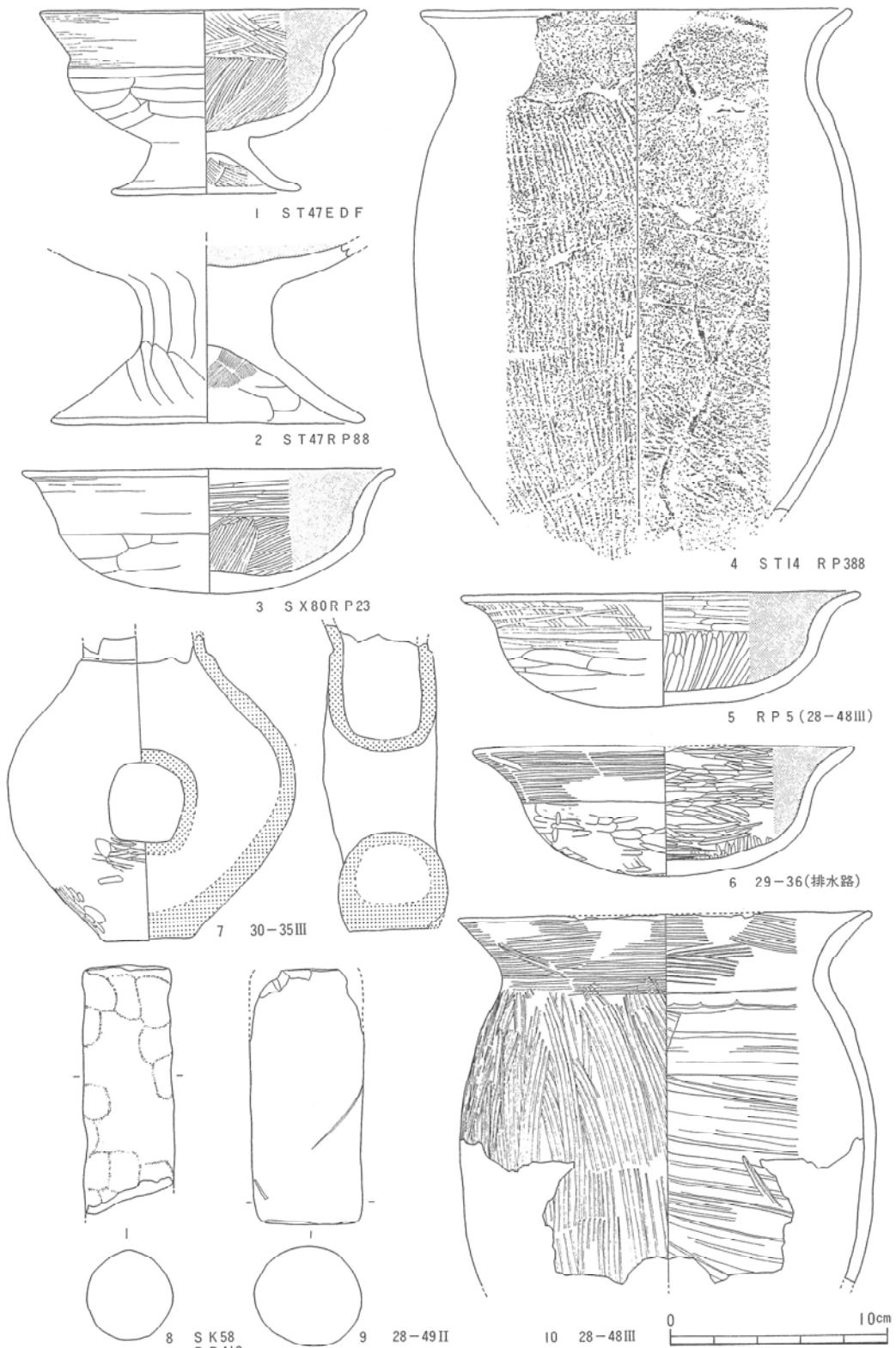
第40図 S D 76溝跡出土遺物(2)



第41図 S D 76溝跡出土遺物(3)



第42図 遺構内出土遺物



第43図 遺構・包含層出土遺物

面ではハケメ、内面ではヘラナデを主とする調整が見られ、口縁部はヨコナデ整形される。

台部は半球状の中空形態で、脚縁をヨコナデにより仕上げ、内面をハケメ調整による整形のままとしている(第39図11)。

甌(E)

資料的に少ないが、以下で述べる器形や法量から分けられるI～IIIまでの類型を認めた。

I類：大振りに外傾して立ち上がる体部と外反気味に開く口縁部等からなる鉢状の器形を呈し、やや大きめの単孔を持つ(第41図4)。外面の調整は体部でハケメ整形を下地とし、その上からハケメを消すような不整なナデ仕上げを行っている。口縁部は甌他と同様2～3cm幅で内外共にヨコナデされる。内面は口縁部を除いて横方向のハケメが小単位で連続的に施され、その仕様は丁寧である。

II類：深い椀状の器形で小さめの単孔を持つ。口縁部は不明確ながら体部に一連で丸く収められるだけの素縁と考えられる(第38図3)。外面の調整はケズリの後ナデ整形を施したものと判断でき、ハケメは認められらしい。内面は横方向のヘラナデで仕上げられる。

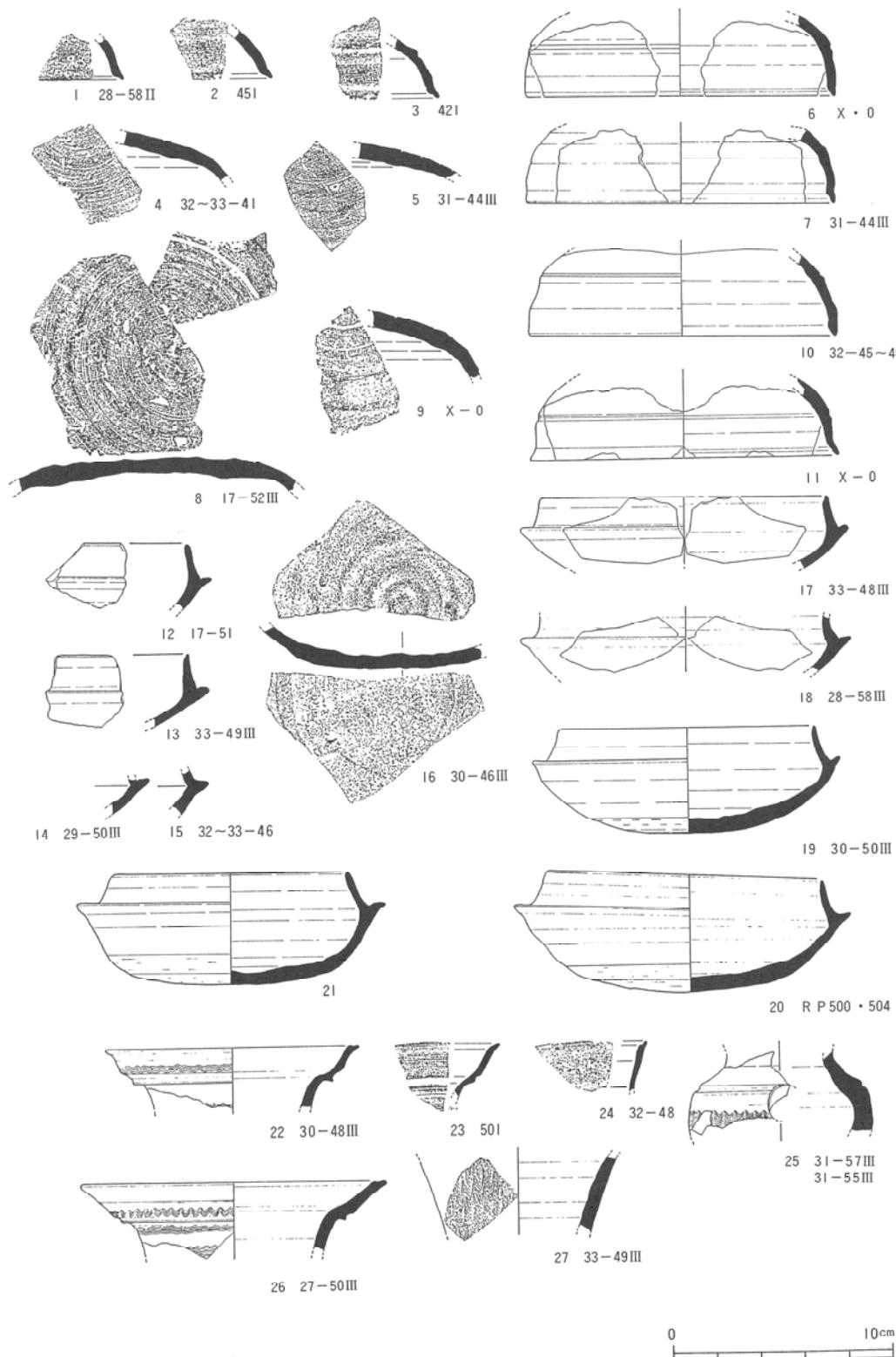
III類：大形で甌形を呈す無底式のものである。器形は上半でやや膨らむ体部、大振りに外傾して開く口縁部等の形態を有す(第38図3)。外面の調整は体部のヘラナデ風ケズリ、口縁部のヨコナデ等の後、体部に細長いミガキを縦方向で連続的に加えて仕上げとしている。内面ではハケメ整形の後、ややアタリ単位の大きなヘラミガキが体部で縦方向、口縁部で横方向に施される。器壁の状態は先のI・II類に比べてはるかに緻密となる。

(2) 古式須恵器

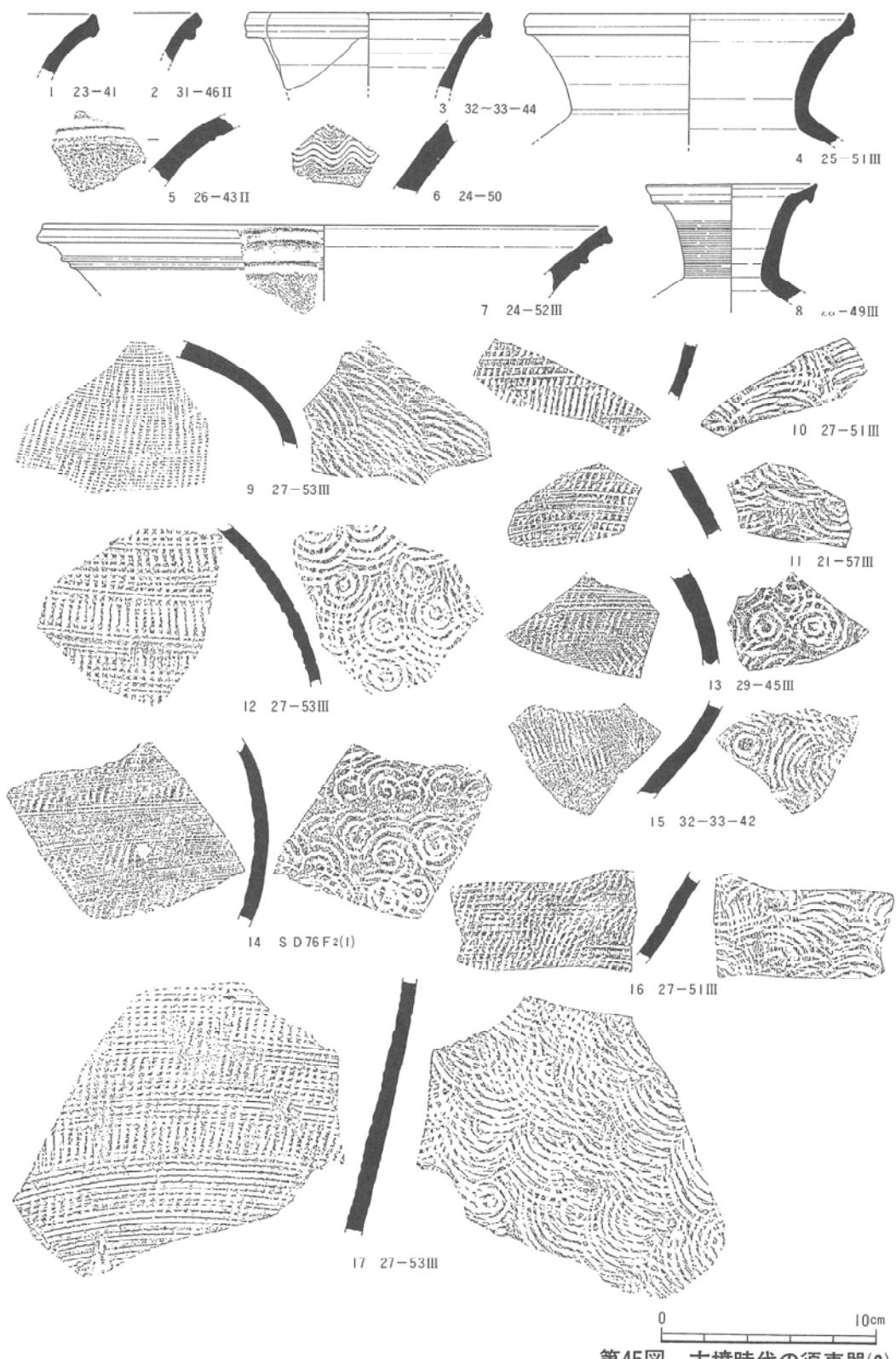
須恵器は精査区内各グリッドの包含層IIから出土したものが大半を占めるが(第44・45図)、若干例ながらST13・31住居跡等の遺構内で土師器他の遺物と共に伴したものがある。確認できた古式須恵器の器種には壺身・壺蓋、甌、提瓶、甌等があり、量的には壺身・壺蓋等の小形の供膳具、次いで供獻具の甌が多く見られた。以下では全体量が少ないと等から器種毎に類別して説明を加え、その概略を述べていくこととする。

壺蓋：固体数にして12点程があり、この内器形の復元できるものは4例である(第44図6・7・10・11)。いずれも口径14cm、高さ4cm前後を測る規格性の強いもので、法量的に壺身のB群(第44図17・20)に対応した在り方が窺える。器形は全体的に椀状の丸みがあり、やや深身の形態を持つ。口縁部は概ね内湾気味で開いており、天井部と口縁部の境に浅い沈線を巡らすものが大方である。口唇部は内殺様ないし形骸的な階段状に整形する特徴が認められる。調整技法では外面の天井部上半を回転ヘラケズリで再調整する他は内外共にロクロナデ整形が殆どである。焼成やや硬調で色調は青灰色や灰青色を呈す。

壺身：小片を含めて10点程の固体があり、復元実測等により形状の窺えるものは5点であ



第44図 古墳時代の須恵器(1)



第45図 古墳時代の須恵器(2)

る。これらは蓋受部や口縁部の形態他から口縁部が直線的に内傾して幾分短めに立つA群(第44図12・13・17)と、全体に大振りな作りを示し、外反気味に内傾して立つ口縁部を持つB群(第44図18~21)とに識別できる。但し、21例は18~20に較べれば法量や体部の立ち上がり形態等で異なり、別種として分離すべきものかもしれない。技法的には外面受部以下の体・底部部分で、底面に近い部分約3分の1程度が回転ヘラケズリされる特徴が顕著である。焼成は概して硬調で、色調は青灰色を呈すものが殆どである。

甌：口縁部破片類を含めて10固体程がある。但し、全形の窺えるものではなく口縁部ないし頸部あるいは体部上半と言った部分資料に限られている。口縁・頸部資料では短頸で櫛描波状紋の丁寧な1群(第37図3、第44図27)と法量的に大きく長頸の部類に属すと考えられる1群(第38図7、第44図22・26)とに大別でき、後者の櫛描波状紋が簡略的、形骸的と看取される。体部資料は作りの小振りな第44図25の1点に限られ、肩部に周巡する明瞭な沈線と円孔下半月に取り付く細かな工具による櫛描波状紋等を窺い知るのみである。全体に焼成硬調なものが多く、胎土は緻密なもの(第38図7・第44図26・27)と砂っぽく粗いもの(第37図13他)等が識別される。色調は青黒、灰、灰白、青灰、紫灰等で一様でない。

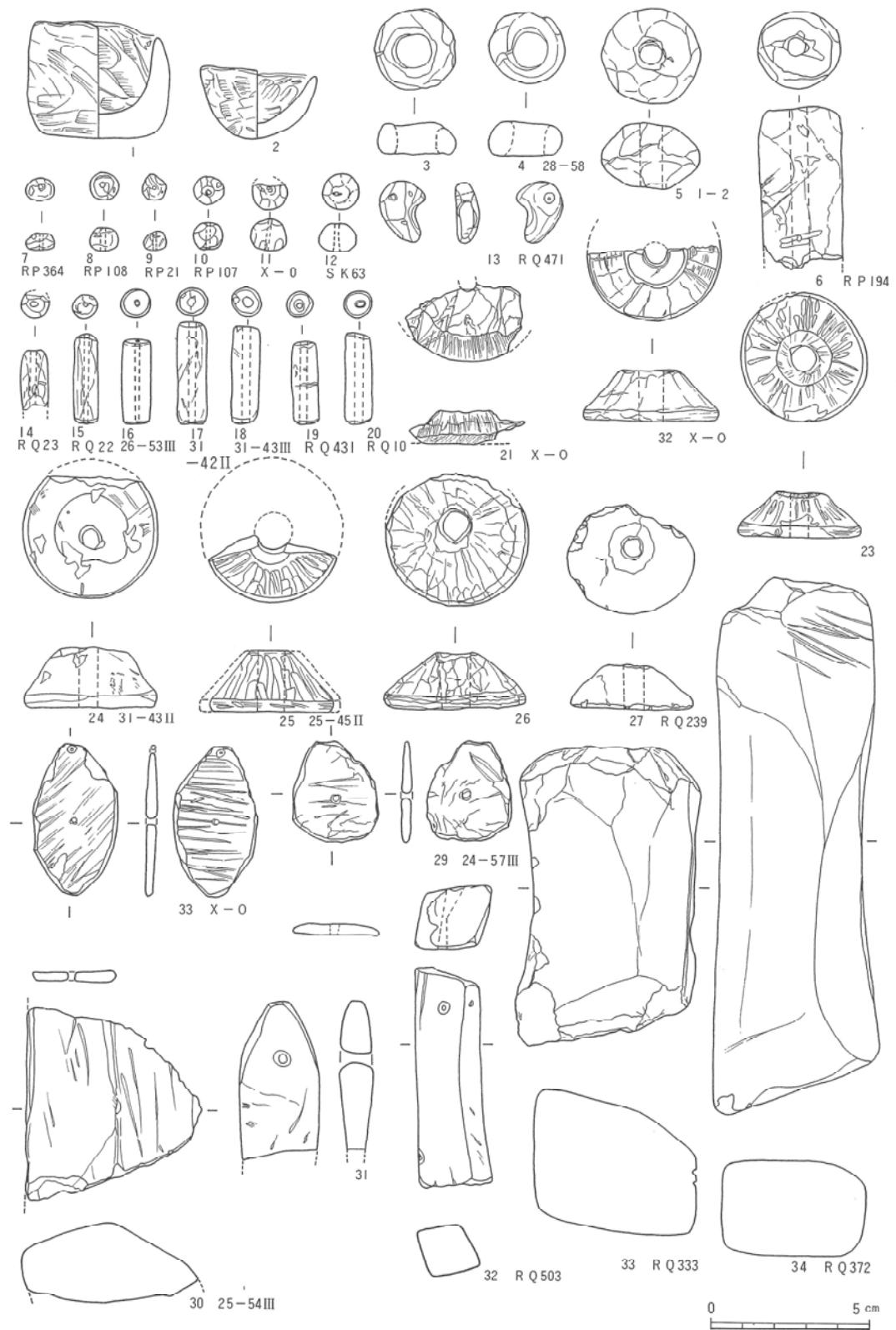
甌：甌は固体数にして4~5固体分があるが、いずれも破片のため全形他の詳細を窺えない。口縁部資料では端部を折り曲げて肥厚させ、逆「く」の字様に整形する小形の一群(第45図1~4)と口径が27cm前後を測る大形の形態で、稜線で口縁部と区画される頸部に、丁寧な櫛描波状文の観察できる一群とがある(第45図5・7)。体部資料では平行タタキに同心円アテないしは青海波や円弧状のアテ痕等を有すものが殆どで、外面ではタタキの上から櫛歯様工具によるカキメの施される資料が多く見られた(第45図9~17)。

提瓶：3固体が認められ、内2固体分はST13に関連して出土している(第37図4~6)。第37図4は口縁端を折り曲げて開く口径7cmを測る口縁部資料、同図5・6は同一固体の頸部から体部上半の資料で、外面に横走するカキメ、内面に円弧・同心円等のアテ痕等が見られる。包含層出土の第45図8は口径8cmを測る口縁部資料で、頸部に浅いながらも明瞭なカキメを周巡させる。胎土はいずれも緻密であり、焼成も硬調で良好である。

(3) 土・石製品(第46図1~34)

土製品では手捏土器、円環状土製品、土製模造の玉類、土製紡錘車、土錘、土製支脚等の器種があり、石製品に共通するものを多く含んでいる。以下に器種毎の概略を記す。

手捏土器は形態を異にする二種が認められ(1)は平底でコップ形、(2)は尖底状の丸底を呈す。径2.5cm前後の円環状土製品(3・4)は民俗例等から後世のものと考えられる。模造の玉類は最大径1cm内外の小玉(7~12)と大きめの丸玉(5)、管玉の模作品(14~16)等があり、5・14を除いたものはミガキ調整が丁寧に加えられて黒色に焼成される。紡錘車(24)は石



第46図 土・石製品

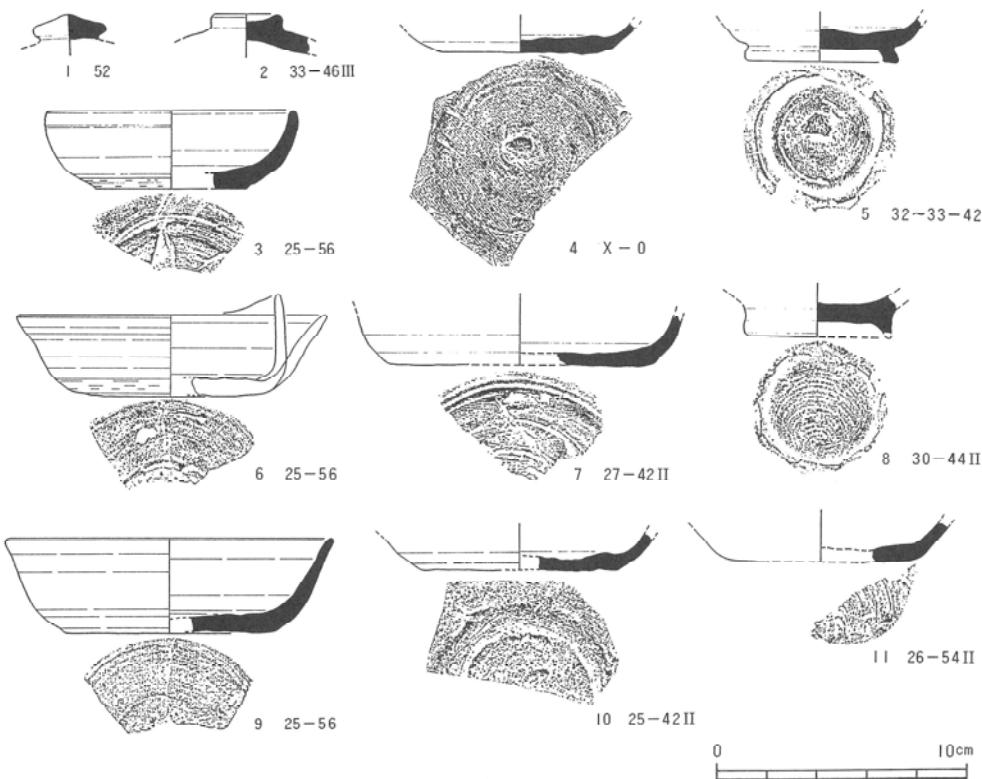
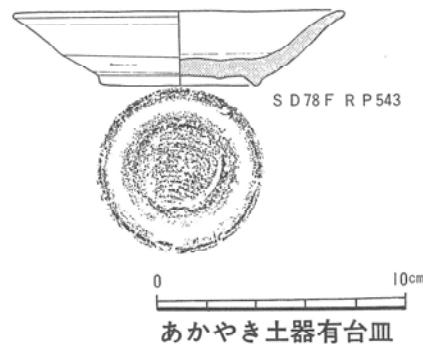
製品の法量に同等で形態的にも模倣が忠実である。土錐は径2.5cm、長さ5cm以上を測る大形で、土師器に共通する胎土・焼成・色調を有す。土製支脚はカマドに据えられた状態で発見されたS T 41例の他、第42・43図に示す5例が得られた。

石製品では勾玉、管玉、紡錘車、石製模造品、砥石等の器種の他、黒耀石製の円形搔器(第37図7)がある。勾玉(13)は翡翠製で、頭部の穿孔は1方向から行っている。管玉(17~20)は総て包含層からの出土で滑石製である。紡錘車は6点あり内21・22・25は滑石製の優品、他の23・26・27は材質不詳で作り他で稚拙な観があり在地的で模作的な印象が否めない。石製模造品では滑石製の剣(28)と有孔円盤(29)と考えられる2点があり、28は双孔、29は单孔である。いずれも偏平で仕上げの粗い擦痕を明瞭に止めている。

砥石は携帯用の31・32の2点と法量的に大きな30・33・34の3点があり、後者の30他は住居内から出土している(33:S T 3、34:S T 5 Y)。

(4) 古代の土器

精査区内からは平安時代の遺構が幾つか検出されており、これらに伴ったと見られる若干量の須恵器やあかやき土器が得られている。詳しくは割愛するがヘラケズリの見られる坏他は注目される。



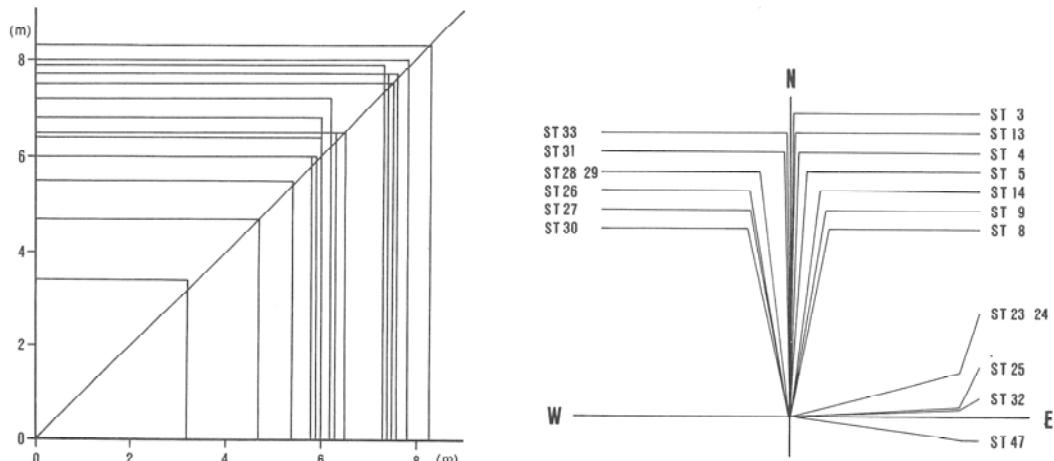
第47図 出土須恵器(蓋・坏)

7 まとめ

(1) 遺構

今回の調査によって検出された遺構は表1の検出遺構一覧に示す通りである。内訳は古墳時代の住居跡24軒、土壙跡16基、溝跡3条、その他1基、および、平安時代の建物跡他7基等であり、総計で51件を数えた。以下ではこれら遺構の中でも主体を占める古墳時代の住居跡について概観し、形態その他の特質を略記する。

先ず、平面形では規模の大小に拘らずいずれも方形を基調にしていると推測でき、この時代の一般例から外れることのないことが看取できた。次に、規模・方位では下図からも明らかな様に1辺が3cm強～8cm強までの範囲中、6cm前後と7～8cm規模の大きさにピークがあり、方位的にはST3・13他の主軸が北に偏する一群とこれとは逆にST33・31例等の西に偏する一群との大別二様の在り方が理解された。また、住居の構築方法では壁周の内側に周溝を巡らす形態と全く伴わない形態とが認められ、これら相互の時期的あるいは性格的相違が問題となつた。何故なら、周溝を伴わない竪穴住居はST3・5・13・31・41等が明確な例であり、他の周溝を有するものに較べて数的に約4分の1と少ない事実と遺物的に見て竪穴例がやや新しい様相を持つのではないかとの当初の予測等による。しかし、重複関係からは竪穴が周溝を切る例(ST4→ST3)と周溝が竪穴を切る例(ST31→ST47)の双方があり、この限りでは形態的相違による先後関係は認め難い。すなわち、同時併存と捉えられるが、今の所これら個々の系譜と消長等については明らかでない。次に、炉の形態を検討すると、周溝を伴わないST41が明確にカマドの検出できた唯一例で、他は地床炉と考えられた。一方、周溝を伴う住居では床面を殆ど遺存しない場合が多かった等から今一つ不明瞭で、仮にST4例がカマドを持っていた可能性があるとできれば、地床炉とカマドの両者が周溝を持つ住居に個別的に伴って存在したと推測できなくもない。このことは、カマドに伴う遺物と考えられる土製支脚が一定量出土していること等から見ても蓋然性が高いと判断できる。この他にも言及すべき事柄は多いが割愛する。



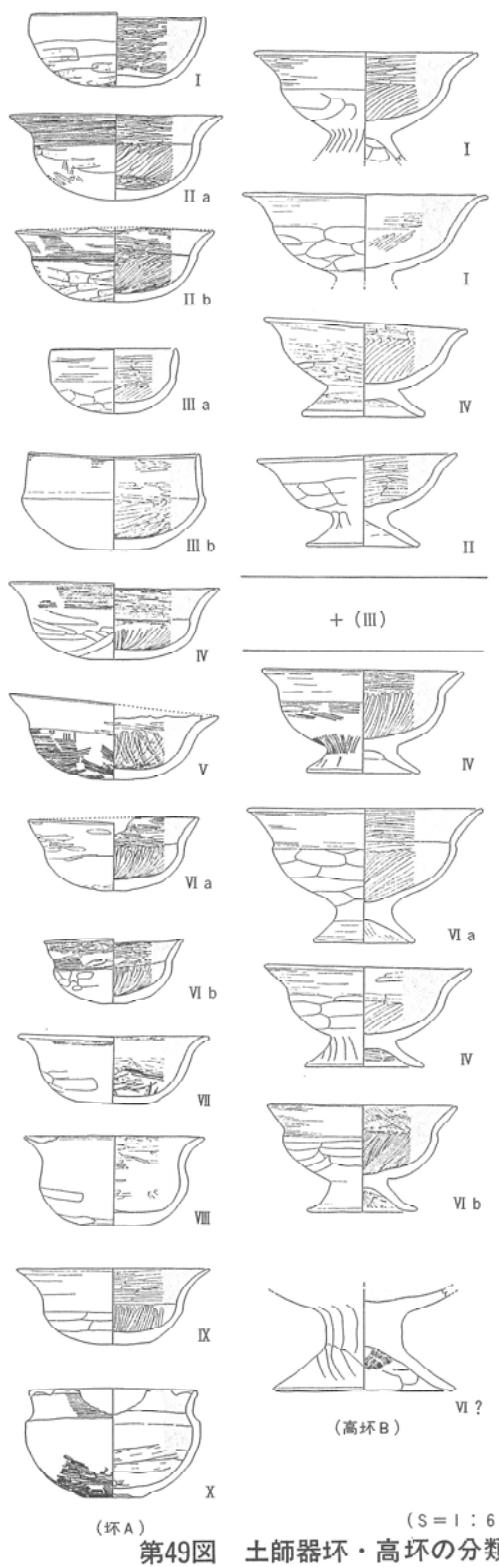
第48図 住居の規模と主軸方位

(2) 遺物

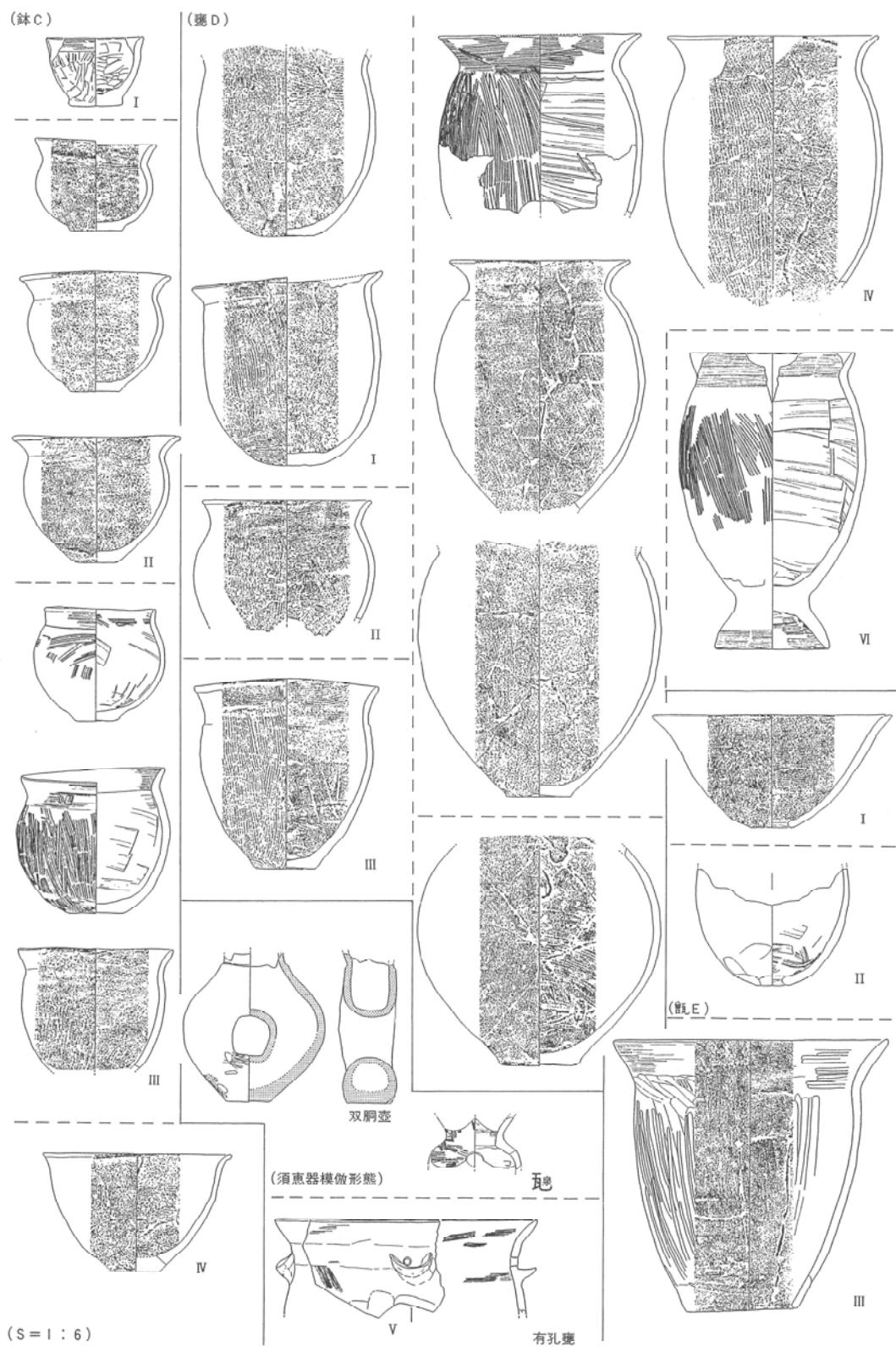
遺物では多量の土師器各器種と若干量の須恵器・石製品・土製品等が出土している。しかし、遺構単位での集計他作業が未了のため遺物の量的構成や組成内容の詳細については明らかに成し得なかった。以下では遺物の主体を占める土師器と年代的編成に欠かせない須恵器について器種毎の分類と特徴、および共伴関係と編年的位置付け他を主としてST 13とSD76における在り方等から概述する。

坏(A)は形態と手法等からI～X類に分類でき、さらに法量的違いからa・b等に細分できた。この中で一定量が保証できるものはII a・II b・IV・V・VI・VII類等であり、IV類が最多であった。他の類はI・III類で各1点、VIII・IX類で各2点等に限られ、未整理のものが多い段階ながらこれらが坏形態での主流に加わることはまずないと考えられた。

一方、器種・量共にまとまりを持つ遺構単位での比較では、組成される類別の組み合わせや量比他に違いが認められる。例えばST 13とSD76ではI・VI類がST13で欠落しIX・X類は両者共に組成されない。また、両者に共有のものではII・IV・V・VIII類があり、主体はIV類にある等である。以下の量的序列はV・II・VIII類の順であった。これらのことからは、遺構の時期がほぼ等しく、かつ坏各類の量比に対応した組成的内容を有すること、幾つかの違いは時期差以上により性格的相違に起因しているであろうと捉えられた。なお、坏の90%以上が内黒で占められており、非内黒は極く僅かであることを付記して置く。



第49図 土師器坏・高坏の分類



第50図 土師器鉢・甕・飴他の分類

高坏(B)は坏部形態や技法的特徴から見て坏(A)の形態に密接な関連があると理解できた。すなわち、B I類はA II a、B IIはAVII、B IIIはAIV、B IVはA II b・VI、B VはAV、B VIはAVI類に良く対応した在り方を示すと見做すことが可能である。これらの量比は全体数が少ないために明確でないが、復元できたものから見てB IV・B VI・B I類等が多く、B II・B III・B V類でやや少ないと推測できる。一方、坏形態のI・III・VIII～X類に関連する一群は欠落するか僅少と判断でき、土師器群の型式構成や器種組成を考える上で注目される。なお、高坏での非内黒は存在しないと言っても過言ではなく、確認し得た総てが内黒であった。

鉢(C)は法量と形態からI～IVに分類でき、主体がC II・III類にあることは既に述べた。他の器種との共伴関係では出土例がS D76に偏っていることから必ずしも明確でなく、S T31で坏A IV・VI類等にC III類を伴っている事が知られる程度である。一方、S D76ではC I～IV類までの類型が出土しており、中でもC II類が多く認められた点は注目される。このC II類は形態・手法的な側面で坏A II a・VI類他に共通する口唇部玉縁等の要素を持っており、これらとの同時性を示す手法上の特徴的な現象と理解することも可能であろう。

甕(D)は坏に次いで量的に多い器種で、法量と形態からI～VI類に分類できた。これらの類型ではIV類が主体を占め、S T13・S D76他の遺構で安定した在り方を示すと看取できる。一方、丸底形態のD I類や口縁が直上気味に開くD III類、有台のD VI類等は一種特異な形態的特徴を有しており、特にD I類の出自・系統等の問題が注意される。すなわち、この様な丸底形態は一般的には北陸的な色彩として把握できると考えられるからである。その他、体部が球形に張る大形のD V類等も散見でき、これらの組成比は極めて少ないと見做せるものの甕の形態上に於ける予想外で多様な在り方が明らかとなった。

瓶(E)は形態や法量を異にするI～IIIまでの類型が認められたが、出土量的には極めて少量である。遺構との関連ではE II類がS T31、E I・III類がS D76にそれぞれ1点ずつ認められ、S D76でE III類が坏A I・IV類・鉢C I類・甕IV a類等、E I類が坏A VI類・高坏B IV類等と共にしている。また、S T31のE II類は坏A IV・VI・X類他、鉢C III類・甕D I・III・IV b類他との共伴が考定できる(第38図3)。

以上で述べた器種の他では、双胴の壺や内面黒色処理の施される壺、甕形で頸部の円孔に対となる受け口様突起を持つもの等があり(第37・38・43図)、後二者はS T31内から出土している。なお、双胴壺・壺等の形態は言うまでもなく須恵器に特有な器種の模倣とでき、必要量に充分な確保が不可能であった状況下での在地的製品と捉えられよう。

須恵器はS T13で坏蓋・壺・提瓶等の各器種計5固体(第37図1～4)、S T31で壺1固体(第38図7)、S D 1で坏身1固体(第44図20)、S T41の西半部覆土から坏身1固体(第44

図21)等が出土した他、遺構検出前段までの過程で壺蓋11固体、壺身8固体、壺6固体、提瓶2固体、甕4~5固体程が検出された。しかし、出土資料の大方は破片であり、器形の窺える固体は復元実測の可能なものを含めても壺蓋・壺身等の小形品幾つかに限られる結果であった(第44図)。数量的には土師器総量の1%にも充たないと捉えられ、遺物組成上では極めて少ない比率と認識できる。これらの中で比較的形態他の特徴が窺い易い壺蓋・壺身・壺等について見てみると、いずれもII期の前葉から中葉に係る時期のものであると考えられ、量的主体はII期の中葉頃と把握できる。すなわち田辺昭三氏の須恵器編年に照らせばMT15やTK10型式に対比でき、TK10相当のものが主流を占めると換言できよう。以下では個別的検討の余裕がないことから土師器との関連で重要と考えられる遺構内出土須恵器の幾つかについて述べ、土師器群と須恵器の関係および年代と編年の位置等について概述する。先ずST13では多量の土師器群に伴って既に述べた壺他の三器種6点(第37図1~4)が出土しており、内2点は型式的特徴の明確な壺の口縁部資料であった(第37図2・3)。両者は頸部の長さ、櫛描波状紋の仕様他の諸点で違いが認められ、RP316はMT15、RP269はTK10相当と捉えられる。また、ST31の壺(第38図7)も長頸、櫛描紋の簡略的な在り方等から見てTK10ないしはMT85併行と考えられた。従って、これらに伴うと判断できる大方の土師器も時期的には6世紀の第2~第3四半期頃の大枠で捉える事が可能で、出土状況他の吟味が進めばこれらの土師器群を最低二型式程度に分離して把握することができると予測している。しかし、両住居跡共に一次的な遺物の遺存状況を示さず、廃絶後の投・廃棄等二次的なかかわりで堆積しているものが殆どと理解できたことからここでの年代的位置付けはこの程度に止どめて置くのが妥当であろう。

なお、本遺跡の土師器については、昭和31年の暗渠排水工事中に出土した資料を基とする川崎利夫氏の論巧があり、その中で「矢馳式」の提唱がなされている。すなわち、山形盆地の嶋I式や宮城県の引田式に併行する5世紀後半から6世紀前半に比定できる型式とされ、壺の内側に稜線を形成する等の形態的特徴と内面黒色化処理の一般化が特色として指摘できると言うものである。しかし、こうした論述は既に述べた事項から適当でないことが明らかで、「矢馳式」の型式設定も器種組成他の検証に立脚して成されるべきは当然であった。今次調査でも幾つかの良好な一括資料が得られたが、単位群としての資料的把握までには至っていない。最後に、比較資料が近隣に殆ど無い現状のため敢えて地域を広げて類例を求めれば、新潟県の田伏遺跡(田伏II式)や中山町三軒屋物見台遺跡V群土器等が対比資料として上げられる。前者は本遺跡の壺A II a・IV類に近似した類型を壺形態の主流とする土器群で、殆どが内黒で占められている。後者は狭義の住社式に併行すると考えられる一群で、有段形態壺の器形や手法との関連から強い相関があると捉えられよう。

IV 矢馳B遺跡

1 調査の方法

昭和61年度の分布調査で確認された約100m四方の遺跡範囲内に $2 \times 10\text{m}$ を単位とするトレンチ18本を設定した(第1図)。トレンチの配置は、ほ場整備事業における計画農道および排水路との関連から、特に破壊が決定的と考えられたこれら部分に限定して行っている。すなわち、その他の大部分は遺構面までの深度と施工上の方法等により、大方は現状での保存が可能と考えられたためである。なお、南北方向でのトレンチ軸はN-60°-Eを測る。以上のトレンチは、各々SN(南北方向トレンチ)1~4の東辺トレンチ、5~8の西辺トレンチ、同様にEW(東西方向トレンチ)1~5・6~10等に命名した。

次に、手作業による遺構検出面までの粗掘りと面整理・面精査を行い遺構・遺物の検出に努めたところ、北辺のトレンチ(EW 6~9)を中心にややまとまった遺構と遺物の集中を認めた。遺構を確認したトレンチ(SN 1・EW 6~10・SN 5・6)では、一部を除いてトレンチ部分に限定した調査を行い、遺構覆土の完掘と土層の観察・平面図作成他の一連の記録を実施している。また、EW 7トレンチではST12住居跡の北西半が約四半分で係ったことからその周囲を最小限度で拡張し、その全形を検出して精査・完掘した。

2 調査の経過

本遺跡の調査は昭和62年7月1日を開始し、同年7月21日までの期間延13日間で行っている。の調査が短期間かつ規模的にも限定的小さなものとなった理由については前項に記した通りである。以下では主として調査の進行状況を記し、その概略を述べる。

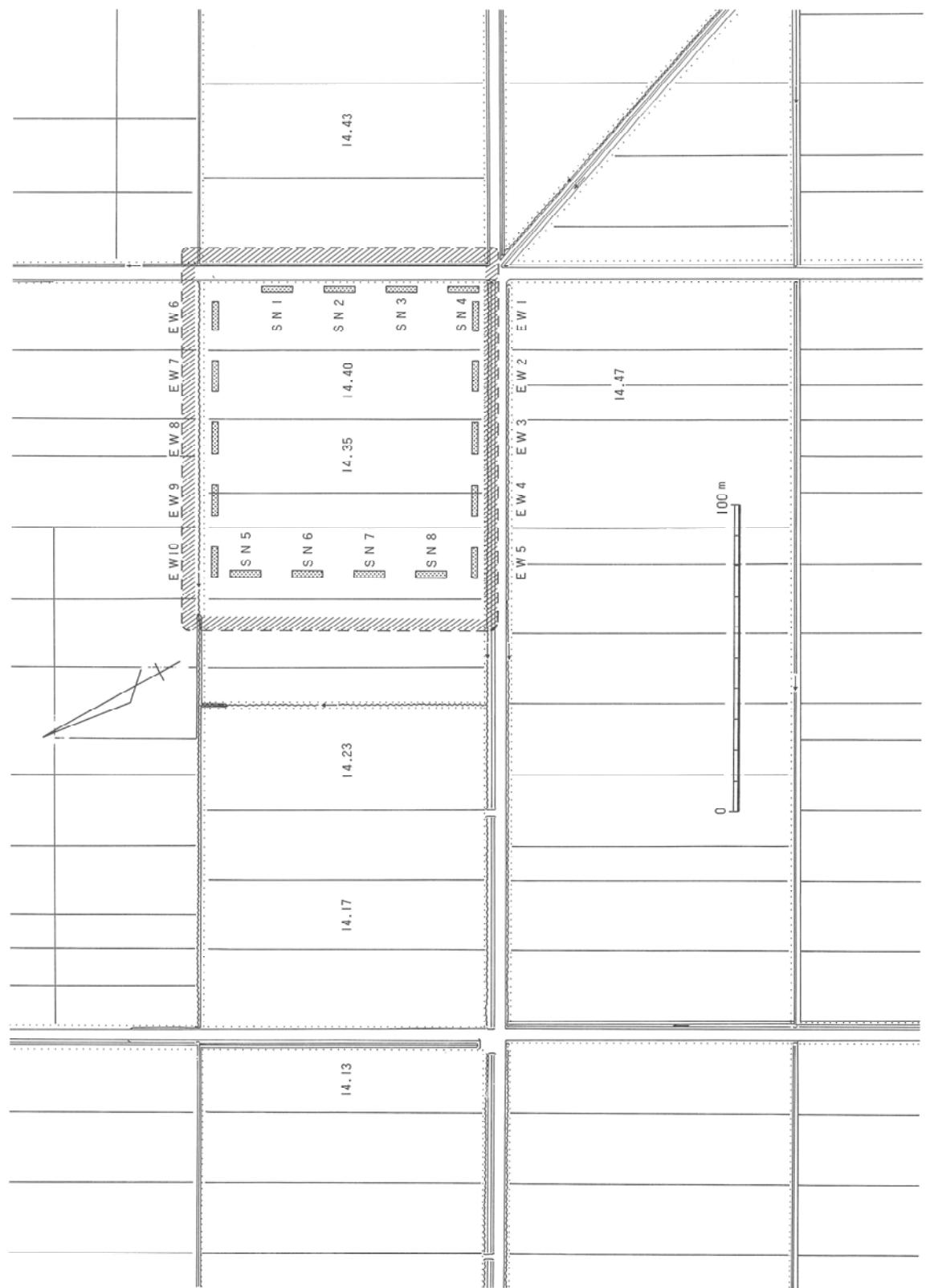
7月1日：調査開始、 $2 \times 10\text{m}$ のトレンチを100m四方と推定される遺跡の外周に沿って設置する。午後二時、赤川土地改良事務所他関係者参集の下鍬入式を行う。

7月2日~14日：各設置トレンチの粗掘りと面整理を行いほぼ終了する。途中雨天のため何度かトレンチ内が水びたしとなる。

7月15日~16日：各調査トレンチの遺構検出・土層観察等の精査と写真撮影等の記録を行う。精査の結果、SN 1・EW 6~9・SN 5の主として遺跡の北辺から東辺に係る計7ヶ所のトレンチで遺構が検出された。検出遺構の大方は南北方向に走る大小の溝跡が主体を占めるが、EW 7トレンチではST12とした竪穴住居跡と考えられる一辺約3mを測る隅丸方形プランの小竪穴を検出できた。

7月17日~20日：検出遺構の掘り下げ等精査と平面図作成他の記録を行い、20日までにはほぼ精査・記録を終了する。なお、7月16日に現地説明会を行っている。

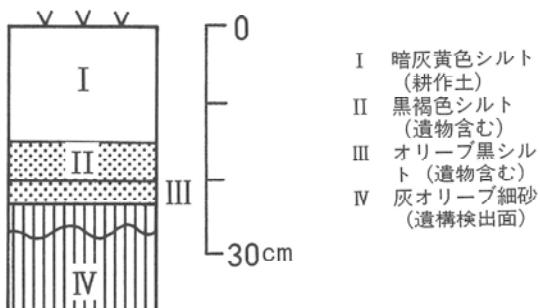
7月21日：現地の跡かたづけと器材その他の撤収を行い調査を終了した。



第51図 遺跡概要図 (1 : 200)

3 遺跡の層序

遺跡域に設置したトレンチ内での土層は必ずしも均一なものではない。概して南辺のトレンチでII層の粘質土が厚く、北東辺域程薄くかつ地盤の高くなる様子が観察された。すなわち、南辺で地盤が下がり、より粘質土が卓越している。同様のことは、北辺のEW10トレンチでも覗えたが、西辺のSN5～7では逆にII



第52図 基本層序柱状図

層が薄くなり、また地盤も砂質シルト基調となって高い等の状況が認められた。

以上のことから見て、ほぼ平坦と見える現在の水田下には、南北方向に走る自然堤防状の微高地が存在するものと予測され、検出遺構は主にその尾根状の高まりに沿って構築された結果によると判断できる。但し、設置トレンチは遺跡外周に沿う形で配したことから、その内部の状況は明らかではない。また、東辺のトレンチからより東方へかけての状況も把握できていない。しかし、設置トレンチの各土層状況からは遺跡立地にかかる要因の一端が予見され、その性格を考える上では重要な視点を得ることができたと言える。

4 調査トレンチの概要

以下では、東西・南北に設置した各トレンチの概要を、土層・検出遺構および遺物の面から略述する。

EW1トレンチ：I層10cm、II層20cmを各測る。検出遺構はない。遺物はII層最下部なしIII層直上面から第5図10に示した須恵器有台坏の底部破片が1点出土したに止まる。

EW2～4トレンチ：土層の状況はEW1に同様である。検出遺構なく、遺物も散発的に含まれた若干があるだけで殆どないと言っても過言ではない。

EW5トレンチ：I層15cm、II層20cmを測り、やや基盤層が下がり気味となる。遺物はこれと言って特記するものではなく、破片若干がII層とIII層の界面から出土しただけである。

EW6トレンチ：南北方向に走る大型の溝跡SD3がトレンチの東辺に検出された。検出部分は溝跡の西辺斜面に限られたためその規模は明らかでない。また、II層に近い覆土を持つ南北方向に延びる溝跡SD4、その検出がIII層上面で覆土がIII層に近似する溝跡SD6、円形の土壙SK5等がある。遺物はSD3の斜面に検出された須恵器の甕体部破片1点に限られた。その他の遺構からは出土遺物がない。

EW7トレンチ：ここからはST12住居跡、SD7～9・11溝跡、SK10土壙等、今次調査の主要な遺構が検出された。また、これら遺構にかかわって量的に少ないながら、遺構の

時期決定を行い得る土師器等の出土遺物がある(第5図)。

E W 8 トレンチ：土層の状況等は基本的に E W 6・7 トレンチに近似し、E W 7 トレンチ同様溝跡を主体とする遺構が集中していた。検出遺構は古墳時代の所産と考えられる溝跡 S D13~17、土壤 S K18・19、柱穴様ピット S P20・21 等である。

E W 9 トレンチ：E W 8 トレンチの西辺から II 層の層厚が増し、E W 10 トレンチに向かって基盤層の降下する様子が看取された。検出遺構は東西方向に走る溝跡 S D12 の 1 条だけである。なお、本トレンチからの遺物の出土はない。

E W 10 トレンチ：I 層 16cm、II 層 20cm を各測り III 層は粘性の強い土壤となる。遺構・遺物の検出はない。次に南北の各トレンチについて述べるが、遺構・遺物の検出されなかつた S N 2~4 トレンチ、および S N 6~8 トレンチについては割愛する。

S N 1 トレンチ：本トレンチでは時期的に新しいと考えられる土壤 S K 1、歴史時代に入る時期の所産と目される掘立柱建物跡の柱穴(E P)列、完掘に至らなかつたものの東西方向で走る溝跡等を検出した。しかし、これら遺構の時期決定にかかわる遺物の出土は皆無であり、詳細は不明である。但し、S K 1 土壤はトレンチの観察土層 III を切り込み、またその覆土は II 層に近いこと等から、後世(近世～近代)のものかと判断された。

S N 5 トレンチ：未精査に終わったが、南北方向に走る溝跡 1 条を検出している。

5 遺 構

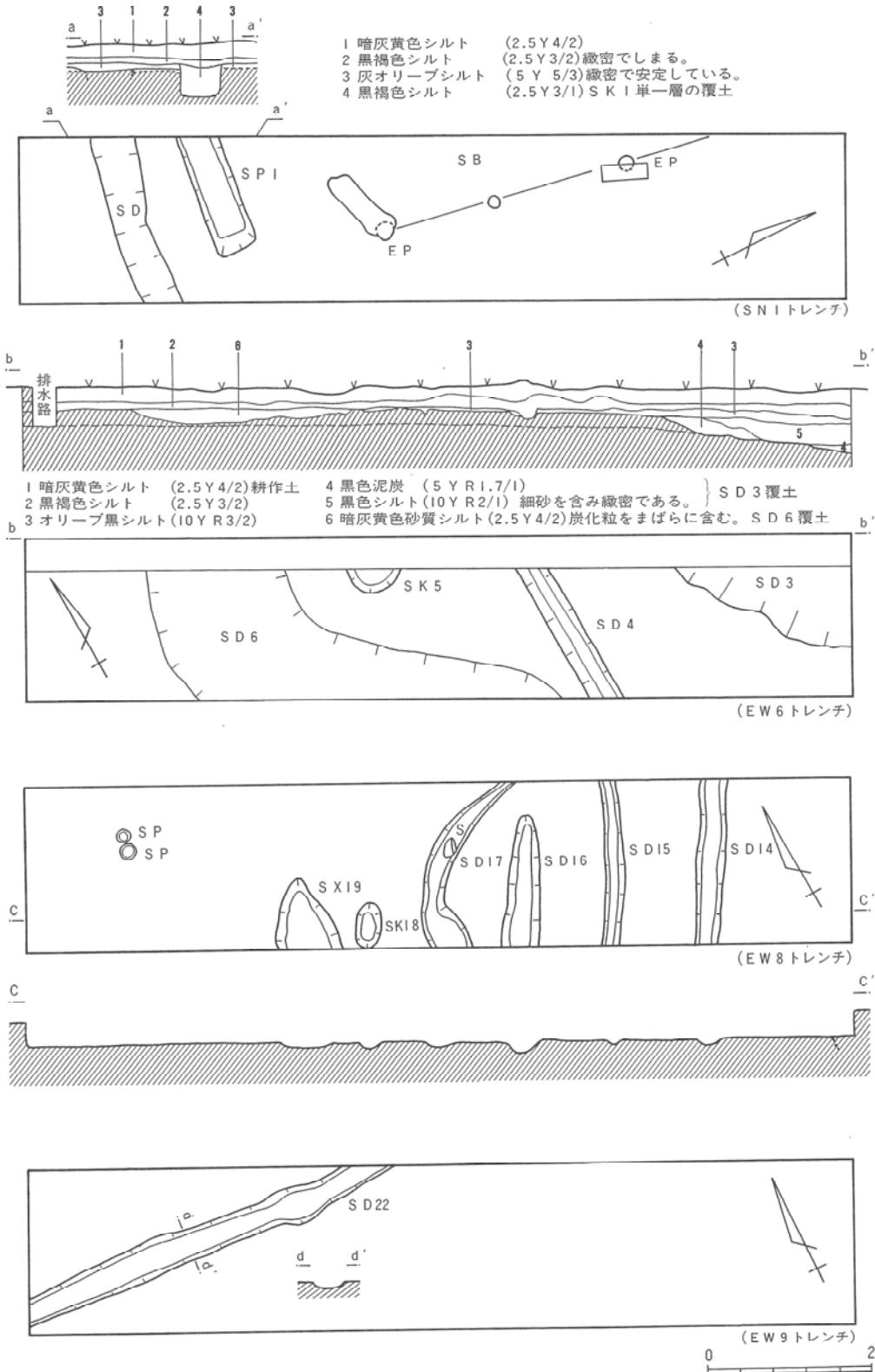
本遺跡の調査によって検出された遺構は、溝跡を主体とする 20 数基がある。以下では調査段階での登録順に従ってこれら遺構の概要を述べる。

S K 1 土壤跡：東西方向に延びる細長い土壤で西辺はトレンチの壁にかかる。覆土は單一で均質な様相を示し、遺物では板切の小片 1 点が検出されたに止まる。検出全長 150cm、上幅 50cm、深さ 37cm を各測る。

S B 2 柱穴列：基本層 III を掘り込む径 20cm、深さ 18cm 前後の柱穴 3 基を検出している。柱穴間の距離は 140cm、170cm を各測り 均一とはなっていない。検出当初 2 間 × 3 間程度の掘立柱建物跡かと推測されたが、トレンチ幅 2 cm と限られたため明らかにできなかつた。なお、中間の柱穴では径 20cm の掘り方内に径約 10cm 前後の柱痕を認めている。

S D 3 溝跡：トレンチの東端で部分的に検出し得たやや規模的に大きいと考えられる溝跡である。覆土は黒色の粘質土やシルト等を主体としていた。規模・性格・所属時期等は不確かながら、溝跡西斜面の底面直上から須恵器甕の体部破片 1 点が出土しており歴史時代の所産かと推測される。

S D 4 溝跡：ほぼ正南北方向に延びる直線的な溝跡で、覆土は基本層序 II にほぼ同等であった。出土遺物はなく、その構築時期は不明確ながら近世ないし近代のものと判断できる。

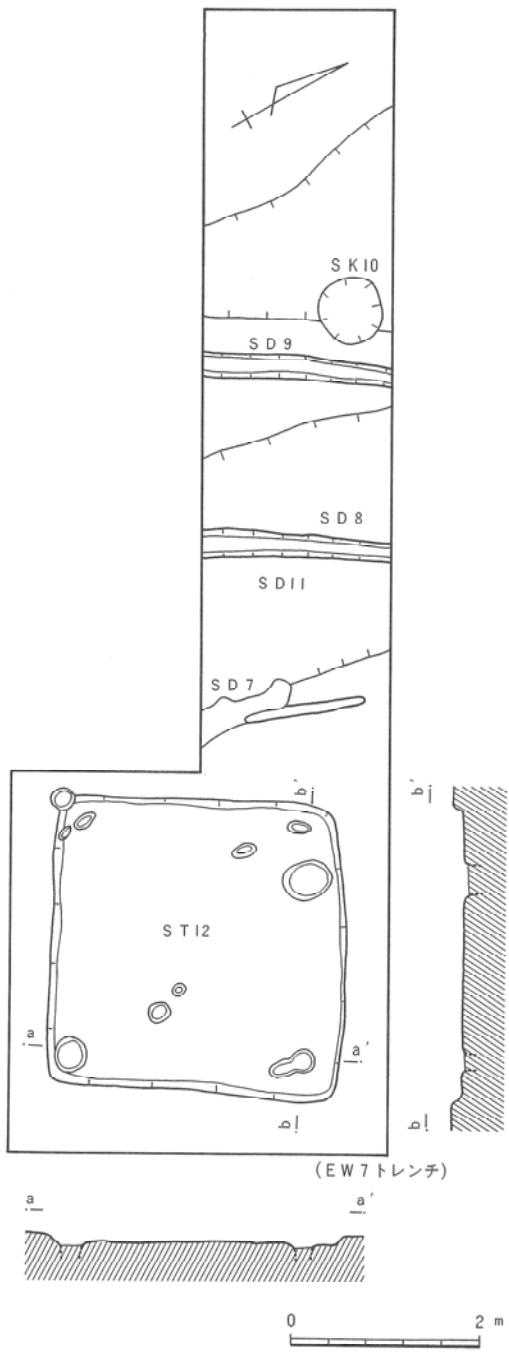


第53図 遺構実測図(1)

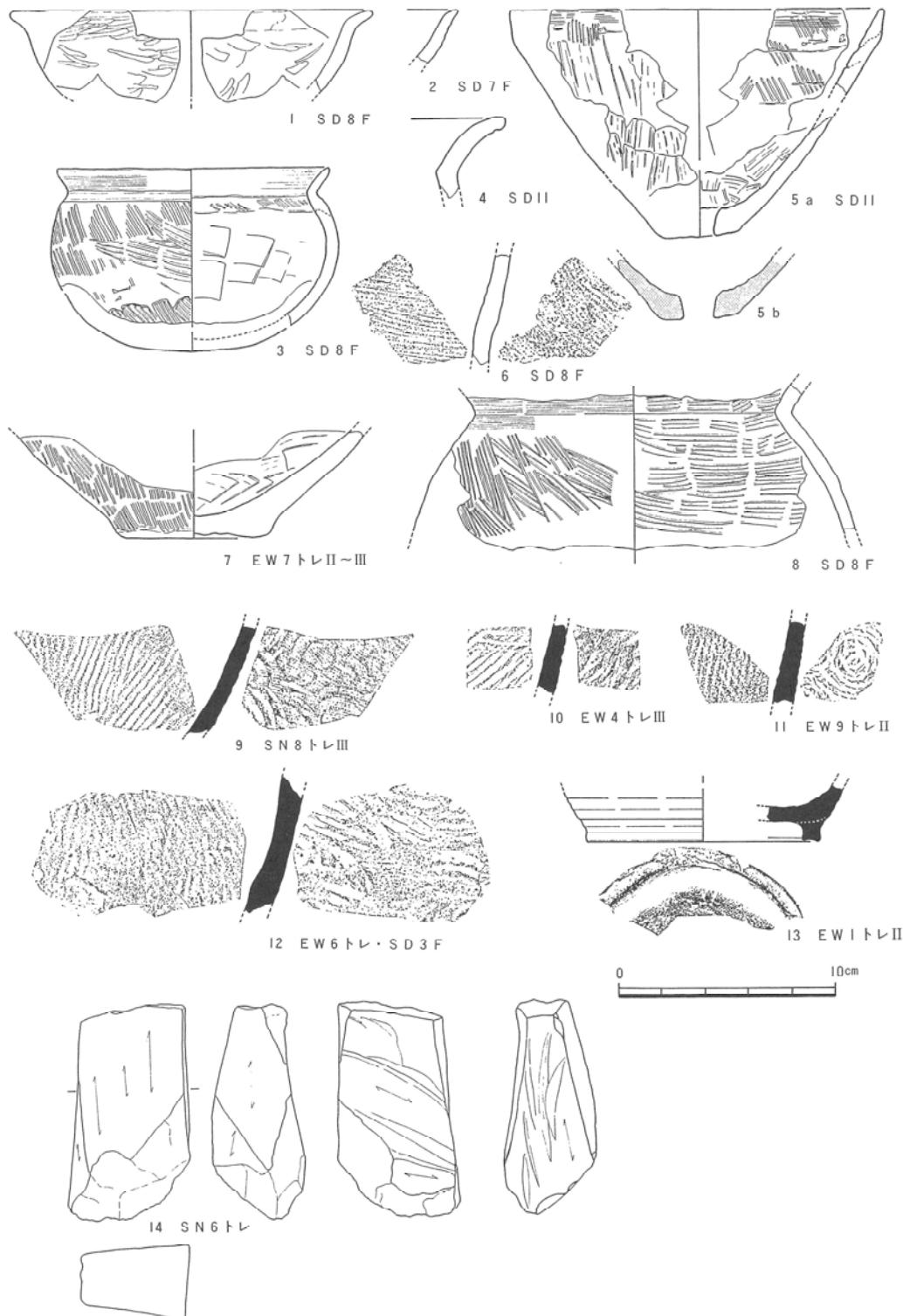
S D 6・11溝跡：幅180cm～250cmと規模的に大きく、覆土は暗灰黄色シルト(2,5Y4/2)で、基本層序IIIとの識別がやや困難なものであった。いずれも南北方向に延びることが分かる他は性格等不明である。時期は、出土土師器から見て概ね古墳時代中期の所産と考えられるが、底面まで完掘するに至らず、深度他堆積状況等を明らかにし得ていない。

S D 14～17溝跡：S D 17を除いてその走向を直線的に南西から北東にとるもので、幅30cm～40cmを測る。覆土はいずれも暗灰黄色シルト(2,5Y4/2)で、炭化物小粒片、遺物小片若干を含むものであった。S D 17では河原石が散発的に認められる。

S T 12住居跡：EW 7トレンチの東端で検出した一辺約3cmの方形プランを有す住居跡で、覆土はS D 6・11溝跡等と同様であった。柱穴は不整ながら各コーナー寄りに存在し、四本柱による構造のものであったことが分かる。但し、掘り方の深さはさほどでもなく、また柱痕等も明瞭ではなかった。床面は基本層IIIをそのまま使用したと考えられるもので、貼り床等特別な施工を認めていない。炉跡、カマド等も認めず、当初から構築されなかつたものと判断される。遺物は主に覆土の上位から中位にかけて散発的に出土した(図版4・5)が、図化し得るまでのものはない。これらは土師器の甕類が大方を占め、坏他の器種を認めていない。また、この北西方に隣接ないし重複すると考えられた遺構の存在を認めたがトレンチ外にかかり充分な精査検証までには至らなかった。



第54図 遺構実測図(2)



第55図 出土遺物実測図

6 遺 物

限られたトレンチ調査と言う制約もあり、今次調査で出土した遺物は整理箱二箱弱と僅少であった。これら遺物の出土概況は前項中で述べた通りである。すなわち、EW 6～9 トレンチ等、遺跡北辺に設定したトレンチ内の主として溝跡群ないしこれら遺構を確認するまでの前段で検出されたものが大半を占めている。

出土遺物の種別では土師器、須恵器他の土器類と若干の砥石等石製品がある。しかし、これらの方は復元等不能な土器類の小破片であり、器形の窺える資料は第5図に示した壺、鉢、甌、および甕の部分等、極めて限られたものに止どまっている。以下では提示し得たものを中心としてこれらの概要を述べることとする。

土師器では壺・鉢・甌・甕等がある。壺では内黒と非内黒の形態を認めることができるが、第5図1に示した非内黒のものが唯一器形の窺えた例である。すなわち、口縁部・体部破片による復元からは体部内湾で口縁部が短く外傾する器形と分かり、調整では内外面共に横方向で丁寧に施されるヘラミガキが顕著である。なお、口縁部が外傾しない類型も存在している(第5図2)。一方、内黒の資料は若干量、しかも小片のため詳細不明ながら、口縁部の断片(図版5最上段右上)等から見て碗状形態のものであることが推測できる。鉢は丸底、体部球形で頸部が縮まり、口縁部が薄くかつ短く外傾する器形を持つ。調整では外面でハケメ、内面でヘラナデ、口縁部内外面でヨコナデとされる。甌は部分形を知るのみながら平底で体部の膨らみが強く、「く」の字にくびれる頸部から口縁が短く外反する器形と窺える。調整では体部内外面でハケメを主とし、口縁部は内外面共にヨコナデとしている(第5図6～8)。甕は単孔を持つ小径で平底の底部から、体部がほぼ外傾で立ち上がる鉢状形態を示し、その調整はハケメ、ヘラケズリ、口縁部分で若干のヨコナデである(第5図5)。須恵器は有台壺(第5図13)1点を除けば甕類の体部の破片が殆どである。そこでは僅かにその内外に施された平行タタキ目、あるいは同心円、平行等のアテ痕その他を知るだけであり、所属時期等の推定は困難である(第5図9～12)。

石製品では砥石1点がある。断面形が長脚の台形様を呈し、その四面および端部割れ面の一部分をも磨面とするものである。石材は硬質の砂岩と考えられる(第5図14)。

7 まとめ

調査は、ほ場整備施工計画にかかる道路・排水路等に限ったトレンチ方式で進め、これらに関連するトレンチ18本を設定して実施した。なお、調査面積は360m²である。調査の結果、検出された遺構の時期は若干の近世から近代にかかるものと同じく歴史時代に入るものの、および古墳時代中期後様から後期初頭期頃に帰属するものがあると考えられ、主体は古墳時代中期後葉期にあると判断している。しかし、遺跡の性格他詳細は不明である。

IV 清水新田遺跡

1 調査の方法（第56図）

調査は、今回の調査対象地区となる東西180m×南北100mの範囲に、東端の農道計画路線の中軸線を基準とする5m×5mのグリッド設定から行なった。次に対象地区全体にグリッドを単位とする2m×10mのテストレンチを34箇所に設定し、遺構・遺物の集中地点、確認面までの深さについて調査を行なっている。その結果、TT4・5(平安時代)、TT9・10(古墳時代)、TT19・34(古墳時代)をそれぞれ中心とする3箇所に遺物集中地点が確認された。その中でも特に遺存状態が良好で表土の薄いとみられるTT19・34を中心とする地区950m²を精査区として拡張した。

精査区では重機による表土剥取の後、手掘りにより部分的に残っていたII層を取り除きIII層上面での遺構検出作業を実施した。精査の進行に伴い、III層上面は遺構のグライ化がはげしく、遺構確認が困難であると判断したため、III層を若干掘り下げ遺構の輪郭の把握に努めた。また精査区の土層断面観察、出土遺物の記録作業を並行して実施した。

調査の後半では、遺構掘り下げの後、写真撮影、平面実測、レベリング等記録を中心とした作業を行ない調査を終了した。

2 調査の経過

4月20日～5月15日：20日に器材搬入、鍵入式。6日からグリッド設定及びテストレンチ掘下げに入り15日までに終了。15日10～17-15～19区に精査区を設定する。

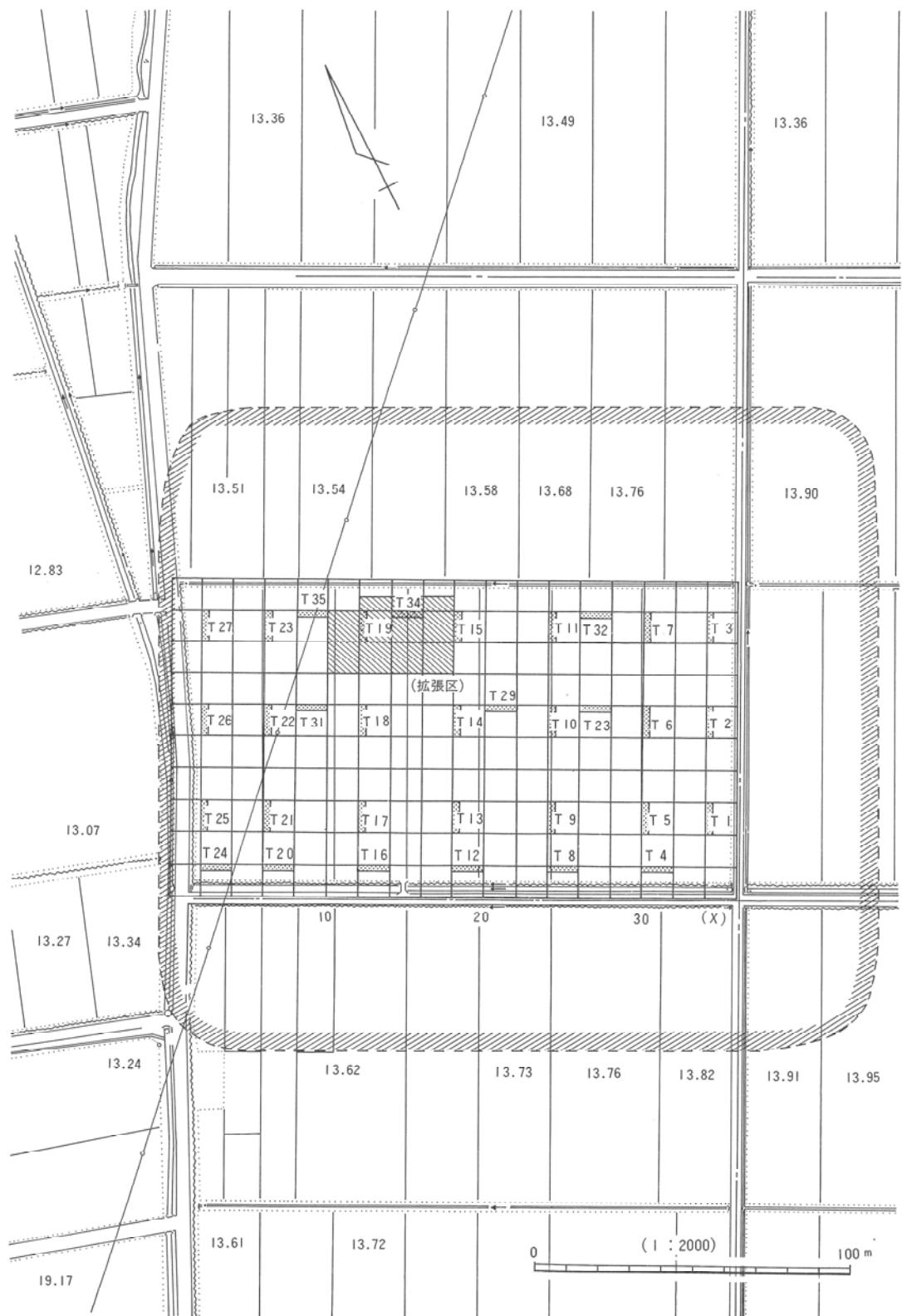
5月18日～21日：18日に精査区内の麦刈取り。19日から重機を導入して精査区内表土剥取り及び杭打ちを実施し20日までほぼ終了する。また19日から面整理作業にはいる。

5月25日～29日：25日からII層の除去作業にはいり28日までほぼ終了する。その間26日まで面整理作業を行なう。27日からIII層の掘り下げ及び遺構検出作業にはいる。

6月1日～5日：面下げ及び遺構検出作業継続。13～17-15～19区は5日までに遺構検出を終了し10軒の竪穴住居跡を検出する。その間2日に精査区南壁セクション図作成。4日、5日に1/100略測図の作成を終了する。また5日からST6の精査にはいる。

6月8日～12日：10～12-15～19区内にある溝状遺構の検出が8日で終了。8日から各遺構の精査にはいり、ST6、13、14、16、17の各建物跡の精査が11日までに終了する。また、11日に現地説明会を開催する。

6月15日～19日：SD18、21～24・ST17E K26・ST10、15の各遺構精査が18日までに終了。また各遺構の断面図、平面図、レベリング等の記録作業も19日までに終了する。19日に器材を撤収する。



第56図 清水新田遺跡概要図

3 遺跡の層序

遺跡の基本層序は右図の様に3層に分類できる。

第I層は耕作土。第II層は粘性の強い黒褐色土で、調査区全域に10~20cmの厚さで堆積し、遺物を包含する。第III層はグライ化したシルトまたは砂で、古墳時代の生活面と考えられる。遺跡の中心から外側に向かって緩やかに下がる様子が観察できる事から、当時は馬の背状若しくは舌状の微高地であったと推定できる。

当初はIII層上面で遺構の検出が可能であると予想されたが、実際には極めて困難であり、III層を掘下げていく過程で検出が可能となった。これは、遺構の覆土と地山を形成する土質とが基本的に同質で、かつまたグライ化によって青灰色系統に単色化していることが原因かと思われるが、II層と地山との間に、地山と酷似した間層が存在する可能性も否定できない。今回の調査では、これらを確認するには至らなかった。

4 遺構と遺物の分布（第58図）

本遺跡ではトレンチ掘りによって、TT4・5から平安時代（9世紀前半）、TT9・10及びTT19・34から古墳時代後期初頭期の遺物が集中して出土している。これら3箇所の集中地点のうち、特に遺物が集中し地山の安定した地域950m²について拡張・精査を行なった。

検出された遺構は13~17-15~19区において古墳時代中頃とみられる住居跡10軒、土壙2基がある。住居跡には少なくとも3期の重複が認められるが詳細は明らかにできなかつた。実際に重複が確認されたのはST13・14・15でST14がST13に切られるが、ST14・ST15間の新旧関係は不明である。これらの住居跡の配置は全体として馬蹄形となりその中央部には遺構が検出されていない。

また、10~12-15~19区内からは、SD18、21~24の各溝状遺構が検出された。このうち南北走するSD18は、西半が攪乱を受けているものの、プランの確認は比較的容易であった。しかしSD21~24については、各々がかなり錯綜しており更にグライ化がはげしいため新旧関係等不明な点が多い。10・11-15~18区、12~14-15区、15~18-19区はそれぞれII層による攪乱を受け、遺構が検出されなかつた。

次に遺物の分布を調査段階でのRP・RQ等登録遺物の在り方から概観する（58図）。この登録遺物は、主として完形品、ないし完形に近い物および重要と判断できた一群であり、

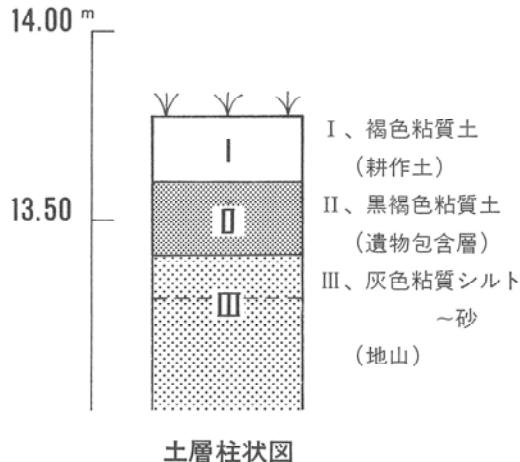
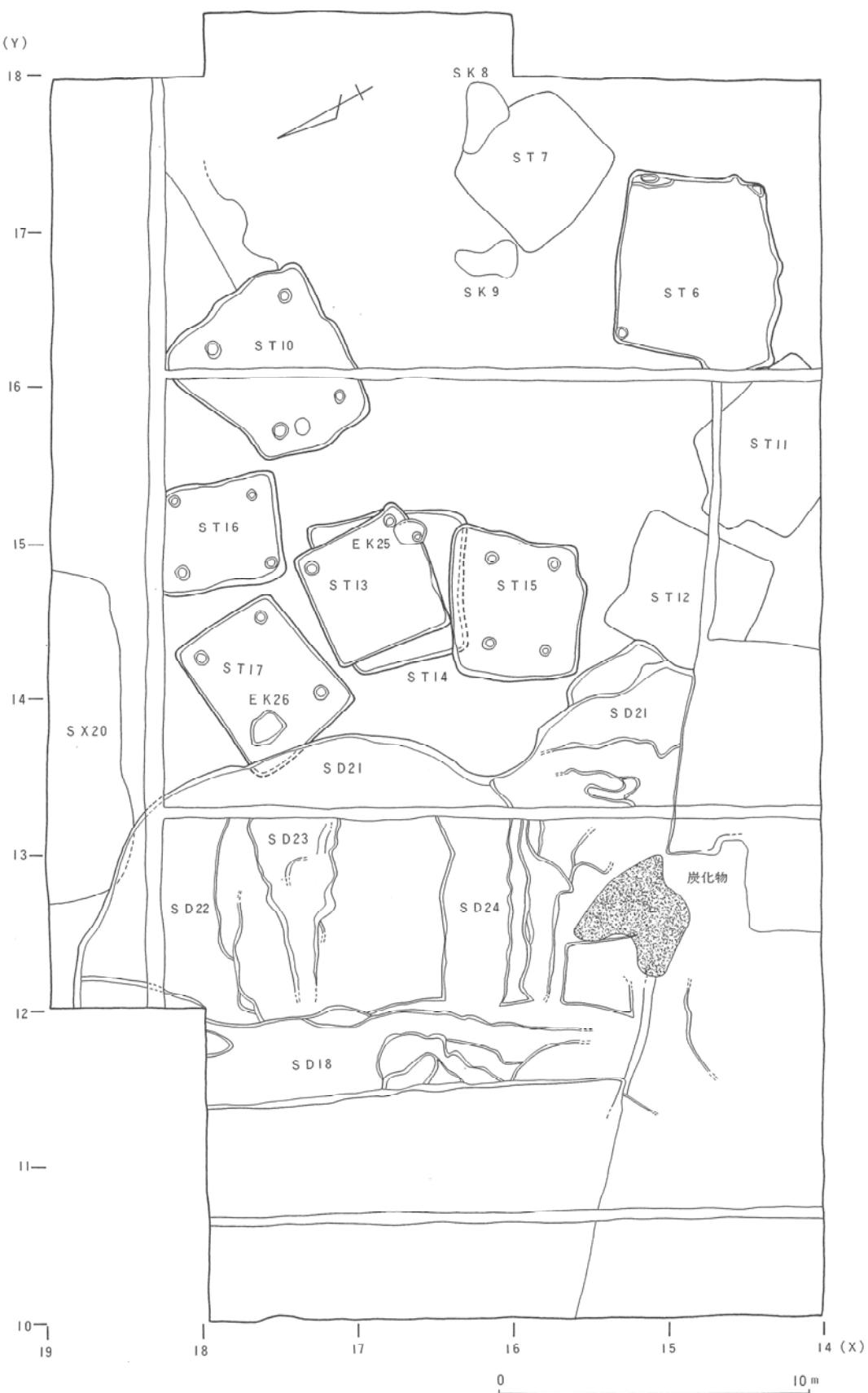


表2 検出遺構一覧

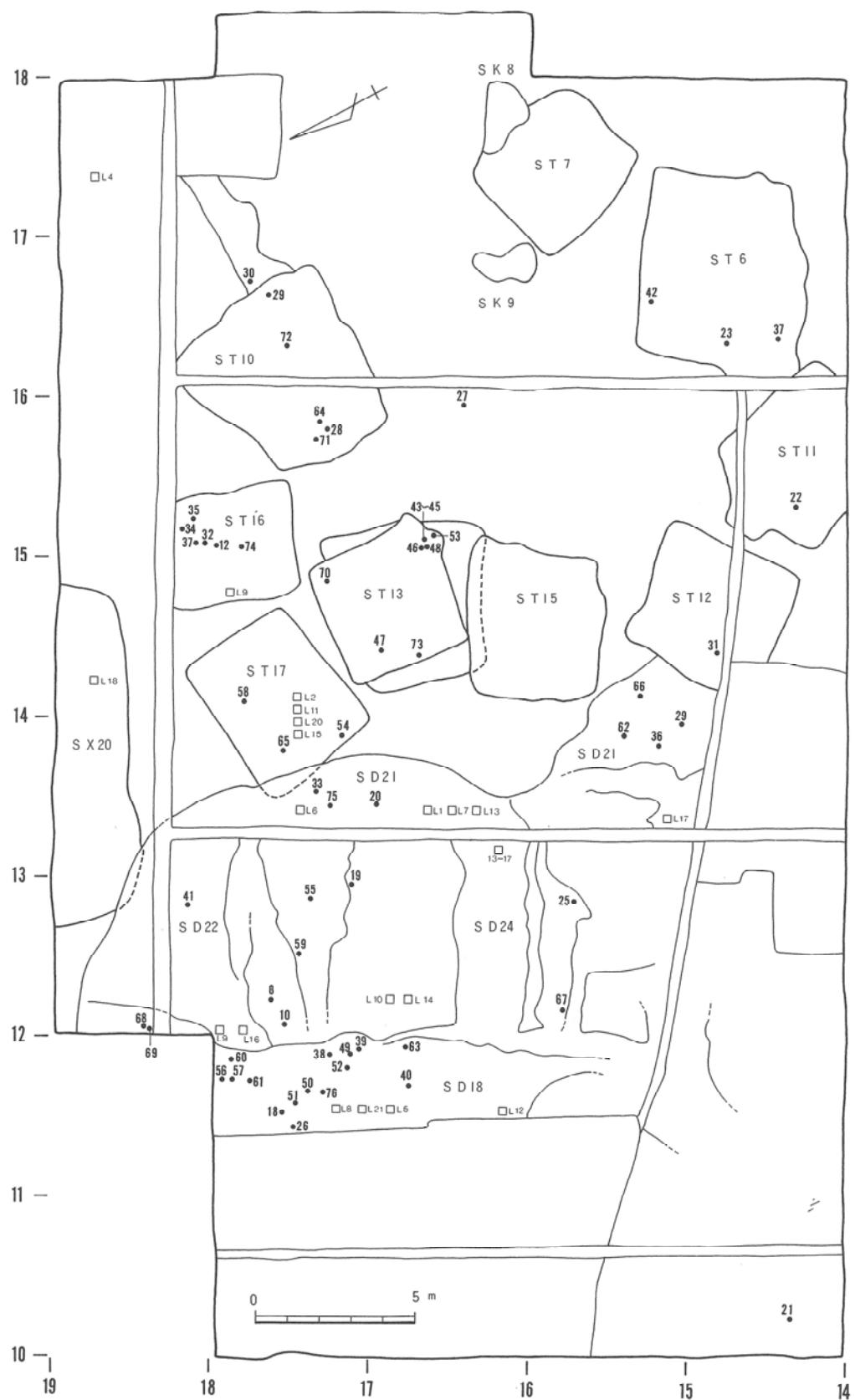
	遺構番号	検出位置(X-Y)G他	平面形	主軸方位	規模(NS×EW)m	備考(重複関係他)
住居跡	S T 6	(16, 17-15, 16) G	?	N 34° E	5.3×6.0	西側に張出し
	(S T 7)	(16, 17-16, 17) G	方 形	N 17° W	4.2×4.2	
	S T 10	(15, 16-17~19) G	台 形	N 3° W	(3.9, 5.5)×5.8	北東部に張出した垂んだ方形。柱穴4。
	(S T 11)	(15, 16-15) G	?	N 22° W	?	
	(S T 12)	(14, 15-15, 16) G	方 形	N 37.5° W	4.3×4.4	
	S T 13	(14, 15-17, 18) G	方 形	N 4° E	4.1×4.1	S T 14を切る。南東部に E K 25、柱穴4。
	S T 14	(14, 15-17, 18) G	台 形	N 20° E	(3.7, 5.1)×5.1	S T 13, 15に切られる。
	S T 15	(14, 15-15, 16) G	方 形	N 30° E	4.3×4.7	S T 14を切る。柱穴4。
跡	S T 16	(14, 15-18, 19) G	長 方 形	N 20° E	? ×3.4	南北にやや長い長方形。柱穴4。東西にやや長い長方形。柱穴3。
	S T 17	(13, 14-18, 19) G	長 方 形	N 9° W	3.8×4.9	北西部に E K 26。
土壙跡	(S K 2)	T . T . 5	円 形			トレンチ中央部分の柱穴様土壙
	(S K 3)	T . T . 4				トレンチの西壁際に位置し、遺物を多く含む土壙。
	(S K 5)	T . T . 19				トレンチ中央部分Ⅲ層面で検出
	(S K 8)	(17-17) G	?			
	(S K 9)	(16-16~17) G	瓢 簾 形			
	E K 25	S T 13内	楕 圓 形			遺物多数
溝跡	E K 26	S T 17内	五 角 形			遺物多数
	(S D 1)	T . T . 2				トレンチ南端部に係る東西の溝
跡	S D 18	(11, 12-16~18) G				遺物多数
	S D 21	(13-16~18) G				
	S D 22	(12, 13-18) G				
	S D 23	(12, 13-18) G				
	S D 24	(12, 13-16, 17) G				
ピット	S P 4	T . T . 4				S K 3 南東に接して位置する。
その他	S X 20	(14~16-19) G				

遺構間のかかわりやその時期決定にとって重要な位置を占める。

まず、土師器ではその量的な主体が、S D18の北半部に集中していることが分かり、次いで住居跡と考えられる竪穴の内部に幾つかの集中地点が認められる。S D18以外の溝跡では、S T12に接する辺りのS D21等部分を除けばかなり散漫であり、相対的な密度も希薄であった。住居跡ではS T10・16などの床面や住居に付随すると考えられた土壙(S T10・16、S T17のE K26)、あるいは竪穴を切る土壙(S T13のE K25)等でまとまった遺存状況が窺えた。そこでの器種構成は第81図に見る器種組成表、あるいは第82図の土器組成図等に示す通りで、S D18を除けば壺を主体とする偏ったものとなっている。また須恵器では、主にS D18・21、S T17の3地点に分布の中心があり、遺跡域での偏在的な在り方が把握されるが、固体数そのものは壺身・壺蓋で数セットその他若干に止まっている。



第57図 遺構配置図



〈凡例〉

● R P • Q 登録遺物 □古式須恵器

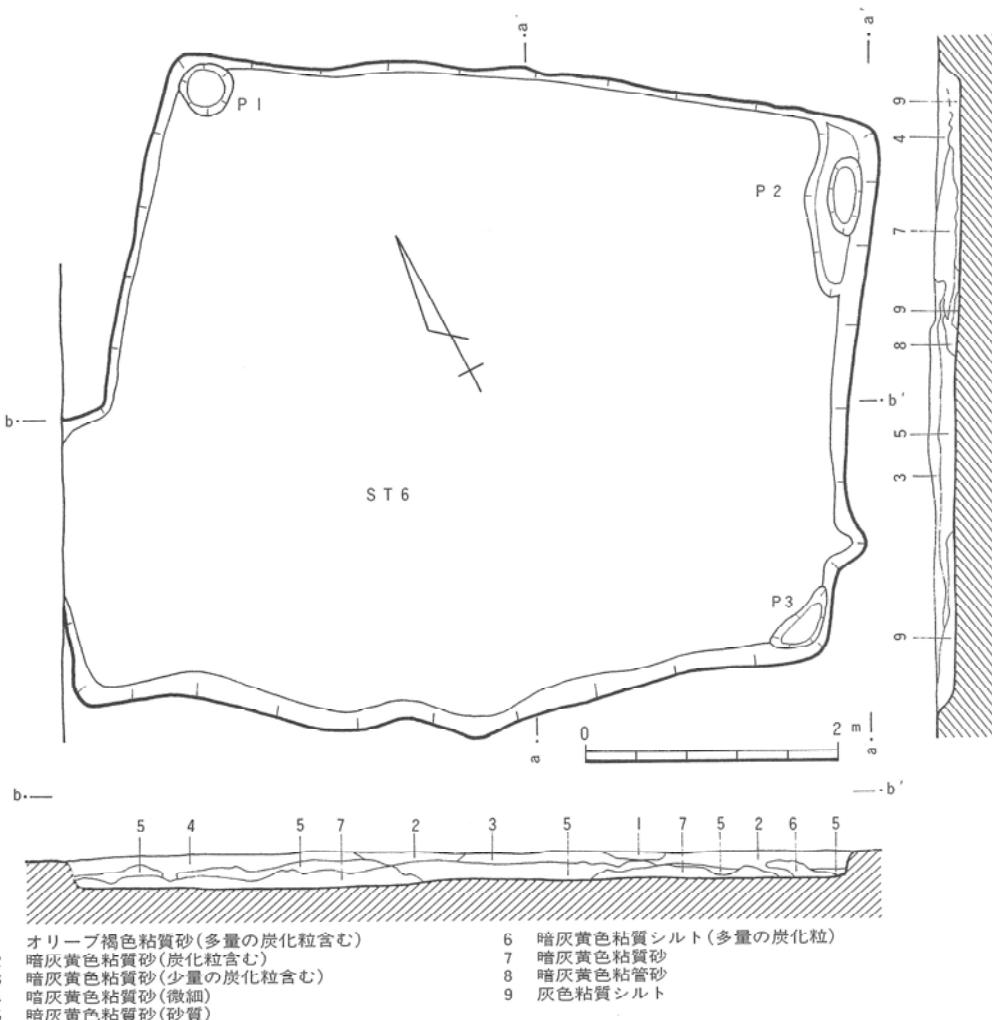
第58図 遺物分布図

5 遺構

S T 6 (第59図)

精査区南東16・17-15・16区III層上面で検出した。西側に張り出しをもった不整方形の平面プランをもつ竪穴である。西側張出し部分の一部が暗渠に切られ、S T11に接する。北辺5.6m、南辺6.0m、東辺4.2m、西辺5.2mの規模をもち、主軸方位はN-34°-Eをはかる。壁高は北辺で7~13cm、南辺では14cm、東辺では13~14cm、西辺では4~16cmといずれも浅いが立ち上がりは急である。床面はIII層を掘り込んで構築され、平坦であるが叩きしめられた痕跡はない。床面に炉跡やカマドなどの施設はない。

ピットは北、南、東の各角に3個検出された。深さはE P 1が18cm、E P 2が16cm、E P 3が4.5cmといずれも浅く、柱穴であるかどうかは疑問である。



第59図 S T 6 住居跡

堆積土は1～9層にわけられた。いずれも不安定に堆積しており、特に北側では4層と9層の境界が判然としない。これらのうち5～9層に多くの遺物を包含する。床面から出土した遺物はなく、廃棄あるいは流れこみによる所産とみられる。堆積土内出土遺物から推察して、古墳時代後期初頭(6世紀前半)の豊穴と考えられる。

S T10 (第60図)

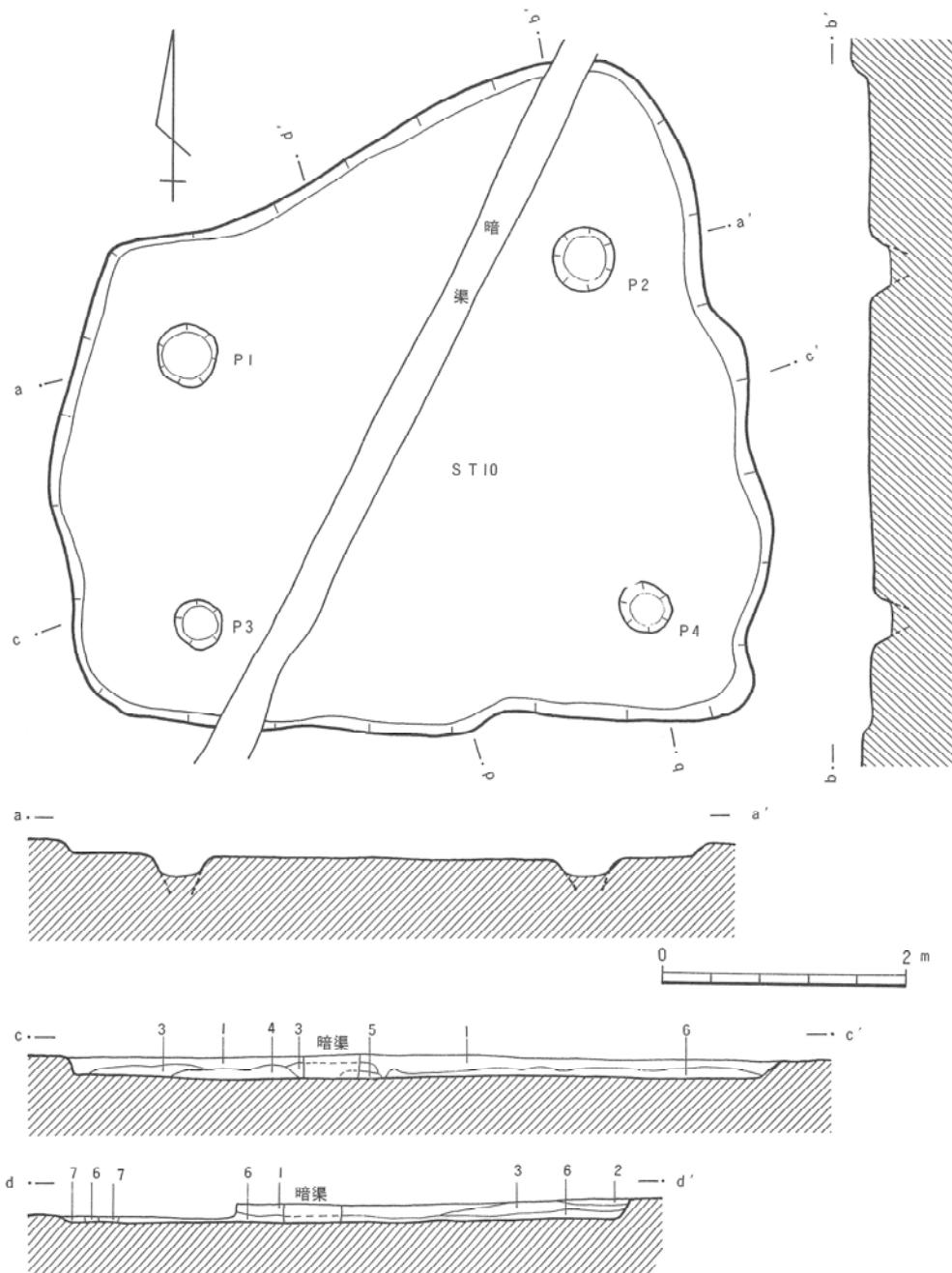
精査区北東15、16-17～19区内において検出された。北東辺が張り出し台形状の平面プランをもつた豊穴である。中央部を南北方向に暗渠に切られ、北東辺が溝状遺構を切っている。北辺4.4m、南辺5.8m、東辺5.5m、西辺3.9mの規模をもち、主軸方位はN-3°-Wと若干西にふれている。壁高は北辺18cm前後、南辺で15cm、東辺で13～15cm、西辺で16～19cmであり、北辺が低くなっているが、これはII層による攪乱を一部に受けているためである。壁の立ち上がりは東辺で若干緩くなる他は急である。III層を掘り込んで床面としており、ほぼ平坦であるが、北に向かって若干傾斜する。床面に炉跡やカマドなどの施設はみられず、叩きしめられた痕跡も弱い。ピットは4個検出された。いずれも平面形は円形となり、直径は最大のものでP₂の54cm、最小のものでP₃の38cmである。ピット間の距離も一定せず最大で3.6m(P₃-P₄)、最小で2.2m(P₁-P₃)をはかる。各ピットの深さはP₁で16.5cm、P₂で15.5cm、P₃で16cm、P₄で18cmである。いずれも床面で確認されており本遺構に伴うものと考えられる。

堆積土は7層にわけられる。1層及び6層が比較的安定して堆積しており、遺物は6層からややまとまって出土している。堆積土内の出土遺物から推察して、古墳時代後期(6世紀初頭)の豊穴と考えられる。

S T13 (第61図)

精査区中央14・15-17・18区内III層上面で検出された。ほぼ整った方形の平面プランをもつ豊穴である。S T14と重複しており、本豊穴がS T14を切っている。各辺4.1mの規模をもち、主軸方位はN-4°-Eと若干東に傾く。壁高は北辺で14cm、南辺で9cm、東辺で17～18.5cm、西辺で11～13cmをはかり、立ち上がりは急である。III層を掘り込んで床面としており、平坦であるが西から東に向かって若干傾斜する。叩きしめは判然としない。床面からカマド、炉跡などの施設は検出されなかったが、床面南東壁に張り出してE K25が検出されている。ピットは東壁に沿って3個検出された。P₁は直径40cmのほぼ円形のプランをもち確認面からの深さは19cmである。ピット底面よりR P70(第66図17)が出土している。P₂は径38cmの円形プランをもち、確認面からの深さは16cmである。

堆積土は1～4層に分けられる。S T14との切り合い関係は土層断面観察でも確認できたが、西側は特にグライ化が著しく切り合いの確認ができなかった。遺物は各層から出土しているが、一括土器として出土したR P47(土師器坏)、R P73(第66図23)は床面付近で



- 1 灰オリーブ色粘質砂
 2 灰オリーブ色粘質砂(炭化粘含む)
 3 灰オリーブ色砂(粗粒)
 4 灰オリーブ色砂(粗粒、やや明色)

- 5 灰オリーブ色粘質砂
 6 灰色粘質砂(炭化粒含む)
 7 黄褐色砂(粗粒)

第60図 S T 10住居跡

検出されている。出土遺物から推察して古墳時代後期初頭(6世紀初頭)の堅穴と考えられる。

E K 25 (第61図)

S T13床面で検出され、南東壁に張り出した楕円形を呈する土壙である。長径100cm、短径80cm、確認面からの深さ10cmをはかる。底面はほぼ平坦である。

覆土は10Y R4/2灰黄褐色粘土質シルトの单一層で、粗砂、炭化粒を多量に含む。また覆土内には礫1点とともに多量の遺物が含まれておらず、復元し得たものでも土師器壺5点、甌1点がある。これらのうちR P43~45は上からこの順に3枚重ねで検出された。S T13に付属する施設と考えられるが、性格は不明である。

S T14 (第61図)

14・15-17・18区、III層上面で検出された。西辺が短い台形状の平面プランをもつ堅穴である。中央部~北側をS T13が切り、南辺でS T15と重複するが、堆積土のグライ化が進んでおり、両者の新旧関係は明確にし得ない。規模は西辺で3.7m、他の辺で5.1mをはかる。壁高は東辺で11cm、西辺で10cm前後であり、立ち上がりは比較的緩やかである。III層を掘り込んで床面としているが、S T13より浅い。堆積土はS T15の5層、6層が確認された。床面から炉跡、カマド等の施設、ピットは検出されなかった。

S T15 (第61図)

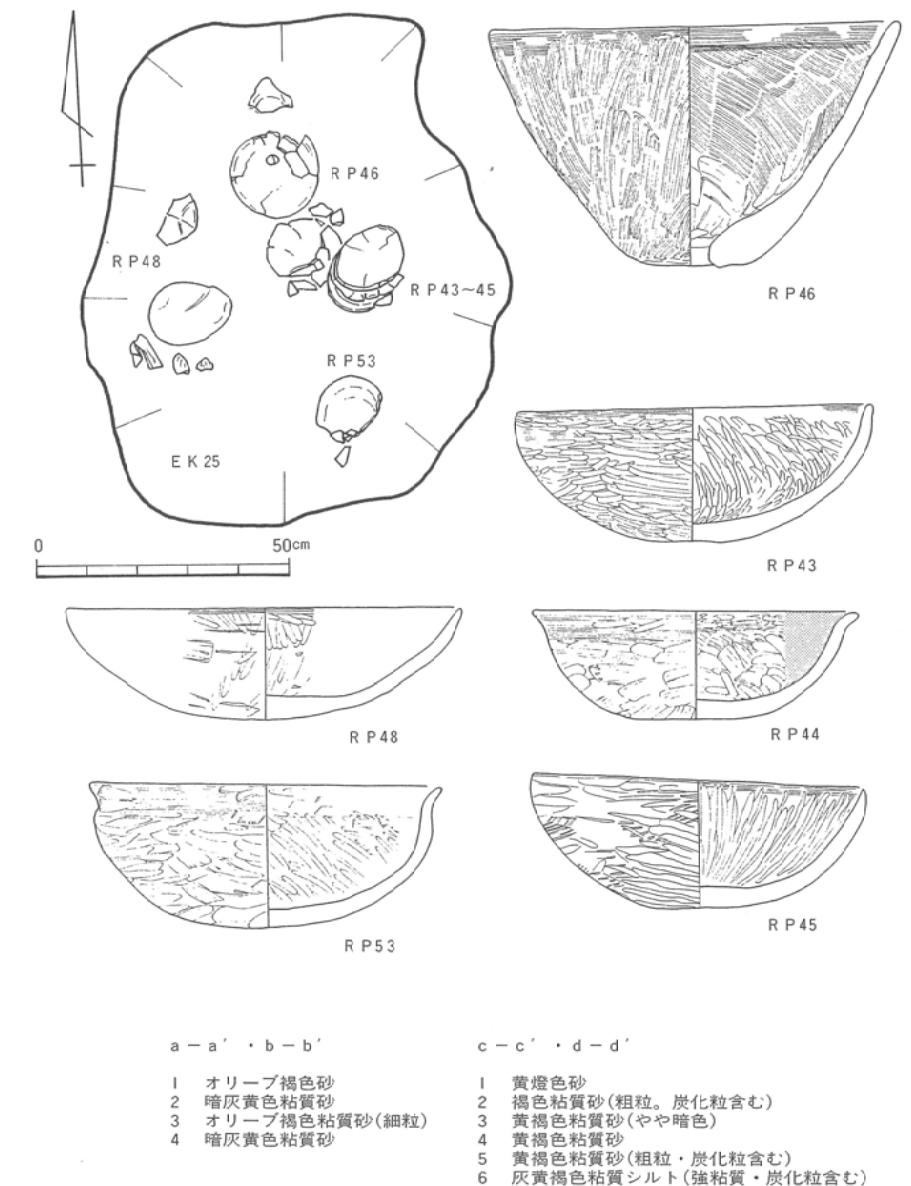
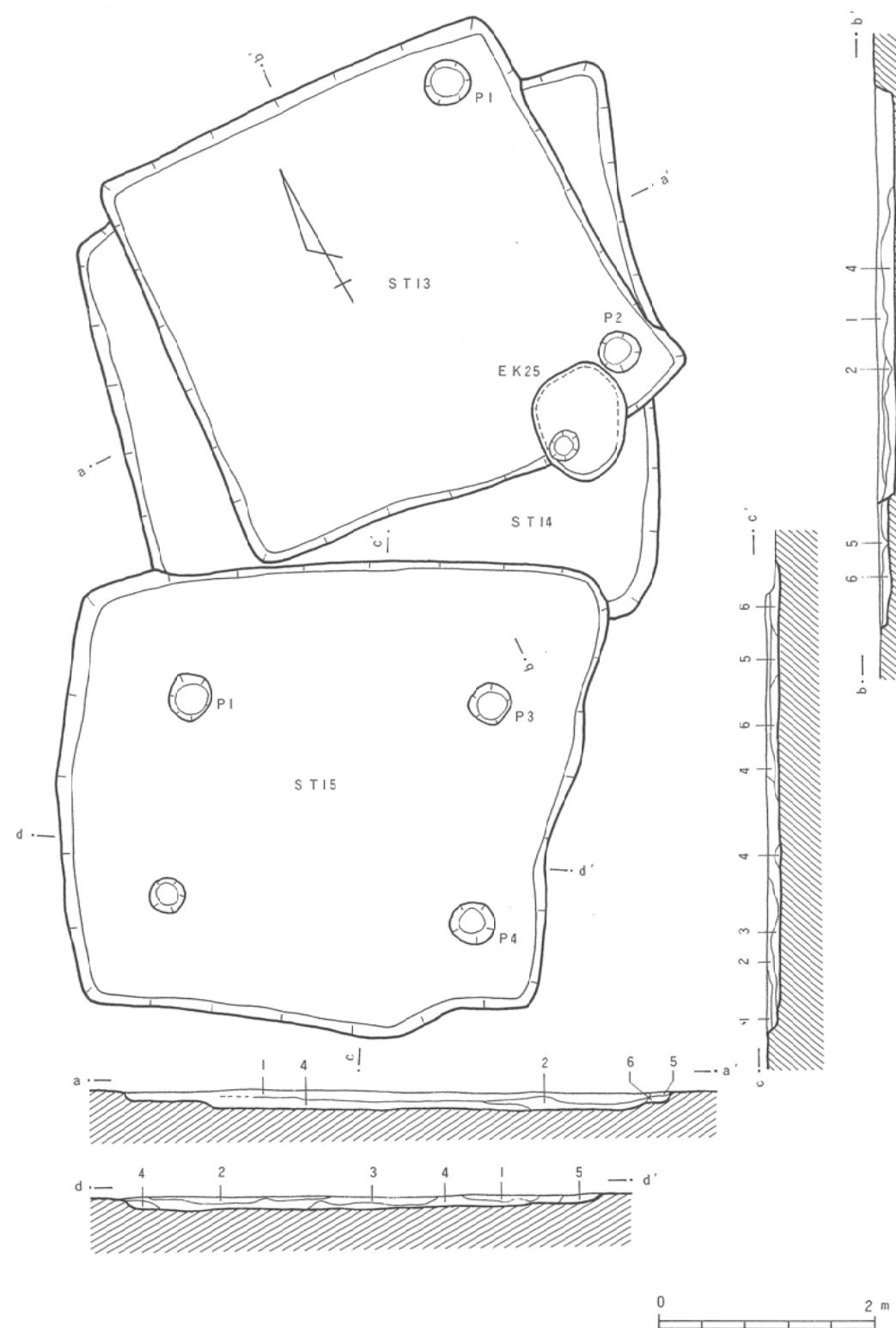
14・15-15・16区内III層上面で検出された、不整方形の平面プランをもつ堅穴である。北辺でS T14と切り合うが新旧関係は不明である。北辺推定4.7m、南辺4.2m、東辺4m、西辺3.8mの規模をもち、主軸方位はN-30°-Eをはかる。壁高は南辺で12~15cm、東辺で10~14cm、西辺で11~12cmと浅く、立ち上がりも緩やかである。主軸方位はN-30°-Eと東にかなり傾いている。

III層を掘り込んで床面としているが、叩きしめられた痕跡はない。床面は平坦であり、傾斜もほとんどみられない。床面から炉跡やカマドなどの施設は検出されなかった。

ピットは各隅若干中央寄りに4個検出された。いずれもほぼ円形のプランをもち、最大のP₁で40cm、最小のP₃で32cmの径をもつ。床面からの深さはP₁、P₂が深く32~35.5cmをはかり、P₃、P₄は各々18cm、16.5cmと浅いが他の堅穴に比較してしっかりした掘り方が確認された。堆積土は1~6層に分けられる。重複するS T14に比較してグライ化の度合は弱いが、各層とも堆積状況は不安定である。本堅穴からは遺物の出土は少なかつたが、6世紀前半(古墳時代後期)の堅穴と推察される。

S T16 (第62図)

精査区中央北側14・15-18・19区内III層上面から検出された。不整方形の平面プランをもった堅穴である。北辺が暗渠に切られ、正確な規模は不明であるが、確認し得る範囲で



a - a' · b - b'
1 オリーブ褐色砂
2 暗灰黄色粘質砂
3 オリーブ褐色粘質砂(細粒)
4 暗灰黄色粘質砂

c - c' · d - d'
1 黄燈色砂
2 褐色粘質砂(粗粒。炭化粒含む)
3 黄褐色粘質砂(やや暗色)
4 黄褐色粘質砂
5 黄褐色粘質砂(粗粒・炭化粒含む)
6 灰黄褐色粘質シルト(強粘質・炭化粒含む)

第61図 ST 13・14・15住居跡・EK 25土壤

は、南辺3.4m、東辺、西辺が各々3mをはかる。主軸方位はN-20°Eと東にふれてい
る。

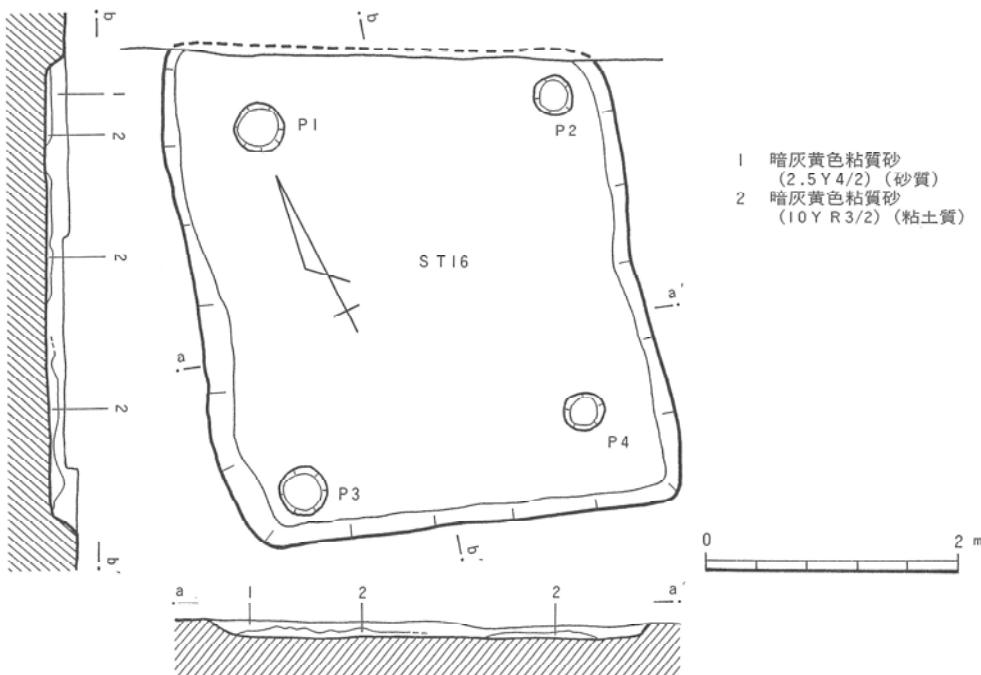
壁高は南辺で19~21cm、東辺で17cm、西辺で13~21cmで、立ち上がりは東辺が急であり
他は全般に緩やかである。III層を掘り込んで床面としており、叩きしめられた痕跡はみら
れず、ほぼ平坦である。また、床面から炉跡やカマドなどの施設は検出されなかった。

床面四隅からピットが4個検出された。直径は最大のP₁で38cm、最小のP₄で28cmをはか
り、いずれも平面形は略円形を呈する。床面からの深さはほぼ等しく16cm前後である。ピ
ット間の距離はP₁-P₂、P₃-P₄が2.4m、P₂-P₄が2.6m、P₁-P₃が2.9mである。堆
積土は2層に分けられた。1層が安定した堆積を示すが、中央部ではグライ化がはげしく
1層と2層の境界は不明瞭となる。

堆積土及び床面からは多量の遺物が出土した。一括土器はR P12、32、35、37の4点の
土師器壺(第65図6・11・15、第67図33)及びR P34の土師器高壺(第68図54)が出土してお
り他に須恵器破片1点が出土した。これらの遺物から6世紀前半(古墳時代後期)の竪穴と
考えられる。

S T17 (第63図)

精査区中央北側13、14-18、19区内III層上面で検出した隅丸長方形の平面プランをもつ



第62図 S T16住居跡

竪穴である。精査区内の竪穴群ではもっとも西に位置する。北西隅を S D21に切られてい るため、正確な規模は不明であるが、北辺推定4.9m、南辺4.4m、東辺3.6m、西辺推定3.8 mと今回検出した竪穴としては平均的な大きさである。

壁高は北辺で9～10cm、南辺で14～15cm、東辺で12～16cm、西辺で11cm前後であり、立ち上がりは急で比較的しっかりしている。III層を掘り込んで床面としているが、叩きしめや貼り床の痕跡は認められない。また床面は平坦であるが、北西端から北東端に向かって約6cm傾斜している。なお床面から炉跡やカマド等の施設は検出されなかったが、床面北西から本竪穴に附属するとみられるE K25(第61図)が検出された。

ピットは北東、南西、南東の各隅から3個検出された。いずれも略円形の平面形で、直径はP₁、P₂が40cm、P₃が36cmとやや小形である。深さはP₁で18cm、P₂で15cm、P₃で20cmである。アタリは確認できず、本竪穴の主柱穴となるかどうかは不明である。

堆積土は1～3層に分けられる。2層が比較的安定した堆積を示すが、中央部でのグラ イ化がはげしく2層、3層の境界が不明瞭である。なお東半は、テストトレーナー(TT19)により床面直上まで掘り下げられ、1層、2層の堆積状況は不明であり、壁の立ち上がりも一部不明瞭となっている。

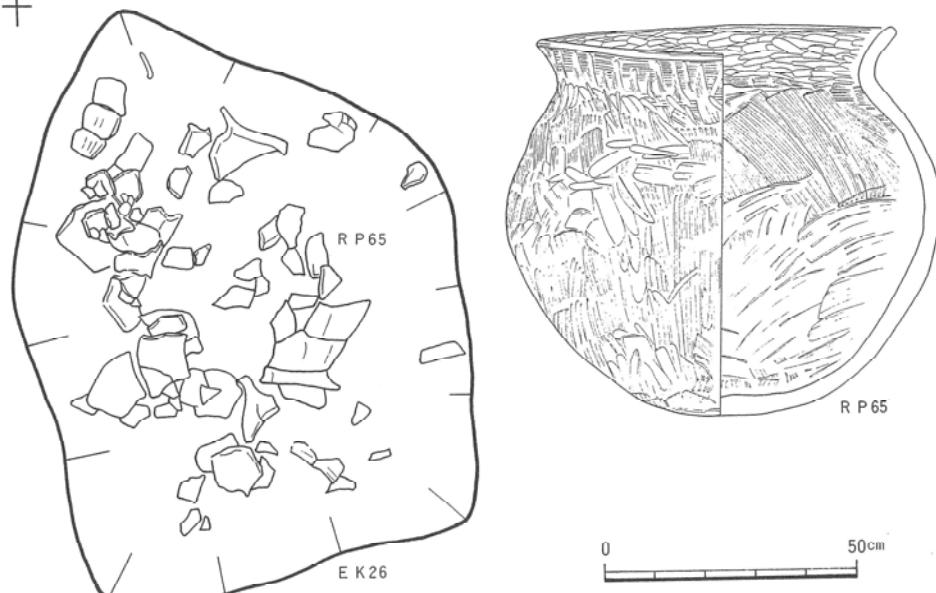
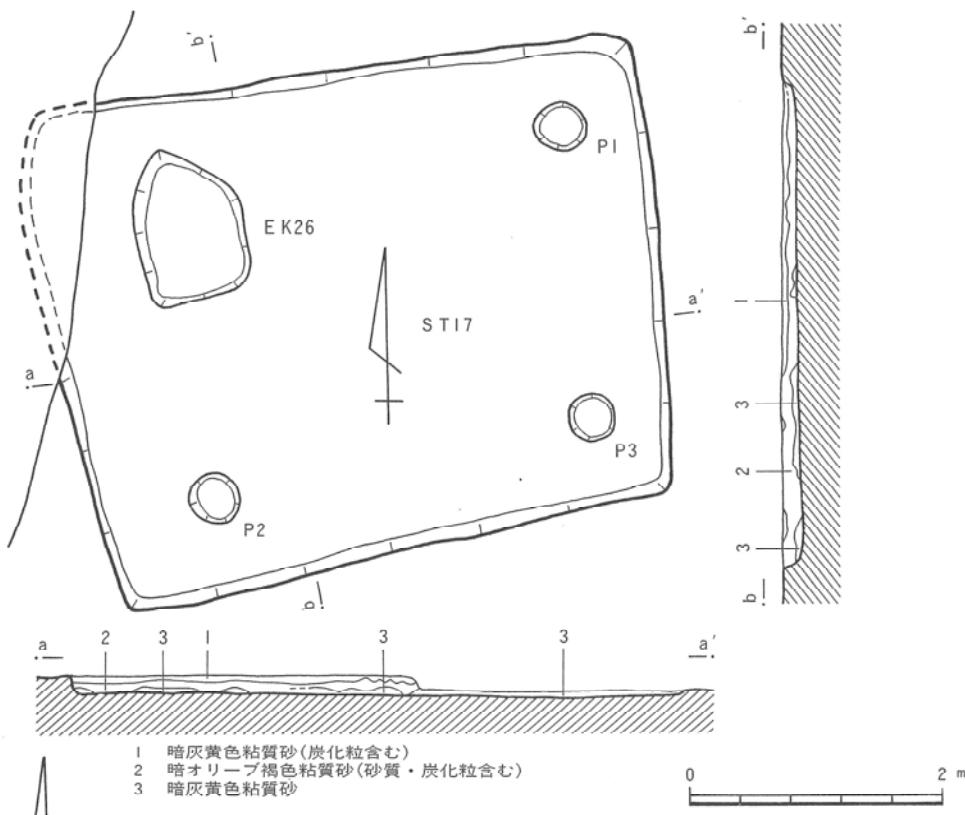
遺物は堆積土及び床面から出土しているが、R P58(第65図2)は床面から検出された土 師器壺である。また堆積土から須恵器破片が4点(第73図93・95・99・102)出土している。これらの中から推測して本竪穴は6世紀前半(古墳時代後期)に位置づけられると考えられる。

E K26 (第63図)

S T17床面北西から検出された南北116cm、東西90cmの規模をもつ土壙である。平面プランは不整五角形を呈する。底面はほぼ平坦であるが北から南に向かって2.5cmの比高をもつて傾斜している。確認面からの深さは北側で9cm、南側で11.5cmである。

堆積土は10Y R5/4にぶい黄褐色細砂の単一層で、しまりなく軟かいが炭化粒を多量に含む。また堆積土及び床面から多量の遺物が出土した。R P65として一括して取り上げたが、第72図79をはじめ土師器壺等3個体以上が含まれる。

S T13 E K25と比較した場合、遺物の出土状態は本土壙の方がまとまりを欠き、一括廃棄的色彩が濃い。またS T17堆積土及び床面からの出土遺物との接合関係もなく、あるいはS T17に先行する施設とも考えられるが、両者出土遺物間に明確な時間差が認められないことから、性格不明ではあるがS T17の附属施設として把えたい。



第63図 ST17住居跡・EK26土壤

S D18 (第64図)

精査区西側11、12-16~18区内、III層上面で検出した。ほぼ南北方向に流れる溝跡である。西側をII層攪乱層に切られ、北側は精査区外へと伸びるが、11-15以南はグライ化が著しくプランが不明瞭である。確認可能な長さ17.5m、最大幅2.8mをはかる。

確認面からの深さは北側で3~12cm、中央で13cm前後、南側で7~18cmと比較的浅く、底面も平坦部分が多いが、中央西側は3段階に深さが変わっており、東辺も2段となっている。砂層が底面となっているために流路が不安定であったと考えられる。またS D22、S D24が本溝跡と切り合うが、遺構確認面での観察では本溝跡が他を切っていた。

堆積土は1~8層に分けられた。一般にレンズ状に堆積するが、不安定であり、地点の違う土層断面間での消長が著しい。これは土層全体のグライ化の度合とも係わりがあろう。

本溝跡からの遺物出土は非常に多く一括土器として取り上げたものだけでも16個体分を数える。いずれも古墳時代中期と考えられる土師器であり、その他、古式須恵器破片4点(第73図89・95他)、子持勾玉R Q76(第75図133)が出土している。遺物は中央~北側に偏つており、また堆積土上面に多く遺存し、底面付近からの出土量は少ないという傾向が観察された。

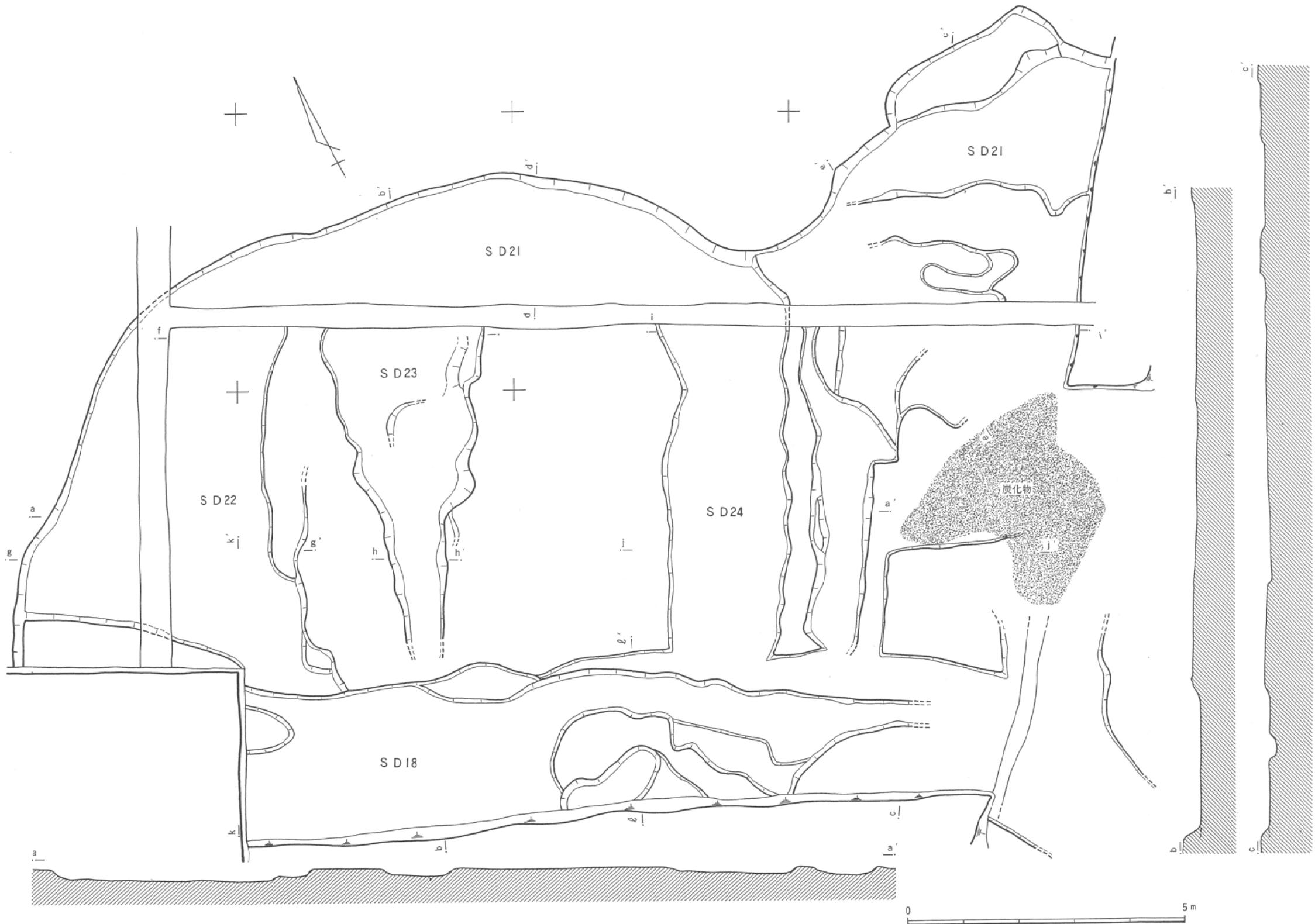
S D21~24 (第64図)

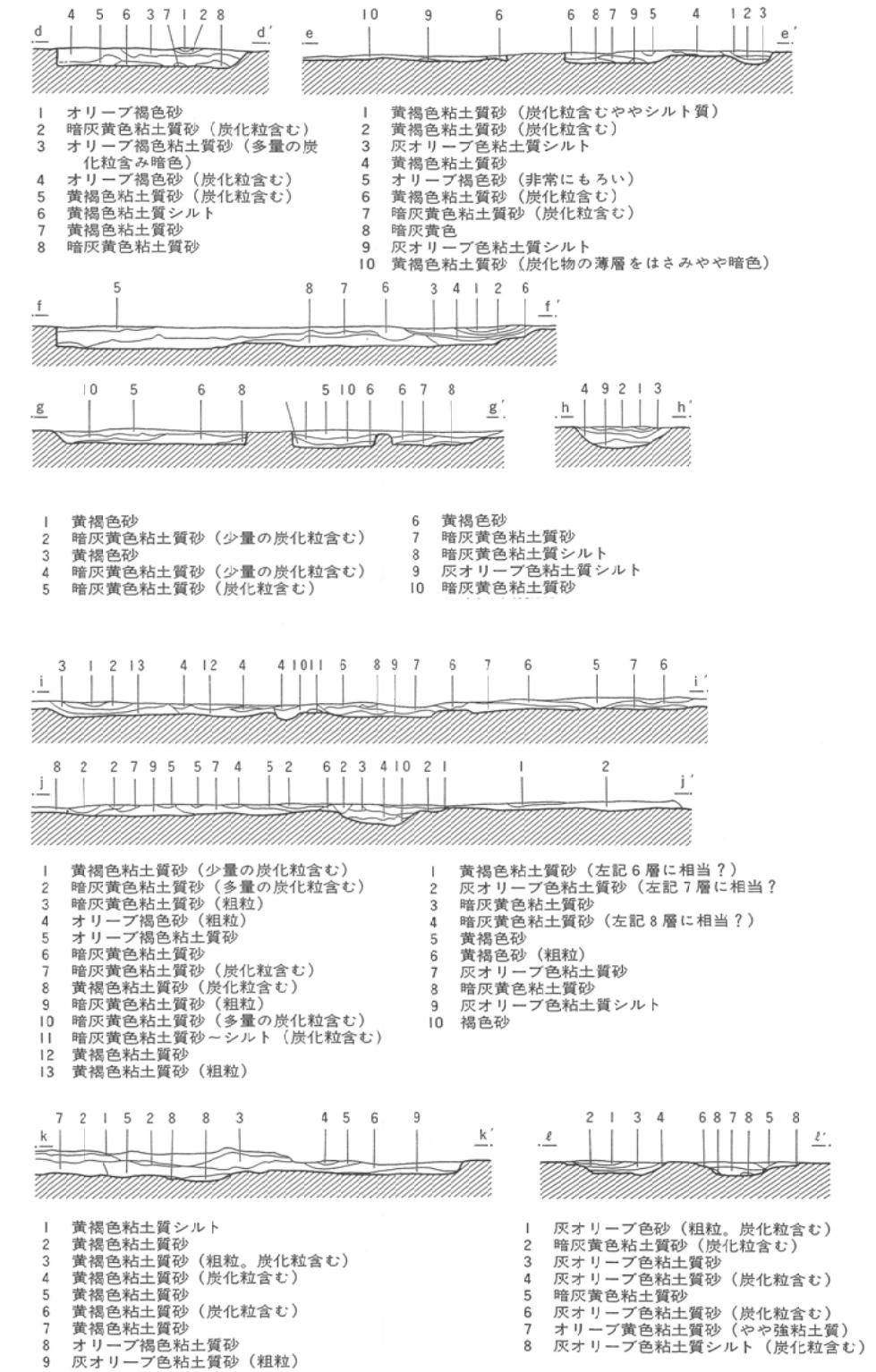
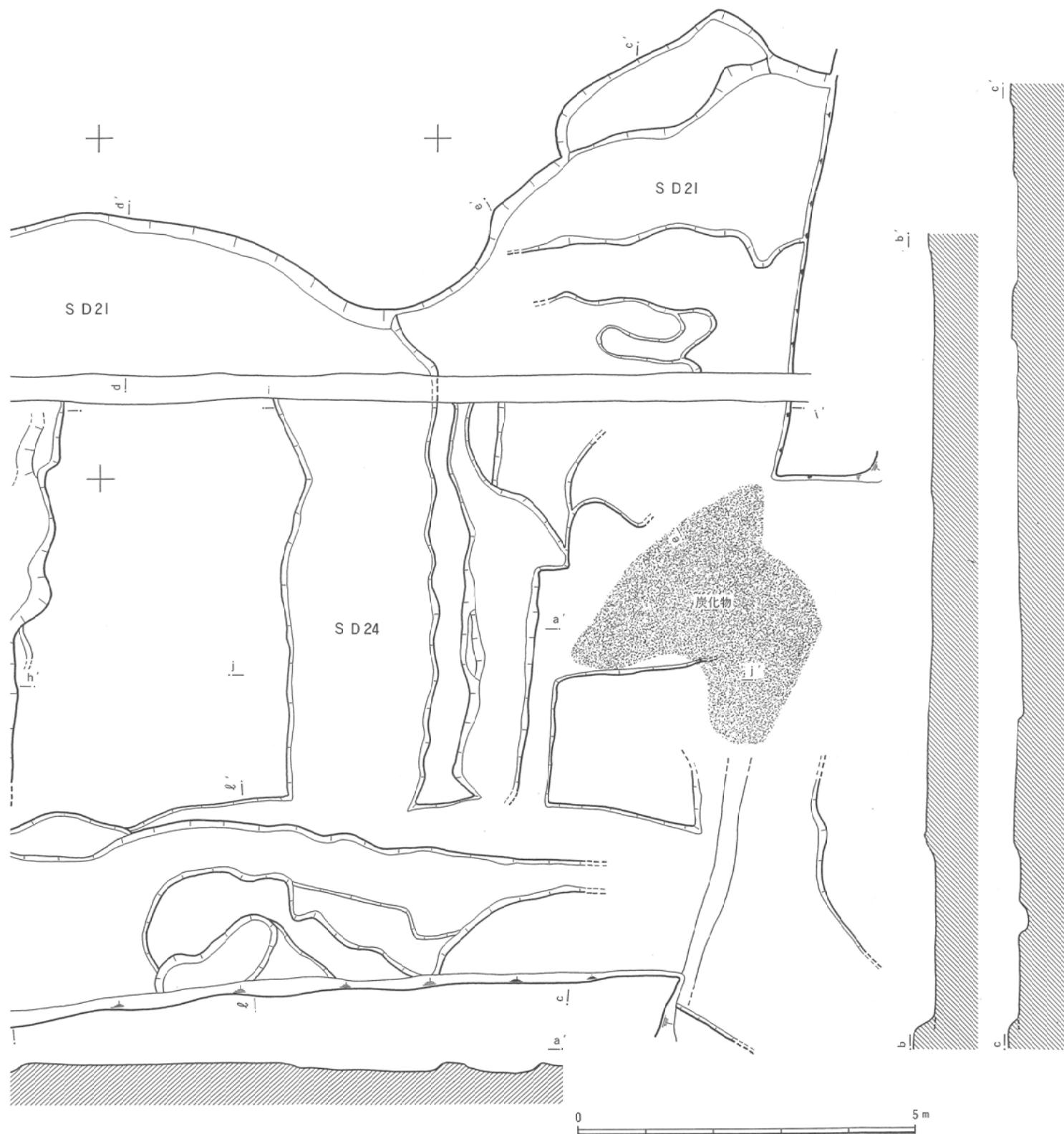
12~13-16~18区内で検出された溝跡群である。南北走するS D21とそこから支流のように枝分かれして東西走するS D22~24により構成される。中央部を暗渠に切られているため、溝跡相互の関係が不明確である。

S D21は南端部分をII層による攪乱を受けているものの、Y-13区内において16.4mの長さで検出された。南側で流路が複雑になっているが、中央~北側ではS T17を切る他は比較的安定している。確認面からの深さは北側で19cm、南側では7~8cmと浅い。本溝跡も出土遺物が多く土師器一括個体6点、古式須恵器5点(第73図)の他第74図中のR P33として取り上げた土錘15点等がある。

S D22はS D21が東西方向に流れを変えたものとみられるが暗渠に切られるため判然とせず、ここでは別の溝跡として扱った。S D18と切り合うが先述のようにS D18が新しい。S D23は確認面からの深さ9~14cmをはかる断面逆カマボコ状を呈する溝跡である。西側S D18と合流する付近でプランが不明瞭となっている。S D24は幅2.0~2.3mをはかる東西走する溝跡であり確認面からの深さ6~8cmで比較的平坦な底面をもつ溝跡である。

その他12~13-15区内III層上面で、南北3.6m、東西4mにわたる炭化物の広がりを検出した。掘り込みの確認や遺物の出土もなく性格は不明である。





第64図 SD 18・21~24溝跡

6 遺 物

(1) 土師器

本遺跡からは壺・高壺・鉢・甕・壺・甑等の土師器各器種が出土している。以下では器種毎にA～I等に大別し、形態他手法から1～3、a～bと細別してその概要を記す。

壺(A) 非内黒形態のものを一括する。

1類：塊状の器形で底部丸底形態、浅身で大きな口径等に特徴が見られる。内弯して立ち上がる口縁は端部を短くつまんで丸く收めるだけの素縁となる。手法的には外面でのケズリからミガキ、内面でのナデからヘラミガキによる仕上げ等を認めた(第65図1、9)。

2類：塊状の器形を呈し、比較的小口径で身の深い形態を持つ。法量的には他のものより小振りとなる。口縁部形態ではI類同様短くつまみ上げて直上気味とする様子が見て取れる。手法的には外面の下地にハケメ整形を残すもの等が見られるものの、概して丁寧なヘラミガキによる仕上げ調整が大方に顕著である(第65図3～7)。

3類：大振りな作りの半球形状を呈す一群である。口径、器高ともに大きく、丸底でやや深身の形態を持つ。口縁部はI類と同等である。手法的には外面にハケメ調整が目に付く幾つかと、粗いヘラミガキの施されるものとがある。内面ではヘラナデやヘラミガキが行わされて平滑な仕上げとなる(第65図11～14)。

4類：丸底から強く内弯して立ち上がる体部を持ち、口縁部の内弯度合も強いものである。従って、断面形は中膨らみの「U」字状を呈す。手法的には内外面共にヘラミガキが丁寧で、胎土も精選された粘土を使用している(第65図10)。

5類：法量的に最小となるもので、丸底ないし小径の平底形態をとる。体部は塊状の膨らみを持ち、口縁部が丸く收められるだけのものとややつままれて直上気味に立つものとがある(第65図8、15)。調整では手法的にIII類と近似するヘラミガキの顕著なもの(第65図15)と粗いヘラナデの施されるものの別があり、両者の差異はかなり大きいと見られる。

6類：弱い内弯形態の口縁部を持つもので、形態的に不整な観を抱かせる。器形的にはIII類に近いと判断できるが、手法的特徴となる粗で単位幅の大きな内外面のヘラミガキは他と区別すべき独特なものと捉られる(第65図9)。

7類：平底風丸底で、体部が内弯して立ち、口縁部が外方に開く形態のものを一括する。口縁部の開きはその長さ他から一様でないが、概して短めで「く」の字状に外傾するものが多い。外面の調整はヘラナデ風のミガキが大半で、口縁部は大方ヨコナデされる。内面の調整では口縁部で横方向のヘラナデないしヘラミガキ、体部で放射状となるヘラミガキやヘラナデが認められる(第66図16～20)。

8類：丸底で肩部に張りを持ち、頸部で一旦縊れて短く口縁が外反する形態を呈す。外面

の調整は口縁部分でヨコナデされる他は底面域までヘラミガキが施される。内面は口縁から底面に亘ってナデやヘラミガキが行われる(第66図30)。

9類：底径の大きな平底形態で肩部に幾分かの張りを持つ。口縁は短くつままれて直上気味に立ち、その端部は厚目に丸く収められる。外面の調整では口縁端が弱くナデられる他、ナデ風の粗いミガキが加えられるだけである。内面ではナデの後、横及び斜方向のヘラミガキが施されるが、その手法は簡略的で粗雑と言える(第66図24)。

10類：器形的には先の9類に近似するが、平底から立ち上がる体部がほぼ直線的に外傾して開く形態を有す。口縁部は内弯様に器壁を減じて短く開き、その内外面共にヨコナデされる。外面の調整はやや粗いヘラミガキが口縁部調整の後に施され、内面もミガキ仕上げが丁寧に行われて平滑とされる(第66図25)。

11類：小径の平底から体部が丸みを持って立ち上がり、さらに口縁が短くつままれて僅かに開く形態を持つ。内外面はアタリ単位の不明瞭なヘラナデ風ミガキが主に横方向で加えられ、平滑かつ緻密に仕上げられる(第66図26)。

12類：明瞭な平底から大振りに内弯して立ち上がる体部、弱くつままれて直上気味となる口縁部等の形態を持つ。調整は内外面共下地整形にハケメ、その後ヘラナデ風のミガキが加えられて平滑に仕上げられる。口縁部は短い幅でヨコナデされるが、その調整は体部より先であり部分的にナデ消される所がある(第66図27)。

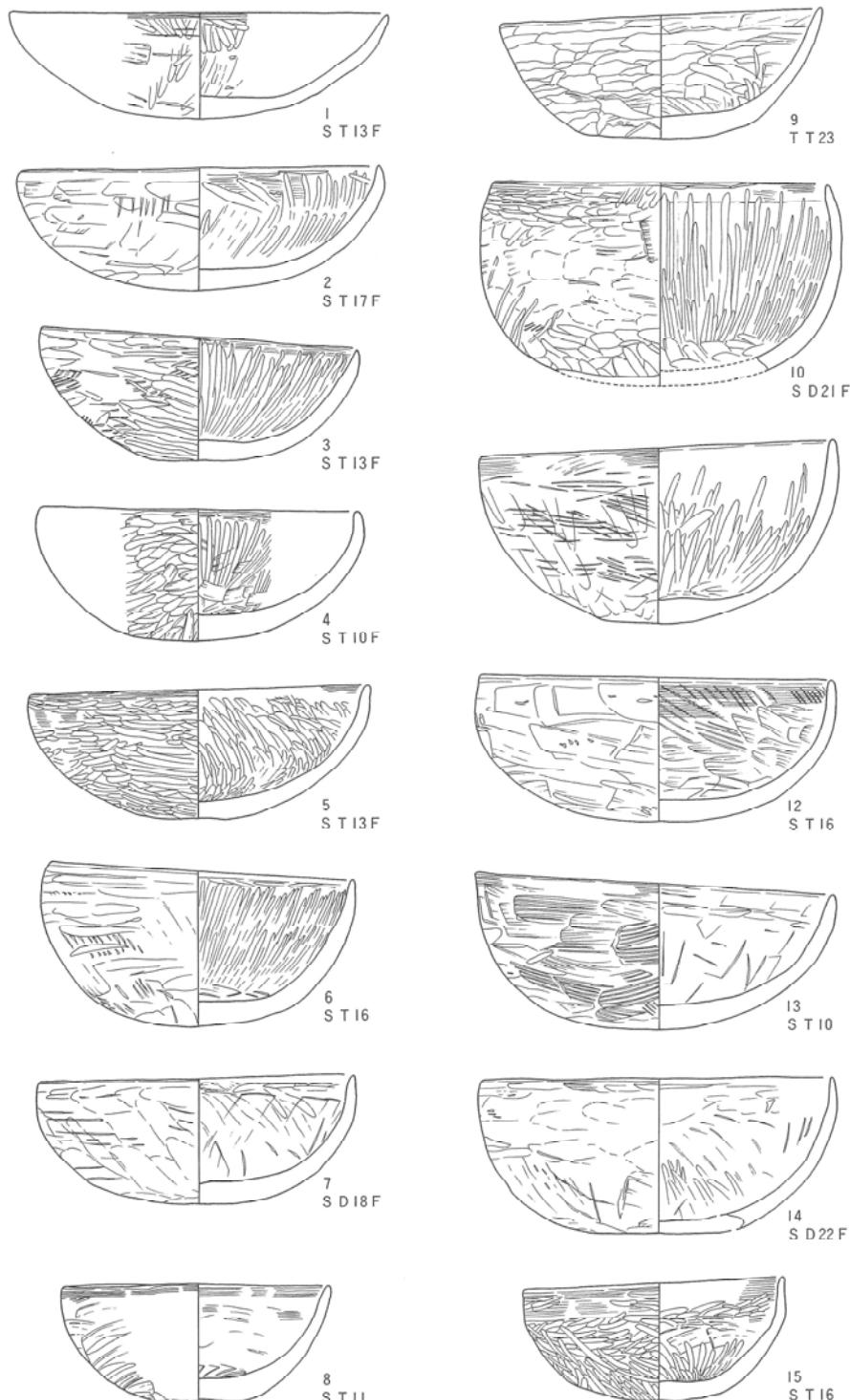
13類：丸底で身の深い半球形を呈し、強めに引き出される口縁部が弱く外反して開く形態を持つ。内外面共に単位の大きなヘラミガキにより仕上げられるが、その方向は口縁部が横、体部が縦方向となる(第66図28)。

14類：鉢状の形態とも見做せるが、調整の点では坏と同等であり鉢のそれとは大きく異なっている。器形は大きめの平底から急傾で内弯する体部と短くつまみ出されて直上気味に外反する口縁部とからなる。調整は内外面共にナデ整形が主体で、口縁部は強めに押えられてヨコナデ整形がなされる(第66図29)。

15類：丸底で小振りな半球形の体部、一旦縊れて段を成す頸部と短く外傾して開く口縁部等の形態からなる。なお、口縁部は中膨らみとなって丸みを持つ。調整は外面で横方向のヘラミガキ、内面で放射状となるヘラミガキが各認められ、口縁では強くヨコナデされた後一部ヘラミガキの加えられる所がある(第66図22)。

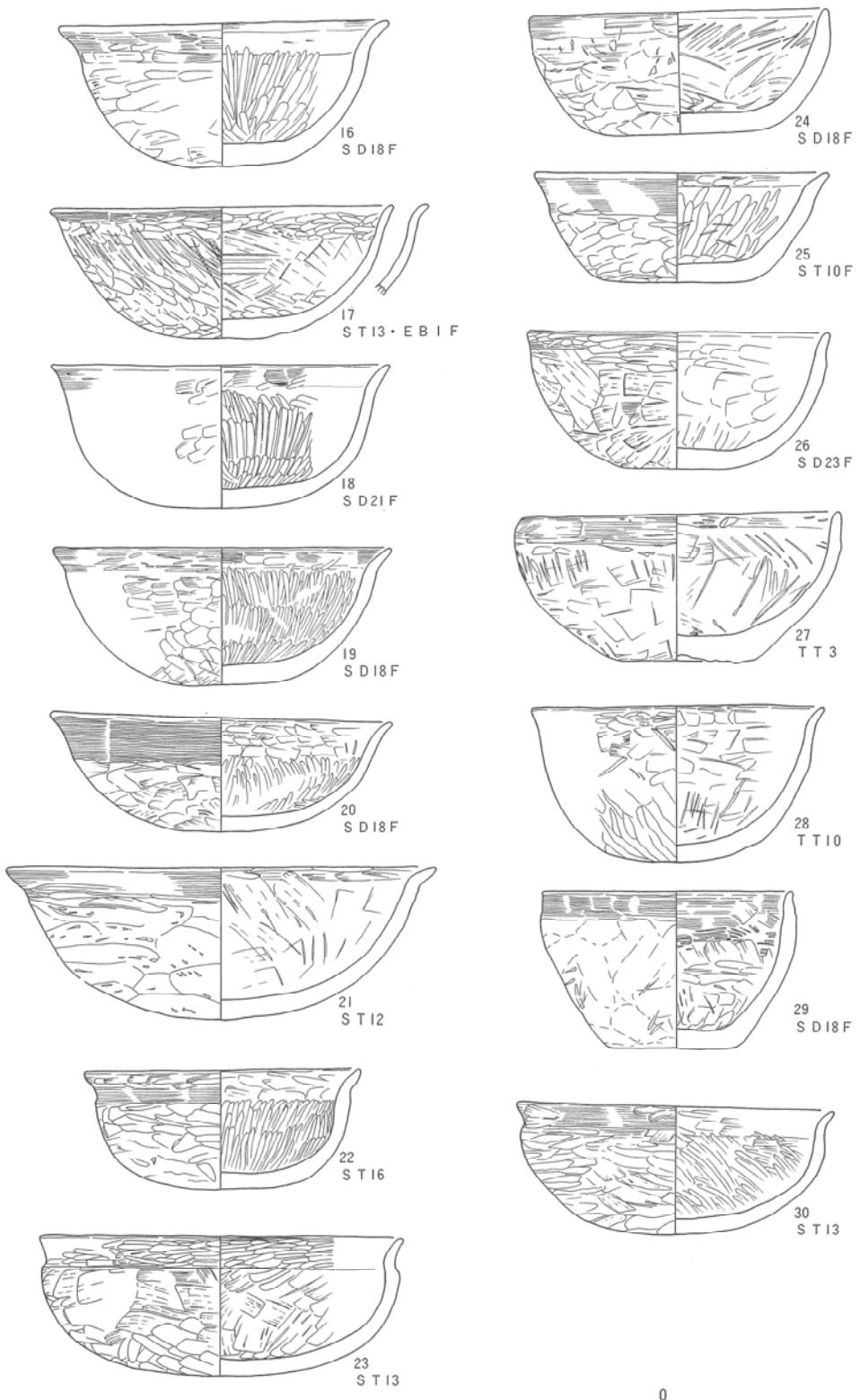
16類：浅身の丸底で皿状風となる体部と強く縊れて段を成す頸部、内屈する頸部から外反気味に引き出される口縁部等の形態を持つ。内外面共にやや粗いナデ風のヘラミガキ仕上げが行われる(第66図23)。法量的に異なるが8類や15類に相似たものと言える。

17類：法量的に最大級で、丸底・体部内弯・口縁部外傾等の各部形態を持つ。内外面の整



0 10cm

第65図 遺物実測図(1)



第66図 遺物実測図(2)

形はヘラケズリやヘラナデの後簡略なナデないしミガキを行う程度となる。口縁部はやや強めのヨコナデが外面で認められ、内面はその後にヘラミガキが加えられる(第66図21)。

坏(B) 内黒形態のものを一括する。形態や調整手法から以下の1～6類に分類できる。

1類：丸底風の平底形態で、丸みの強い内弯する体部と直上気味に立ち上がるだけの口縁部とからなる器形を持つ。調整ではやや幅広のヘラ状工具によるミガキ仕上げが内外面共に顯著で、外面でヘラケズリ整形後の横ないし平行充填、内面で斜方向ないし平行充填とするものが多い(第67図31～33)。

2類：一部を除けば全体に浅身のものが多く、体部の緩い内弯と端部が短くつままれてそのまま自然に外反する口縁部等に特徴が窺える。底部は小径の丸底風平底形態である。調整は体部外面でヘラナデと粗いミガキ、口縁部でヨコナデとなるものが多く、内面では口縁部で横方向、体部で斜方向とするやや不整なヘラミガキが施される(第67図34～37)。

3類：平底風の丸底形態で、体部は上半に膨らみを持つ。口縁部は直上気味に立って縊れる頸部から強めに引き出されて大振りに外反している。資料的に僅少で、図示し得るもの以外に概要の窺える例はない。調整では外面で横方向のヘラミガキ仕上げが底面域を除いて施される。内面では口縁部から体部上半で横方向、体部下半と底部で斜方向ないし平行となるヘラミガキが加えられる(第67図38)。

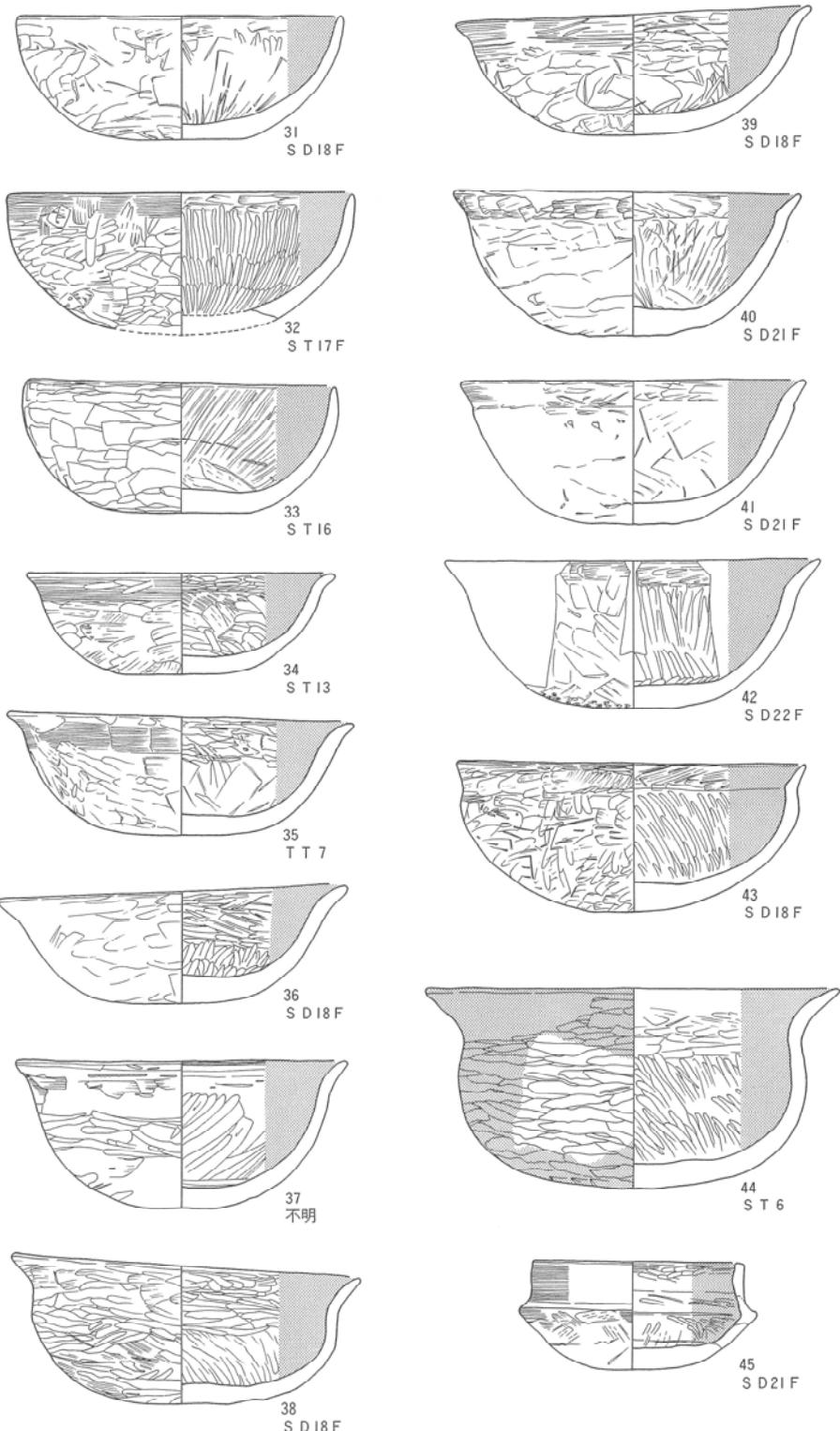
4類：器形的、手法的に先の2類に近似するが全体に大振りな作りとなる。形態的には底部中心域が小径で底平を呈す丸底風平底、体部内弯、口縁部外傾等の特徴があり、2類のそれと大きな違いはない。但し、口縁部分の作り出しに相異が認められ、内面に弱いながら稜状の段が付いて体部との境界を明瞭としている(第67図39～42)。

5類：器形的には非内黒のA 8類に非常に近いものと見做せる。この特徴は肩部の張り、縊れて締まる頸部、内弯様に引き出される短くて鋭角的な断面の口縁部等に窺える。調整では外面でヘラケズリ後の横方向を主とするヘラミガキが丁寧に施され、最終の仕上げとなる。内面では口縁部で横、体部で左から右方向へ連続的に充填して施す斜方向のヘラミガキが認められる。その後黒色処理が行われたと考えられるが底面域を除いて黒色が飛んでおり、あるいは意図的な内黒ではなく黒斑様の結果である可能性もある(第67図43)。

6類：平底風丸底の大振りな作りを呈す形態で、強く引き出されて長めに外反して伸びる口縁部に特徴がある。外面では横方向のヘラミガキが全域に亘って施され、内面では口縁部で横、体部で斜め方向のヘラミガキとなる(第67図44)。

坏(C) 須恵器模倣形態の坏を一括するが、量的に僅少で概要の分かるものは提示資料の1点に限られる(第67図45)。

器形は蓋受の明瞭な須恵器の坏身を忠実に模倣したと考えられるものである。手法では



0 10cm

第67図 遺物実測図(3)

蓋受部の突出等が明瞭で、口唇部の作りも端部を平坦に整形する等その作りに於ける模倣の忠実性が窺える。胎土的にはそれ程精選吟味されたものではなく、他の土師器類と大きく異なることはない。調整では、外面でヘラケズリ後にナデ、内面の口縁部でナデ、体部及び底部で密度の粗いヘラミガキが施されて内黒としている。

高坏(D) 高坏形態のものを一括する。主として坏部や脚部等の形態、及び内黒ないし非内黒等から以下の1～4類に分類できるが相対的にその出土数は多くない。

1類：非内黒で法量的に最大となる大形のものである。脚部を欠く1点のみの資料ながら坏部が椀形を示さずに中程で段をなし、口縁部が直線的に外傾する形態等はより古相を示す。脚は不明ながら坏部から見て中空の長脚で裾が大振りに開く形態が推測できる。坏部内外面の調整はヘラナデとヘラミガキである(第68図46)。

2類：体部が塊形で丸みを持ち、口縁部が大きく開く形態の坏部と、短く直線的に開く脚部とからなる高坏で、坏部の内面は内黒である。調整は内外面共に主としてヘラミガキであり脚部の内面に1次的な調整そのままと考えられるハケメ整形を認める(第68図47)。

3類：坏部下半部分の資料ながら特徴的な器形持つ。すなわち、体部中程に隆帯を巡らして稜状とする整形が加えられ、さらに頸部には沈線を巡らして口縁部との境界にする等の手法である。内面はアタリの細かな放射状となるヘラミガキが丹念に加えられて内黒とされる。外面の調整は横方向のヘラナデやヘラミガキである。脚部は不明ながら、その接続部分の在り方からは長円柱状とはならず大きく開く形態が想定される(第68図52)。

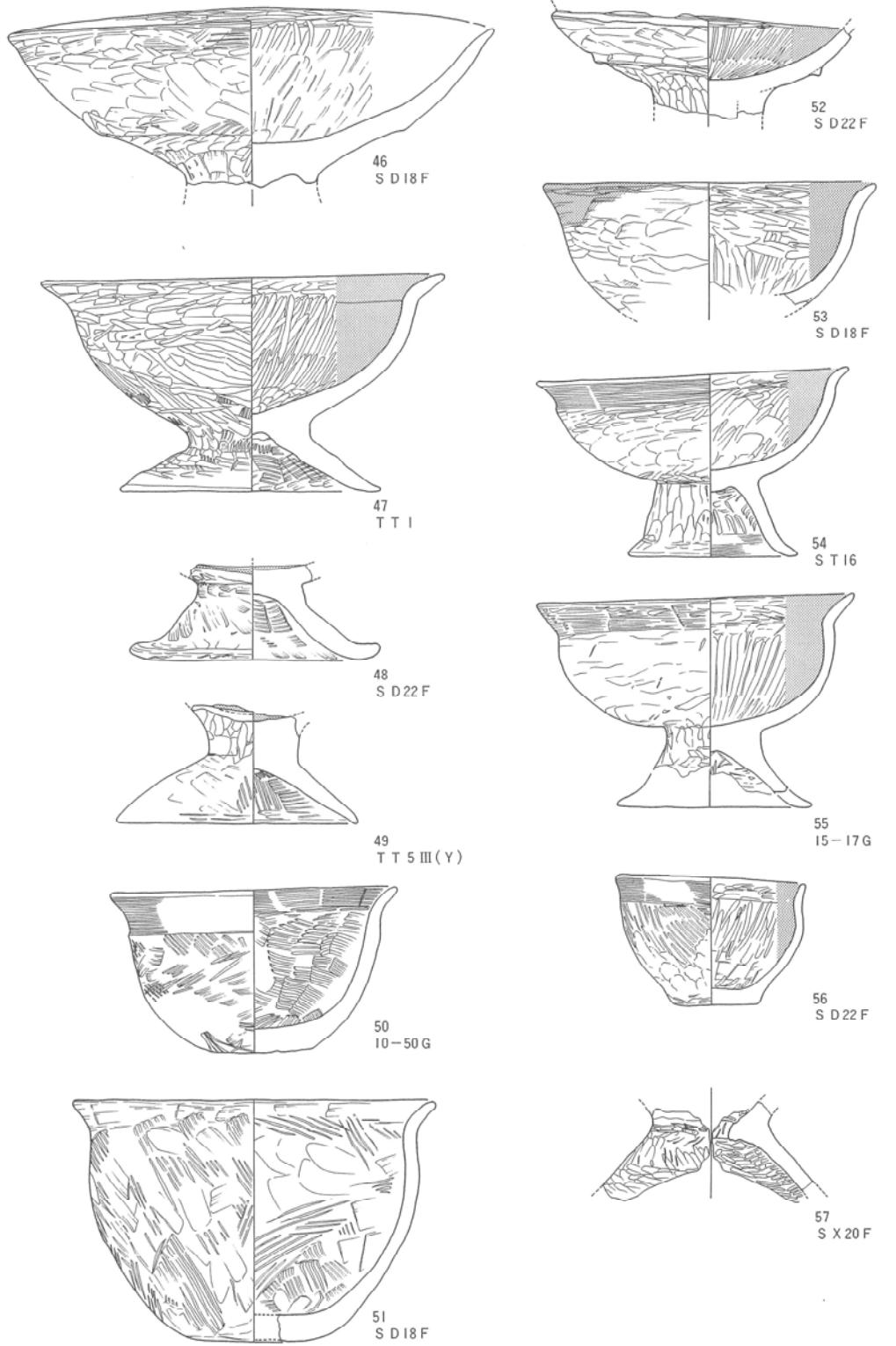
4類：坏部の形態がB3類ないしB4類に近似する塊形で、内外面の調整でもヘラミガキを主体とする等の共通した在り方を示す。脚は中空の短脚で裾の開きもそれ程でないと考えられる(第68図53～55)。全体的に出土量が少ないながら高坏での主体となる。

鉢(E) 小形の鉢を一括した。形態や法量から以下の1～3類に分類できる。

1類：小径の平底から内弯して立ち上がる体部がその上半に張りを持つ。口縁部は一旦縊れる頸部から弱く外傾して開く形態で、小振りながら深身の器形をとる。調整では外面の体部で縦方向の浅いハケメ、口縁部でヨコナデが施される。内面は口縁部で横方向のヘラミガキ、体部でヘラナデとヘラミガキであり内黒としている(第68図56)。

2類：平底の底部から体部が内弯して立ち上がる形態で、口縁部は強めにつままれて外反氣味に開く。体部外面の調整は不正方向のハケメとヘラナデ、口縁部では周巡するヨコナデである。内面は口縁部が外面同様にヨコナデである他は横方向主体のハケメ調整としている。なお、第68図50の資料にはその底部にオオバコの葉の圧痕が付く。

3類：法量的に大きいながら、基本的に前記の2類と器形や調整の点で変わることろがない。内外面の調整はハケメを主体とする。なお、底部から体部下間にかけて二次的な加熱



0 10cm
第68図 遺物実測図(4)

を受けた形跡が認められ、黒色の炭化物がこびり付くように付着している(第68図51)。あるいは以下で述べる小形甕の部類に帰属させるべきなのかも知れない。

甕(F) 小形の甕を一括した。口縁部や底部等の形態から1～3類に分類でき、さらに丸底形態の3類は法量等からa、bに細分される。

1類：頸部の縊れ、体部の張り共に弱い形態で、口縁部はわずかに外傾して開く器形を有す。調整は外面で縦方向のハケメ、内面で横方向のハケメないしヘラナデが施され、口縁部は内外一連でヨコナデの整形を受ける(第69図58～60)。

2類：平底で小径の底部から体部が張りを持って立ち上がる形態で、1類に較べて体部の丸みが強い。頸部はやや強めに縊れて締まり、口縁部が「く」の字様に外傾ないし外反して開いている。調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面でハケメ、内面が横方向のハケメないしヘラナデであり、よりヘラナデが多用される(第69図61～63)。

3a類：体部形が断面「U」字状を呈す小形丸底甕で、口縁部は大振りに外傾して開くだけとなる。体部外面の調整は縦方向のハケメ、内面では横方向のヘラナデであり、口縁部は外面がヨコナデ、内面でヨコナデ後に体部と一連のヘラナデを受ける(第69図65)。

3b類：3a類よりさらに小振りで丸みを持ち、体部下半に膨らみを持つ。頸部は強めに縊れ、口縁部が短く外反して開く形態となる。調整は口縁部の内外面でヨコナデ、体部外面でヘラナデ風のハケメ、同内面で横方向のハケメである(第69図64)。

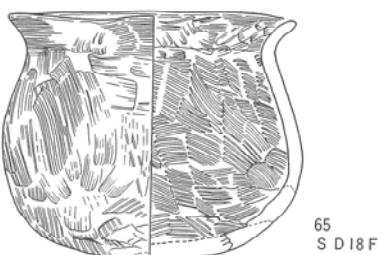
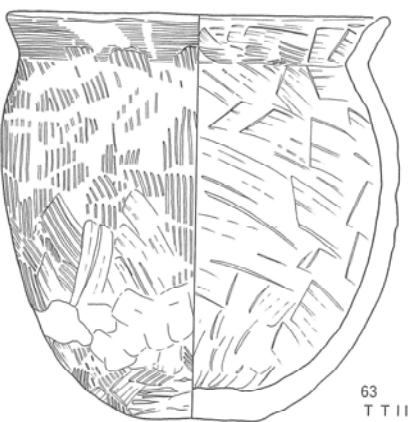
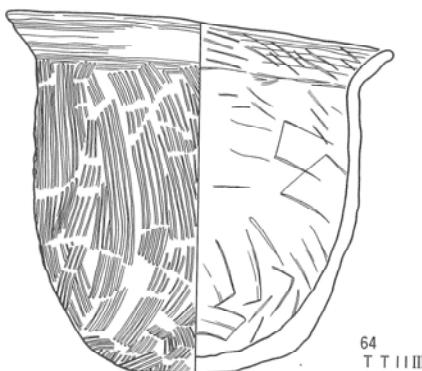
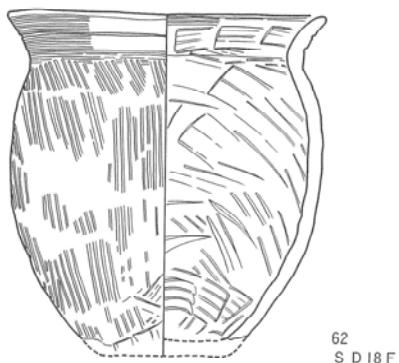
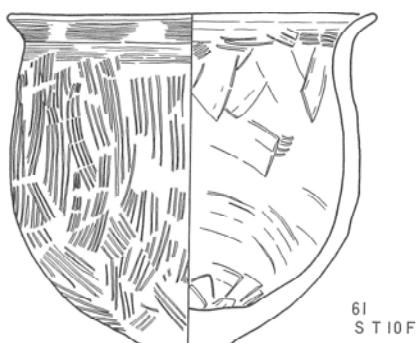
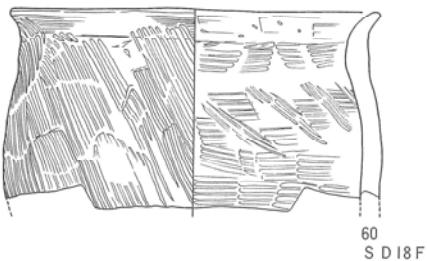
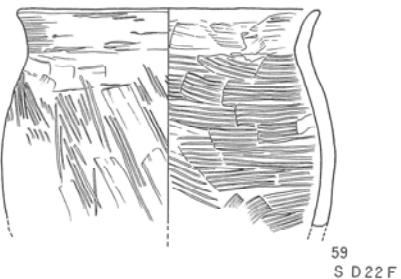
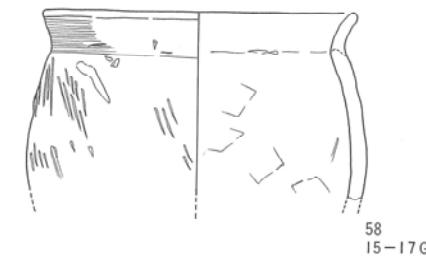
甕(G) 大形の甕類を一括する。体部形態等から1～2類に細分できる。

1類：体部が比較的丸く膨らむ形態のもので、口縁部が明確に「く」の字様に外傾して開く器形を有す。調整は口縁部の外面でヨコナデ、体部で縦ないし斜めのハケメ、内面の口縁部でハケメないしヘラナデ、体部で横方向となるハケメ等である(第70図66・67)。

2類：紡錘形状の長胴となる大形甕類で、胴部の中程から下半にかけて最大径を持つものである。口縁部はやや縊れる頸部から弱い外傾ないし外反で開く形態が大半を占め、1類に較べて手法その他の諸点で見劣りがする。調整では例外なく体部外面で縦のハケメ、内面で横方向のハケメ、口縁部でヨコナデとしている(第70図68～第71図76)。なお、一部のもので口縁端部を玉縁様とするものが認められる(第70図73、第71図77)。また、底部形態の明瞭な資料そのものが少ないので、小径で平底となる形態が主体と考えられる。

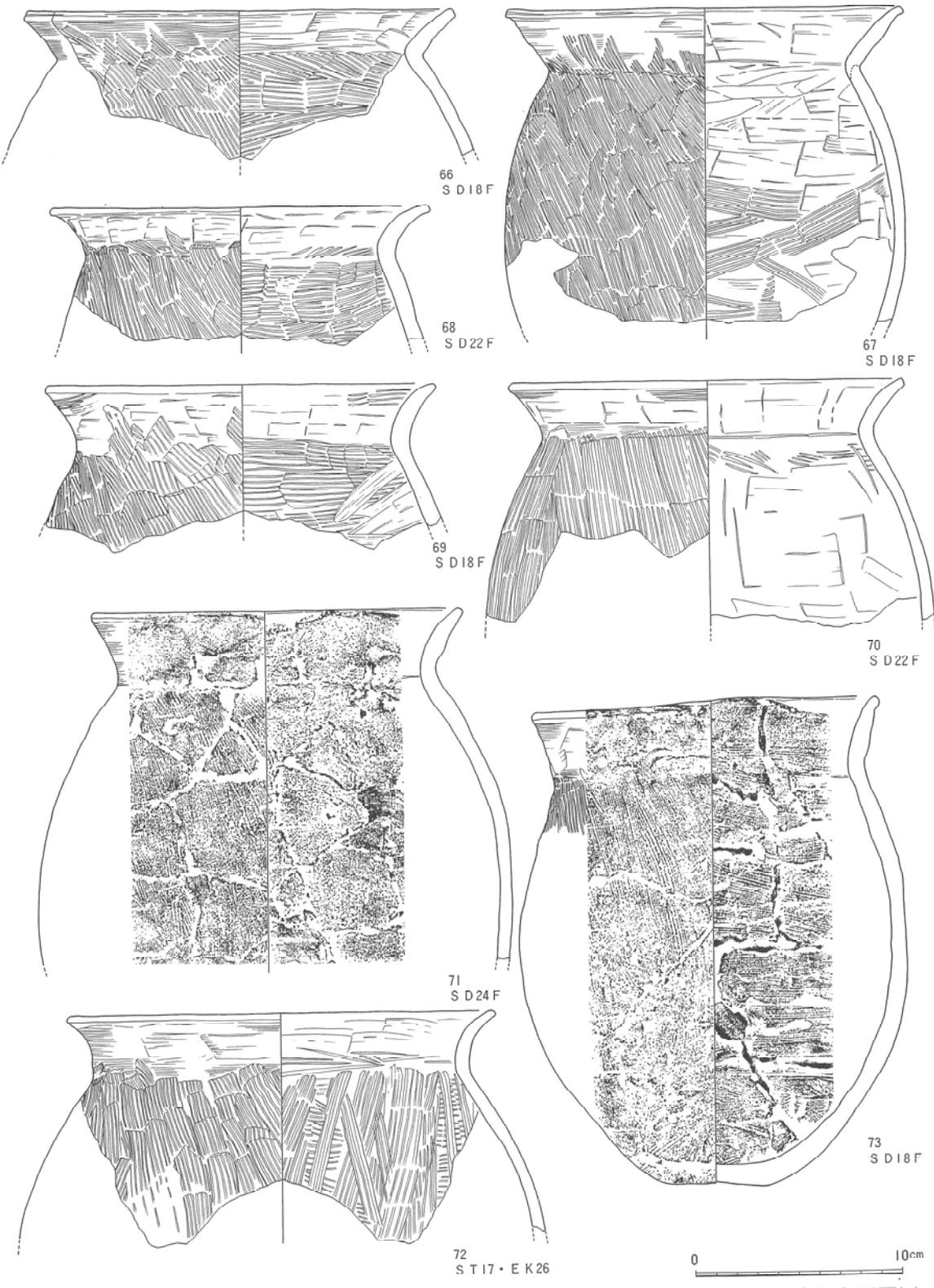
壺(H) 形態的特徴から以下の1～5類に分類できる。

1類：口縁が直線的に外傾して伸びる長頸壺である。体部は断面形が長楕円形状を呈し、中程に最大径を持つ。底部は丸底とはせず小径ながら明瞭な平底としている。調整では口縁部から体部に至るまで外面全体に丁寧なヘラミガキを施すと見做せるが、体部下半は風化による摩滅のため明瞭でない。内面は口縁部の上半にヘラミガキが加えられる他、一次

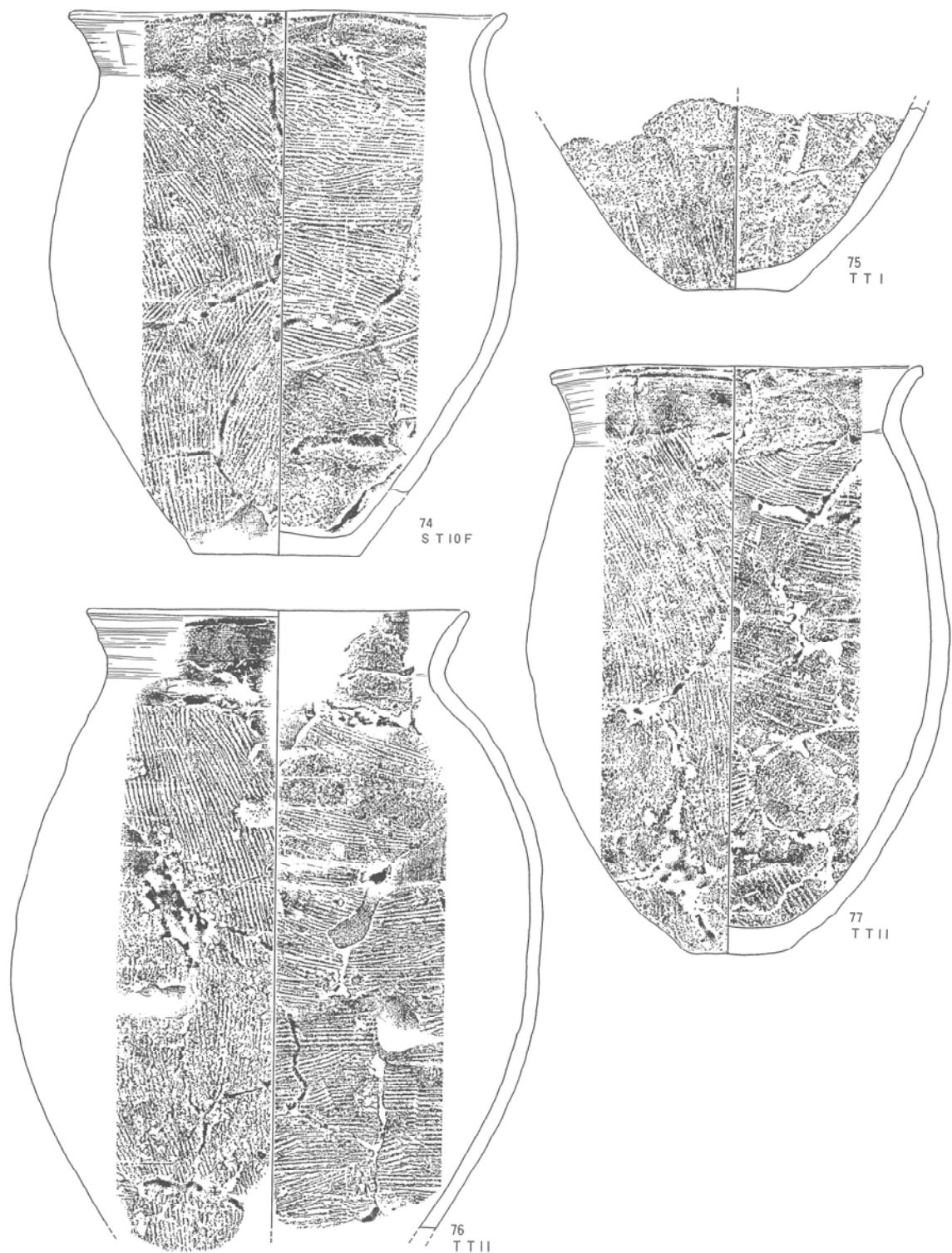


0 10cm

第69図 遺物実測図(5)



第70図 遺物実測図(6)



0 10cm

第71図 遺物実測図(7)

整形時のハケメをそのままに残す(第72図81)。

2類：球形の体部上半に張りを持ち、頸部が著しく縮まる形態の長頸壺と考えられるが、口縁部をきれいに欠く。外面の調整は横方向を主体とするヘラミガキである(第72図81)。

なお、本例は漆の貯蔵器として二次的に再利用されたもので、内面に固形化した漆が充満している。一方、外面にも使用時の垂れと推測できる痕跡を明瞭に残す。

3類：頸部と口縁部の境界に明瞭な段を持ち、頸部が縮まって体部が球形になる壺と考えられる。破片資料のため詳細不明であるが、調整は頸部外面で縦のヘラミガキ、内面で横方向のヘラミガキを認める。なお、外面は朱ないし丹様のもので赤彩される(第72図78)。

4類：体部球形で丸底形態をとり、口縁部が外傾して短く開く短頸壺と考えられる器形を持つ。形態や調整手法的に近似する小形甕F2と較べれば胎土・焼成、製作手法等の諸点で勝っており同類とするには大きなためらいがある。一方、口縁部の外面にはヘラ状の工具で暗紋風に施された波状紋が認められ、須恵器甕との関連が想起される。こうしたことから考えれば須恵器模倣形態の甕とすべきなのかもしれない(第72図79)。

5類：体部が球形をなし、丸底から内弯して立ち上がった体部がそのまま収められて口縁部となる無頸壺かと考えられるものである。調整は口縁部でヨコナデ、体部の内外面でハケメ整形および最終仕上げとしてのヘラミガキをそれぞれ認め、坏(A)の3・5・6・11類等に共通する手法と看取できる(第72図80)。こうした観点から見れば、坏A形態の特種例として把握すべきとも考えられるが、形態的相違は大きいと見られる。

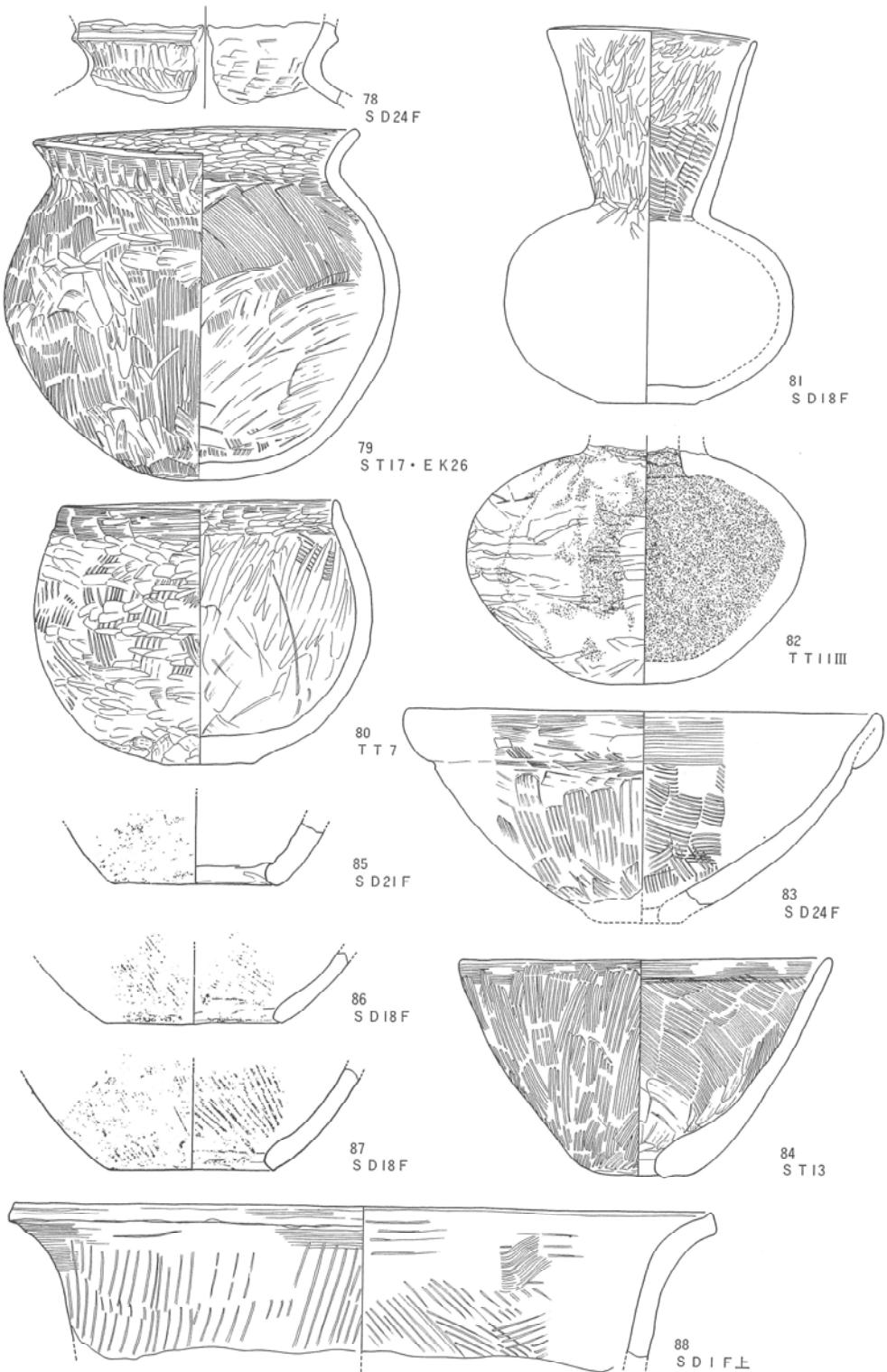
甕(I) 主として形態と法量から以下の1～3類に分類できる。

1類：やや大形で单孔式になると考えられる形態を示し、口縁部が折り返されて肥厚する複合口縁を持つ。調整は内外面共に浅く施されるハケメであり、口縁部の外面が一部ヨコナデされる。なお、底部は欠失しており詳細は不明である(第72図83)。

2類：小径の平底に单孔を持ち、体部が急傾で立ち上がってそのまま口縁部となる鉢状の形態を有す。調整は口縁部が体部の調整以前にヨコナデされる他は、内外面共にハケメが施されて最終の仕上げとなる(第72図84)。

3類：大形の甕形態を取る無底式の甕と考えられるものである。しかし、全形の復元できるものではなく、わずかに無底と判る底部部分の小片若干を認めたに止まる。調整ではいずれも内外面のハケメを知る他は不明となる(第72図85～87)。

4類：口縁部資料から無底式で大形の甕形態を持つと考えられる甕である。しかし、限られた破片資料のため体部他の詳細が不明であり、調整でも内外面の浅いハケメを認めるに止まる。一方、ハケメ調整はこれまで見てきた甕等のものと異なっており、出土地点等も考慮すればその所属時期が大きく異なる可能性が強い(第72図88)。



第72図 遺物実測図(8)

表3 土師器観察表(1)

挿図 番号	図版 番号	器種	出土位置	法量(cm)			調 整		底部 形態	分 類	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面			
65-15	6-10	坏	ST16	10.8		4.8	ナデ、ミガキ ケズリ、ナデ ヘラナデ	ミガキ ヘラナデ	丸底	A-5類	R P74
65-8	6-9	坏	ST11	11.1	3.3	4.9	ナデ ユビナデ	ナデ ユビナデ	平底	A-5類	R P22
65-6	6-12	坏	ST16	12.6		6.4	ハケメ、ミガ キ、ユビナデ	ミガキ ヘラナデ	丸底	A-2類	R P35
65-7	6-8	坏	SD18F	13	3.1	5.2	ハケメ、ナデ	ミガキ ヘラナデ	丸底	A-2類	R P38
65-3	6-4	坏	ST13F	13.1		5.1	ハケメ、ミガキ	ミガキ	丸底	A-2類	R P45
65-12	6-5	坏	ST16	14.6		5.9	ヘラナデ ハケメ	ヘラナデ ハケメ	丸底	A-3類	R P35
66-27	7-9	坏	TT3	14	6.0	6.5	ナデ、ケズリ ヘフナデ	ナデ、ハケメ ヘフミガキ	平底	A-12類	
65-14	6-13	坏	SD22	14.5	5.1	6.4	ミガキ ナデ	ヘラナデ ミガキ		A-3類	
66-26	7-8	坏	SD23F	13.3	4.5	6.0	ケズリ、ナデ ミガキ	ミガキ	平底	A-11類	R P55
65-5	6-7	坏	ST13	14.2	3.2	5.3	ミガキ	ミガキ	丸底	A-2類	R P43
65-11	6-11	坏	ST16	14.1		7.2	ハケメ、ミガキ	ミガキ	丸底	A-3類	R P32
66-24	7-2	坏	SD18F	13.2	6.6	5.3	ナデ、ケズリ ヘラナデ	ミガキ ヘラナデ	平底	A-9類	R P69
65-13	6-14	坏	ST10	14.8		6.0	ハケメ ヘラナデ	ミガキ	丸底	A-3類	R P71
65-4	6-6	坏	ST10F	13.0		5.4	ミガキ	ミガキ ナデ消し	丸底	A-2類	R P64
65-9	6-3	坏	TT23	13.2	5.8	5.1	ミガキ	ミガキ ヘラナデ	丸底	A-6類	R P9
65-2	6-2	坏	ST17F	14.8		5.0	ハケメ、ナデ	ミガキ、ナデ	丸底	A-1類	R P58
65-10		坏	SD21F	13.9	(8.4)		ケズリ、ナデ ナデミガキ	ナデ ミガキ	丸底	A-4類	R P20
65-1	6-1	坏	ST13F	(15.7)		4.4	ケズリ、ナデ ミガキ	ミガキ、ナデ	丸底	A-1類	R P48
66-23	7-13	坏	ST13	16.0		6.1	ミガキ ヘフミカキ	ミガキ ヘラナデ	丸底	A-16類	R P73
66-30	7-14	坏	ST13	14.0		5.7	ミガキ、ナデ	ミガキ	丸底	A-8類	R P53
67-43	8-13	坏	SD18F	14.8		6.2	ケズリ、 ミガキ	ミガキ	丸底	B-5類	R P63
66-22	7-12	坏	ST16	12.2	3.3	5.2	ナデ、ミガキ	ミガキ、ナデ	丸底	A-15類	
66-28	7-11	坏	TT10	12.8	3.1	6.7	ミガキ	ミガキ	丸底	A-13類	R P14
66-17	7-4	坏	ST13 EB 1 F	15.2	3.3	5.8	ハケメ、ナデ ミガキ	ヘラナデ	平底	A-7類	R P70
66-25	7-1	坏	ST10F	13.0	5.2	4.9	ミガキ、ナデ	ミガキ	平底	A-10類	R P29
66-19	7-6	坏	SD18F	14.9	3.0	6.1	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	平底	A-7類	R P57
66-18	7-5	坏	SD21F	14.9		6.2	ナデ、ミガキ	ミガキ	丸底	A-7類	R P66
66-16	7-3	坏	SD18F	14.6	4.0	(6.2)	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	平底	A-7類	
66-21	7-10	坏	ST12	18.8		6.8	ケズリ、ナデ	ヘラナデ	丸底	A-17類	R P31
66-20	7-7	坏	SD18F	15.0	2.9	5.0	ナデ、ケズリ	ミガキ	丸底	A-7類	R P52 · R P49
67-31	8-1	坏	SD18F	13.6	5.0	5.1	ミガキ、 ナデ、ケズリ	ヘラミガキ ヘラナデ	平底	B-1類	R P26
67-32	8-2	坏	ST17F	14.6		(6.0)	ナデ、ケズリ ミガキ	ミガキ		B-1類	
67-33	8-3	坏	ST16	12.8	5.5	5.4	ヘラナデ	ヘラナデ		B-1類	R P12 · 外面に黒色 塗料(ヤニ?)
67-39	8-9	坏	SD18F	(15.0)		5.0	ナデ、ミガキ、ヘラ ミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ ヘラナデ		B-4類	
67-41	8-11	坏	SD21F	(14.5)		6.0	ミガキ ナデ	ミガキ ヘフナデ	平底	B-4類	R P62
67-40	8-10	坏	SD21F	(14.6)	3.7	6.1	ヘラナデ ミガキ	ヘラミガキ、ミガ キ、ヘラオサエ		B-4類	R P36
67-35	8-5	坏	TT7	(14.6)		4.9	ナデ ミガキ	ハケメ ミガキ	平底	B-2類	R P2
67-34	8-4	坏	ST13	13.0	4.5	4.3	ケズリ、ナデ ミガキ	ミガキ		B-2類	R P44
67-37	8-7	坏	不明	(11.0)		6.1	ヘラナデ ミガキ	ミガキ		B-2類	
67-36	8-6	坏	SD18F	(14.7)	3.2	4.7	ミガキ ヘラナデ	ミガキ ヘラナデ		B-2類	
67-38	8-8	坏	SD18F	14.7		5.8	ケズリ、ハケ ミガキ	ミガキ		B-3類	
68-53		高坏	SD18F	(14.9)		(5.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ		D-4類	底・脚部欠損
67-42	8-12	坏	SD22F	(15.8)	4.1	6.2	ミガキ	ヘラミガキ		B-4類	外面に黒色塗料 (ヤニ?)
67-44	8-14	坏	ST6	(17.5)		8.3	ミガキ	ミガキ		B-6類	R P42

表4 土師器観察表(2)

掲図番号	図版番号	器種	出土位置	法量(cm)			調 整		底部	分類	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面			
67-40	8-15	壺	SD21F	8.9		4.5	ナデ ヘラナデ	ナデ、ミガキ		C 類	内黒、須恵器模倣杯
68-46	9-1	高壺	SD18F	21.8	7.3~ 8.0	(4.4)	ハケメ ミガキ	ミガキ ヘラナデ		D-1 類	R P 40
68-52	9-2	高壺	SD22	13.1		(4.4)	ナデ、ミガキ	ミガキ		D-3 類	R P 10・内黒
68-47	9-3	高壺	TT11	18.1		19.6	ハケ、ミガキ	ミガキ		D-2 類	R P 17・内黒
68-55	9-7	高壺	15-17	14.2 (8.7)	9.5	ナデ ミガキ	ミガキ ヘラナデ			D-4 類	R P 27・内黒
68-54	9-4	高壺	ST16	14.0		8.1	ナデ、ミガキ ケズリ	ミガキ、ヘラミ ガキ、ヘラナデ		D-4 類	R P 34・内黒
68-48	9-6	高壺	SD22F		11.2 (4.0)	ナデ	ミガキ ハケメ、ナデ			D-4 類?	R P 10・内黒
68-49	9-5	高壺	TT5III(Y)	10.7	(5.1)	ミガキ、ナデ ハケメ	ハケメ、ナデ			D-3 類?	内黒
66-29	9-10	壺	SD18F	11.2	6.0	7.2	ナデ	ハケメ、ナデ ミガキ		A-14 類	
72-80	13-2	壺	TT7	(12.1)		11.3	ナデ、ミガキ ケズリ	ハケ、ヘラナ デ、ミガキ	丸底	H-5 類	R P 3
68-56	9-8	小鉢	SD22F	8.5	3.6	5.7	ハケメ、ナデ 消し	ヘラナデ ミガキ		E-1 類	R P 8・内黒
68-50	9-9	小鉢	10-15G	12.9	4.5	(7.3)	ナデ、ハケメ	ハケメ、ナデ		E-2 類	R P 21
68-51	9-11	小鉢	SD18F	16.2		10.8	ハケメ ヘラナデ	ハケメ、ヘラ ナデ(ユビナデ)		E-3 類	
72-79	13-1	鉢	ST17EK26	14.2~ 15.5		15.4	ハケメ、ミガ キ、ナデ	ミガキ、ハケ メ、ヘラナデ	丸底	H-4 類	R P 65
69-61	10-6	鉢	ST10F	14.5	3.3	13.1	ナデ、ハケメ	ハケメ ヘラナデ		F-2 類	R P 28
69-63	10-4	鉢	TT11	15.1		16.0	ナデ、ハケメ	ハケメ ヘラナデ		F-2 類	R P 16
69-62	10-3	鉢	SD18F	12.6		13.4	ナデ、ハケメ	ナデ ヘラナデ		F-2 類	R P 39
69-64	10-7	鉢	TT11III	15.3		13.8	ナデ、ハケメ	ハケメ ヘラナデ	丸底	F-3 b 類	
69-65	10-8	鉢	SD18F	11.3		(9.7)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	丸底	F-3 a 類	R P 18
69-58	10-1	鉢	15-17	12.2			ヨコナデ ハケメ	ヘラナデ		F-1 類	R P 27
69-59	10-5	鉢	SD22F	12.0		(8.4)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		F-1 類	
70-73	12-4	甕	SD18F	17.0		23.5	ヘラナデ ハケメ	ハケメ ヘラナデ		G-2 類	R P 57
71-77	12-1	甕	TT11	17.1		27.6	ヘラナデ ハケメ	ヘラナデ ハケメ		G-2 類	R P 15
71-75	11-7	甕	TT1		5.0	(8.7)	ハケメ	ハケメ		G-2 類	R P 5
70-71	12-6	甕	SD24F	18.0		(17.0)	ヘラナデ ハケメ	ヘラナデ		G-2 類	R P 25
70-67	11-2	甕	SD18F	19.3		(15.1)	ハケメ	ハケメ ヘラナデ		G-1 類	
69-60	10-2	甕	SD18F	14.6		(7.7)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		F-1 類	
71-76	12-5	甕	TT11	18.2			ナデ ハケメ	ハケメ		G-2 類	R P 17
71-74	12-3	甕	ST10F	20.9		(25.6)	ヘラナデ ハケメ	ヘラナデ ハケメ		G-2 類	R P 28
70-72	11-1	甕	ST17EK26	20.5		(11.1)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		G-2 類	
70-70	12-2	甕	SD22F	19.0		(12.1)	ハケメ ヘラナデ	ナケメ ヘラナデ		G-2 類	R P 75
70-69	11-5	甕	SD18F	19.0		(7.1)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		G-2 類	
70-66	11-4	甕	SD18F	20.5		(7.2)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		G-1 類	
70-68	11-3	甕	SD22F	18.4		(6.7)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		G-2 類	
72-81	13-3	壺	SD18F	(9.4)	(4.2)	16.3	ミガキ	ミガキ ハケメ		H-1 類	R P 68
72-82	13-4	壺	TT11III		2.8 (10.3)	ミガキ	不明		丸底	H-2 類	漆充満
72-84	13-6	甕	ST13	16.2		9.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		I-2 類	RP46・単孔式
72-88	13-10	甕	SD1F	31.0		(6.2)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		I-4 類	(奈良時代?)
72-83	13-5	甕	SD24F	20.5	(3.7)	(19.3)	ハケメ ヘラナデ	ハケメ ヘラナデ		I-1 類	R P 67・複合口縁 ・単孔式?
72-87	13-9	甕	SD18F		7.0		ハケメ	ハケメ		I-3 類	無底式
72-86	13-8	甕	SD18F		7.6		ハケメ	ハケメ		I-3 類	無底式
72-85	13-7	甕	SD21F		7.0		ヘラナデ	ヘラナデ		I-3 類	無底式
72-78		壺	13-17 SD24F	(11.6)		(3.4)	ミガキ	ヘラナデ		H-3 類	複合口縁
68-57		器台	13-17 SX20F 上	(9.0)		4.2	ミガキ	ハケメ		J 類	

表5 古式須恵器観察表

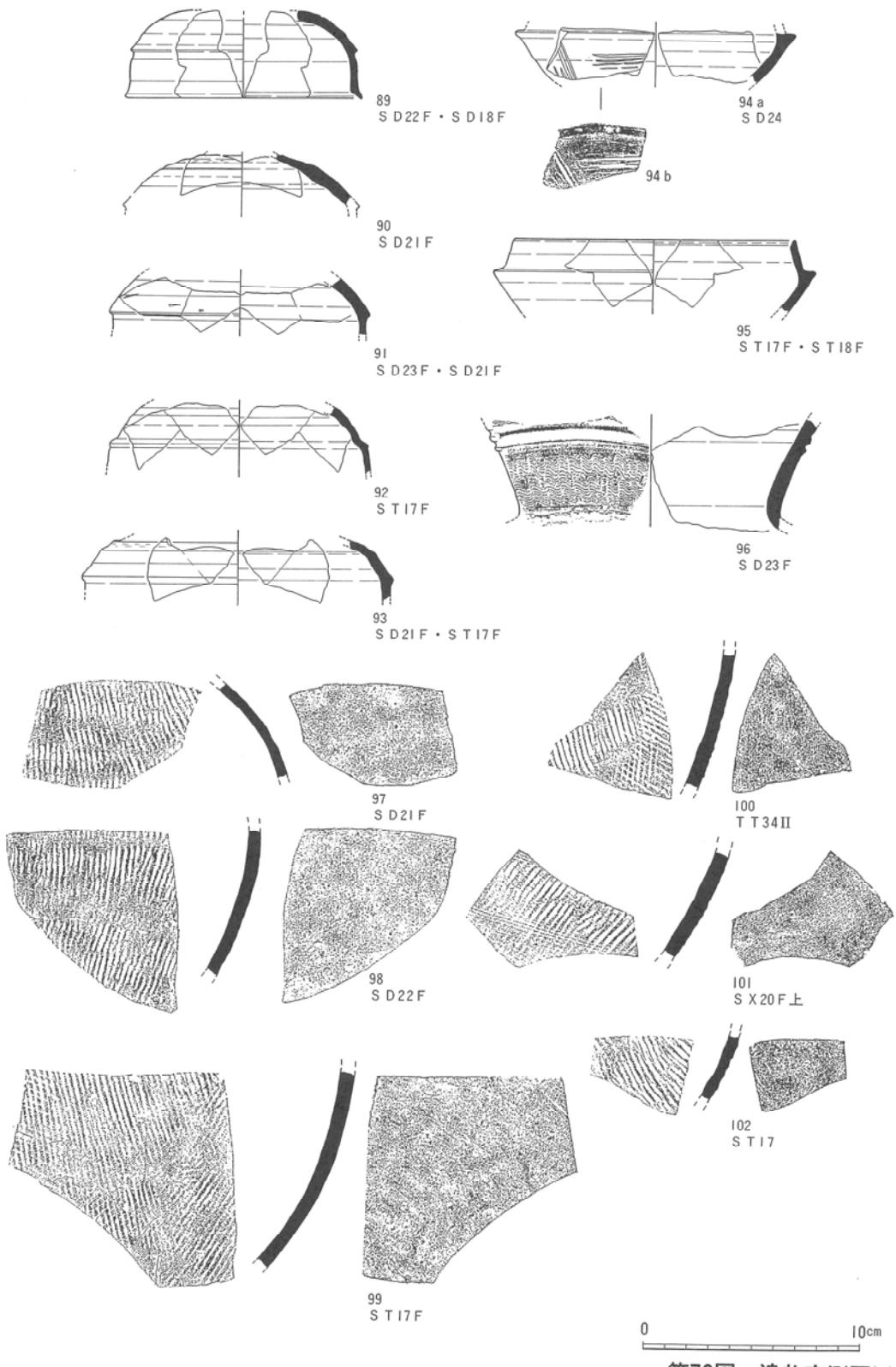
挿図 番号	図版 番号	器種	出土位置	法量(cm)			調 整		胎 土 断面色調	備 考
				口径	底径	器高	外 面	内 面		
73-94	14-8	坏	SD24				ロクロ	ロクロ	砂っぽい 灰 白	砥石に転用、軟質
73-95	14-9	坏	ST17F SD18F(11-18Ⅲ)	(14.9)			ロクロ	ロクロ	砂っぽい 青 灰	受部が水平にのびる
73-93	14-2	蓋	SD21F ST17F(13-18)				ロクロ	ロクロ	やや粘質 青 灰	穂端が丸く仕上がる
73-90	14-1	蓋	SD21F (13-17)	(9.9)			ロクロ・ ケズリ	ロクロ	やや砂っぽい 灰 黒	稜が鋭くつまみ出さ れる
73-89	14-3	蓋	SD22F(12-18) SD18F(11-17)	(10.9)			ロクロ・ ケズリ	ロクロ	やや粘質 灰 白	内外面に自然釉を薄 く被る
73-91		蓋	SD23F(12-17) SD21F(13-17)				ロクロ	ロクロ	やや砂っぽい 青 灰	稜は明瞭
73-92	14-4	蓋	ST17F(13-16)	(11.9)			ロクロ	ロクロ	やや粘質 褐	堅い焼成
73-96	14-10	甕	SD23F(12-17)	(15.1)			ロクロ	ロクロ	やや粘質 青 灰	頸上端に隆帶 横抽波状紋
73-99		甕	ST17F (14-18)				平行タタキ	アテスリケシ	やや粘質 薄い褐色	98・100~102と同一 個体と判断できる
73-98		甕	SD22F (12-18)				平行タタキ	アテスリケシ	やや粘質 淡い褐色	
73-97		甕	SD21F (13-16)				平行タタキ	アテスリケシ	やや砂っぽい 灰 白	外面に自然釉
73-101		甕	SX20F (14-19)				平行タタキ・ カキメ	アテスリケシ	やや粘質 淡い褐色	
73-100		甕	TT34 II				平行タタキ	アテスリケシ	やや粘質 淡い褐色	
73-102		甕	ST17F				平行タタキ	アテスリケシ	やや粘質 淡い褐色	

(2) 古式須恵器

検出し得た古式須恵器は破片数で23点、固体数にして坏身2～3点、坏蓋7～8点、甕3～4点である(第73図89～102)。以下では器種毎に類別して説明を加える。

坏蓋：口縁部破片等から器形の窺えるもの5点がある。加えて、天井部の部分片と判断できるもの3点程があり、固体的には最大で7～8点になるかと考えられる。法量は部分片に限られる資料が多いことから明確でないが、口径11cm前後を測る小振りな1群(第73図89～91)と12cmを超えるやや大振りな1群とに大別できる(第73図92・93)。器形的には前者で天井部の丸みが強く、口縁部と天井部との境に巡る稜状の区画が明瞭で鋭いものとなっている。後者は境界の稜線が丸みを持つ緩やかなもので、口径の大きい分偏平気味と見て取れる。なお、89は口唇部形状の唯一明確な資料で、強くつままれて内殺状ないしは円弧様に整形される特徴的な形態が窺えた。調整技法では内外面のロクロナデと天井部の3分の2以上に及ぶと考えられる回転ヘラケズリが認められ、その仕様は幅の狭いケズリ面を明確に残す等丁寧である(89・90・92)。焼成は概ね硬調で、胎土は細砂を含む等全体に砂っぽいものが大半を占める。色調は93が暗い灰色(N4/)で断面がにぶい赤(7.5 R4/4)を呈す他は内外面および断面共に灰白色系の色調を有すものが殆どである。

坏身：破片資料から形状の復元できるもの2点がある(第73図94・95)。94は体部上半部の破片資料で、蓋受部の直径が約13cmを測る。焼成は軟調で、色調は全体に灰白色を呈し、胎土も粉っぽく粗い等の特徴が窺える。なお、当該資料は二次的に砥石として転用されており、外面に横・斜走する線刻様の磨面数条を認める。95は推定口径13cmを測る小破片資料である。器形的には口縁部が内傾して短く立ち、蓋受部がほぼ水平に延び出る等の形態



第73図 遺物実測図(9)

が窺える程度に止まる。細部では口唇部内側に沈線を巡らして段状に整形する様子が観察できるが、その仕様は形骸的で明瞭でない。焼成は軟調、色調灰(N6/1)、胎土は砂っぽく粗い。なお、当該資料はS T17、S D18出土の各破片が接合している。

甕：甕は頸部、体部破片等から見て小型甕が殆どと考えられ、体部資料に於ける湾曲度もそれに呼応して強いものが大半を占める(第73図96～102)。唯一の頸部資料96は頸部下端で推計12.2cmを測り、櫛描波状文や上下に文様帶を二分する隆線の在り方等から幾分長めの頸部を持つ形態が想定できる。この二条の隆線と稜線は半截竹管様の工具によって施され、上段のものが断面蒲鉾状、下段でU字状となるようにネガとポジの組み合わせで配されている。櫛描波状文は6条程を1単位とする工具を用いて基本的に2段で周巡させておりその施文は比較的丁寧である。焼成は硬調で内外面共に自然釉を被ることから光沢があり、色調は灰あるいは暗灰色(N4/～3/)、断面でやや白っぽい灰色(N6/)を呈している。胎土は緻密ながらやや砂っぽく、石英粒他の細かな砂粒の混入が認められる。

体部資料では拓影図に示す6点の他2点の小片がある。これらは焼成や色調、あるいは断面から窺える胎土の特徴および内外面のタタキやアテ等調整技法から見て97、98・102、99・100、101、の4固体に識別できる。97は体部上半の肩部資料で薄手である。外面に横方向で施される格子目風の平行タタキを止めるが内面は丁寧にヨコナデされてアテ痕を認めない。なお、外面は釉がかかり灰オリーブ、灰色等斑状を呈している。焼成は硬調で、胎土緻密ながら断面での所見はやや粉っぽい観があり、内面と断面の色調は灰白から灰色(N7/～6/)である。98は体部中程と考えられる資料で、外面に1×2cm程度の小さなアテ具による平行タタキが認められる。一方、内面には対応する円弧文と考えられるアテ痕が微かに判別できるが、二次的な擦り消しにより殆ど痕跡的となっている。胎土、焼成、色調等は97にほぼ同等である。99は98同様のタタキおよびアテの工具によって整形されるもので、内面も同様丁寧に擦り消されている。胎土、焼成、色調等では他とほぼ近いが、断面の色調でややにぶい赤褐色(7.5R5/3)を呈する点が注意された。101は部位等不明瞭であるが、外面に明確な格子目風タタキとその上に施される浅めのカキメが認められる。内面はこれまでのもの同様丁寧にナデ仕上げされて前段のアテ痕を止めていない。

(3) 土・石製品他

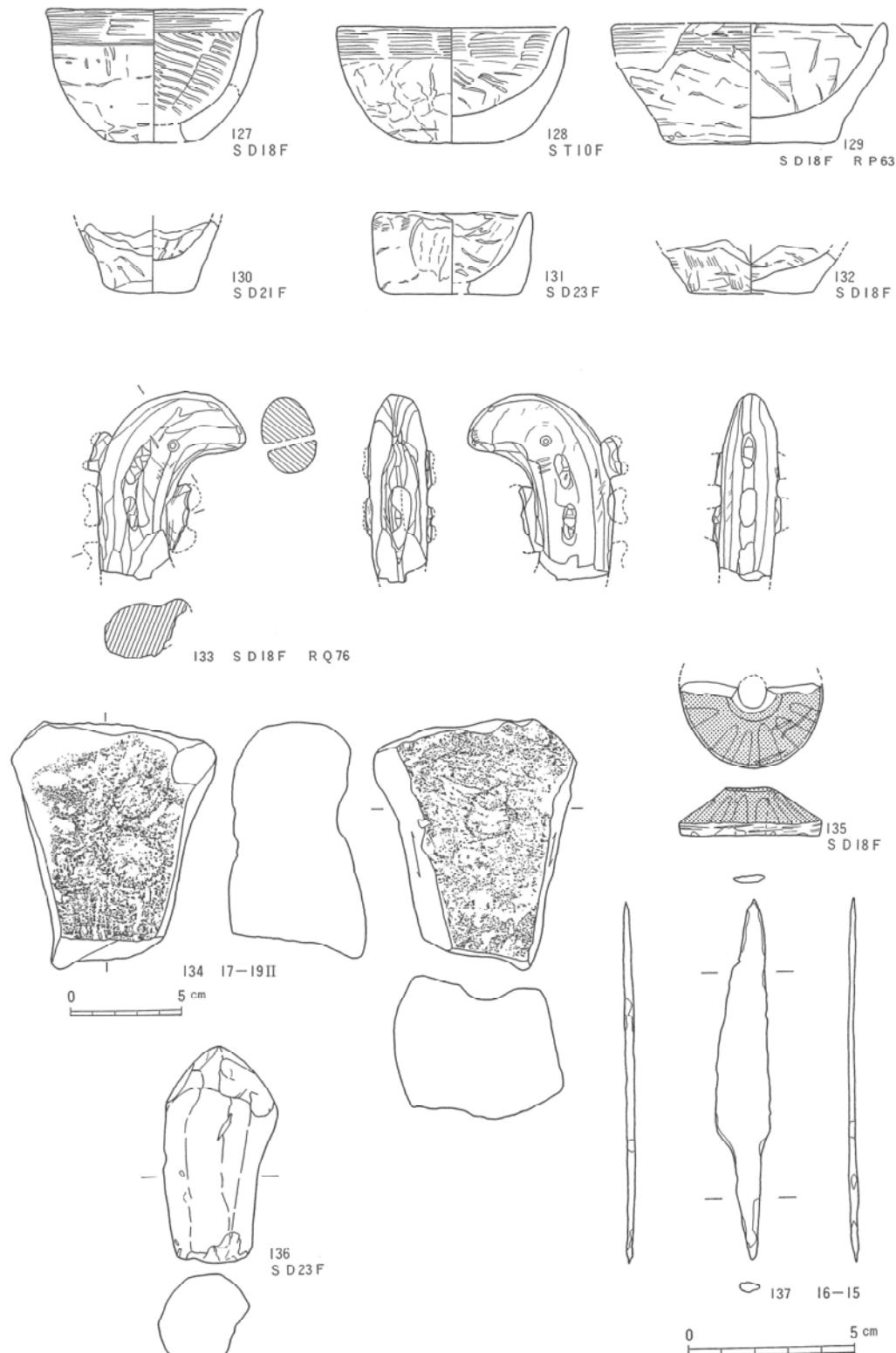
土製品では土錘、ミニチア土器、手捏土器等の器種があり、量的には溝跡S D21から一括的に出土した土錘等がまとまりを持つ。以下に器種毎の概要を述べる。

土錘：管玉他の土製模造品かとも考えられたが、作りの粗雑さや法量的に大きすぎる等を考慮して土錘と判断するのが適當と思われた。このことは良好な出土状態が窺えたR P33の一括的在り方他からも肯定される。これらは法量的に見て短径と長径のほぼ等しい小形



0 5 cm

第74図 遺物実測図(10)



第75図 遺物実測図(11)

表6 土・石・金属製品観察表

掲図 番号	図版 番号	出土位置	種別	種類	法量(cm·g)					備考
					最大長	最大幅	最大厚	最大径	重量	
75-128	16	ST10F	土製品	小形土器			6.9 (口徑)		3.5	底径30 外面ナデ 内面ナデ、ヘラナデ
75-129	16	SD18F	土製品	小形土器			8.2 (口徑)		3.6	PP63 外面ナデ、ヘラナデ 底径50 内面ヘラオサエ
75-130	16	SD21F	土製品	手捏土器			4.0	(2.2)	底径20 指頭痕有り	
75-131	16	SD23F	土製品	手捏土器			4.8	(2.5)	底径39 指頭痕有り	
75-127	16	SD18F	土製品	小形土器			6.5 (口徑)		(4.0)	底部欠損
75-132	16	SD18F	土製品	手捏土器			5.2	(1.3)	底径3.9 指頭痕有り	
74-121	15	SD21F	土製品	土錘	6.8	3.0		52		R P33 (以下のR P33と一括出土)
74-108	15	SD21F	土製品	土錘	3.9	2.8		31		R P33
74-110	15	SD21F	土製品	土錘	3.7	2.4		22		R P33
74-109	15	SD21F	土製品	土錘	3.8	2.6		21		R P33
74-104	15	SD24F	土製品	土錘	2.5	2.8		19		
74-105	15	SD21F	土製品	土錘	2.8	2.9		19.5		R P33
74-106	15	SD21F	土製品	土錘	2.6	3.1		24		R P33
74-103	15	SD21F	土製品	土錘	2.3	2.8		17		R P33
74-115	15	11-16II	土製品	土錘		2.9				
74-122	15	11-18 SD19F	土製品	土錘	6.4	2.7		(42)		
74-113	15	SD21 F	土製品	土錘		3.0				
74-114	15	SD21F	土製品	土錘		3.2				R P33
74-111	15	SD22F	土製品	土錘	2.4	2.4				
74-117	15	SD21F	土製品	土錘	(3.4)					
74-112	15	SD21F	土製品	土錘		3.0				R P33
74-107	15	SD21F	土製品	土錘	(2.9)					R P33
74-125	15	SD18F	土製品	土錘	2.8	1.2		2.5		
74-124	15	SD22F	土製品	土錘	(2.1)					
74-118	15	10-15III	土製品	土錘						
74-119	15	10-15III	土製品	土錘						
74-116	15	SD21	土製品	土錘	(2.6)					R P33
74-120	15	SD21	土製品	土錘						R P33
74-123	15	SD21	土製品	土錘						R P33
74-126	15	TT17II	土製品	土錘	4.4	1.9		10.5		
75-136	16	SD23F	石製品	使途不明	6.5	3.4		10		土師器の調整工具? 軽石製
75-133	16	SD18F	石製品	子持勾玉	5.6	2.3		(44)		R Q76 滑石製
75-135	16	SD18F	石製品	紡錘車			1.4	4.3 (8.5)		外面に黒漆塗り(ハケに撲る塗り痕が判別できる。)半次品
75-137	16	ST6F	鉄製品	刀子	10.2	1.6	0.3			
75-134	16	17-19II	石製品	砥石	11.2	7.8	6.0	487		凹石 砂岩製

※ ()内数値は推定ないし残存値

のA群(103~106)と長径が短径の約2倍となる中形のB群(107~112)、および長径が短径の約3倍程度にもなる大形のC群(121・122、113~117?)とに大別できる。A~C群の各重量はA群の完形品106で24g、B群の108で31g、C群の121で52gを測るが、全体的には固体間のばらつきが大きいと見て取れる。作り等手法では心棒に粘土を巻き付けて指でナデ

表7 須恵器・中世陶器観察表

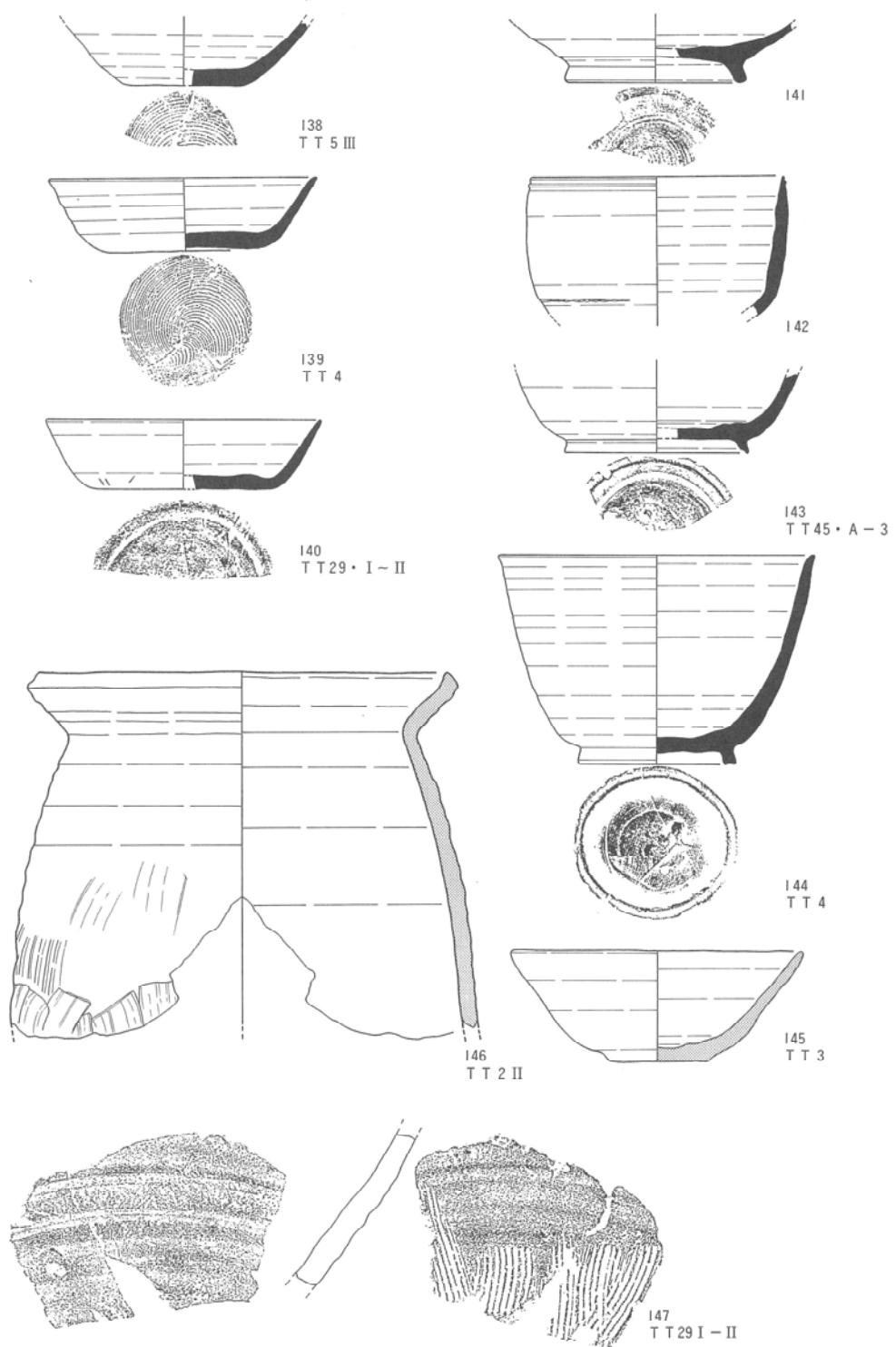
挿図 番号	図版 番号	器種	出土位置	法量(cm)			調整		底部 切離	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面		
76-142		高台付壺	TT29 II	(11.0)		(6.0)	ロクロ	ロクロ		口縁部に二条の沈線 が巡る
76-138		壺	TT 5 III	(10.4)	(5.0)	(2.7)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
76-143		高台付壺	TT4, SK 3 F	(12.2)	(3.4)	(8.0)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	
76-141		皿	TT 5 II	(11.3)	(8.0)	(2.5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切	
76-140		壺	TT29 II	(12.0)	(7.4)	(3.0)	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	
76-147		擂鉢	TT29 II				ロクロ	ロクロ		14・15世紀代の珠洲系陶器
76-144		高台付壺	TT 4 II	13.8	6.9	9.0	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	
76-139		壺	TT4II	11.6	6.2	3.2			回転糸切	R P 6

表8 あかやき土器観察表

挿図 番号	図版 番号	器種	出土位置	法量(cm)			調整		底部 切離	備考
				口径	底径	器高	外 面	内 面		
76-146		甕	TT 2 II	11.8		(15.8)	ロクロ・ケズリ	ロクロ		あかやき土器
76-148		壺	TT 3 II	12.7	4.3	4.8	ロクロ	ロクロ	回転糸切	あかやき土器

整形した後心棒を抜き取るだけのものである。焼成は硬調で良く焼き締まり、胎土・色調は土師器の壺群に同等である。なお、提示資料は出土品の大半で、破片資料も含めて22固体程を数えた。その他、土錘としたものとは異なる細長の形態を持つものが2点(125・126)あり、上記土錘がやや規格的な存在と見做せればそれらからは外れる例と捉えられよう。但し、125には貫通孔がない。ミニチア土器：碗形の壺を模したと考えられる小形土器が4点出土しており、内3例を図化し得た。127・128は丸底風平底、129は平底形態を示すもので、調整は体部外面でナデ、同内面でヘラナデやハケメ、口縁部の内外面でヨコナデ等が認められる。手捏土器：口径・器高共に小さなもので手捏ねにより作られている。器面には指先で成・整形した際の指頭圧痕がそのままに残るものが大半である。

石製品では子持勾玉、紡錘車、砥石、軽石製品(133～136)の各器種の他、鉄石英の剝片類多数、頁岩製の石核1点等がある。子持勾玉は下端の尾部を欠くもののほぼ全形が窺える優品で、背面に3個、腹面に1個、両側面に各2個の子玉が配されている。形態的には頭部勾形で厚みを減ずる尖頭状、胴部断面形が橢円形等の特徴を持つ。材質は滑石かと思われるが、鑑定未了のため詳細不明である。紡錘車は半次品1点が出土したに止まるが、外面の全域に薄く漆を塗布する等特異な仕様で注目される。但し、側縁周は漆の塗布後に再度擦られて殆ど剝落していた。砥石はS T10の東側グリット17-19から1点出土している。灰白色のきめの細かい砂岩製でやや大振りなものである。図の両側縁に磨り面があり、正面および裏面はくぼみ石様の使用痕を止める。その他使途不明の軽石製品やS T 6出土の刀子、精査区他で散見された主として平安時代前半に係ると考えられる須恵器・あかやき土器、さらには珠洲系の中世陶器等があるがここでは図示に止め説明を割愛した。



0 10cm
第76図 遺物実測図(12)

7 まとめ

(1) 遺構

今次調査による検出遺構は表2の遺構一覧に示す通りで、内訳は古墳時代中期末葉～後期初頭に係る時期の所産と考えられる堅穴住居跡10棟、土壙2基、大小の溝跡5条、その他、平安時代に帰属する溝跡、土壙等6基である。以下では、これら遺構の中で主体を占めた古墳時代の住居跡について概観し、形態その他の特徴を略述する。

堅穴住居はST13の様に方形を基調として構築された様子が看取できるが、プラン的に不整なものや一辺が幾分長くなつて長方形を呈するもの等も少くない。これらの規模は一辺の長さ4m弱から6m程までの範囲にあり、4m強のものが主体をしめた。こうした規模的な面からは一般的なこの時期の例に較べて遜色ないものと見ることができる。次に、炉跡等について述べなければならないが、いずれの住居跡にも認める事ができず、これら住居では構築当初から屋内に炉を伴つていなかつたものと判断される。柱穴は検出自体が極めて困難であったが、基本的には住居各コーナーを結ぶ対角線上に配置される四本柱と捉えられる。しかし、掘り込み的には極く浅いと判断され、部分的には認め得ない等の状況も散見された。また、住居跡相互の重複はST13等から少なくとも三期は認められたが、良好な遺物の遺存がないこと他からどの程度の時期幅があるのか等の検討は不能であった。

(2) 遺物

本遺跡の調査からは器種・量共にまとまりある土師器と少量の古式須恵器、および土・石製品が出土している。以下では主として土師器の器種的特徴、組成、年代的位置等を中心として概要を述べ、後に須恵器と土・石製品について種別毎に触ることとする。

土師器では壺・高壺・鉢・甕・壺・壺・甕等の器種が認められた。これらの量的な構成は復元固体や大形破片等からおおよそ壺A～Cが51%、甕F・Gで23%、高壺9%、甕7%、壺6%、鉢3%の順と見做すことができ、圧倒的に壺・甕類の占める割合が多いと理解できる。

a) 器種と特徴

壺(A～C)では非内黒(A1～16)と内黒(B1～6)の手法的二者が認められ、その比率は約2対1で前者が高い。非内黒の壺Aは口縁部の内弯、直上、外反他の特徴から1～16類までに細分でき、この中ではA2・A3・A7が量的主流を占めた。内黒の壺Bは形態的に壺Aとほぼ共通し、B1はA3、B2はA7、B3はA7ないしA8、B4はA7、B5はA8にそれぞれ対比が可能であろう。しかし、B6はこれらに見合う壺A中の類型がなく、やや異質な存在と指摘できる。壺Cは須恵器壺身の忠実な写しと見做せる形態を持つもので、全体的に小振りな作り、口縁部直上、明瞭な蓋受部等の特徴から少なくともII期までには下らない時期の須恵器壺身が手本になったと考えられる。

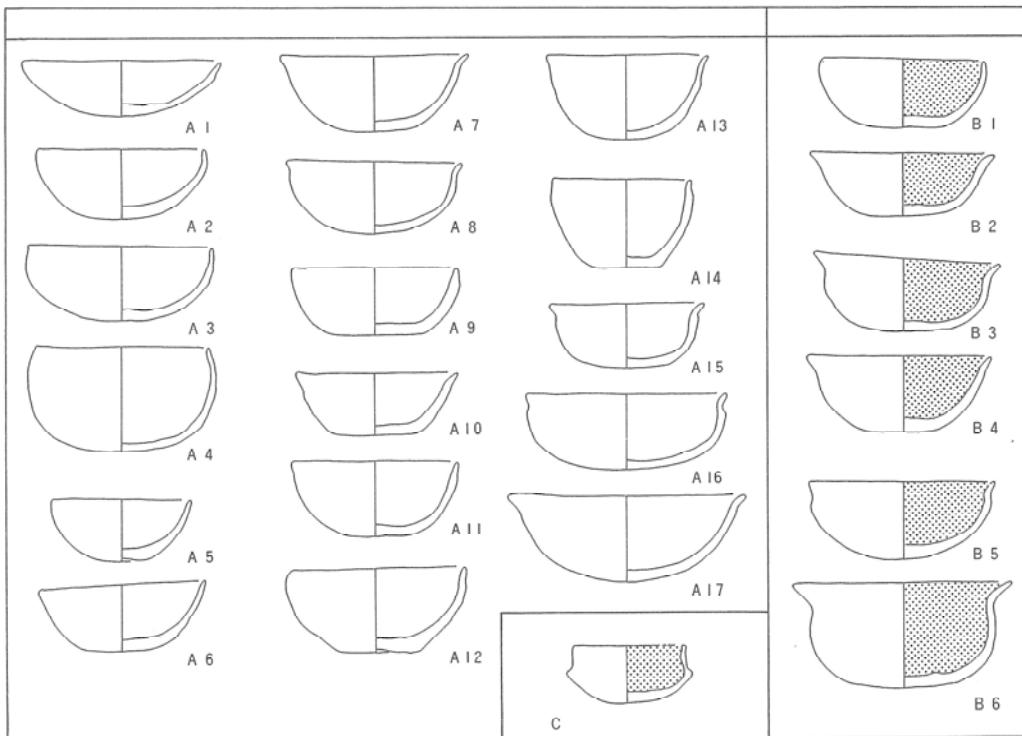
高坏(D)は坏同様、手法的に非内黒と内黒の二者があり、坏部・脚部等の形態的特徴から1～4類に細分される。しかし、内黒手法を別とすれば前型式的な特徴を残存させるD1・D3の形態と、既に述べた坏B形態のB2ないしB4に関連が辿れるD4の類型とに大別でき、後者がより新しい様相を持つものであることは疑い得ない。但し、D3は明らかにヘラミガキを伴う内黒が認められ、内黒形態でも初源的な一例と把握できると共に前型式とは区別すべき手法的特徴を備えると認識される。なお、量的な主体は後者にある。

鉢(E)は量的に僅少ながら形態と法量からE1～3類に細分できた。E1類は内面にヘラミガキを加えて内黒とする最小の形態、E2・3類は非内黒で主として法量的な大小による差異と把握される。しかし、鉢本来の機能が供膳器とするならばE3類は二次的加熱の痕跡を止めること等からここに含めた分類が必ずしも適切でないことは既に述べた。

甕(F・G)は大きく分けて法量的に小さなFと大形のGとがあり、各々その法量と口縁部、体部、底部等の主として形態的相違から細分される。甕Fでは平底と丸底等の底部形態他から1～3類に細分でき、さらに3類は法量と調整手法の差異からa・bに区分された。一方、甕Gは直線的に外傾する口縁部と体部が比較的丸みを持つ形態の1類、口縁部が外反気味に開き体部が長胴形態を取る2類に大別され、大方は2類に帰属すると把握できた。時期的には1類がより古相を示すものと判断でき、2類が後出的なものとできる認識は一般的に首肯されることと考えられる。こうした新旧相互の様相的混在は既に見た坏・高坏にも認められた現象で、これら土師器群が型式的に細分できるか、あるいは過渡期的様相を備えているためのどちらかに起因していると推察される。

壺(H)は頸部あるいは口縁部等の作出と全体的な形状から1～5類までに細分できたが、器形的には1・2類の長頸壺、3・4類の短頸壺、5類の無頸壺と大略三形式に捉えられる。しかし、これらの胎土や個々の形態・手法的特徴他からはいずれも個別的な特徴が顕著であると把握され、さらに時期的相違も一部で指摘可能と考えられた。すなわち、口縁部下端に段を有するH3類は別格として、H2類は厚手の作り、調整で高坏D2に共通する仕様等から見て時期的に幾分後出の可能性が強いのではないかとの印象を受ける。

甑(I)は形態と法量から1～3類に細分されたが、器形に限って見れば鉢形で单孔式の形態(1・2類)と法量的に大きな無底式の形態(3・4類)とに二大別できる。前者ではD1類が複合口縁を持つ等の古相を、D2類は体部から一連で立ち上がる単純な口縁部等の特徴から新しいと判断できる様相を各有すと看取できる。また、無底式形態のD3類は底部の破片資料に限られたことから詳細不明で、D4類に類似する口縁部形態を持つ大形の器形が推測できる程度に止まる。なお、D4類は条間の粗いハケメ等から手法的に他とは仕様を異にすると見做すことができ、時期的隔たりが大きい可能性他を既に述べた。

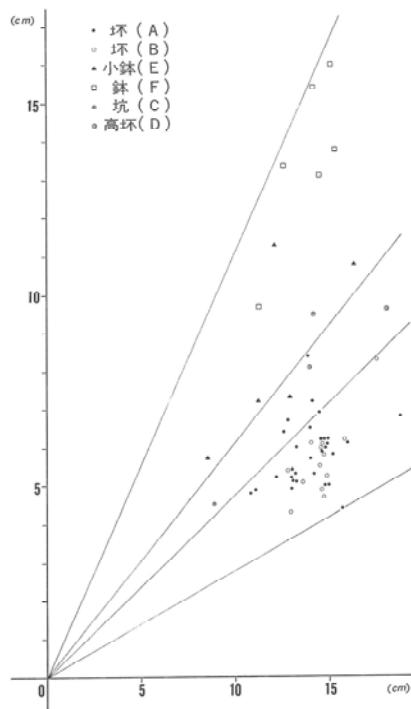


第77図 土師器坏分類図

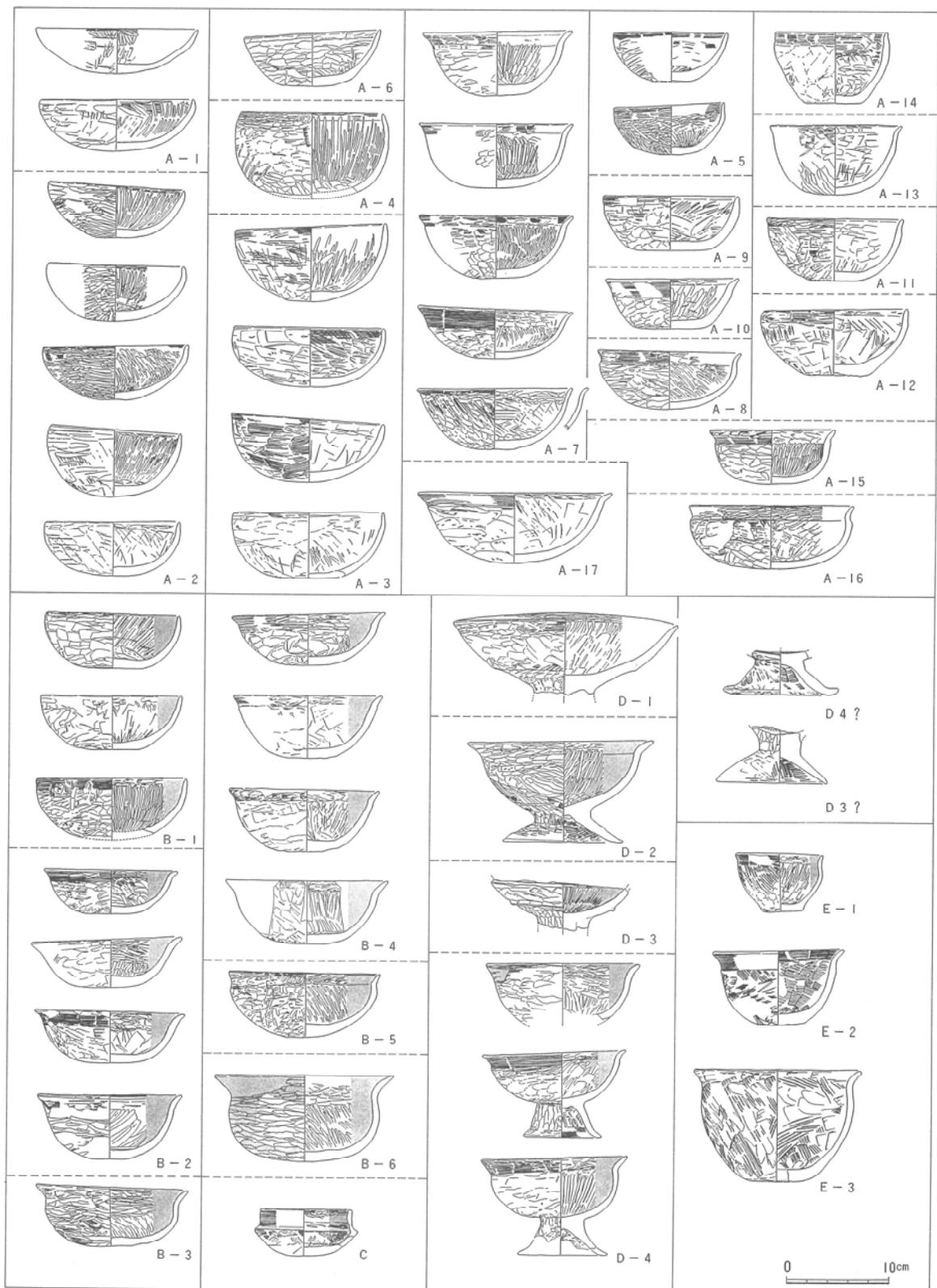
b) 共伴関係と組成

土師器坏他の器種と各類型は幾つかの住居跡やトレンチ内の同一層準等で、一括出土品ないし共伴と認められる状態で出土している。従って、こうした共伴関係の検討と把握からは器種構成他のセット関係が捉えられ、遺構単位あるいは遺構期単位での組成を窺うことが可能と考えられた。

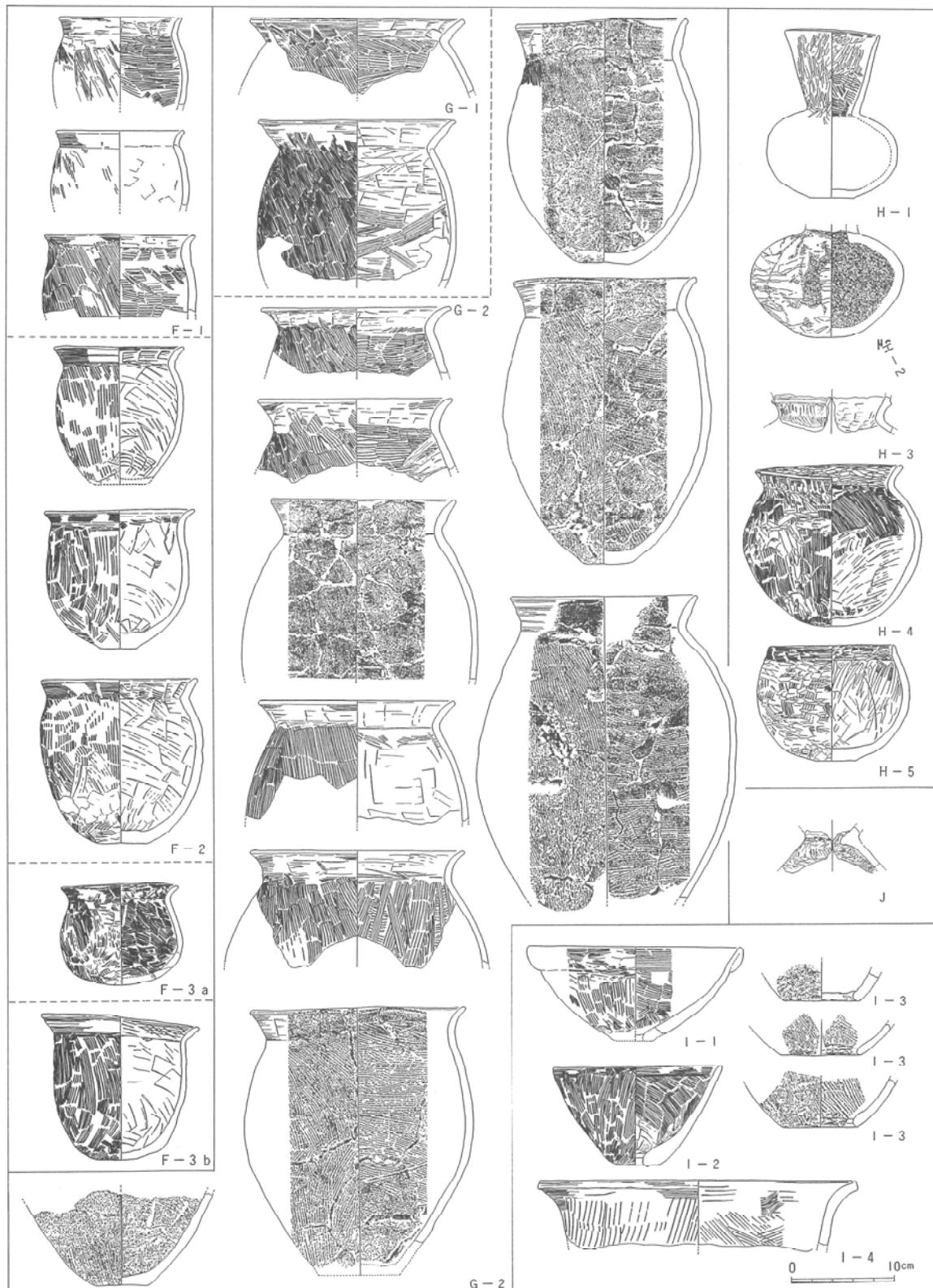
第81図に掲げた資料は住居跡・トレンチ等での代表的な一括資料とできるもので、これらの中でもST10のA2・A3・F2・G2、ST13のA1・A2・A8・B2・I2、ST16のA2・A3・A5・A15・B1・D4およびトレンチ11のIII層出土一括遺物D2・H2・F2・F3b・G2等がより確実性の高い共伴と見做せる。第82図は主な遺構単位の一覧で、土師器各類型の相関と遺構間の時期的検証等を目的に作成している。



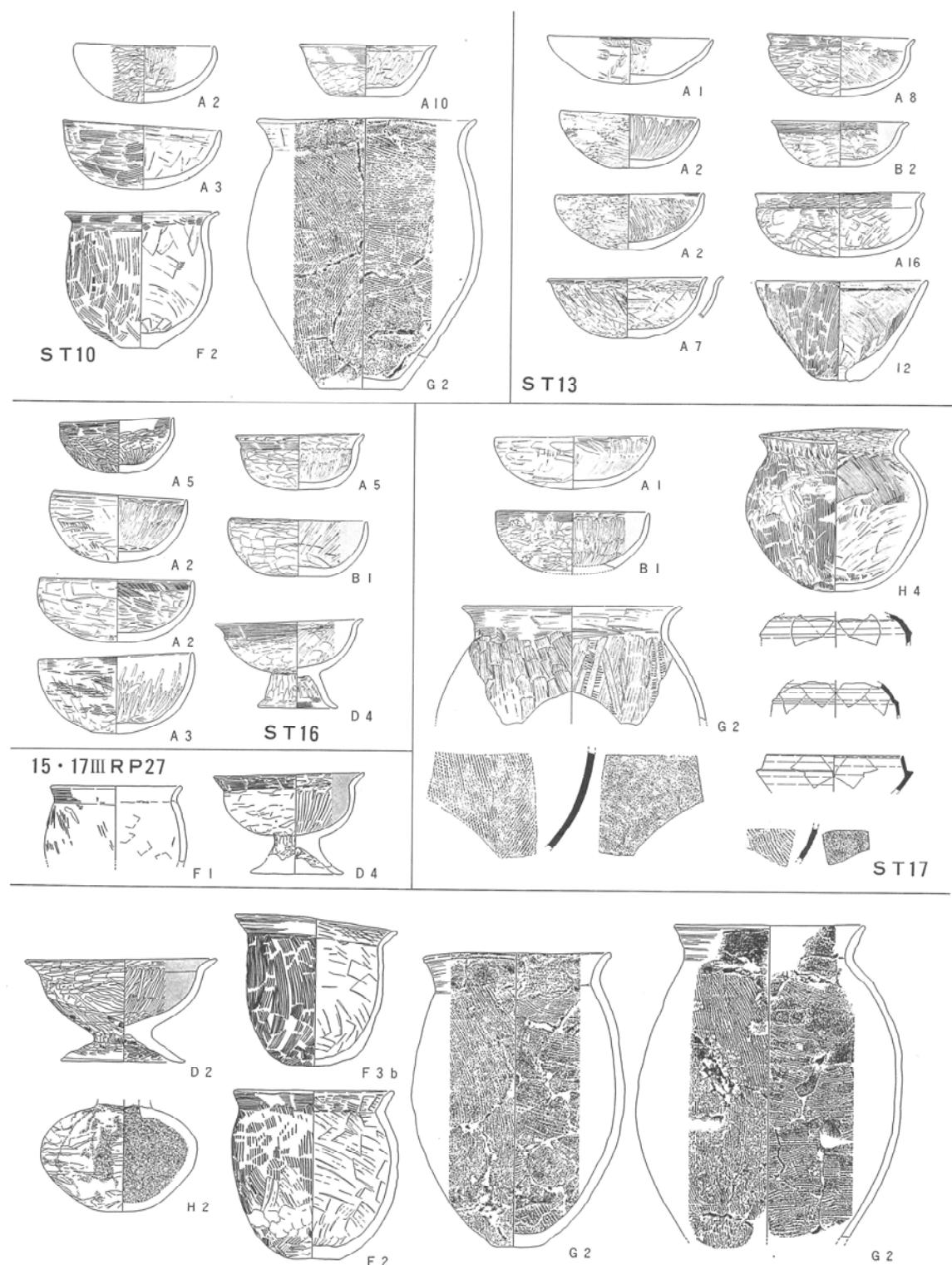
第78図 坯・鉢・高坏の法量



第79図 土師器集成・分類図(1)



第80図 土師器集成・分類図(2)



第81図 土器組成

こうした結果と状況からは器種と類型的に坏(A 2・A 3・A 7・B 1・B 4)・高坏(D 4)・小形甕(F 1・F 2)・大形甕(G 2)等が遺構間での組成率が高くしかも量・時期的にも主体となる一群と見做せた。逆に、坏A 6・A 9・A 12・A 13、鉢E 2、壺H 3・H 5、器台J等は僅少な類型あるいは検出遺構群とは直接的関係がなく、時期を異にする近隣地點等からの流入他の理由が考えられるものである。前者では坏A 6他の類型と鉢E 2・壺H 5等が、後者に壺H 3・器台J等の古墳時代前期にまで遡る一群が各該当しよう。

一方、遺構と遺物の相関から遺構群の同時性を見いだすことは遺物遺存の状況が同質と判断できないことや組成的偏り等から困難であった。むしろ遺構的には近接しすぎて同一

器種\遺構	SD 1	ST 6	ST10	ST11	ST12	ST13	ST16	ST17	SD18	SD21	SD22	SD23	SD24	TT11
A 1														
A 2														
A 3														
A 4														
A 5														
A 6														
A 7														
A 8														
A 9														
A 10														
A 11														
A 12														
A 13														
A 14														
A 15														
A 16														
A 17														
H 1														
H 2														
H 3														
H 4														
H 5														
C														
D 1														
D 2														
D 3														
D 4														
E 1														
E 2														
E 3														
F 1														
F 2														
F 3a														
F 3b														
G 1														
G 2														
H 1														
H 2														
H 3														
H 4														
H 5														
I 1														
I 2														
I 3														
I 4														
J														

第82図 土器組成表

期とするには不自然ながら、ST 10・13・16等で捉えられる様相は合い似通ったほぼ共通する時期のものと考えることができ、逆にこれらの遺構が時期的に近接することを示唆すると判断できなくもない。なお、トレンチ11の一群は坏A・Bの類型を共に欠くこと等から比較検討が十分に行えないが、高坏D 2や壺H 2等の形態から時期的にST 10他の一群とは異なると考えられ、若干後出のものかと推測される。以上のことから、本遺跡出土の土師器群は坏A 2・3・7、坏B 1・2・4、高坏D 4、鉢E 1・2、甕F 2・G 2、壺H 1・4・5、甑I 3・4等が器種・類型の中でも中核を占める様相と把握でき、具体的遺構単位の資料としてST 10・13・16等の一括ないし共伴遺物を代表例として上げができると考えられる。これらは従来不明であった庄内地方における当該期土師器の様相を窺う上で基準に成り得る資料と捉えられ、これまでの内容を下に「清水新田式」の型式設定を行ってこれから研究に資することも可能なことと判断される。年代に付いては必ずしも明確な根拠を持たないが、出土須恵器が編年上TK47型式～MT15型式に併行する時期のものと見られること、坏Bなどの諸相から黒色処理出現の頃にかかり、この段階では既に一定量が組成されると認められること等から6世紀第1四半期を中心とする時期が考定される。対比資料は石川県漆町遺跡第14群土器、新潟県域ではいまの所良好な資料が見当たらないが馬場上49号住居例に後続し田伏II式よりは前出の一群と推定できる。

c)須恵器

須恵器は固体数にして坏身2～3点、坏蓋7～8点、甕3～4点と僅少で、量的に土師器の1%にも満たないと捉えられる。出土状況ではS D18・21～24溝跡とS T17住居跡等の遺構内から大半が出土しており、概ね土師器他の遺物と時期的に近い関係にあると考えられた。しかし、特徴等把握の困難な破片資料が殆どである。この内、部分的ながら復元実測のできた幾つかについて述べれば、坏蓋の第73図89・91は全体に小振りな作り、天井部と口縁部の境界を成す稜線の鋭さ、口唇部分の特徴的整形等の仕様からTK47併行と判断される。また、壺の頸部資料(第73図96)も竹管様隆線区画を挟んで施される丁寧な櫛描波状紋等から同じくTK47相当と捉えられた。甕の体部資料については判然としないが仕上げのナデ整形によりアテの痕跡を殆ど止めない等の調整が認められ、やはり古相を示す特徴の一つかと思われた。その他、坏身・坏蓋共に法量の幾分大きな一群がS T17・S D21等の覆土から出土しており、これらについてはMT15に併行する時期が考えられる。

d)石製品

石製品では子持勾玉・紡錘車・砥石・軽石製品等が検出され、滑石製の子持勾玉が注目された。類似例を求めるに秋田県西目遺跡に1例、山形県鷺ノ森遺跡に1例が認められ、形態・法量等で良く共通すると判断できると共に分布的側面からも興味が持たれる。

参考引用文献

- 1)氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14東北歴史学会
- 2)志間泰治 1958「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」P43～P51『考古学雑誌』第43巻第4号日本考古学会
- 3)田辯昭三 1966「陶邑古窯跡群I」平安学園考古学クラブ
- 4)柏倉亮吉 1969「古墳文化」『山形県史考古資料』資料篇11山形県
- 5)川崎利夫 1972「庄内平野の土師式土器—鶴岡市矢馳出土の土師式土器を中心として—」P10～P18『庄内考古学』第11号
- 6)閔 雅之 1972「田伏玉作遺跡—糸魚川市田伏遺跡発掘調査報告書—」糸魚川市教育委員会
- 7)小野 忍 1972「山形市天神山遺跡」P1～P18『山形考古』第2巻第2号山形考古学会
- 8)加藤 稔 1973「最上川流域における古墳文化の展開」P109～P164『最上川流域の歴史と文化』
- 9)角田清美 1976「庄内平野の地形について」P1～P20『庄内考古学』第13号 庄内考古学研究会
- 10)岸本雅敏他1978「富山県小矢部市竹倉島遺跡発掘調査概報」富山県教育委員会
- 11)川崎利夫 1979「山形県における土師器編年試論」P1～P13『庄内考古学』第16号 庄内考古学研
- 12)小野 忍 1980「山形県における古式須恵器の様相」P1～P20『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会
- 13)川崎利夫 1980「古墳時代の庄内地方」P21～P30『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会
- 14)佐藤庄一他1983「閔B遺跡第2次発掘調査報告書」県埋文報第68集 山形県・山形県教育委員会
- 15)山田邦和 1985「第2節北陸地方の須恵器」P41～P47『福井市宿布古墳』福井県教育委員会・財団法人古代学協会
- 16)酒井英一 1986「東田川郡藤島町三和出土の古式土師器」P75～P76『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会
- 17)田島明人 1986「IV考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」P101～P181『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 18)阿部明彦 1986「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(1)」県埋文報第106集 東北電力KK・山形県教育委員会
- 19)阿部明彦 1987「三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)」県埋文報第107集 日本道路公団・山形県教育委員会
- 20)伊藤隆三 1987「富山県小矢部市道林寺遺跡」小矢部市埋蔵文化財調査報告書第22冊 小矢部市教育委員会
- 21)小松正夫 1987「宮崎遺跡発掘調査報告書」西目町教育委員会・秋田市遺跡保存会

VI 総 括

今次の矢馳A遺跡、矢馳B遺跡、清水新田遺跡の調査はいずれも昭和62年度県営ほ場整備事業(鶴岡西部地区)に係ることから県教育委員会が主体となって実施した緊急発掘調査である。これら調査の内容と成果については既にIII~V章で述べた通りであり、従来殆ど知られていなかった庄内地方の古墳時代に関する具体的知識が飛躍的に増大したと評価できる。以下に遺物・遺構の側面から調査成果の意義を概括的にまとめてみたい。

遺物、特に土師器等の土器様相からは北陸的ないしは東北日本海沿岸地域に共通する在り方と認識でき、当時の文化的・政治的絆帶が既に原北陸道域を中心として確固たるものであったと推察できた。こうした文化的基盤はその後もより強固なものとして継続的に発展すると捉えられ、歴史時代に入っても明確にその影響力下にあることは衆目の一致した見解である。例えば、叩きのある長胴丸底甕等のあかやき土器と呼んでいる煮沸形態土器の主体的分布、九世紀前半代までの供膳形態他に占める須恵器の卓越現象と土師器の僅少性等が上げられ、内陸盆地(陸奥側)におけるそれとは大きな様相的違いを持つ等は既往の事実と受け止められる。一方、遺構の面からは矢馳A遺跡他の成果から住居形態が竪穴式であることや構築等方法で周溝の有無等から大きく二者に区別できること、炉の形態でカマドと地床炉の二様があり、後者が主体的であったこと等が知見上の特色として上げられる。また、居住域を区画するような溝状遺構をほぼ例外なく伴っていると考えられ、これら溝跡の起源が人工か自然かから始まって、人工であるとすればその機能は何であったのかが論議の対象になるべきと考えられた。しかし、調査が部分的である等の限界から性格把握までの情報が得られていない。従って、個別的で具体的な資料とある意味では見かけ上の傾向性が窺えた程度とできるに止どまり、遺構の時期区分と組合せ等構成から導かれる集落の内容、時期的推移による遺構他形態の変化等、主要な問題が殆ど解決されないままに過ぎたと言わざるを得ず、今後に残された課題は大きいとしなければならない。

次に、矢馳A遺跡、矢馳B遺跡、清水新田遺跡の三遺跡について個別的な調査のまとめを行い今次調査の成果とその他の確認をして報告を終えることとする。

矢馳A遺跡：遺跡は南北方向に延びる自然堤防上に立地し、範囲は東西150m、南北200m程の規模を測る。調査はトレンチ掘りから始めこの結果を下にして遺構と遺物の集中する地域約5000m²を対象地域として拡張し、さらにこの内の約3000m²について精査を実施している。調査の結果、古墳時代後期中葉を主体とする遺構と遺物が多数検出され、住居形態他遺構の具体的在り方、炉形態に於ける地床炉とカマドの二者等が注目された。重複等を含めて確認できた住居跡は24軒であった。一方、遺物は土師器を主体として整理箱にして

200箱におよぶ出土量があり、S T13・31、S D76等の遺構からまとまりある資料が得られている。また、遺物全体量の1%にも充たないながら主に北陸地方から移入されたと考えられる古式須恵器が供膳形態の小形製品を中心として出土している。これらの幾つかは、S T13住居跡等の遺構内で土師器と共に共伴関係にあり、主体を占める土師器群の編年や年代を推定するに当たって非常に有用であると判断できた。須恵器編年上の型式はT K10等に対比できるものが大半であることから、6世紀中葉を中心とする年代が推定できる。

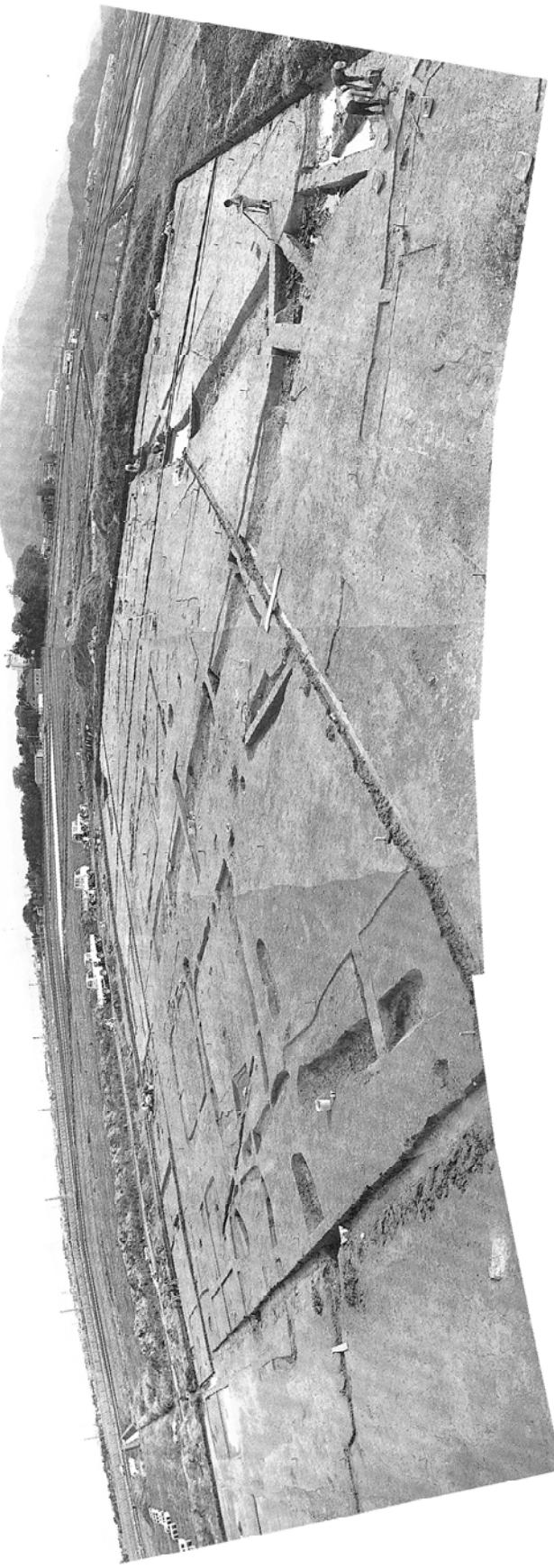
その他、紡錘車、砥石、勾玉、管玉等、剣・円盤形模造品他の石製品と手捏土器、丸玉・管玉等の玉類、土製紡錘車、土錐、支脚等土製品が出土しており、量的比率は別としても当時の遺物内容とすれば他との比較でも遜色がない。なお、土師器の編年的位置付けに関連して、既に川崎利夫氏により「矢馳式」の型式設定が成されていることは先述の通りである。従って、本来ならば今次調査で得られたS T13・S T31・S D76等での良好な一括資料の検討を通じてその吟味・検証を試み、内容把握と評価の修正を行うべき立場にあつたが遺憾ながら幾つかの否定的見解を述べた結果に止どまり、意図した目的が充分に果たせなかつた。川崎氏の見解は研究史的に正当であり、一早くこれら遺物の重要性に注目された姿勢は大きく評価さるべきであることに何等の疑いもない。以上のことから当初設定された「矢馳式」自体は否定ではなく保留的に扱うべきであると考えられ、今後の研究により6世紀中葉を前後する時期の土器様相を深化、具現できるものと確信している。

矢馳B遺跡：調査は工事の方法により遺跡の大方が保存できると判断できたことから、対象を破壊の避けられない道路・排水路等に限ってトレンチ方式で実施した。従って、調査面積も遺跡域に係る360m²程に限られる結果となつた。調査の結果、古墳時代・古代・近世にかかる遺構と遺物が検出されたが、この内では古墳時代に関連する遺構・遺物が主体を占めた。遺構ではS T12堅穴住居が注目でき、出土遺物他から隣接する清水新田遺跡の主体的時期にほぼ併行する集落跡であったと推察できる。すなわち、これらの遺跡相互には何等かの有機的関連があり、村落形態の在り様を示す一端と捉えられたが、如何んせん調査の目的と規模等から遺跡の性格その他の詳細までは明らかに成し得なかつた。

清水新田遺跡：調査は前記同様、ほ場の面工事による改変が大きいと見られた部分約1000m²程度を対象として実施している。調査の結果、住居跡10棟他の遺構と整理箱にして50箱程の遺物が検出された。遺構は検出が極めて困難であった等の状況があり充分な成果が得られたとは言い難い結果であった。しかし、遺物では良好な一括品が得られており、その評価において6世紀前半の基準資料に成り得ると判断できたことから、庄内南半地域を代表する「清水新田式」の型式設定も可能であろうとの見通し他を述べた。そこでは、内黒土器出現期の様相にかかる坏B形態の存在と移入須恵器(T K47併行)が注目される。

図 版

—矢馳A遺跡—



検出遺構全景（北西から）

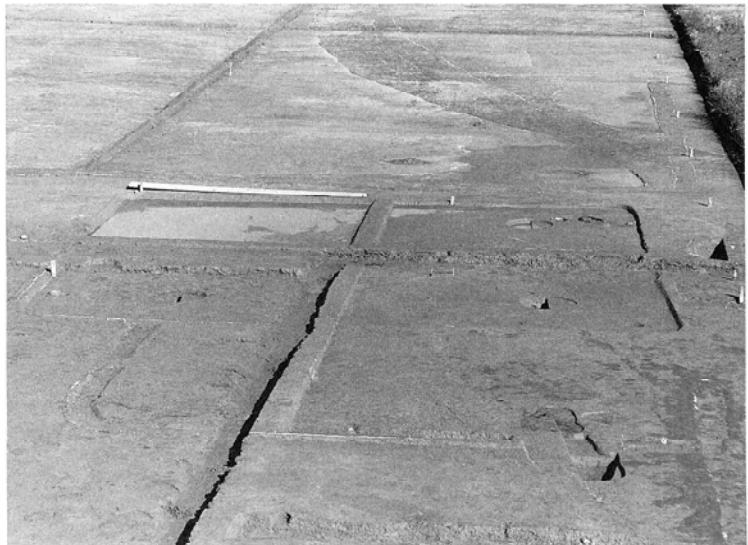
図版2



調査風景



説明会風景



S T 3、4、12住居跡
(南から)



S T 5、8、9、14
住居跡 (北西から)

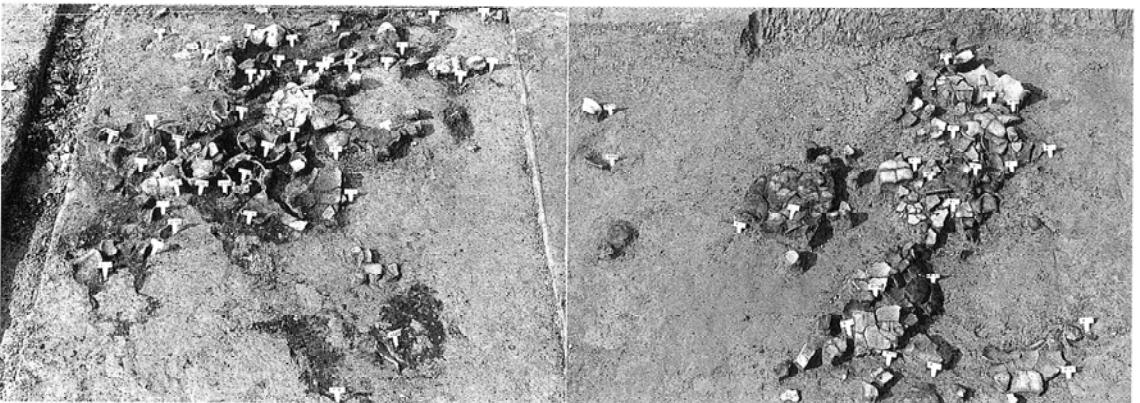


S T 13住居跡 (南から)

図版4

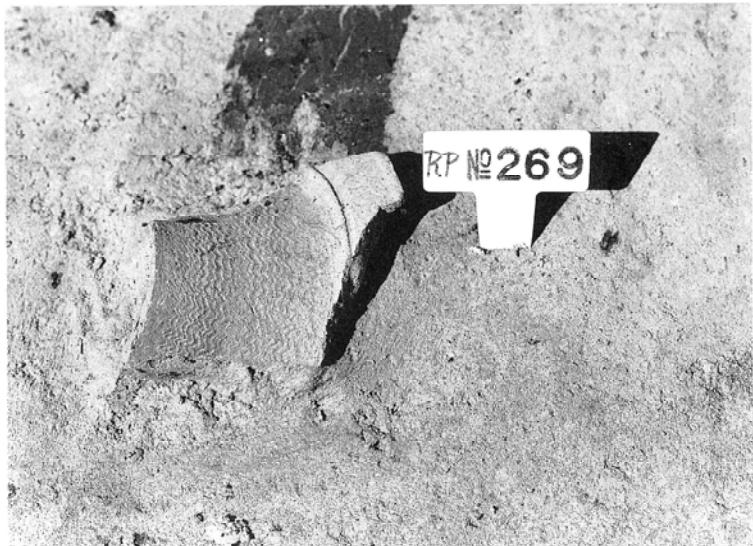


S T 13住居跡（南から）



S T 13遺物出土状況

S T13・R P269出土状況



S T13・R P361出土状況



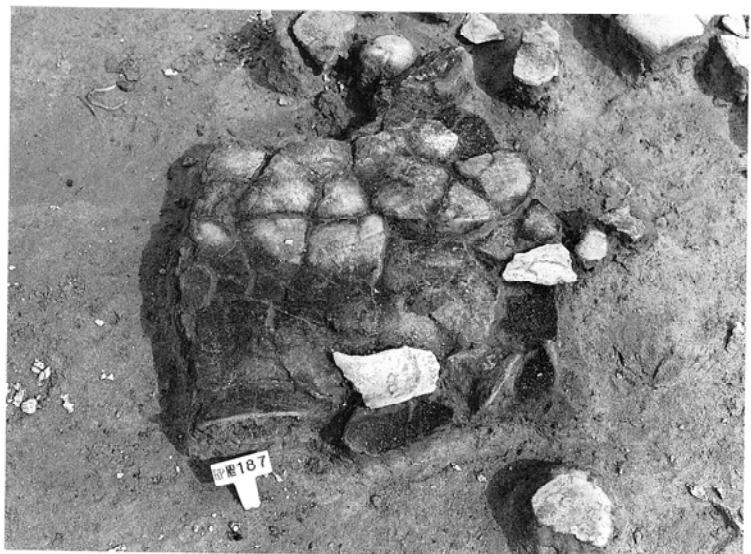
S T13・R Q471(勾玉)
出土状況



S T 13・R P 473、474
遺物出土状況

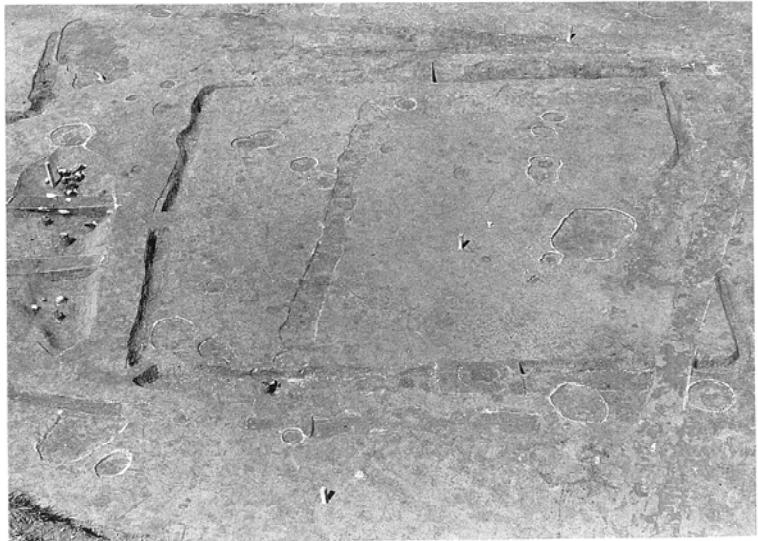


S T 13・R P 187出土状況

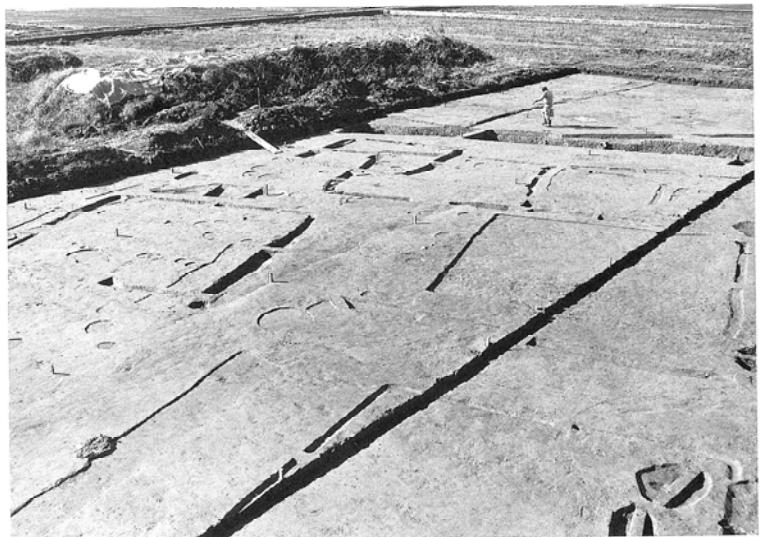


S T 13・R P 373
(ミニチュア土器) 出土状況





S T 22、23住居跡
(南から)

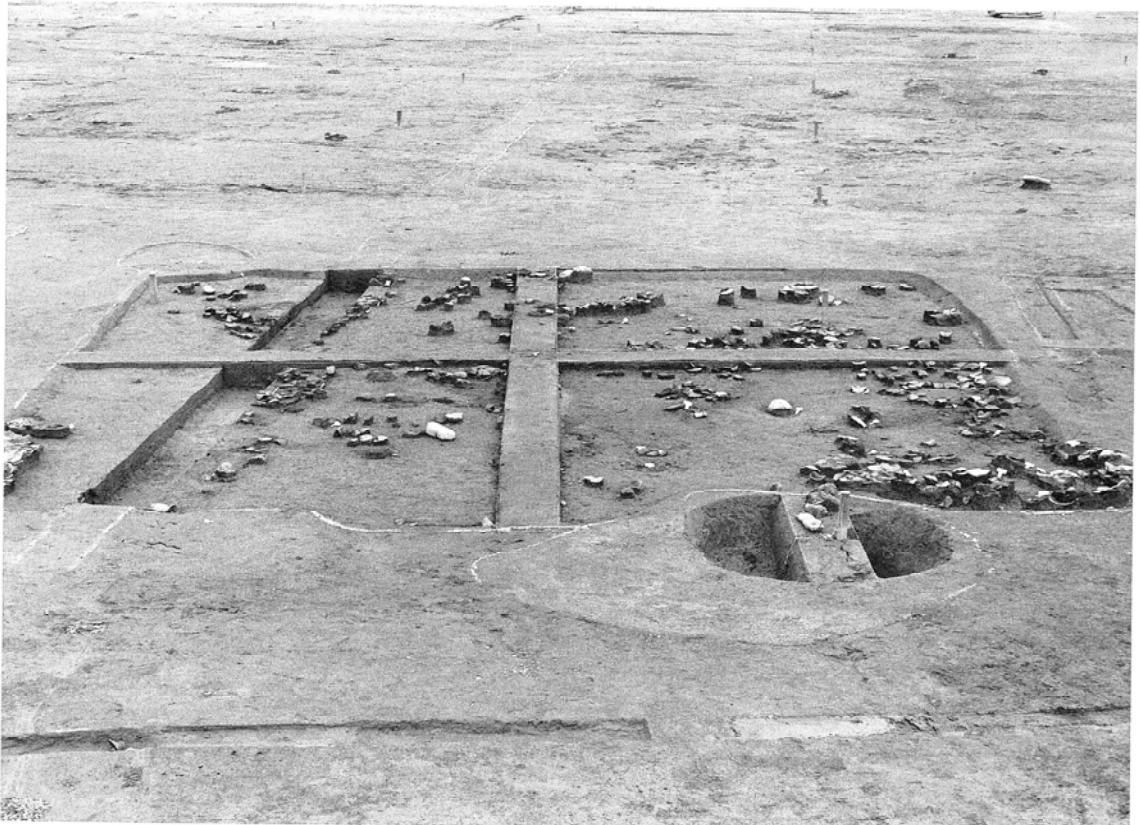


S T 22、23、24、25、26、27
住居跡 (北東から)

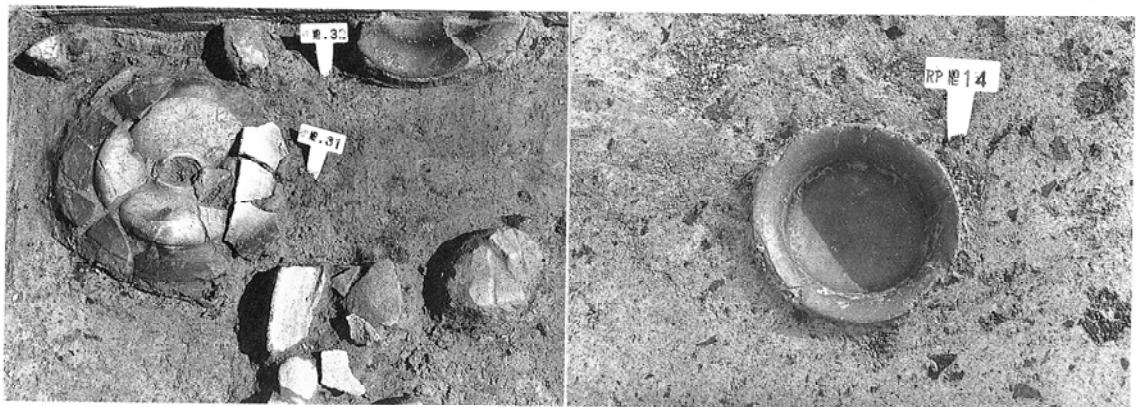


S T 31住居跡 (南から)

図版8



S T31住居跡（南から）



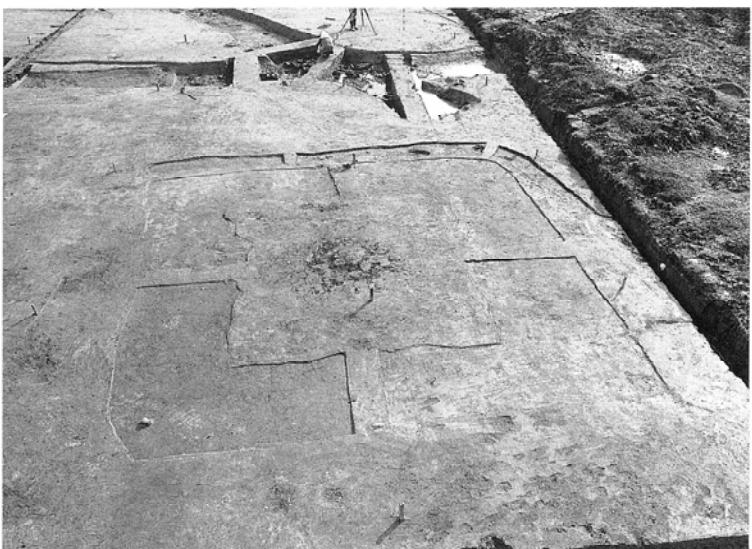
S T31遺物出土状況



ST 41・かまど
(北東から)

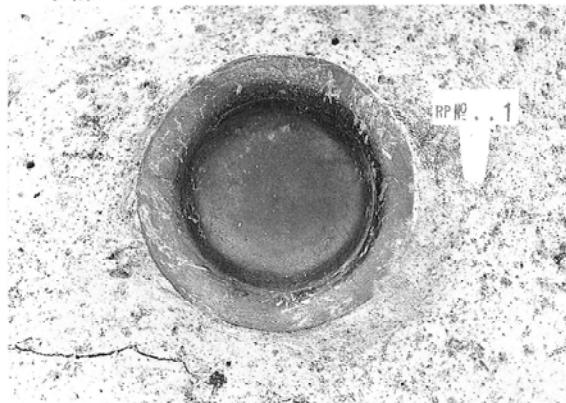


ST 47住居跡 (東から)

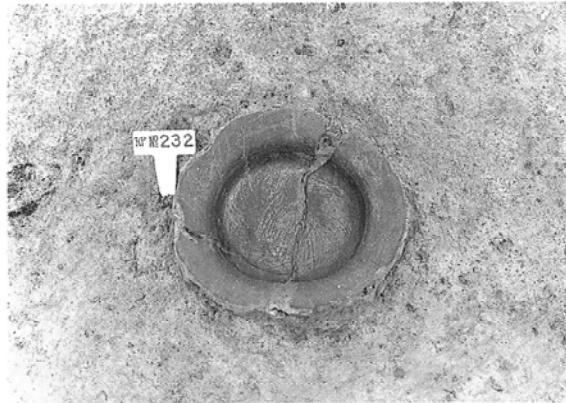


ST 70住居跡 (北から)

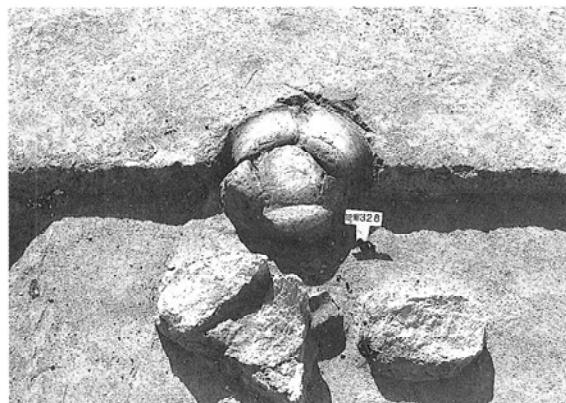
図版10



S T32 R P 1



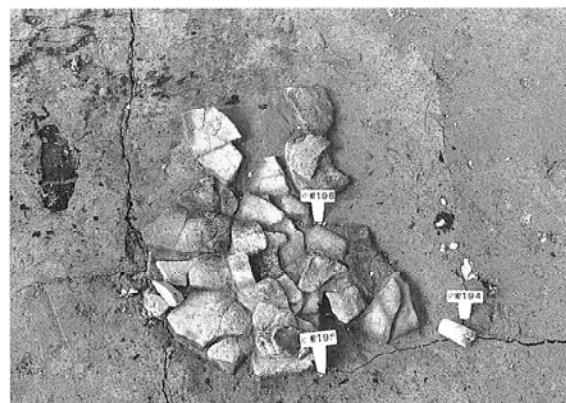
S D37 R P232



S T28 R P328



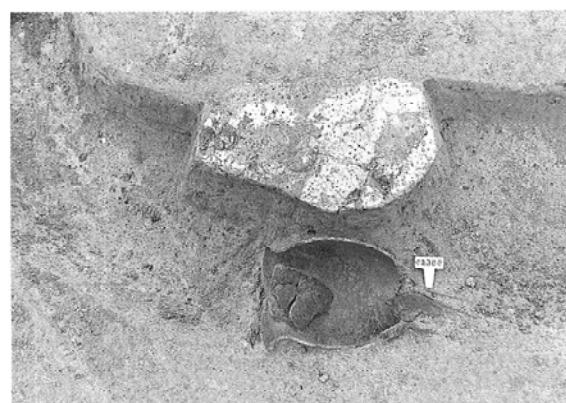
S T8 R P479



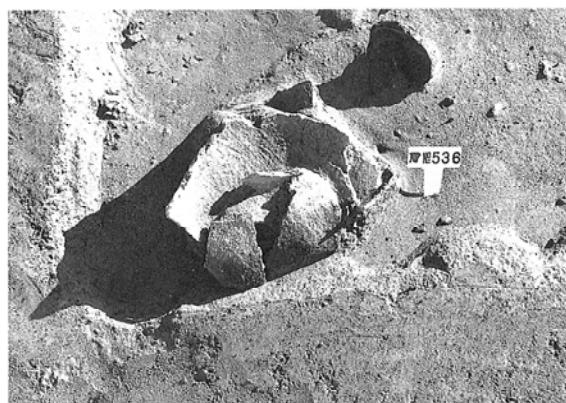
S T33 R P194~196



S T28 R P342

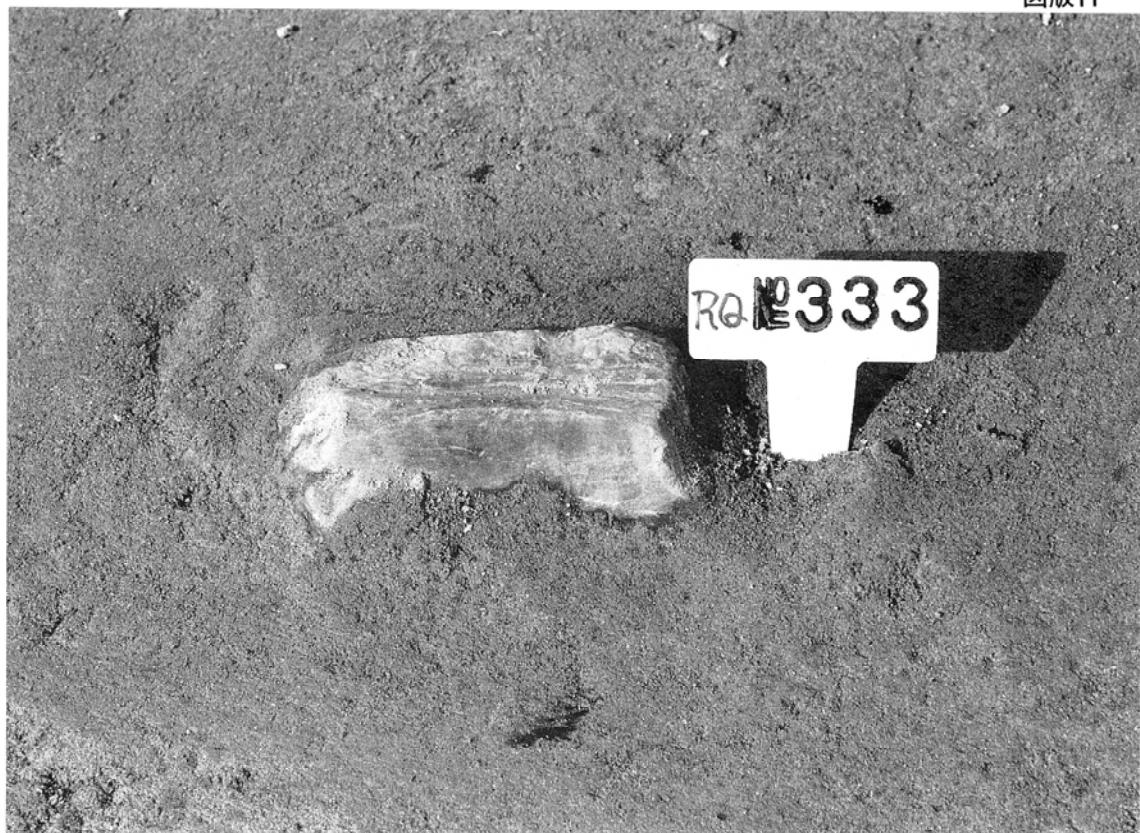


S T14 R P388

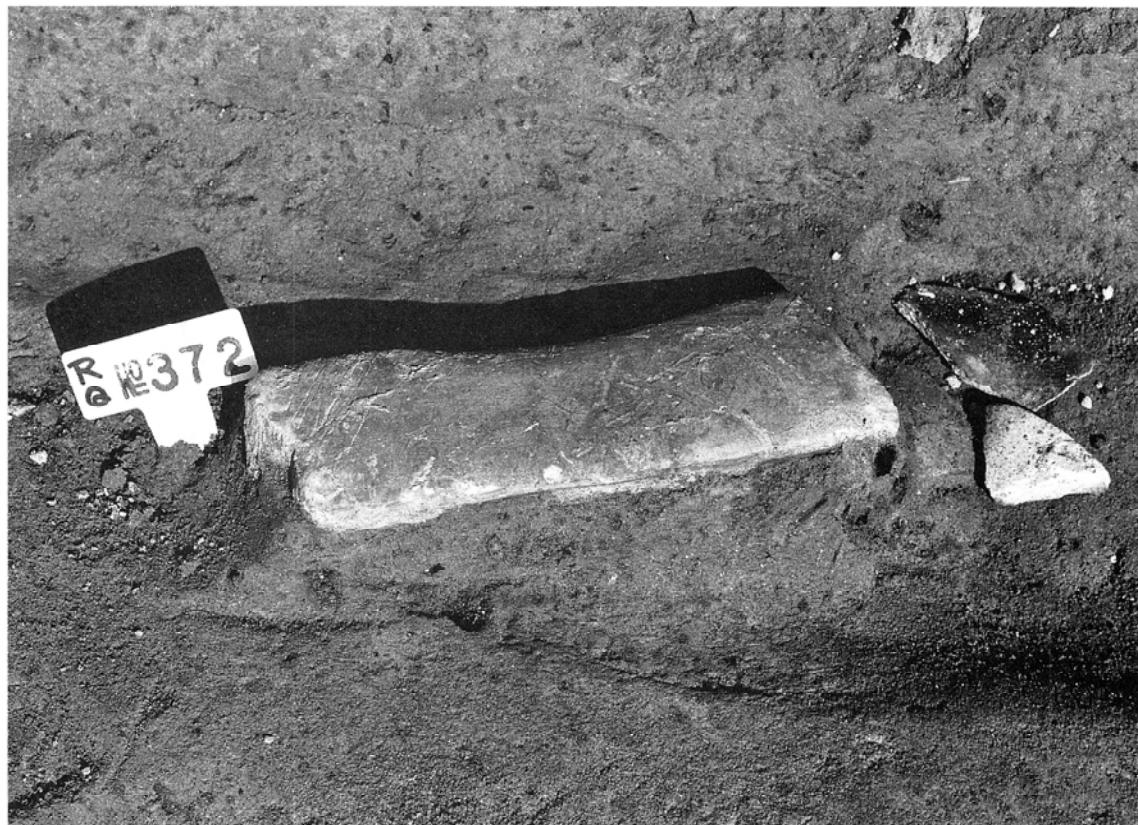


S T14 R P536

遺物出土状況(1)



S T 3 R Q 333

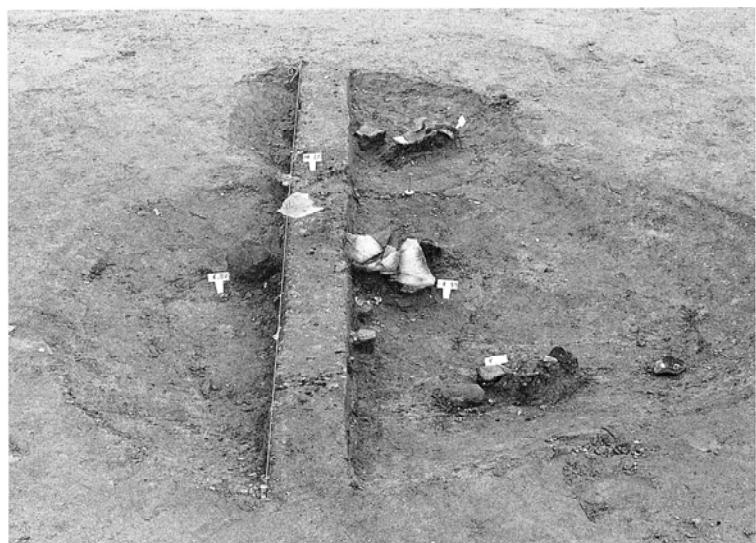


S T 5 R Q 372

図版12



SK 43土壤（南から）



SK 44土壤（南から）



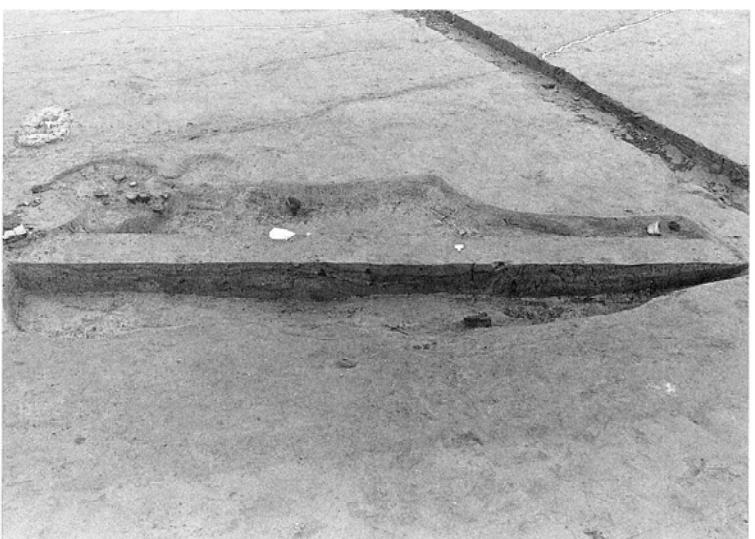
SK 58土壤（南から）



S K66土壤（西から）



S K67土壤（北から）



S K69土壤（北から）

図版14

S X 46遺物出土状況
(東から)



S X 46遺物出土状況



S X 46遺物出土状況





SD 76溝跡（北から）



SD 35溝跡（南東から）

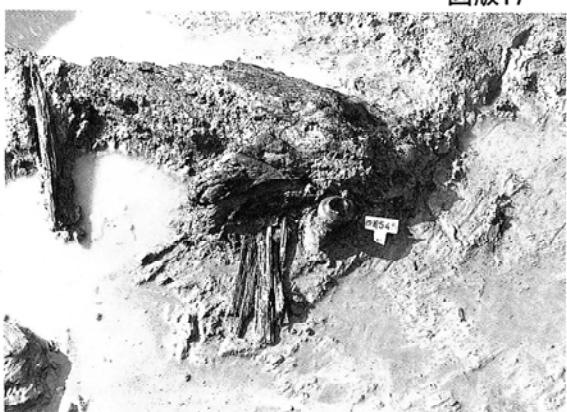
図版16



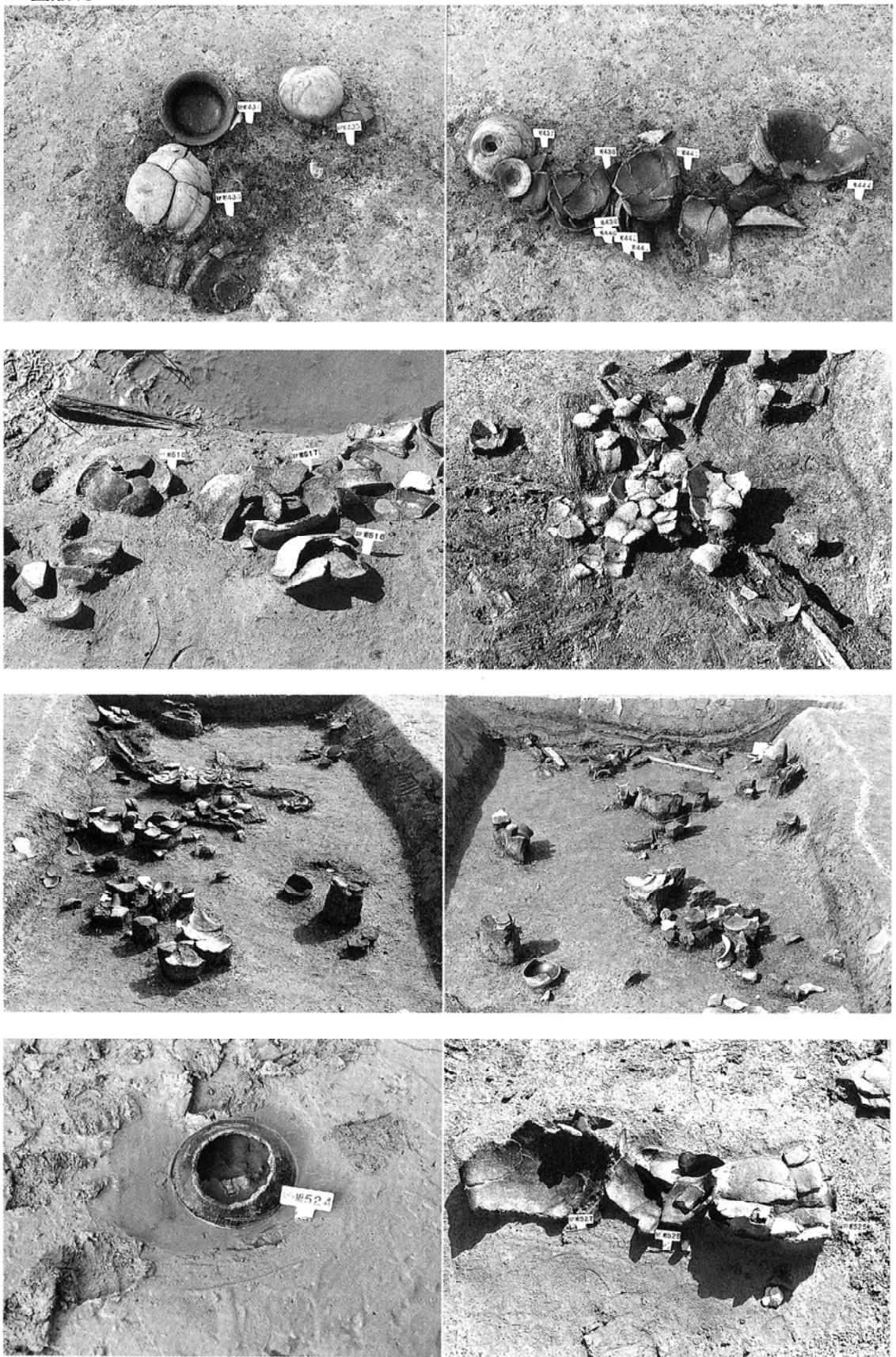
S D 35、76遺物出土状況（東から）



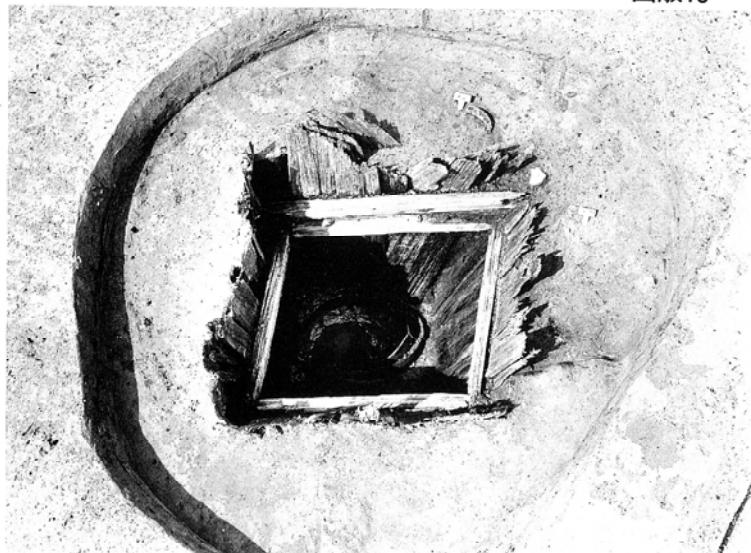
S D 35、76遺物出土状況（東から）



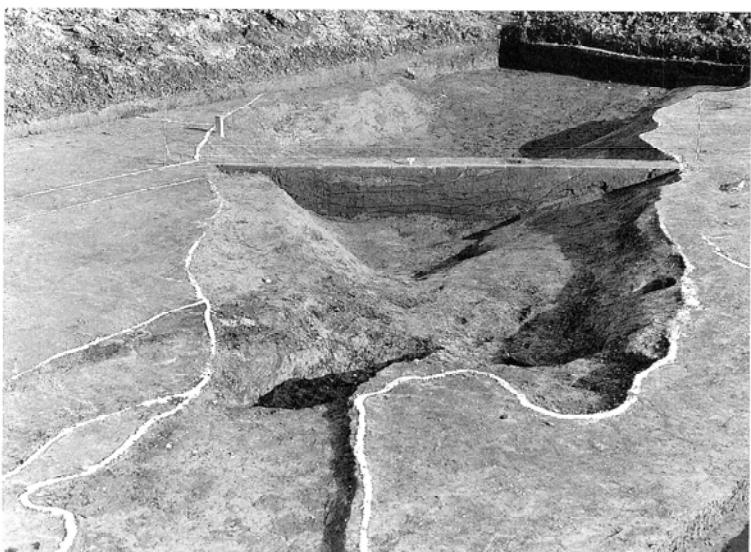
図版18



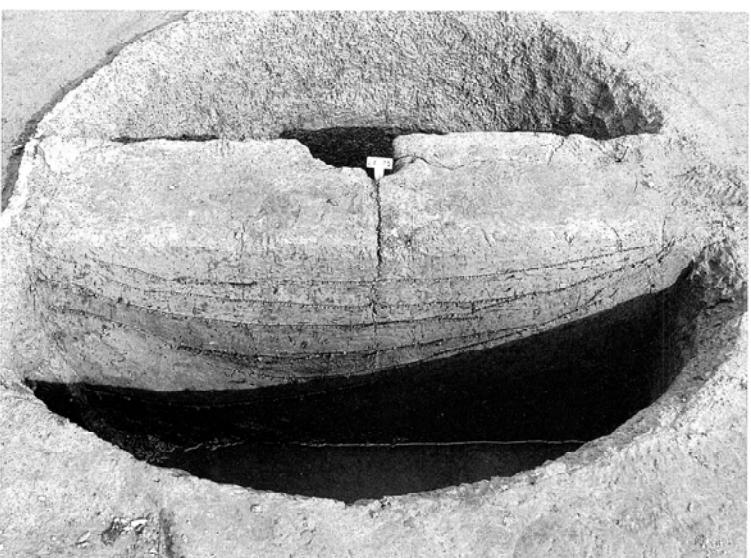
SD 76、35遺物出土状況（上3段SD 76、下1段SD 35）



S E 15井戸跡（南東から）

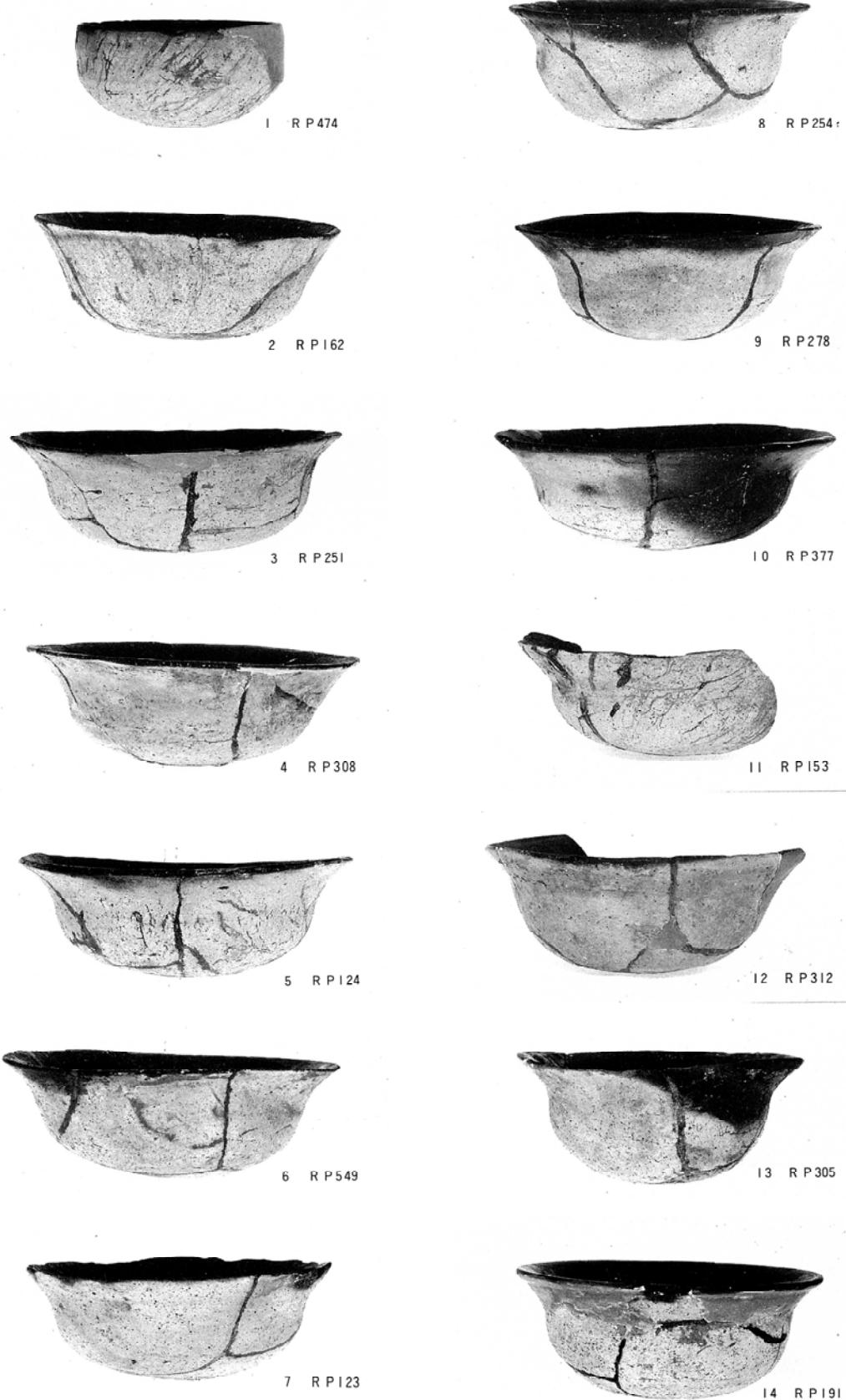


S D21溝跡（北西から）



S K75土壤（西から）

図版20





1 R P123



3 R P307



2 R P473



8 R P272



4 ST13Y



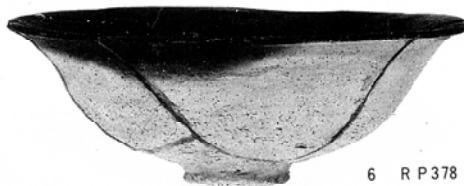
9 R P472



5 R P192



10 R P198



6 R P378



11 R P186



7 R P252

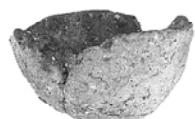
図版22



1 R P 171・184



3 a SX 16 F



2 R P 373 Y



3 b



4 a ST 13 F



4 b



5 R Q 239



6 a R Q 471



6 b



6 c



6 d

※ 1は1/4.5、3は1/3、6は1/1、他1/1.5



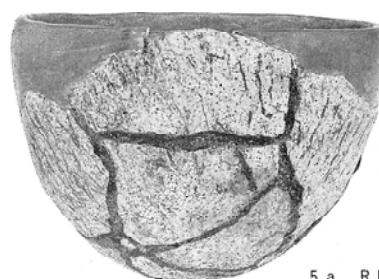
1 R P14



3 S T31F



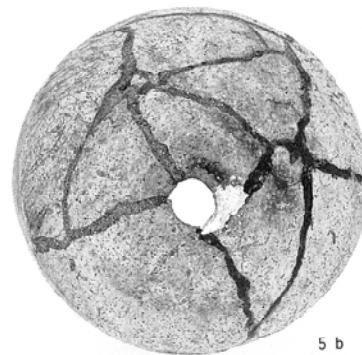
2 R P450



5 a R P34



4 R P54



5 b



6 R P11



7 R P8

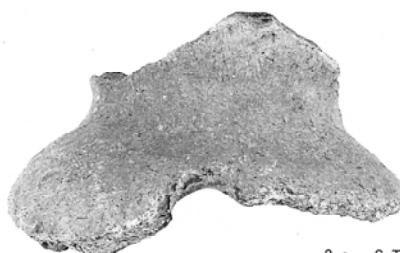
図版24



I a R P 44



I b



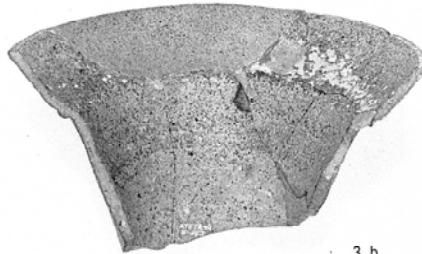
2 a S T 31 F



2 b



3 a 29-44 II



3 b



4 a 30-35 III



4 b



5 R P 58

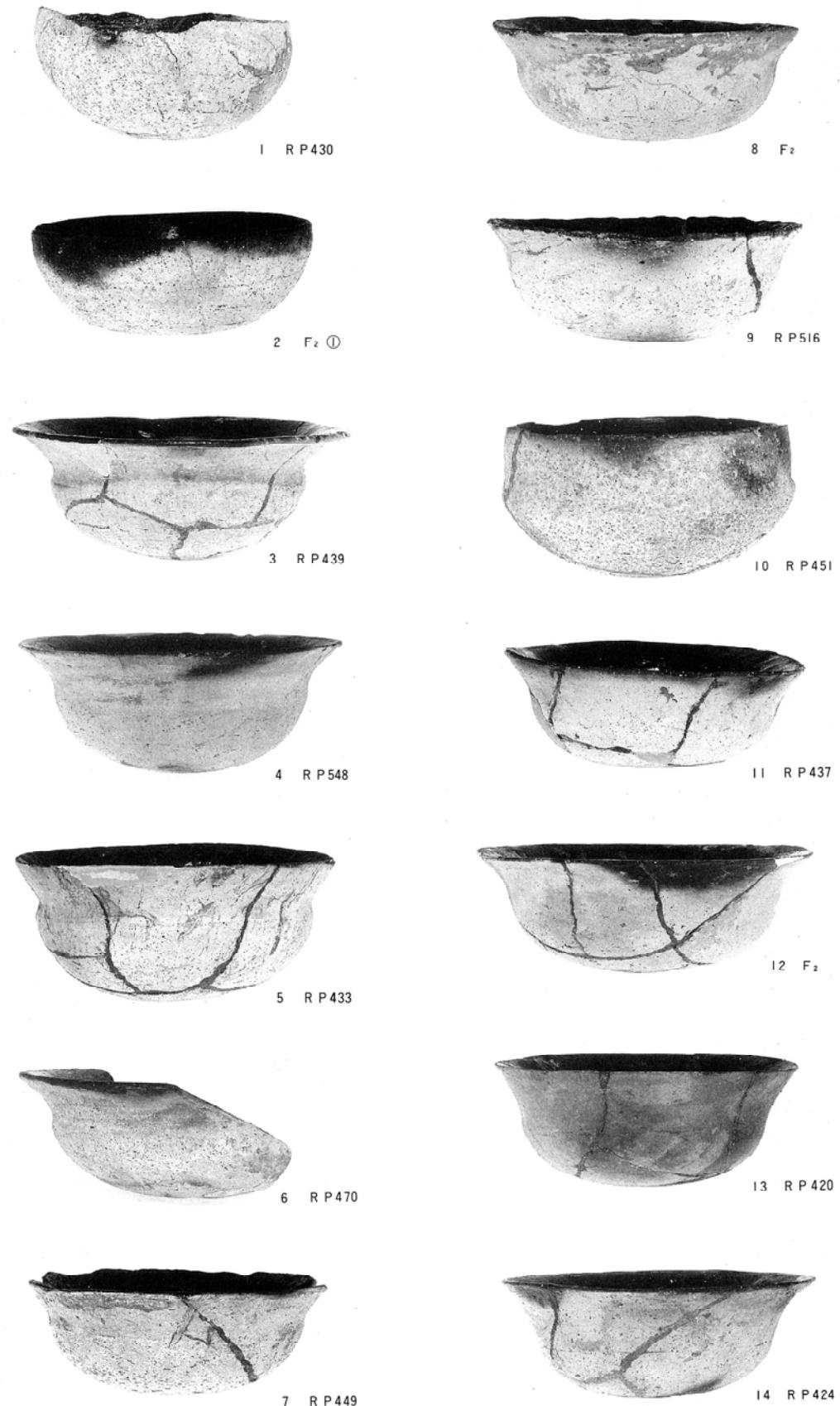


6 S T 3 R P 100



7 28-48 III

※ 1 ~ 4・6 は 1/3、5・7 は 1/4.5



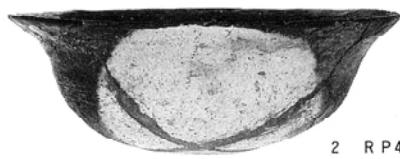
図版26



I R P 2



8 R P 432



2 R P 465



9 R P 438



3 R P 425



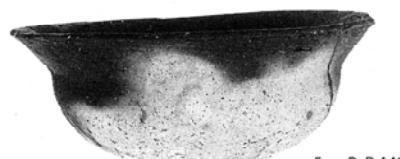
10 F



4 R P 442



11 R P 442



5 R P 443



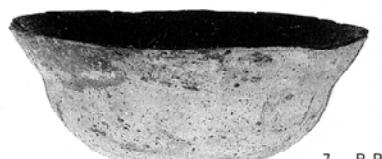
12 R P 438



6 R P 441



13 R P 438



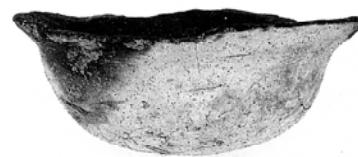
7 R P 447



14 R P 436



1 R P 434



2 R P 435



3 R P 537



7 R P 541



4 R P 437



8 R P 547



5 S D 76① F 1 ~ 2



9 S D 76・F 1 ~ 2



6 R P 540

図版28



I R P 546



5 R P 446



2 Fz



6 Fz



3 Fi



7 Fi



4 R P 486



8 Fi

※4.7は1/4.5、他は1/3



1 R P534



3 R P421



4 R P545



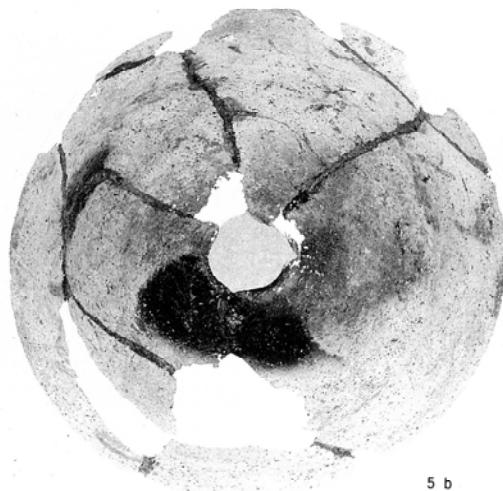
2 R P533



6 a R P418



5 a R P444



5 b



6 b

※ 1・2・6は1/4.5、3・5は1/3、4は1/1.5

図版30



1 S T14・R P388



6 S T32・R P1



7 S D35・R P455



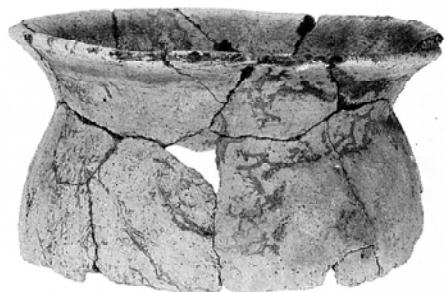
2 S T14・R P393



8 S D35・R P524



3 S T41・R P236



9 S T41・R P233



4 S K44・R P12



10 S T47・R P88



5 S T47

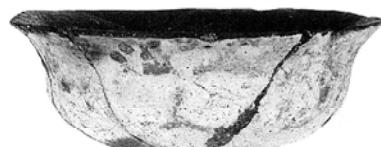


11 S X80・R P23

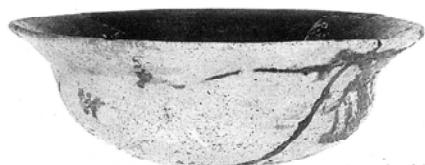
※1は1/4.5、他は1/3



I 28-48III • RP 5



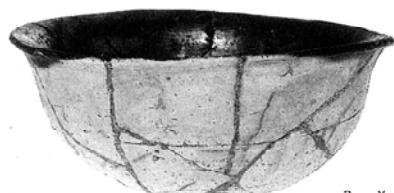
4 X - 0



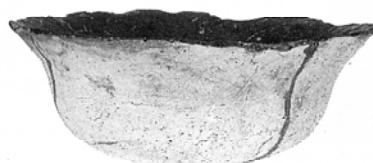
2 29-36III



5 X - C



3 X - 0



6 SD 76 • RP 432



7 31-56III



9 31-56III

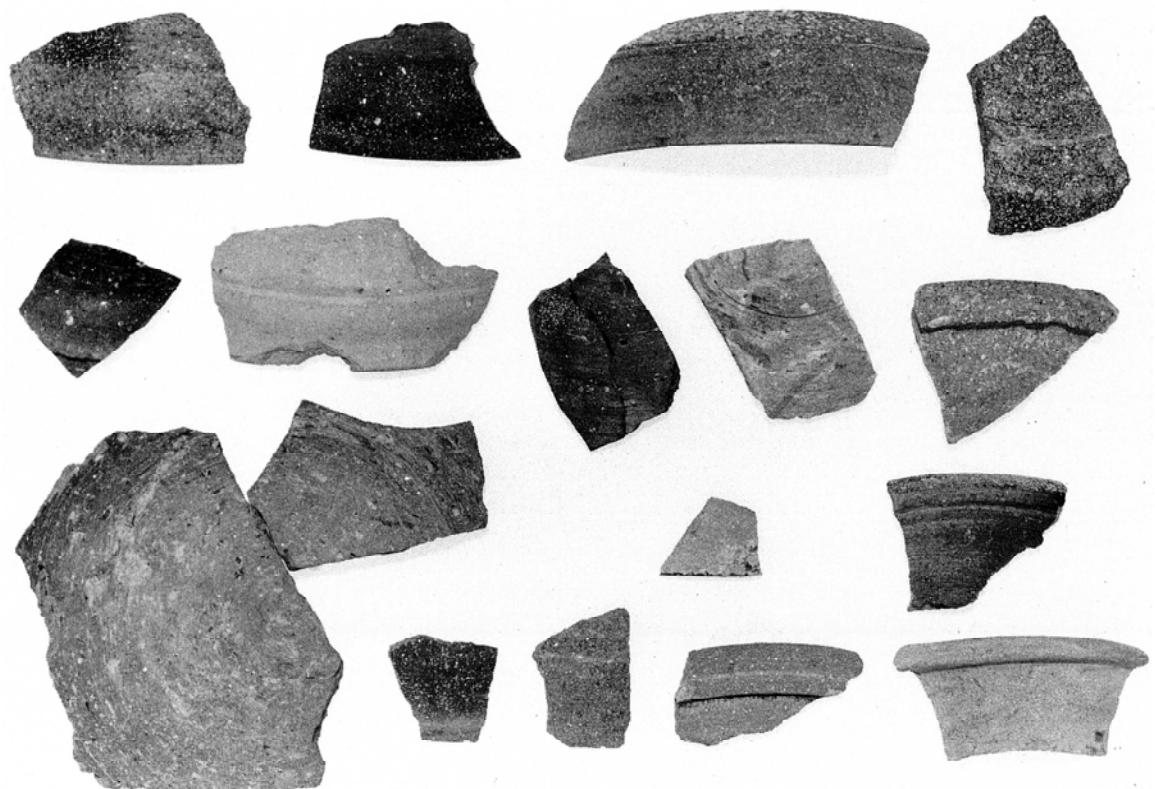


8 31-56III

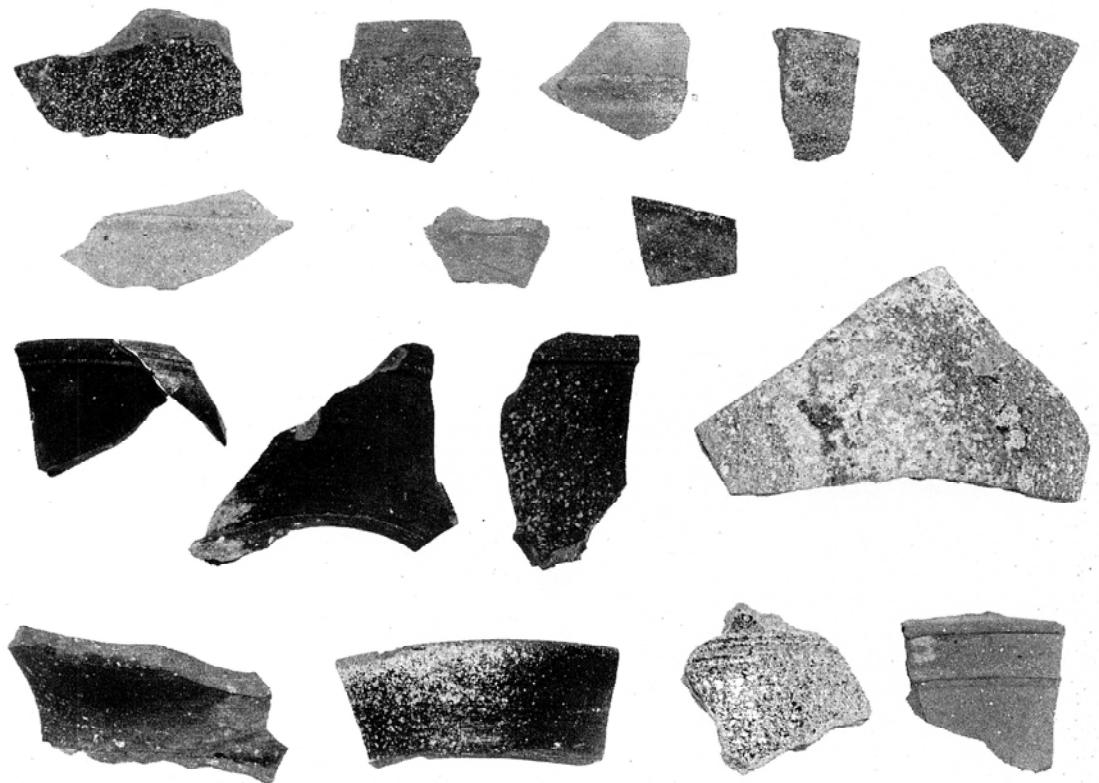


10 31-56III

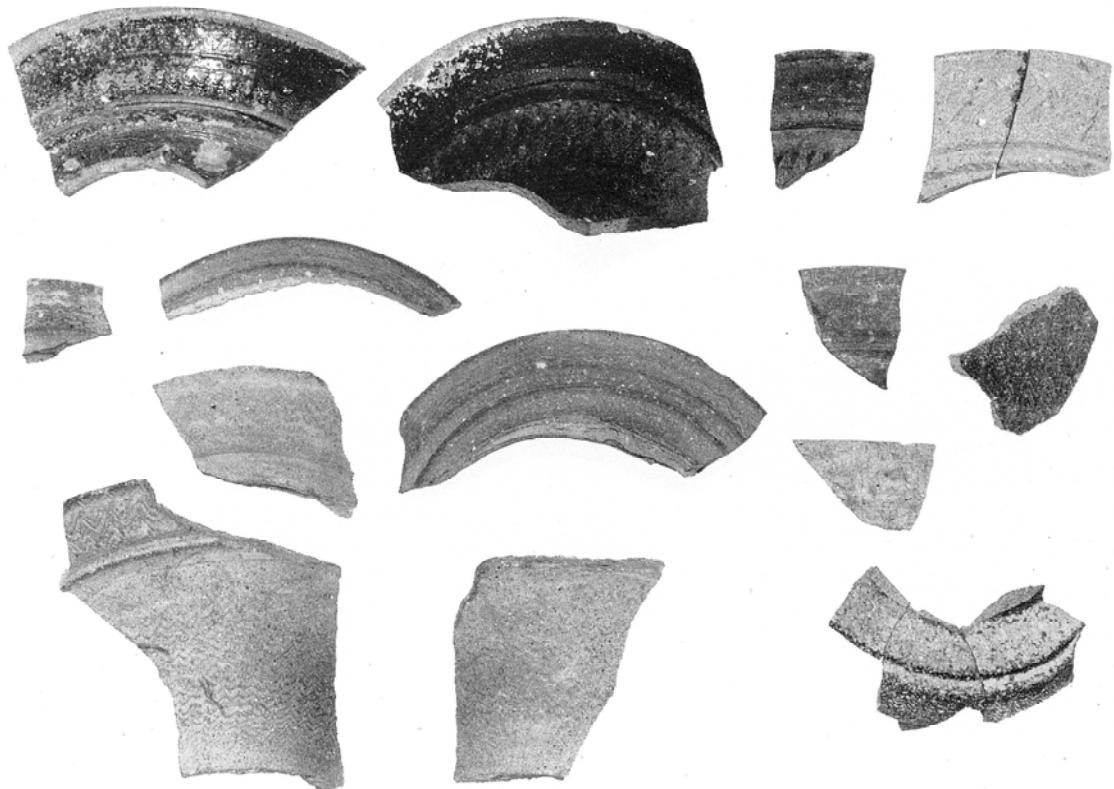
図版32



出土須恵器(1)



出土須恵器(2)

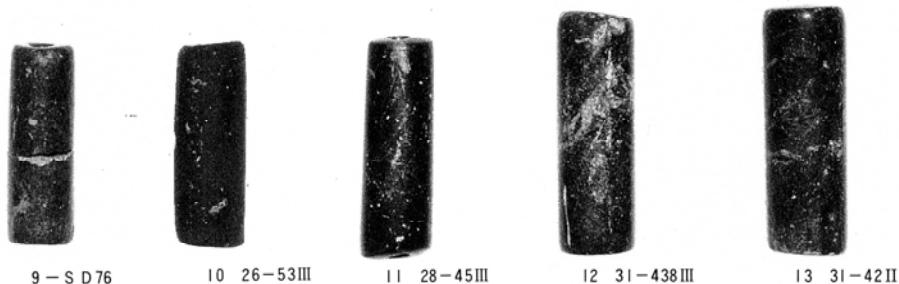
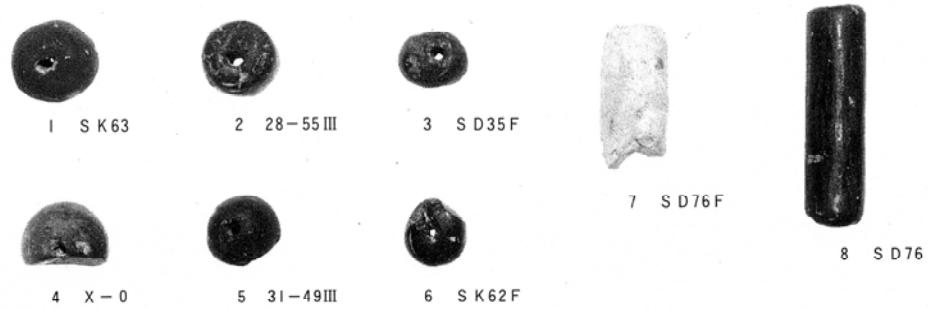


出土須恵器(3)



出土須恵器(4)

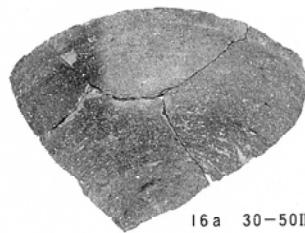
図版34



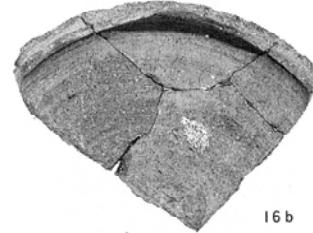
14 SD 1 F



15 ST 41 F



16 a 30-50 III



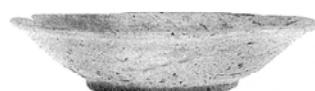
16 b



16 c



17 28-49 III



18 SD 78

* 1 ~ 13は1/1、他は1/3



1 31-43II



2 a 40トレ



3 28-58



4 27-46



5 a ST 33Y



2 b



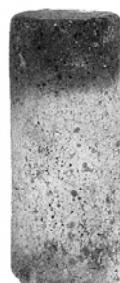
6 1トレ



7 24-50III



5 b



8 SX 46F



9 SX 46 F



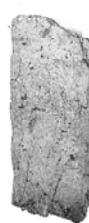
13 31-43II



10 SK 58



11 28-49III



12 25-58III



14 30-49II



15 a 25-57III



15 b



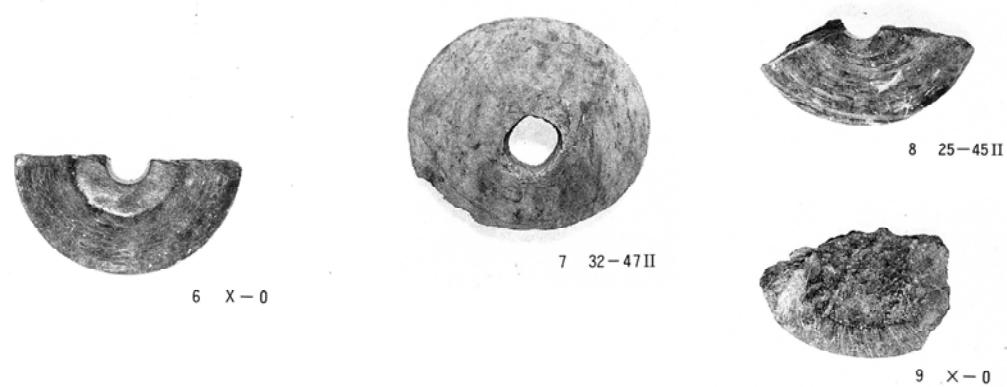
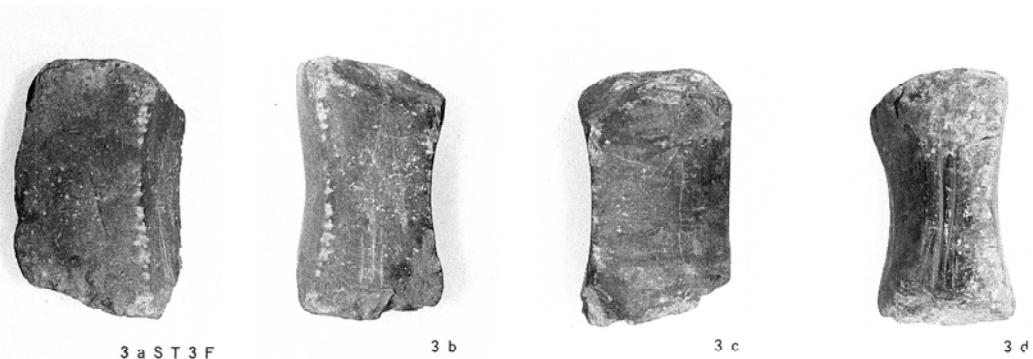
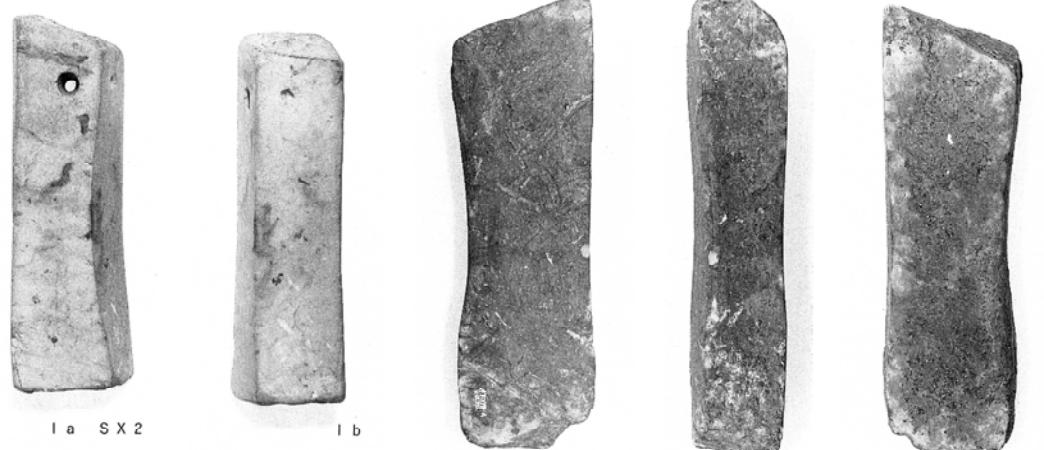
16 a X - 0



16 b

※ 8~12は1/3、他は1/1.5

図版36



※ 2・3は1/3、他1/1.5

図 版

—矢馳B遺跡—



遺跡近景（東から）



調査前の状況（北から）

図版2



調査風景



EW6
北壁土層断面(1)

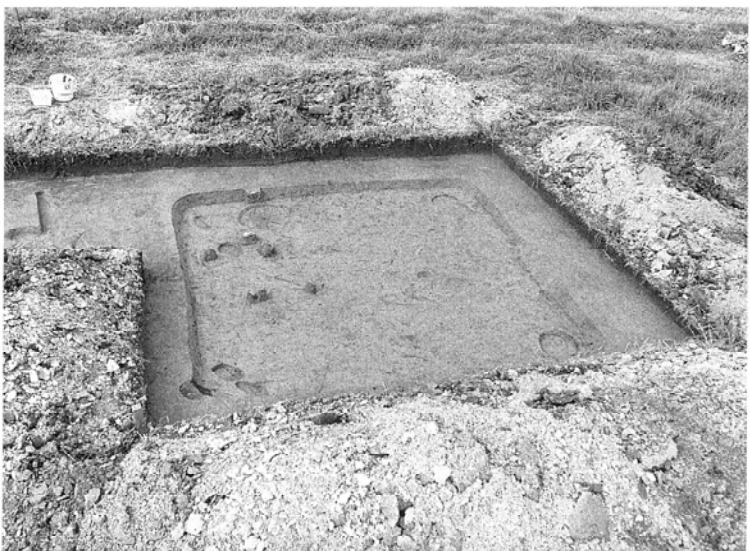


EW6
北壁土層断面(2)



EW6トレンチ
SD13溝跡のプラン検出状況

図版4



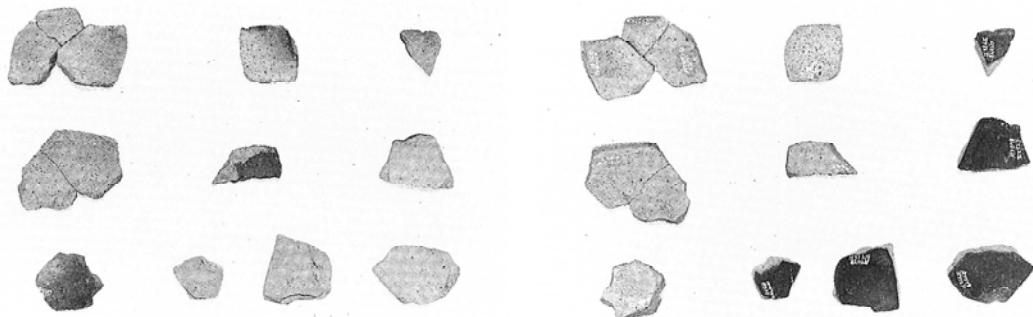
EW7トレンチ
ST12住居跡検出状況



EW7トレンチ
ST12住居跡内遺物出土状況(1)



EW7トレンチ
ST12住居跡内遺物出土状況(2)



土師器壊



土師器壊

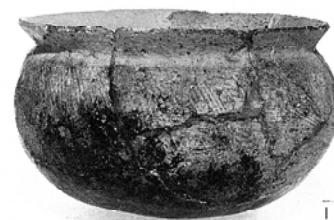


土師器壊



須恵器

図版6



I S D 8 F

鉢



2 a EW

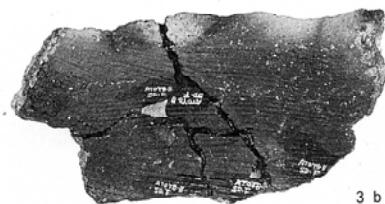


2 b

甕底部



3 a S D 8 F



3 b

甕



4 a S N 6



4 b



4 c



4 d

砥石

図 版

—清水新田遺跡—



遺跡近景（南から）



調査説明会風景

図版2



S D 18・21～24溝跡（南から）



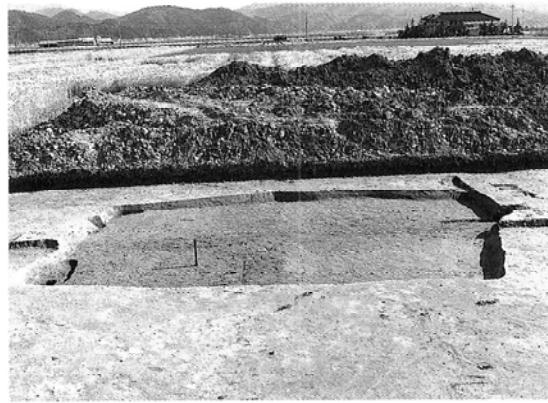
検出遺構全景（北西から）



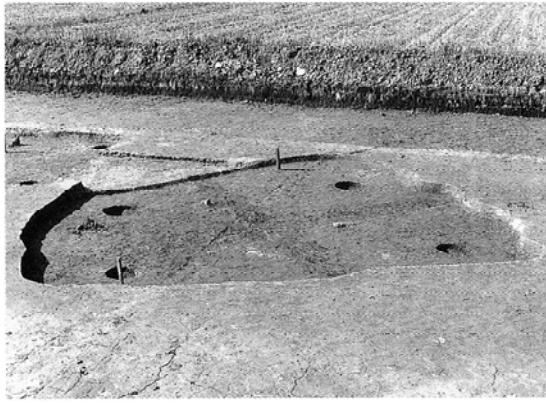
S T15住居跡 (E ↑)



S T17・16・10住居跡 (S ↑)



S T6住居跡 (N ↑)



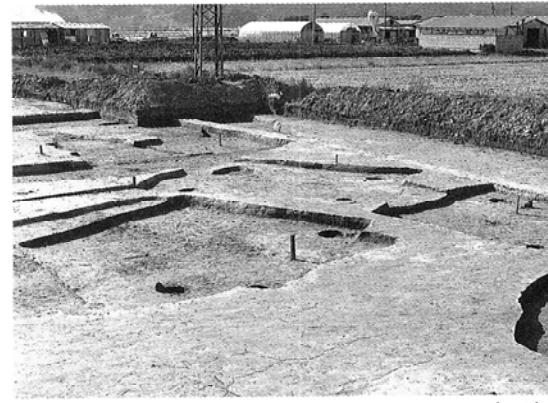
S T10住居跡 (S ↑)



S T17住居跡 (W ↑)



S T13・E K25土壤遺物出土状況 (S ↑)

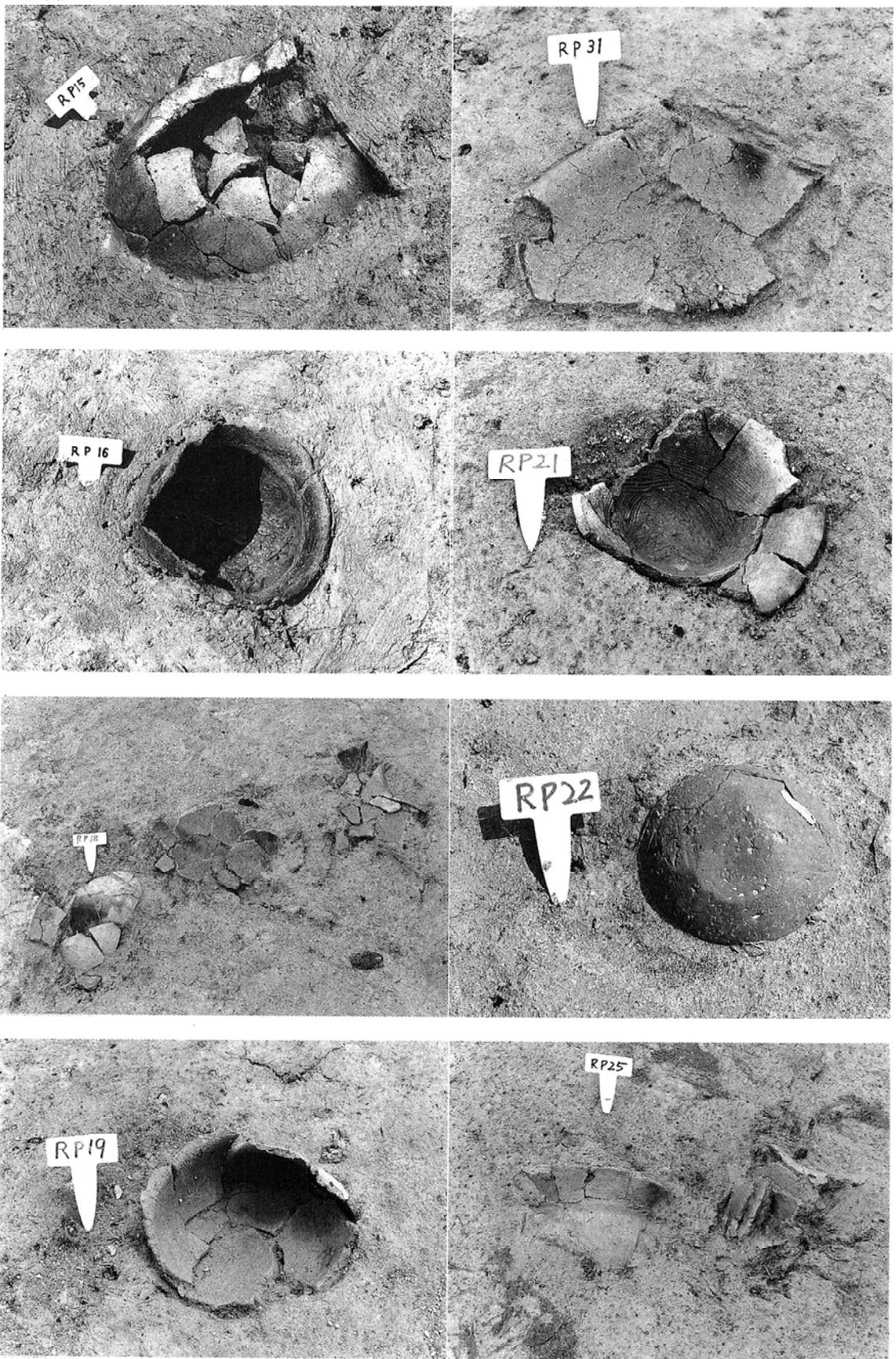


S T13・17住居跡 (S ↑)

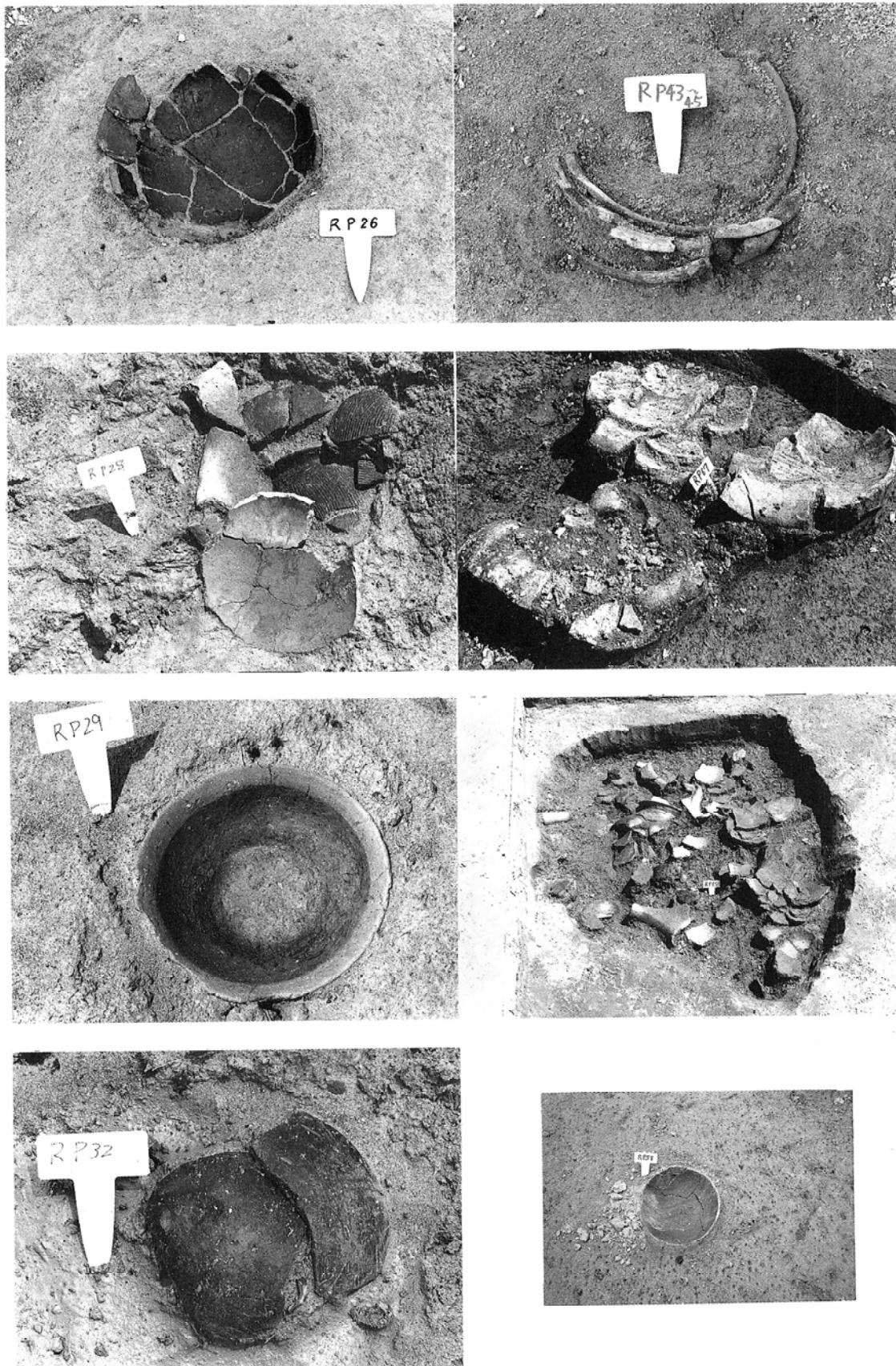


S D21・R P33遺物出土状況

図版4



遺物出土状況(1)



遺物出土状況(2)

図版6



I ST13・RP48



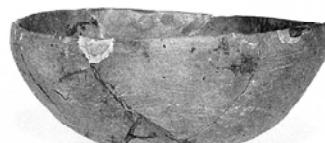
2 ST17・RP58



3 TT23・RP9



9 ST11・RP22



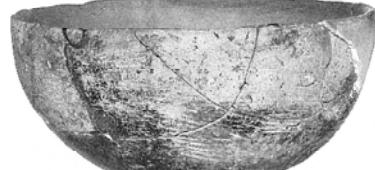
4 ST13・RP45



10 ST16・RP74



5 ST16・RP35



11 ST16・RP32



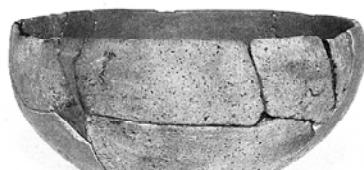
6 ST10・RP64



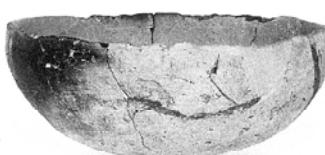
12 ST16・RP35



7 ST13・RP43



13 TT69



8 SD18・RP38



14 ST10・RP71

出土遺物(1)



1 S T 10 • R P 29



8 S D 23 • R P 55



2 S D 18 • R P 69



9 T T 3



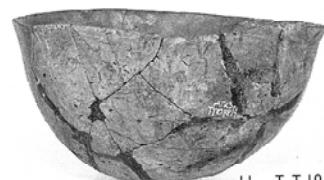
3 S T 13



10 S T 12 • R P 31



4 S T 13 • R P 70



11 T T 10 • R P 14



5 S D 21 • R P 66



12 T T 34 • S T 16



6 S D 18 • R P 57



13 S T 13 • R P 73



7 S D 18 • R P 52



14 S T 13 • R P 53

出土遺物(2)

図版8



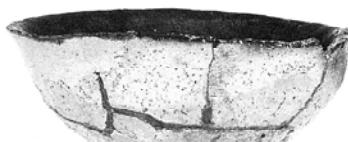
I SD18・RP26



9 SD18



2 ST17



10 SD21・RP36



3 ST16・RP12



II SD21・RP62



4 ST13・RP44



12 SD22



5 TT7・RP2



13 SD18・RP63



6 SD18



14 ST6・RP42



7 X-0



8 SD18



15 SD21 RP75

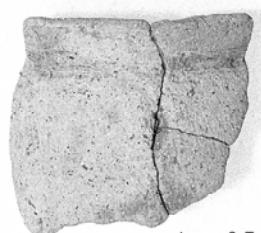
出土遺物(3)



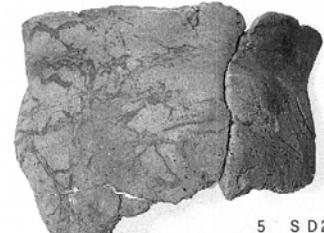
9 10-15G・RP21



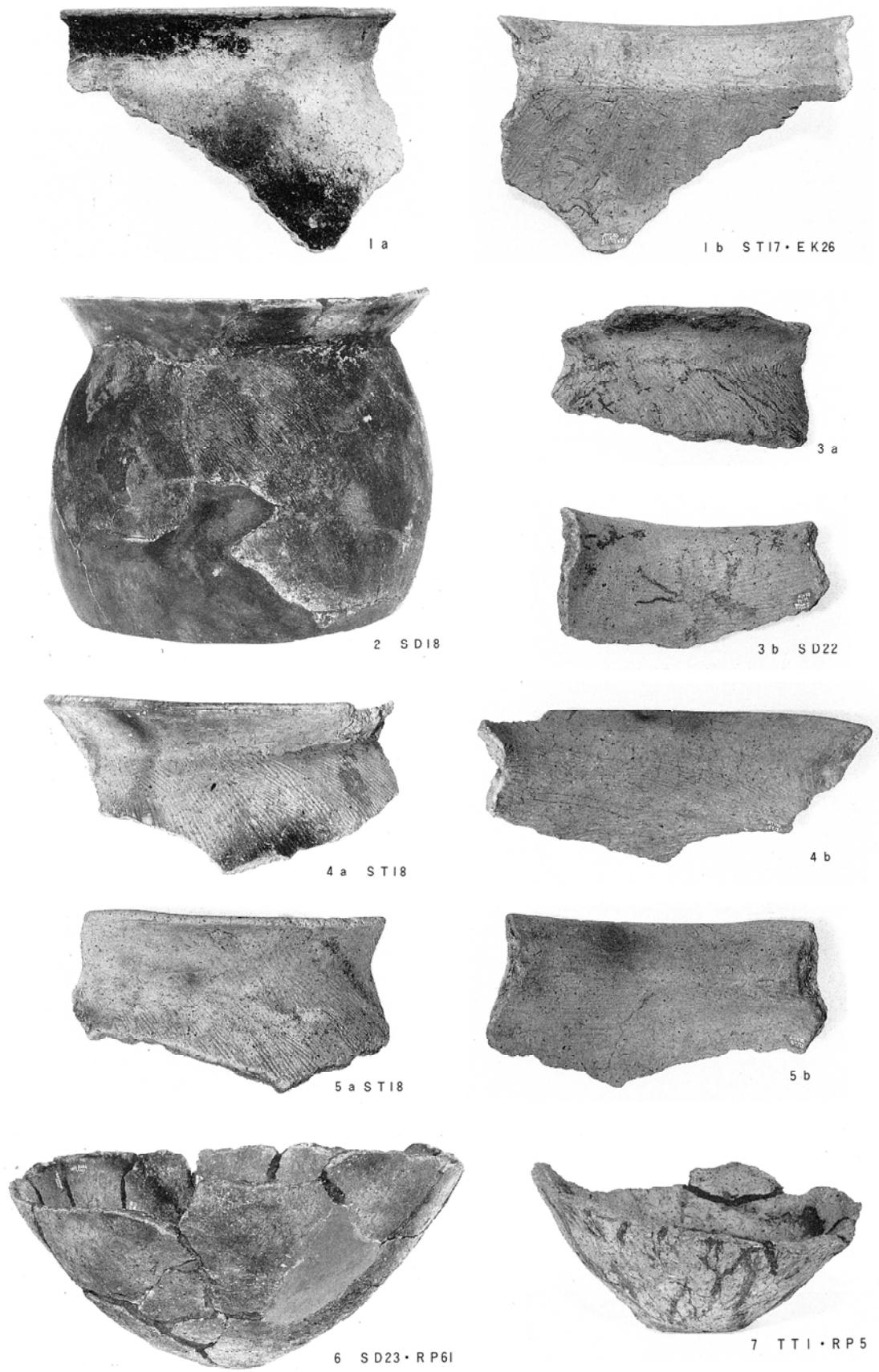
図版10



S T 6
R P 37

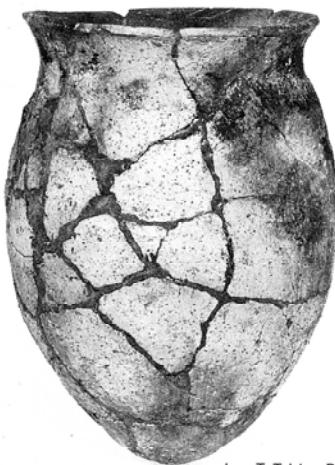


出土遺物(5)

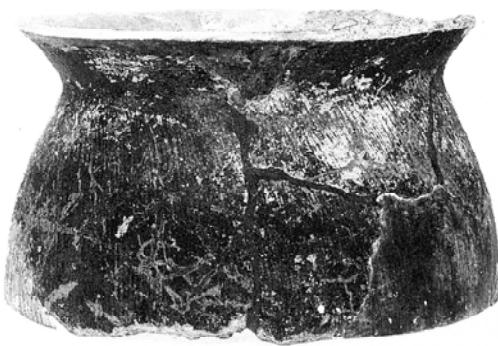


出土遺物(6)

図版12



1 TTII・RP15



2 SD22・RP75



3 STI0・RP28



4 SD18・RP57



5 TTII・RP17



6 SD24・RP25

出土遺物(7)



1 S T I 7 • E K 26 • R P 65



3 S D 18
R P 68



2 T T 7 • R P 3



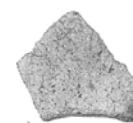
4 T T 11



5 a



5 b
S D 24 • R P 67



7 a



7 b S D 18



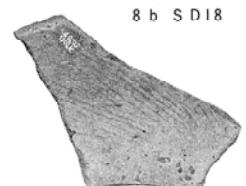
8 a



8 b S D 18



9 a



9 b S D 18



6 S T I 3 • R P 46



10 T T 2

図版14



1 a SD21F



1 b



2 a



2 b ST17 + SD21F



3 a SD18 + 22F



3 b



3 c



4 a ST17F



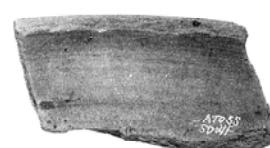
4 b



9 a ST17 + SD18



8 a SD21F



8 b



9 b



10 a SD23F



10 b

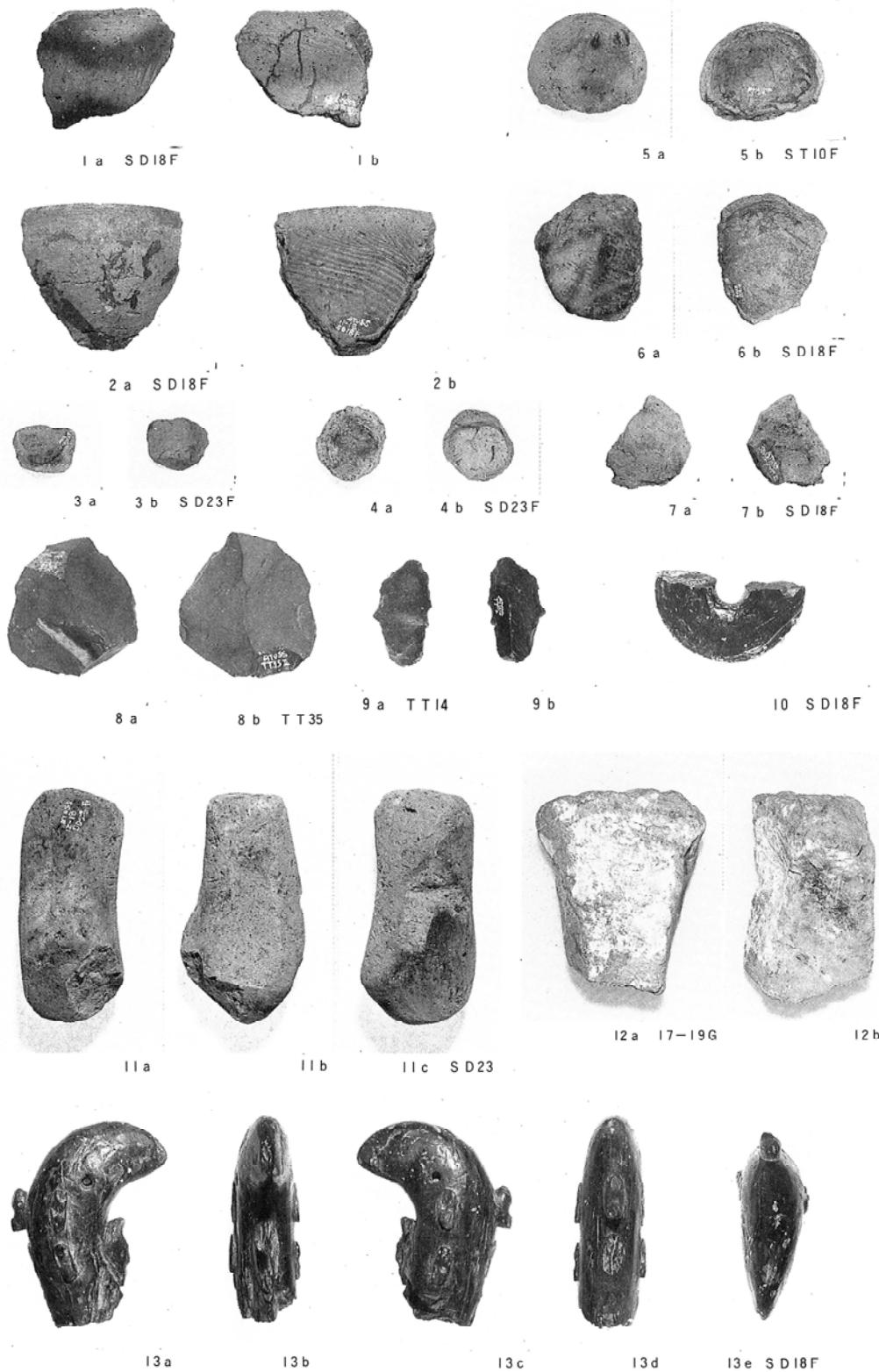
出土遺物(9)



土製品（土錘）

出土遺物(10)

図版16



出土遺物(11)

山形県埋蔵文化財調査報告書第127集
鶴岡西部地区遺跡群

矢馳 A 遺跡

矢馳 B 遺跡

清水新田遺跡

発掘調査報告書

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 螢田宮印刷
